

# 2021年度（第71回）学生生活実態調査結果報告書

東京大学学生委員会

学生生活調査WG

## 目次

2021 年度調査の概要	1
実施状況一覧	2
回収状況一覧	4
留学生対象版調査概要	6

### 【学部学生】

I. 基本的事項（回答者の特性）	7
1. 性別	7
2. 入学時の科類	7
3. 現在の所属	8
4. 現在の学年	9
5. 出身校	9
6. 現役・浪人等	9
II. 入学・進学・学業	10
7. 東大受験時の入学希望度	10
8. 入学の動機	11
9. 進学の決定（内定）	14
10. 卒業後の進路	15
11. 大学院進学理由	19
「II. 入学・進学・学業」の分析（まとめ）	21
III. 就職	22
12. 就職希望職種	22
13. 就職希望職種選択理由	25
「III. 就職」の分析（まとめ）	27
IV. 不安・悩み	28
14. 不安・悩みの程度	28
15. 悩みの相談相手	30
16. メンタルヘルスの状態	32
「IV. 不安・悩み」の分析（まとめ）	34
V. 新型コロナウイルス感染症の影響	35
17. オンライン授業満足度	35
18. コロナ収束後の希望授業形態	39
19. 活動制限による影響	41
「V. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ）	47

<b>VI. 大学への要望</b> . . . . .	48
20. 大学への要望・期待 . . . . .	48
「VI. 大学への要望」の分析（まとめ） . . . . .	50
<b>VII. 生活費の状況</b> . . . . .	51
21. 収入・支出 . . . . .	51
22. 授業料負担 . . . . .	56
「VII. 生活費の状況」の分析（まとめ） . . . . .	57
<b>VIII. 通学・住居</b> . . . . .	58
23. 居住地 . . . . .	58
24. 居住形態（自宅／自宅外） . . . . .	59
25. 居住形態（自宅外選択者への設問） . . . . .	60
「VIII. 通学・住居」の分析（まとめ） . . . . .	61
<b>IX. 奨学金</b> . . . . .	62
26. 奨学金受給の有無 . . . . .	62
27. 奨学金の役立て方 . . . . .	63
28. 奨学金不受給理由 . . . . .	65
「IX. 奨学金」の分析（まとめ） . . . . .	66
<b>X. アルバイト</b> . . . . .	67
29. 過去1年間のアルバイト実施状況 . . . . .	67
30. アルバイトの種類 . . . . .	69
31. アルバイトの時間 . . . . .	70
32. アルバイトの目的 . . . . .	71
33. 現在の暮らし向き . . . . .	73
「X. アルバイト」の分析（まとめ） . . . . .	75
<b>XI. 家庭の状況</b> . . . . .	76
34. 高校時代の居住地 . . . . .	76
35. 家族構成 . . . . .	78
36. 生計維持者 . . . . .	79
37. 父親の職業 . . . . .	80
38. 母親の職業 . . . . .	81
39. 世帯収入 . . . . .	83
「XI. 家庭の状況」の分析（まとめ） . . . . .	86

## 【大学院学生】

I. 基本的事項（回答者の特性）	87
1. 課程	87
2. 学年	87
3. 所属研究科	88
4. キャンパス	89
5. 性別	89
6. 年齢	90
7. 社会人経験	90
II. 大学院入学の目的	91
8. 入学目的	91
9. 入学理由	94
「II. 大学院入学の目的」の分析（まとめ）	96
III. 学会参加・研究活動	97
10. 所属学会	97
11. 学会参加・発表	98
12. 研究成果満足度	100
13. 研究活動に関する不満等	101
14. 研究室満足度	103
15. 研究室スペース	107
16. 研究室机	109
17. 研究費自己負担額	110
18. 研究平均時間	112
「III. 学会参加・研究活動」の分析（まとめ）	113
IV. 就職	114
19. 課程	114
20. 修了後の進路予定（修士課程）	115
21. 修了後の決定進路（修士課程）	116
22. 修了後の希望進路（修士課程）	117
23. 修了後の進路予定（専門職学位課程）	118
24. 修了後の決定進路（専門職学位課程）	119
25. 修了後の希望進路（専門職学位課程）	120
26. 修了後の進路予定（博士課程）	121
27. 修了後の決定進路（博士課程）	122
28. 修了後の希望進路（博士課程）	123
29. 教育職・研究職就職	124
30. 希望する就職先	125

3 1. 就職見通し	129
3 2. 就職情報	130
「IV. 就職」の分析 (まとめ)	131
<b>V. 不安・悩み</b>	132
3 3. 不安・悩みの程度	132
3 4. 悩みの相談相手	134
3 5. メンタルヘルスの状態	136
「V. 不安・悩み」の分析 (まとめ)	138
<b>VI. 新型コロナウイルス感染症の影響</b>	139
3 6. 研究への影響	139
3 7. 生活への影響	141
「VI. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析 (まとめ)	142
<b>VII. 大学への要望</b>	143
3 8. 要望や期待すること	143
「VII. 大学への要望」の分析 (まとめ)	145
<b>VIII. 家庭の状況</b>	146
3 9. 生計維持者	146
4 0. 家族・本人の年間税込み収入	147
4 1. 親・本人の職業	150
「VIII. 家庭の状況」の分析 (まとめ)	153
<b>IX. 生活費の状況</b>	154
4 2. 収入・支出	154
「IX. 生活費の状況」の分析 (まとめ)	157
<b>X. 研究奨励金及び奨学金</b>	158
4 3. 学内外研究費等支援の受給状況	158
4 4. 奨学的資金 (学外) の受給状況	161
4 5. 経済的支援の状況	162
「X. 研究奨励金及び奨学金」の分析 (まとめ)	164
<b>XI. アルバイト・暮らし向き</b>	165
4 6. アルバイトの目的	165
4 7. アルバイトと勉学の関係	166
4 8. 現在の暮らし向き	168
「XI. アルバイト・暮らし向き」の分析 (まとめ)	169
<b>総合分析</b>	170

## 調査の概要

### 1. 調査票の作成

2021（令和3）年12月に学生委員会学生生活調査WGで調査内容の企画立案を行った。

### 2. 調査の期間

2022（令和4）年1月19日～2月20日

### 3. 調査の対象及び抽出率

学部学生及び大学院学生。基本調査、留学生を対象とする調査ともに悉皆調査。

### 4. 調査の方法

基本調査、留学生を対象とする調査ともに、オンライン調査。

### 5. 調査の内容

（学部学生）

I. 基本的事項、II. 入学・進学・学業、III. 就職 IV. 不安・悩み、V. 新型コロナウイルス感染症の影響、VI. 大学への要望、VII. 生活費の状況、VIII. 通学・住居、IX. 奨学金、X. アルバイト、XI. 家庭の状況、XII. 具体的記述

（大学院学生）

I. 基本的事項、II. 大学院入学の目的、III. 学会参加・研究活動 IV. 就職、V. 不安・悩み、VI. 新型コロナウイルス感染症の影響、VII. 大学への要望、VIII. 家庭の状況、IX. 生活費の状況、X. 研究奨励金及び奨学金、XI. アルバイト・暮らし向き、XII. 具体的記述

## 報告について

1. 学部学生及び大学院学生を対象に調査を行った。基本調査と留学生調査は別に実施し、特に比較が意味を持つと思われる項目について、両者の比較分析を行った。集計結果の分析に当たっては、部局間・年度間・男女間などの相違に注目し、特異な数値傾向の把握に努めた。
2. 「学生生活実態調査結果報告書」については、調査票、単純集計表、及びクロス集計表を省略した。省略した集計表等については、ホームページに別ファイルとして掲載した。
3. 2009年度までは、2分の1程度の具体的記述を原文のまま報告書に記載していたが、個人が特定できる可能性があること、さらに、報告書掲載の基準が恣意的になりやすいこともあり、2009年調査より具体的記述は報告書に掲載しないこととした。ただ、このことは具体的記述を無視するとか軽視することを意味しているわけではなく、それぞれの具体的記述は学生委員会学生生活調査WGで検討するとともに、担当理事によっても検討され、大学の施策の改善に役立てられている。
4. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。

## グラフと表について

1. 本文に掲載した経年変化のグラフと表については、1986年調査まで遡って取り上げた項目がいくつかあり、2ページに1986年以降の学部学生調査、3ページに1958年以降の大学院学生調査の実施状況を表示した。
2. 文中に掲げたグラフと表については、それぞれの年の比較を見やすくするため「無回答」及び「非該当」を除いた比率で作成している。ただし、学部学生調査の時系列の場合には、2007年までは無回答を含んでいる。また、個々の数値を四捨五入しているため、合計が100%に満たないものと100%を超えるものがある。
3. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。
4. 平均値の算出は、非該当及び無回答のものを除く該当者平均を求めた。
5. 作表の説明変数として用いた用語の定義は、次のとおりである。

「全体」……………回答者全員の比率を示す。

「文科系」「理科系」……………在籍する部局により二つの系に区分したものを示す。

「本郷」「駒場」「弥生」……学生が主に通学するキャンパスを示す。

## 学生生活実態調査実施状況一覧（学部学生）

回数	調査年月	対象学生	抽出率	対象者数	回収率	調査方法
				人	%	
第36回	1986年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,385	72.6	郵送自記式
第37回	1987年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,432	73.9	郵送自記式
第38回	1988年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,459	70.9	郵送自記式
第39回	1989年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,480	78.5	郵送自記式
第40回	1990年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,504	63.1	郵送自記式
第41回	1991年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,530	62.2	郵送自記式
第43回	1993年11月	学部男子・女子	男・女 1／10	1,593	64.8	郵送自記式
第44回	1994年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	2,005	60.6	郵送自記式
第45回	1995年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	2,011	64.0	郵送自記式
第46回	1996年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	2,004	60.9	郵送自記式
第47回	1997年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	1,990	60.2	郵送自記式
第48回	1998年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	1,964	60.3	郵送自記式
第50回	2000年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	1,917	54.4	郵送自記式
第51回	2001年11月	学部男子・女子	男・女 1／8	1,900	49.6	郵送自記式
第52回	2002年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,749	37.2	郵送自記式
第53回	2003年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,700	40.6	郵送自記式
第55回	2005年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,534	38.7	郵送自記式
第56回	2006年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,455	32.8	郵送自記式
第57回	2007年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,406	43.0	郵送自記式
第58回	2008年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,506	45.2	郵送自記式
第60回	2010年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,419	42.6	郵送自記式
第62回	2012年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,346	45.3	郵送自記式
第64回	2014年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,337	44.0	郵送自記式
第66回	2016年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,325	36.6	郵送自記式
第68回	2018年11月	学部男子・女子	男・女 1／4	3,359	35.9	郵送自記式
第70回	2021年 3月	学部男子・女子	悉皆（全数）調査	13,394	12.6	Web(オンライン)
第71回	2022年 1月	学部男子・女子	悉皆（全数）調査	13,295	11.4	Web(オンライン)

（注）「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。1992年調査は「外国人留学生」を含む

学生生活実態調査実施状況一覧（大学院学生）

回数	調査年月	対象学生	抽出率	対象者数	回収率	調査方法
第9回	1958年12月	課程在籍者	男子 1/5 女子 1/5	人 248	% 95.6	面接調査 (一部郵送)
第11回	1960年11月	課程在籍者 + 留年者	男子 1/3 女子 全数 留年者 全数	785	85.2	面接調査 (一部郵送)
第17回	1966年12月	課程在籍者	全 数	3,002	48.7	研究科窓口配布 (一部郵送)
第28回	1978年12月	課程在籍者	男子 1/4 女子 全数	1,177	66.2	郵送自記式
第35回	1985年11月	課程在籍者 + OM、OD	男子 1/2~1/4 女子 1/2 OM、OD 1/2	1,382	66.3	郵送自記式
第42回	1992年11月	課程在籍者	男子(文) 1/2 男子(理) 1/6 女子 1/2	1,496	59.8	郵送自記式
第49回	1999年11月	課程在籍者 + OM、OD	男子・女子 1/4	2,099	49.5	郵送自記式
第54回	2004年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,539	40.6	郵送自記式
第59回	2009年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,675	49.9	郵送自記式
第61回	2011年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,621	45.3	郵送自記式
第63回	2013年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,295	40.2	郵送自記式
第65回	2015年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,508	43.9	郵送自記式
第67回	2017年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,450	37.8	郵送自記式
第69回	2019年11月	課程在籍者	男子・女子 1/4	2,386	41.6	郵送自記式
第71回	2022年1月	課程在籍者	悉皆（全数）調査	12,925	11.3	Web（オンライン）

注 1) 「OM」はオーバーマスター、「OD」はオーバードクターの略を示す。

2) 「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。但し、1992年調査は「OM、OD」を除き「外国人留学生」を含む。



## 2021年度(第71回)学生生活実態調査回収状況一覧(学部学生)

学部名	男子			女子			全体			
	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	
前期課程・教養学部	5,115	508	9.9%	1,269	247	19.5%	6,384	766	12.0%	
後 期 課 程	法学部	667	48	7.2%	194	29	14.9%	861	79	9.2%
	医学部	410	33	8.0%	104	22	21.2%	514	55	10.7%
	工学部	1,823	156	8.6%	202	32	15.8%	2,025	190	9.4%
	文学部	528	48	9.1%	188	30	16.0%	716	79	11.0%
	理学部	567	79	13.9%	55	14	25.5%	622	97	15.6%
	農学部	448	41	9.2%	146	32	21.9%	594	73	12.3%
	経済学部	619	36	5.8%	126	10	7.9%	745	46	6.2%
	教養学部(後期)	306	42	13.7%	131	30	22.9%	437	72	16.5%
	教育学部	130	12	9.2%	77	16	20.8%	207	28	13.5%
	薬学部	123	14	11.4%	67	11	16.4%	190	25	13.2%
小計	5,621	509	9.1%	1,290	226	17.5%	6,911	744	10.8%	
合計	10,736	1,017	9.5%	2,559	473	18.5%	13,295	1,510	11.4%	
2020年度(第70回)調査	10,857	1,210	11.1%	2,537	458	18.1%	13,394	1,691	12.6%	

※性別に関して、「その他」の選択者及び無回答者は合わせて22名見られたが、全体の回収数(人)には含めた。

2021年度(第71回)学生生活実態調査回収状況一覧(大学院学生)

研究科等名	修士課程及び専門職学位課程						博士課程						全体		
	男子			女子			男子			女子			対象者数	回収数	回収率
	対象者数	回収数	回収率	対象者数	回収数	回収率	対象者数	回収数	回収率	対象者数	回収数	回収率	対象者数	回収数	回収率
	人	人	%	人	人	%	人	人	%	人	人	%	人	人	%
人文社会系研究科	186	25	13.4%	94	20	21.3%	166	27	16.3%	90	12	13.3%	536	88	16.4%
教育学研究科	91	21	23.1%	86	16	18.6%	93	13	14.0%	86	15	17.4%	356	65	18.3%
法学政治学研究科	250	22	8.8%	155	13	8.4%	52	6	11.5%	24	2	8.3%	481	44	9.1%
経済学研究科	137	12	8.8%	77	2	2.6%	48	3	6.3%	11	1	9.1%	273	18	6.6%
総合文化研究科	323	45	13.9%	193	22	11.4%	287	36	12.5%	172	22	12.8%	975	129	13.2%
理学系研究科	627	91	14.5%	162	35	21.6%	520	74	14.2%	126	23	18.3%	1,435	228	15.9%
工学系研究科	1,862	155	8.3%	365	42	11.5%	957	94	9.8%	220	20	9.1%	3,404	318	9.3%
農学生命科学研究科	392	45	11.5%	219	35	16.0%	262	27	10.3%	136	13	9.6%	1,009	123	12.2%
医学系研究科	62	9	14.5%	122	21	17.2%	553	24	4.3%	340	36	10.6%	1,077	91	8.4%
薬学系研究科	124	19	15.3%	52	5	9.6%	118	10	8.5%	53	3	5.7%	347	39	11.2%
数理科学研究科	86	10	11.6%	3	1	33.3%	69	8	11.6%	2	0	0.0%	160	22	13.8%
新領域創成科学研究科	631	49	7.8%	263	27	10.3%	351	41	11.7%	150	26	17.3%	1,395	143	10.3%
情報理工学系研究科	514	52	10.1%	35	4	11.4%	241	23	9.5%	26	0	0.0%	816	83	10.2%
学際情報学府	143	10	7.0%	105	17	16.2%	88	10	11.4%	52	10	19.2%	388	47	12.1%
公共政策学教育部	113	8	7.1%	142	11	7.7%	13	0	0.0%	5	0	0.0%	273	20	7.3%
所属不明														0	
合計	5,541	573	10.3%	2,073	271	13.1%	3,818	396	10.4%	1,493	183	12.3%	12,925	1,458	11.3%
2019年度(第69回)調査	1,147	440	38.4%	319	165	51.7%	685	255	37.2%	235	108	46.0%	2,386	992	41.6%

※性別に関して、「その他」の選択者及び無回答者は合わせて35名見られたが、全体の回収数(人)には含めた。

## 留学生対象版調査概要

### 調査概要

従来の学生生活実態調査の対象に含まれていなかった、留学生を含む全学生を対象とした調査を行うため、2018年度（第68回）調査から、留学生を対象とした調査を同時に実施している。2021年度（第71回）調査は、学部留学生対象としては三度目、大学院留学生対象としては二度目の実施となる。

質問項目は、基本調査との共通項目と、留学生を対象にした独自項目から構成されるが、本報告においては、共通項目部分について、留学生と国内出身学生との比較を中心に報告を行う。留学生版調査全体については、別途「留学生対象調査報告書」として、国際化教育支援室においてとりまとめ、報告を行う。

### 実施方法・時期

調査は、東京大学社会科学研究所のシステムを利用し、日本語・英語版のオンライン調査（悉皆調査）として実施した。学生への周知は学務システム（UTAS）上での告知と学部・研究科などを通じて行った。なお、基本調査は、学部学生対象の2020年度（第70回）調査時に郵送調査からオンライン調査に移行しており、71回調査は基本調査と同時期に行った。

### 調査対象・有効回答数

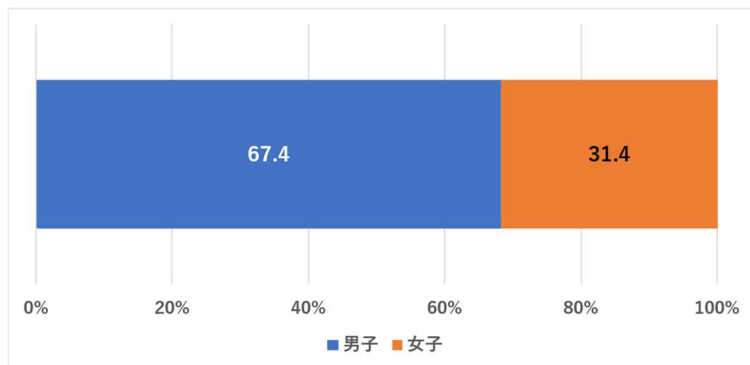
主に「留学」の在留資格を有する、正規課程在籍者（交換留学生・研究生・特別研究生・研究所研究生・特別聴講学生・休学者等を除く）。なお、在留資格「特別永住者」「永住者」「定住者」「日本人・永住者・特別永住者の配偶者」等は、基本調査の対象に含まれる。

調査を実施した2022年1月に在籍した、調査対象学生は学部留学生321名、大学院留学生4,180名であり、有効回答数は、学部留学生117名、大学院留学生1,108名であった。なお調査の実施時点においても、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための入国制限により、日本への入国ができていない学生がおり、回答者には国外在住者も含まれる。詳細については、「留学生対象調査報告書」を参照のこと。

## 【学部学生】

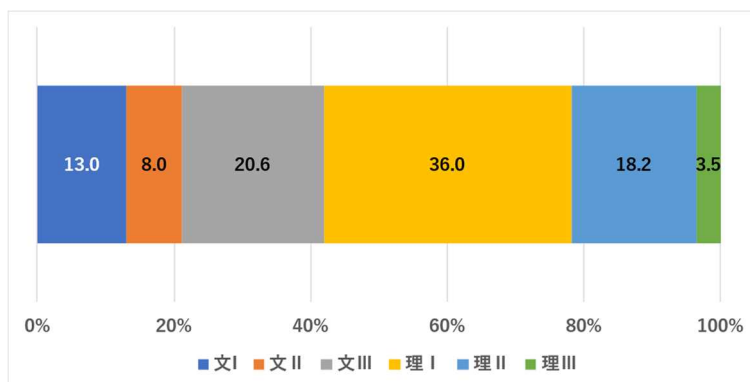
### I. 基本的事項（回答者の特性）

#### 1. 性別



回答者の性別は、男性が67.4%、女性が31.4%で在籍者比率（男性80.2%、女性19.8%）と比較して、女性回答率が高い。留学生は、男性（57.3%）、女性（41.9%）、その他・回答しない（0.9%）であり、在籍者中の男女比率（男性50.8%、女性49.2%）と比較すると、男性の回答率が高い。

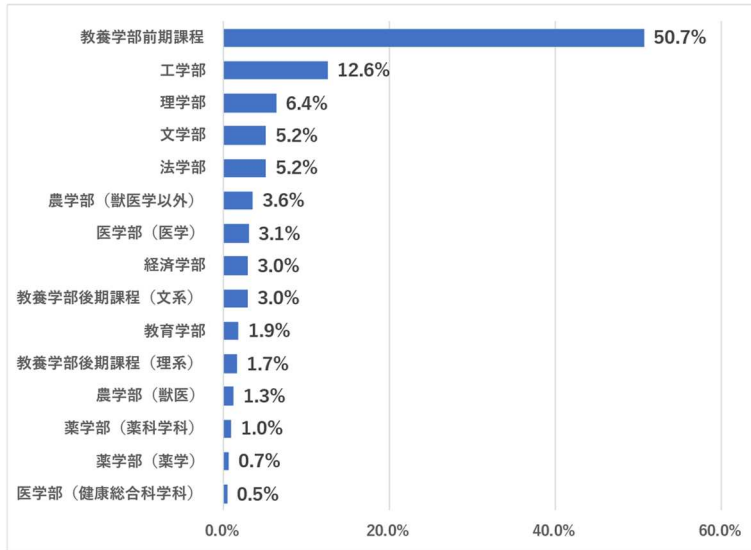
#### 2. 入学時の科類



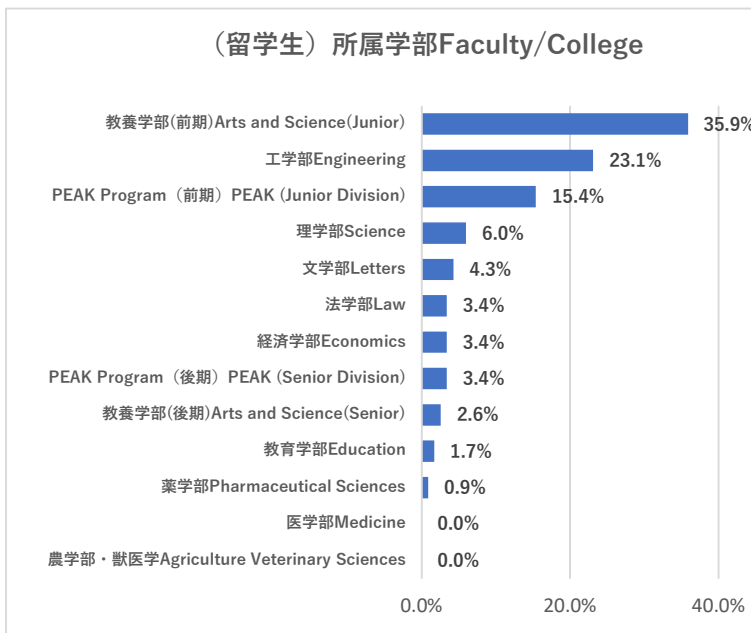
入学時の科類は理Iが最大であるものの、全学の構成比とほぼ等しい。留学生の入学時の科類は、文I(7.7%)、文II(6.0%)、文III(27.4%)、理I(26.5%)、理II(24.8%)、理III(1.7%)であった。また3年時からの編入者(5.1%)を含む。

## 【学部学生】

### 3. 現在の所属



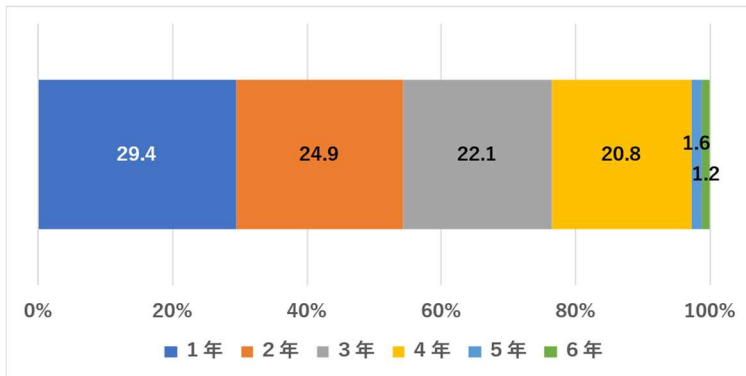
現在の所属は教養学部前期課程が 50.7%で最も多く、全学構成比と比較して 3.3%ポイント程度多い。工学部は 12.6%で、全学構成比より 2.6%ポイント程度少ない。それ以外は全学構成比と概ね等しい。



留学生の現在の所属は、教養学部（前期課程 35.9% /PEAK 前期 15.4%）でおおよそ半数であった。後期課程在籍者は、工学部が 15.4%と最も多く、概ね在籍者の比率を反映している。

## 【学部学生】

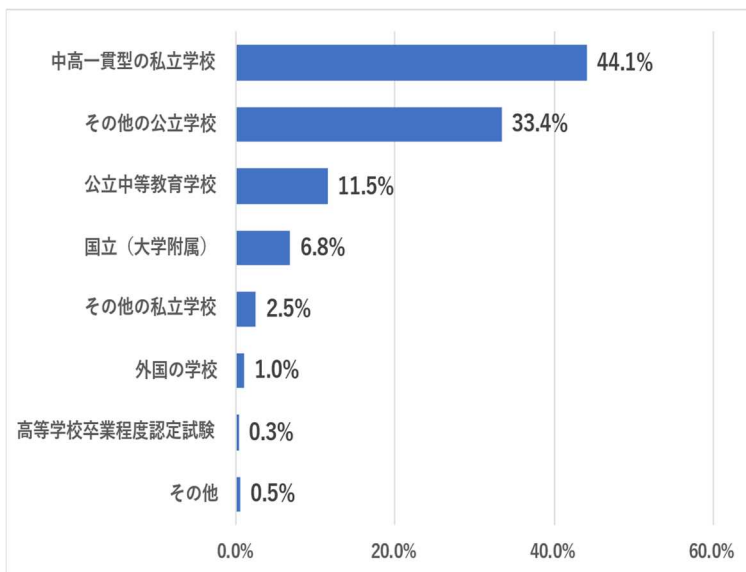
### 4. 現在の学年



1年生の割合は2020年度(第70回)調査(以下、「前回調査」という。)と比べて11.4%ポイント減少したが、依然として割合が一番高い学年である。2年生、3年生、4年生の割合はそれぞれ4.9%ポイント、3.4%ポイント、2.1%ポイントの増加である。

留学生の学年は、1年生38.5%、2年生23.1%、3年生26.5%、4年生12.0%であり、4年生の回答が少ない。

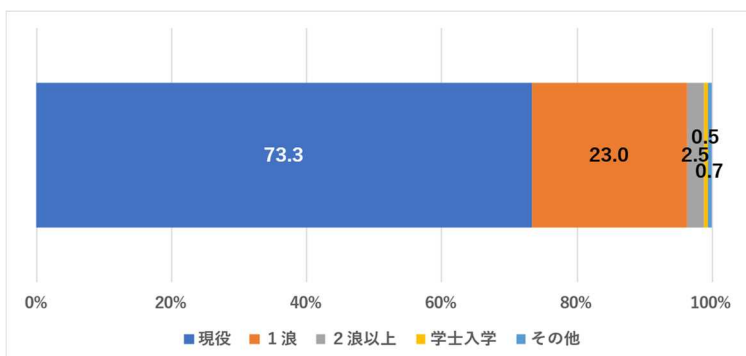
### 5. 出身校



出身校は「中高一貫型の私立学校」が前回調査の46.9%と比べて2.8%ポイント減少した。「その他の公立学校」は4.2%ポイント増加した。「公立中等教育学校」は前回と同じ。それ以外は全体的に微増しているものの、前回調査と概ね等しい。

なお、学部留学生は、93.0%は日本国外の高校の出身者であるが、7.0%は日本国内の高校出身者であった。

### 6. 現役・浪人等



現役は前回調査の69.5%より3.8%ポイント増加した。1浪は4.2%ポイント程度の減少である。

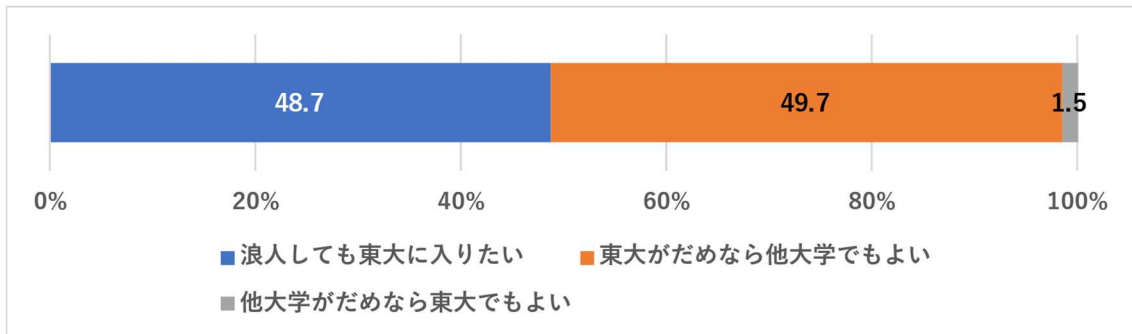
## 【学部学生】

### Ⅱ. 入学・進学・学業

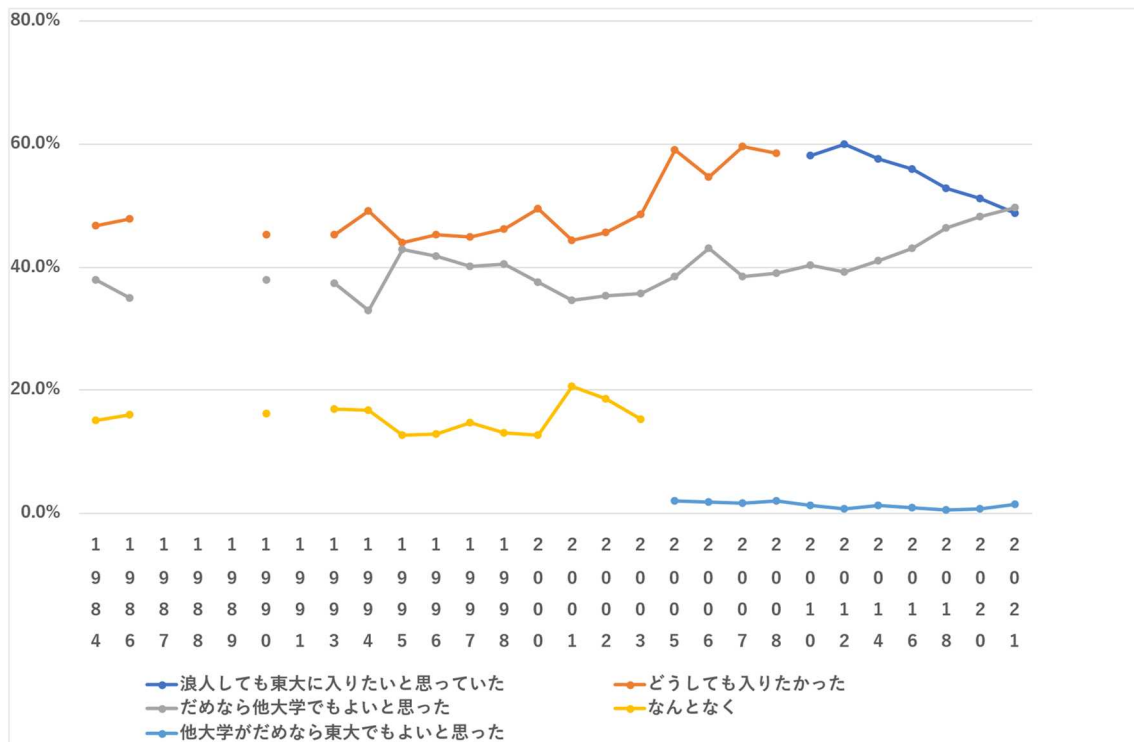
#### 7. 東大受験時の入学希望度

- 「浪人しても東大に入りたい」と「東大がダメなら他大学でもよい」の割合が逆転

7. 東大を受験する際に東大に入学することをどの程度希望していましたか。あてはまるものを1つ選んでください。



「東大受験時の入学希望度」の経年変化



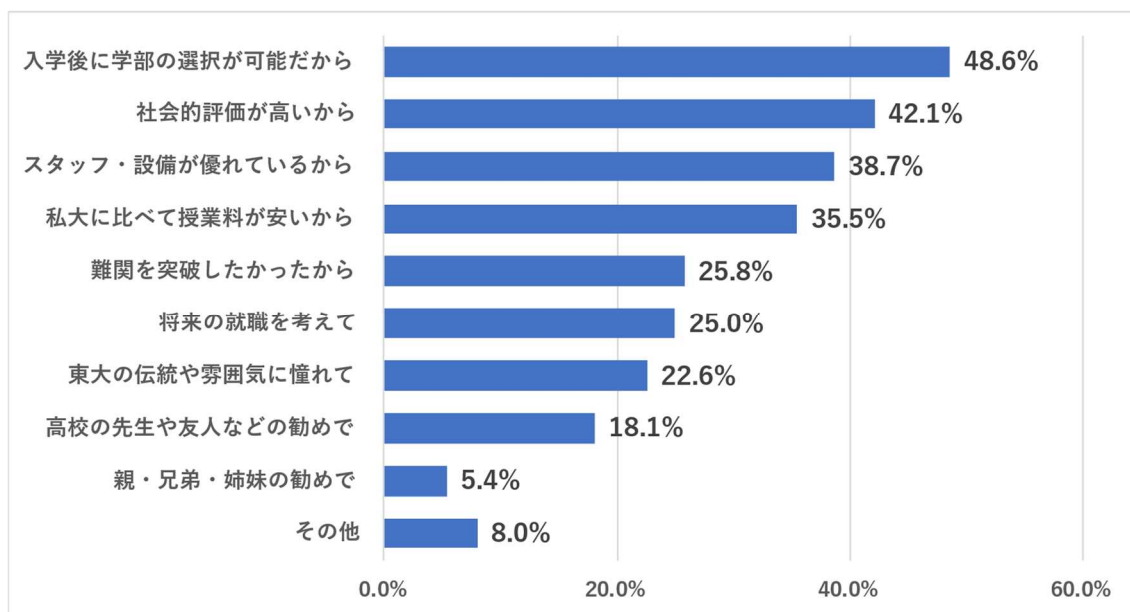
「浪人してでも東大に入りたい」と思っていた層は 48.7%に減少し、2010 年以來初めて半数を下回った。対して「東大がダメなら他大学でもよい」は前者を超える 49.7%で、2012 年以降増加傾向にあり、今回調査で割合が逆転した。

## 【学部学生】

### 8. 入学の動機

- 入学動機上位 3 項目「入学後に学部の選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」「スタッフ・設備が優れているから」
- 「難関を突破したかったから」という理由は「将来の就職を考えて」と「東大の伝統や雰囲気憧れて」を超えて上位 5 項目に
- 「スタッフ・設備が優れているから」は 2018 年から大きく増えて、今回も前回調査と比較して 3.8%ポイント程度の増加

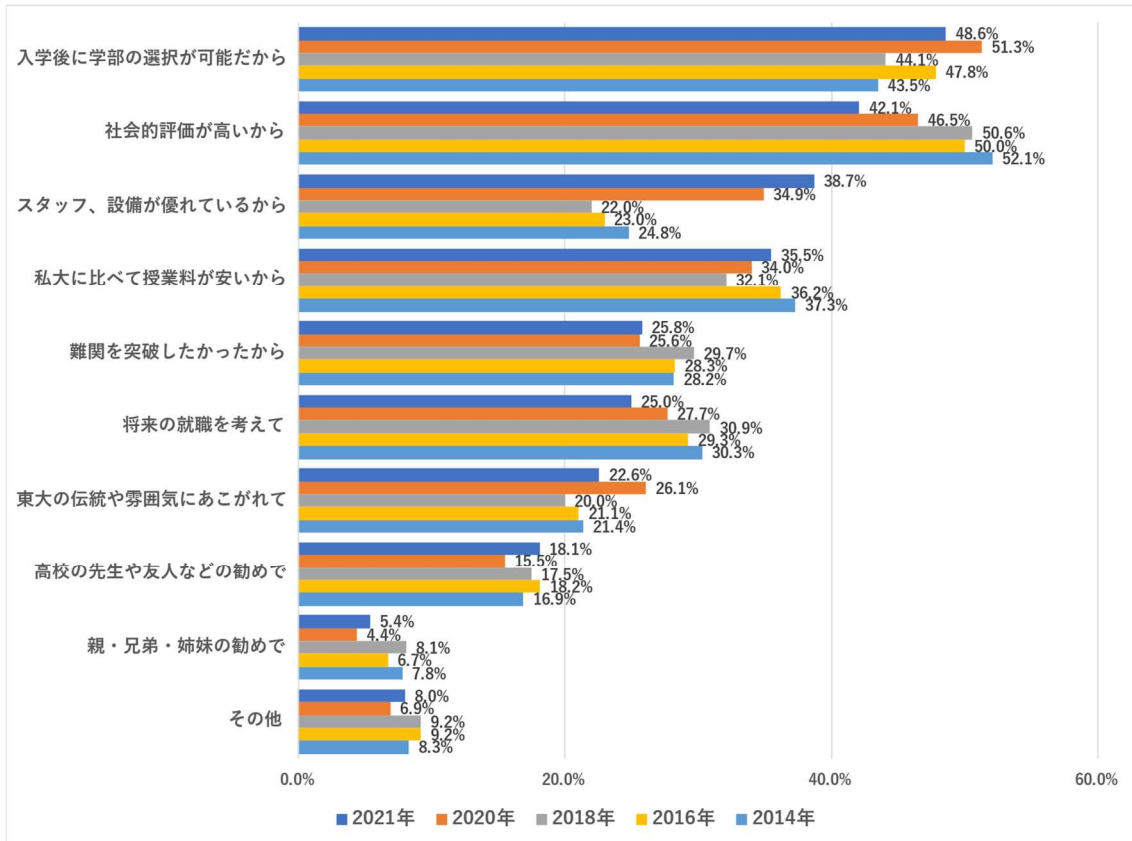
8. 東大入学の動機は、どれにあたりますか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。





## 【学部学生】

### 東大入学の動機の経年変化



東大入学の動機は、前回調査の結果と比べて上位4項目の変動がない。「入学後に学部を選択が可能だから」は48.6%で前回調査より2.7%ポイント減少したが、依然として最上位の項目である。「社会的評価が高いから」という理由は2014年以降減少傾向にあったものの、42.1%で2番目となる。3番目の「スタッフ・設備が優れているから」は2018年から大きく増えて、今回も前回調査と比較して3.8%ポイント程度の増加である。「私大に比べて授業料が安いから」という理由は2014年~2018年の間は年々減少であったが、2018年からは少しずつ増えて、今回は35.5%で4番目となる。なお、「難関を突破したかったから」という理由は「将来の就職を考えて」と「東大の伝統や雰囲気に憧れて」を超えて上位5項目に入った。

## 【学部学生】



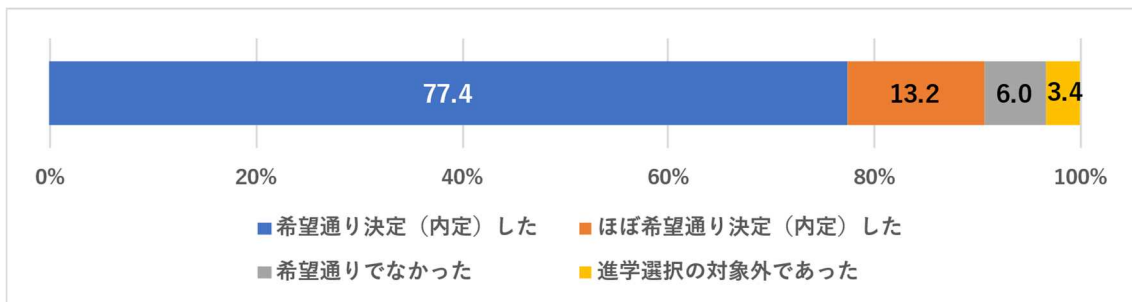
留学生版の選択項目は、国内生版と異なるが、半数以上が「知名度の高さ」「世界大学ランキング上位」を選択した。知名度重視の傾向は、これまでの調査結果と重なっている。また 12.8%は「入学前に奨学金受給が決定した」ことも、選択理由として挙げている。

## 【学部学生】

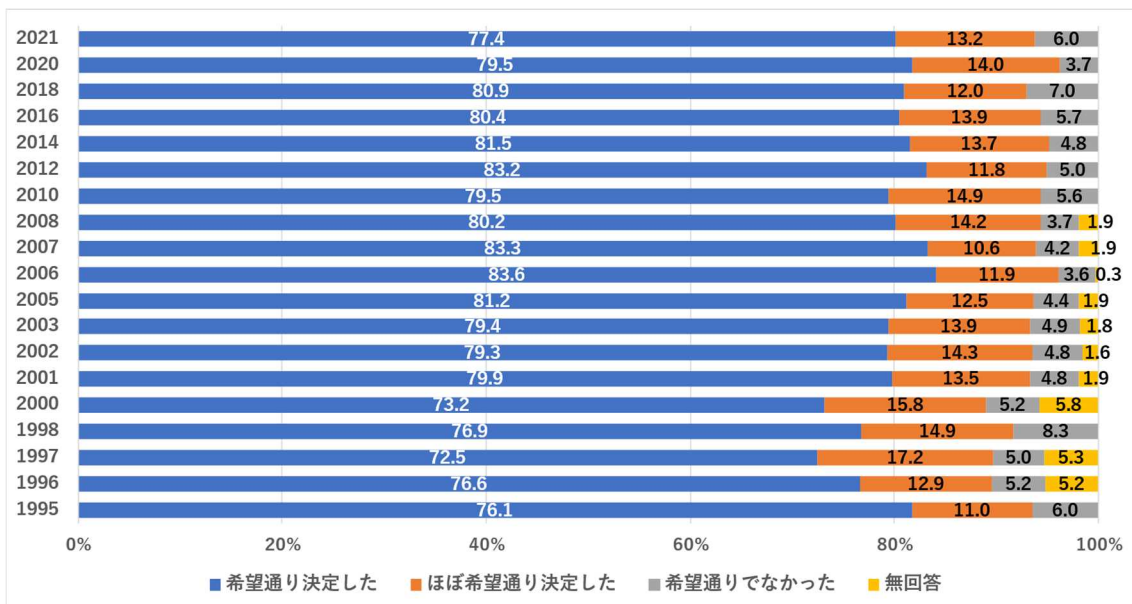
### 9. 進学決定（内定）

- 「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」は9割程度であるが、2018年以降減少傾向

9. 【進学内定者】及び【後期課程学生】にお伺いします。進学決定（内定）は、希望通りでしたか。あてはまるものを1つ選んでください。



「進学決定（内定）」の経年変化



進学の内定は77.4%が「希望通り決定した」で、「ほぼ希望通り決定した」も含めると90.6%となり、前回調査の93.5%より2.9%ポイント減少した。「希望通りでなかった」の回答は6.0%で、前回調査と比べて2.3%ポイント程度の増加である。目立った時間的変化や傾向はみられず、1995年以降大多数が進学先を「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」している。

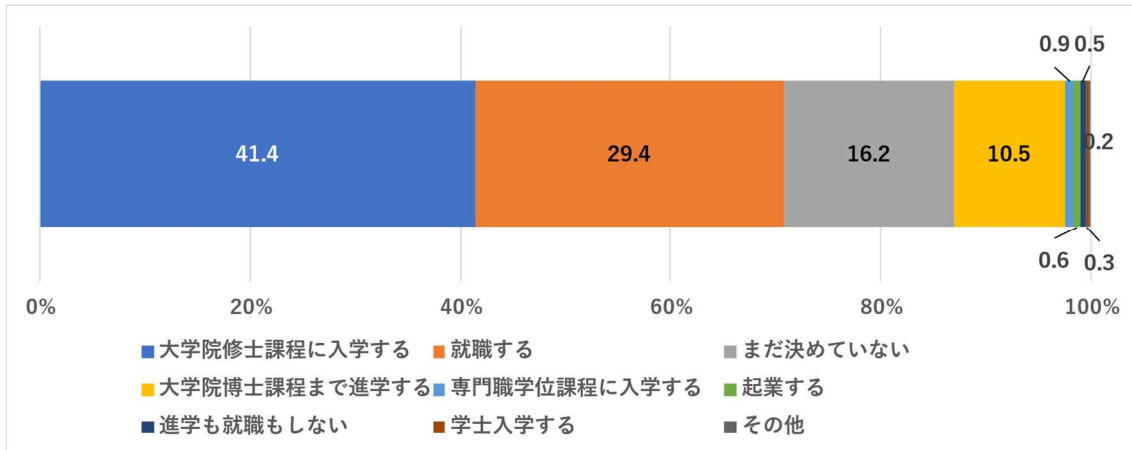
留学生は、入学時に進学先が決まっている場合があるため、回答のあった79名のみについてみる。「希望通り決定（内定）」82.3%、「ほぼ希望通り決定（内定）」15.2%、「希望通りではなかった」2.5%であり、国内生よりも希望通りと回答した学生割合が高い。

## 【学部学生】

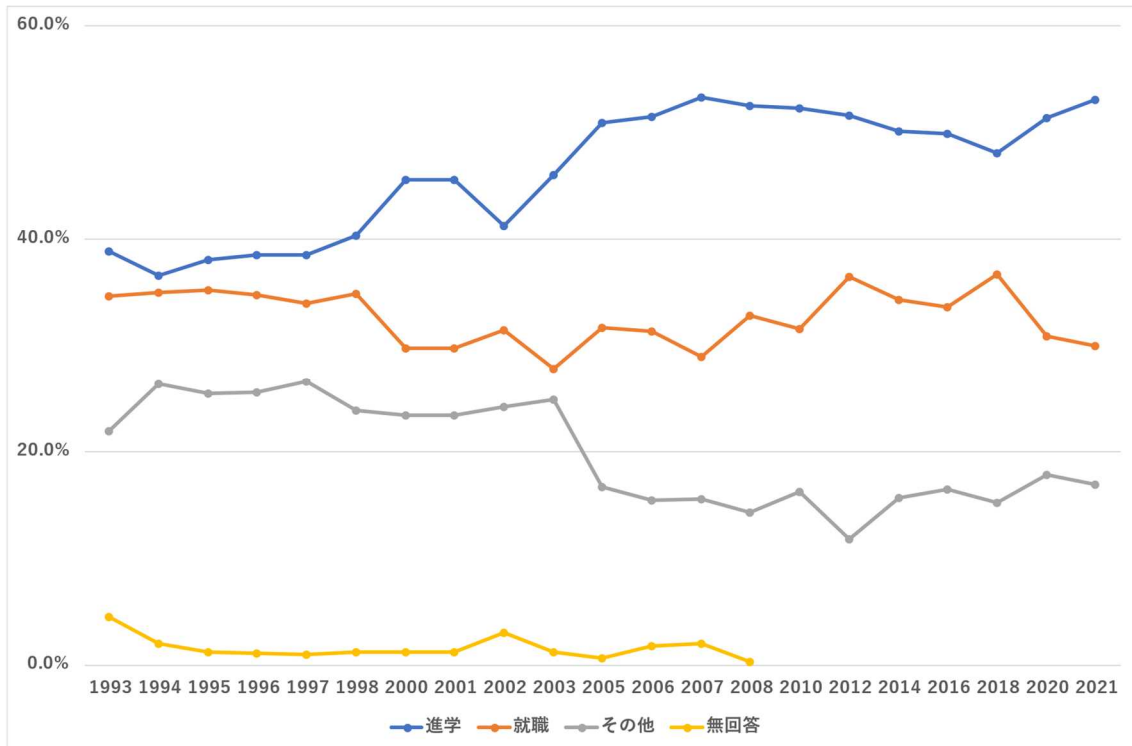
### 10. 卒業後の進路

- 進路上位3項目「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」
- 進学と就職の差が拡大
- 進学はピークであった2007年の数値に近づいている

10. あなたは、学部卒業後は、どのような進路を予定していますか。あてはまるものを1つ選んでください。



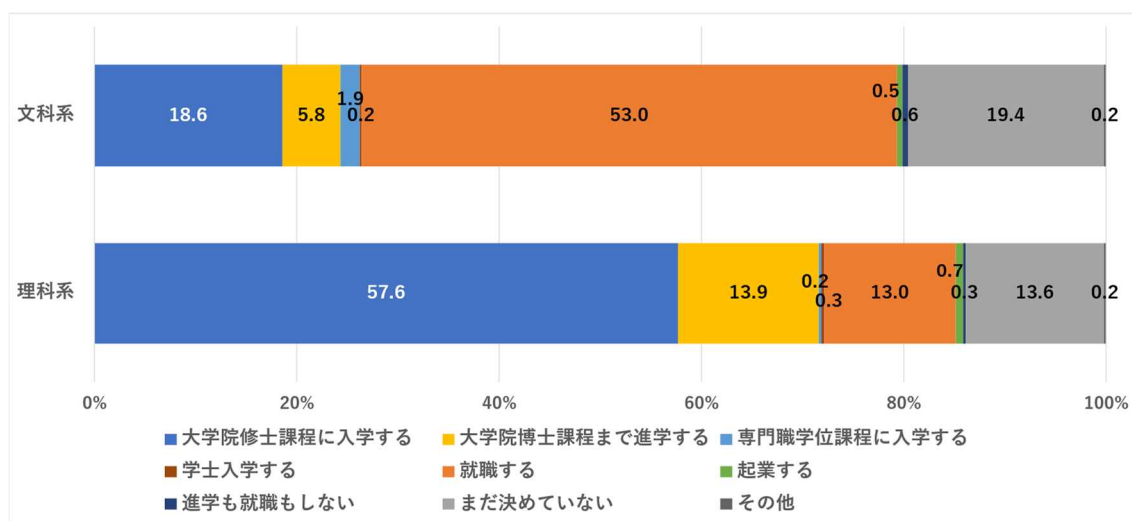
進路予定の経年変化



## 【学部学生】

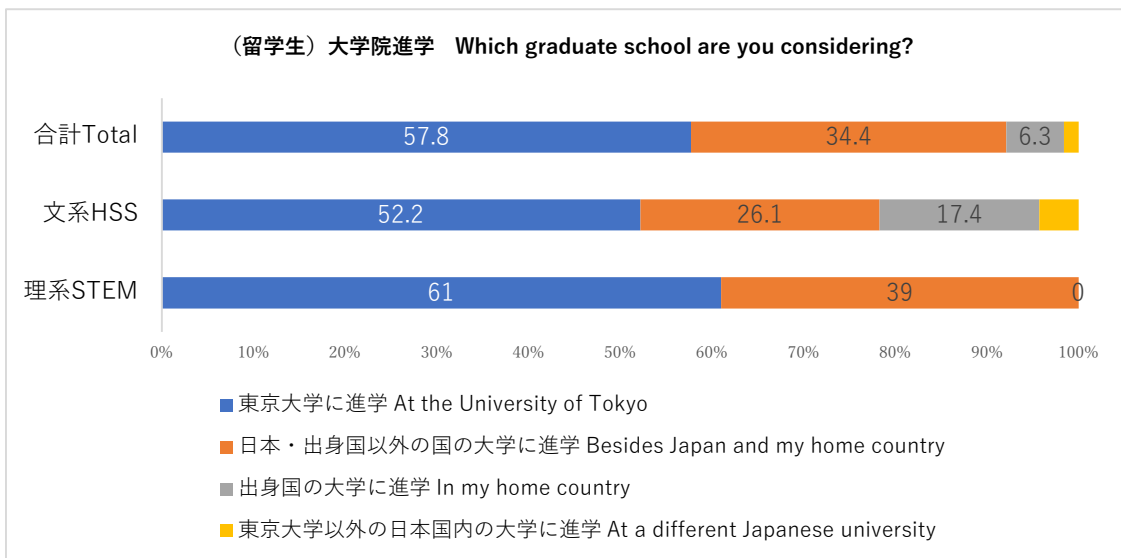
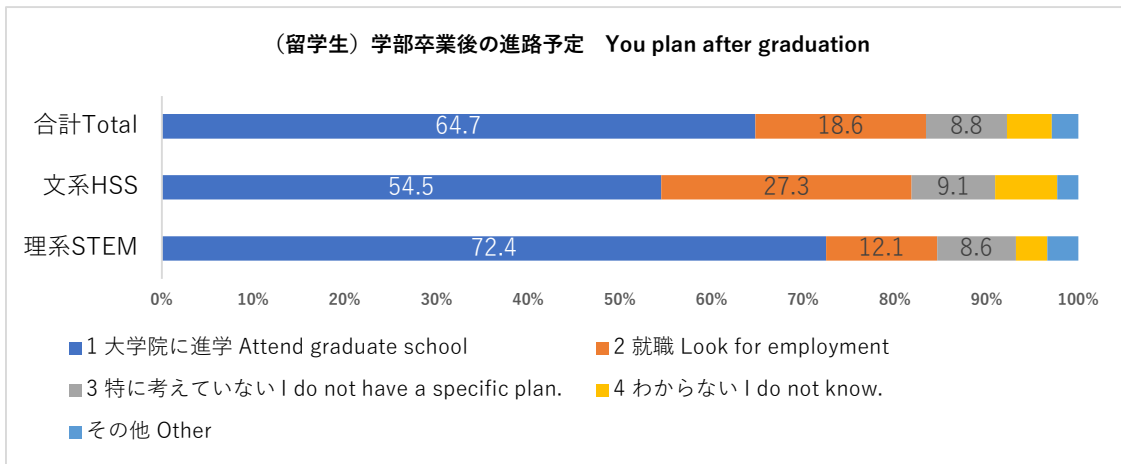
卒業後の進路上位3項目は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」で、前回と同様の順位である。時系列でみると今回調査では進学（前回調査 51.3%、今回調査 53.1%）と就職（前回調査 30.9%、今回調査 30.0%）との差が拡大していることがわかる。微減傾向であった進学は2018年以来増加傾向となり、今回調査ではピークであった2007年の数値（53.3%）に近づいている。「就職する」は29.4%で、前回調査より0.8%ポイント程度の減少である。

### 進路予定（文理別）



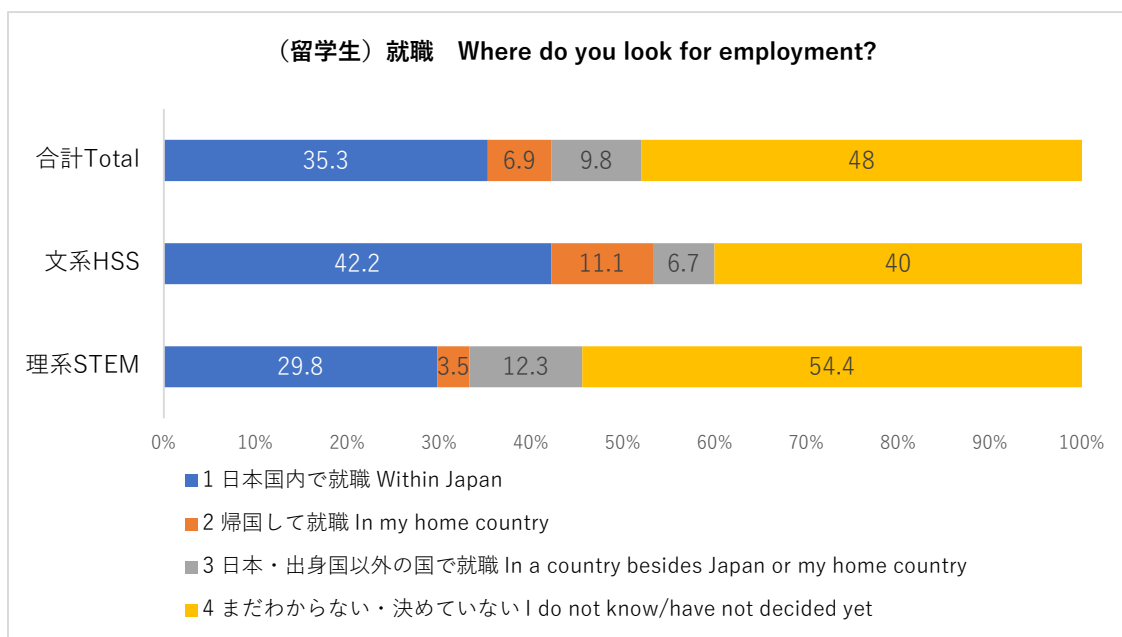
文理別で見ると、文科系の上位3項目は「就職する」「まだ決めていない」「大学院修士課程に入学する」であったが、理科系の学生は大学院への進学率が高いため、「大学院修士課程に入学する」「大学院博士課程まで進学する」「まだ決めていない」の順となった。前述のとおり、全体では進学と就職の差が拡大傾向であるが、文理別に変化の内訳をみると、「大学院修士課程に入学する」の割合は文科系（前回調査 16.8%、今回調査 18.6%）、理科系（前回調査 56.5%、今回調査 57.6%）であり、「就職する」の割合は文科系（前回調査 56.2%、今回調査 53.0%）、理科系（前回調査 12.4%、今回調査 13.0%）となっている。

## 【学部学生】



留学生の進路決定においては、進学か就職かを定めることと、日本で進学・就職をするかどうかを決めることが必要となる。日本人学生の回答と比べると、文系学生も大学院進学希望者が多いことが特徴であり、学部留学生の研究者志向の強さと、民間への就職に関する情報不足等が関係している可能性がある。大学院進学者の6割程度が東大での進学を希望し、3割程度が日本以外の国での大学院進学を希望に挙げる傾向は、前回調査とも重なる傾向である。

## 【学部学生】



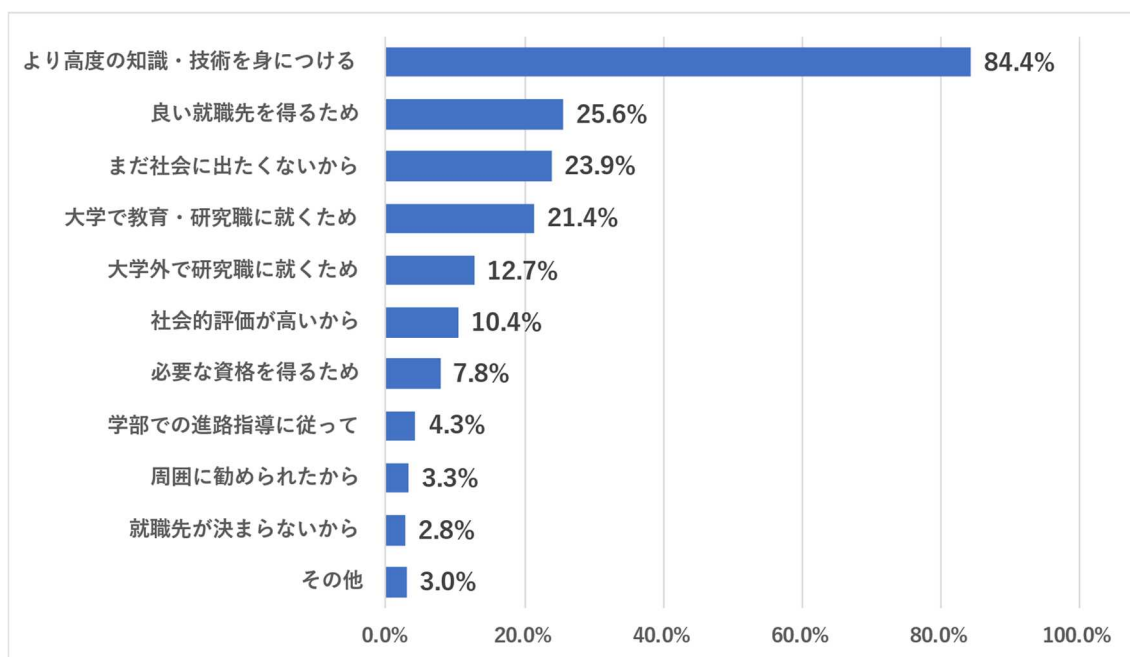
学部留学生の半数近くは、将来の就職先が未決定であるが、就職を決めている学生の中では、日本での就職希望者が多い。過去の調査とは質問の仕方が異なっており、数字そのものの比較は難しいが、68回調査では93.3%、70回調査では84.0%が、日本国内での就職を希望していた。日本以外の国での就職希望者が増加する傾向があるのか、今後注視していく必要がある。

## 【学部学生】

### 11. 大学院進学理由

- 大学院に進む理由上位3項目「より高度の知識・技術を身につける」、「良い就職先を得るため」、「まだ社会に出たくないから」
- 「まだ社会に出たくないから」は大きく増加

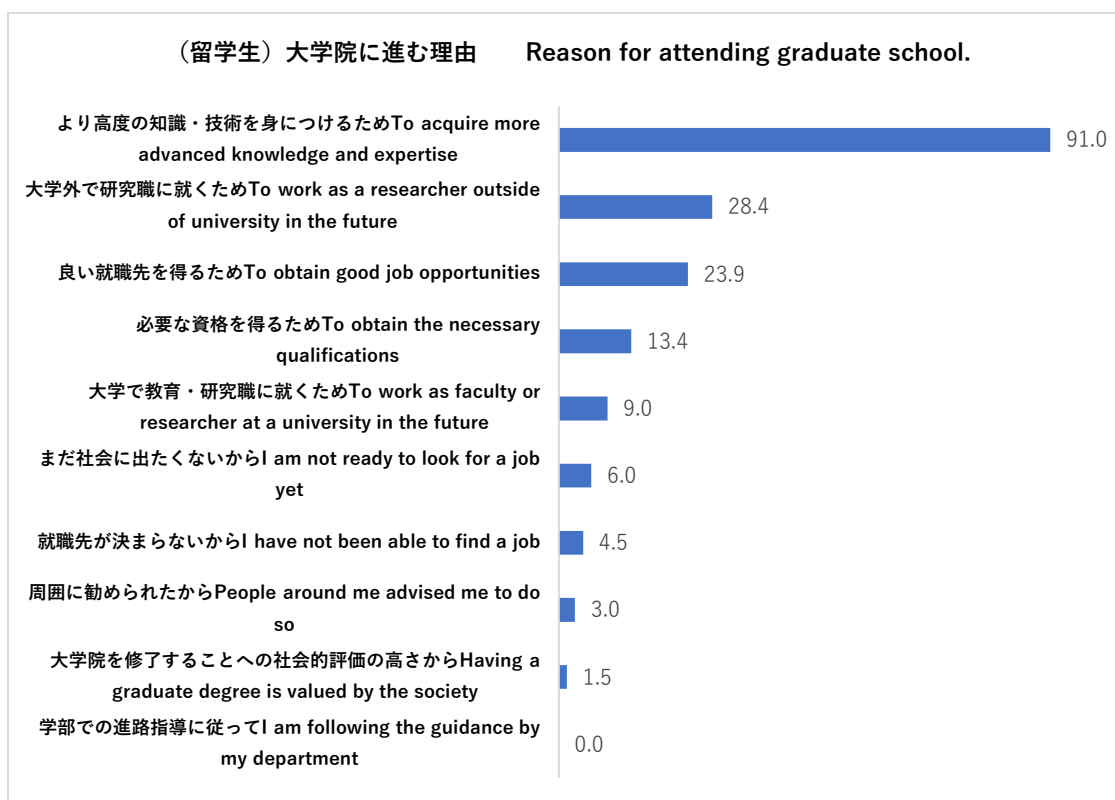
11. 大学院に進む理由で、あてはまるものを2つ選んでください。



大学院に進む理由上位2項目は「より高度の知識・技術を身につける」（前回調査84.4%、今回調査と同じ）と「良い就職先を得るため」（前回調査26.8%、今回調査25.6%）である。変化が大きいのは「まだ社会に出たくないから」（23.9%）で、前回調査（14.6%）より9.3%ポイント増加し、「大学で教育・研究職に就くため」（前回調査22.0%、今回調査21.4%）を超えて上位3項目に入った。「大学外で研究職に就くため」は前回調査と比べて2.4%ポイントの減少である。



## 【学部学生】



大学院に進む理由上位は「より高度の知識・技術を身につける」91.0%、「大学外で研究職に就くため」28.4%、「良い就職先を得るため」23.9%であった。「大学外で研究職に就くため」を選択した学生の割合が、国内生よりも留学生のほうが高い傾向がみられるが、全体的には概ね重なっている。

## 【学部学生】

### 「Ⅱ. 入学・進学・学業」の分析（まとめ）

入学、進学選択、進路等について調査を行った。浪人をしてでも東京大学への入学を希望する者の割合は近年減少傾向で、今回調査は50%未満となった。一方、「東大がダメなら他大学でもよい」と回答した者の割合の増加傾向は変わらない。また、入学理由として「入学後に学部の選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」及び「スタッフ・設備が優れているから」は前回調査と同じく上位3項目である。特に、「スタッフ・設備が優れているから」という理由を選んだ学生の割合は2018年以降大きく増加し、東京大学のソフト面とハード面双方の魅力が認められている。一方、進学先が希望通り、ほぼ希望通り決定としたのは大多数であるが、その割合は2018年以降減少傾向である。

卒業後の進路希望は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」と回答した者が多い。2007年から減少傾向であった進学希望者は2018年から増加に転じて、逆に就職希望者は減少しつつあり、両者の差が拡大している。同時に、大学院進学理由として、「まだ社会に出たくないから」の割合が増加し、再び上位3項目に入った。コロナ禍の状況下で、新卒採用の方法の変化や景気変動が学生の選択に与える影響を注視していく必要がある。

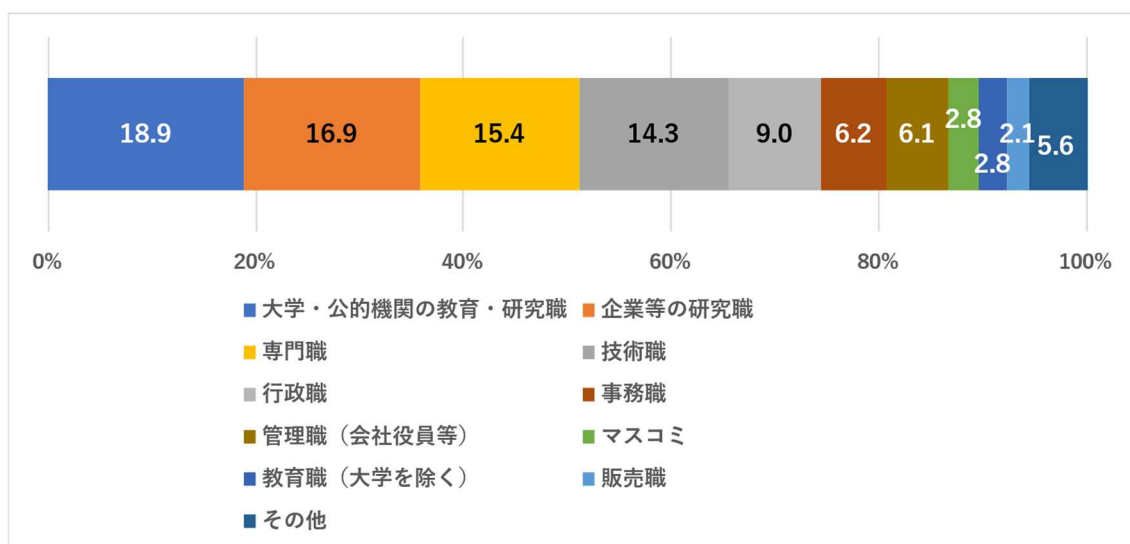
留学生の進路に関する希望は、国内生と比較すると文系・理系の差が小さく、いずれも大学院進学希望者が多い点にある。詳細は、留学生版調査報告書を参照のこと。

### Ⅲ. 就職

#### 12. 就職希望職種

- 全体的な就職希望職種上位3項目は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「専門職」
- 文理問わず「大学・公的機関の教育・研究職」の順位が上昇
- 「専門職」と「技術職」の順位が逆転

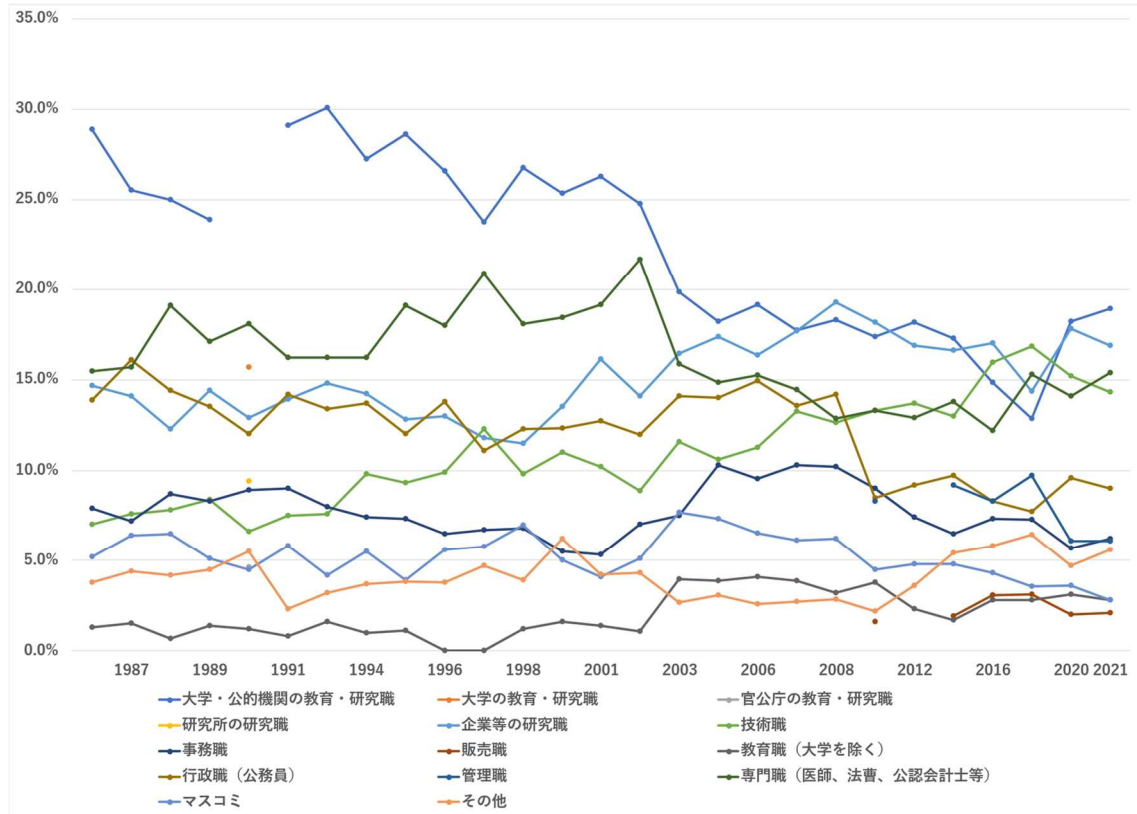
12. どのような「職種」に就きたいと思っていますか。あてはまるものを1つ選んでください。



「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」が合わせて 35.8%を占め、前回調査の 36%とほぼ同じ結果となった。「専門職」の増加と「技術職」の減少により、両者の順位が前回調査と比べて逆転した。

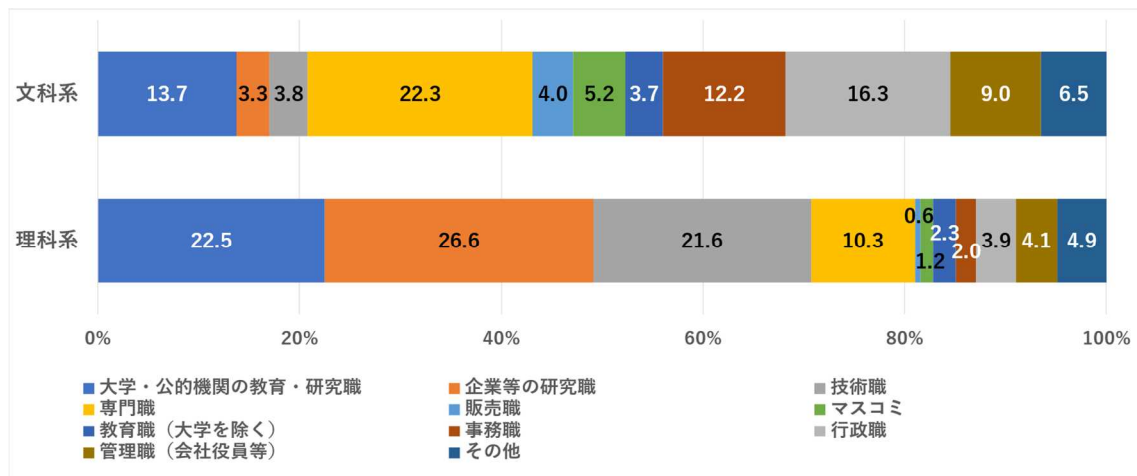
## 【学部学生】

就職希望職種の経年変化



経年変化を確認する。「大学・公的機関の教育・研究職」は前回調査と同じく増加傾向であるが、「企業等の研究職」と「行政職（公務員）」は微減した。前回調査ですでに減少した「技術職」もその傾向は続いている。「管理職」は前回調査と変わらないが、ここ10年間の傾向は減少している。「事務職」は今回調査で増加したが、ここ十数年間で全体的な傾向は減少している。それに対して、「専門職(医師、法曹、公認会計士等)」は再び増加し、2018年の数値に近づいている。

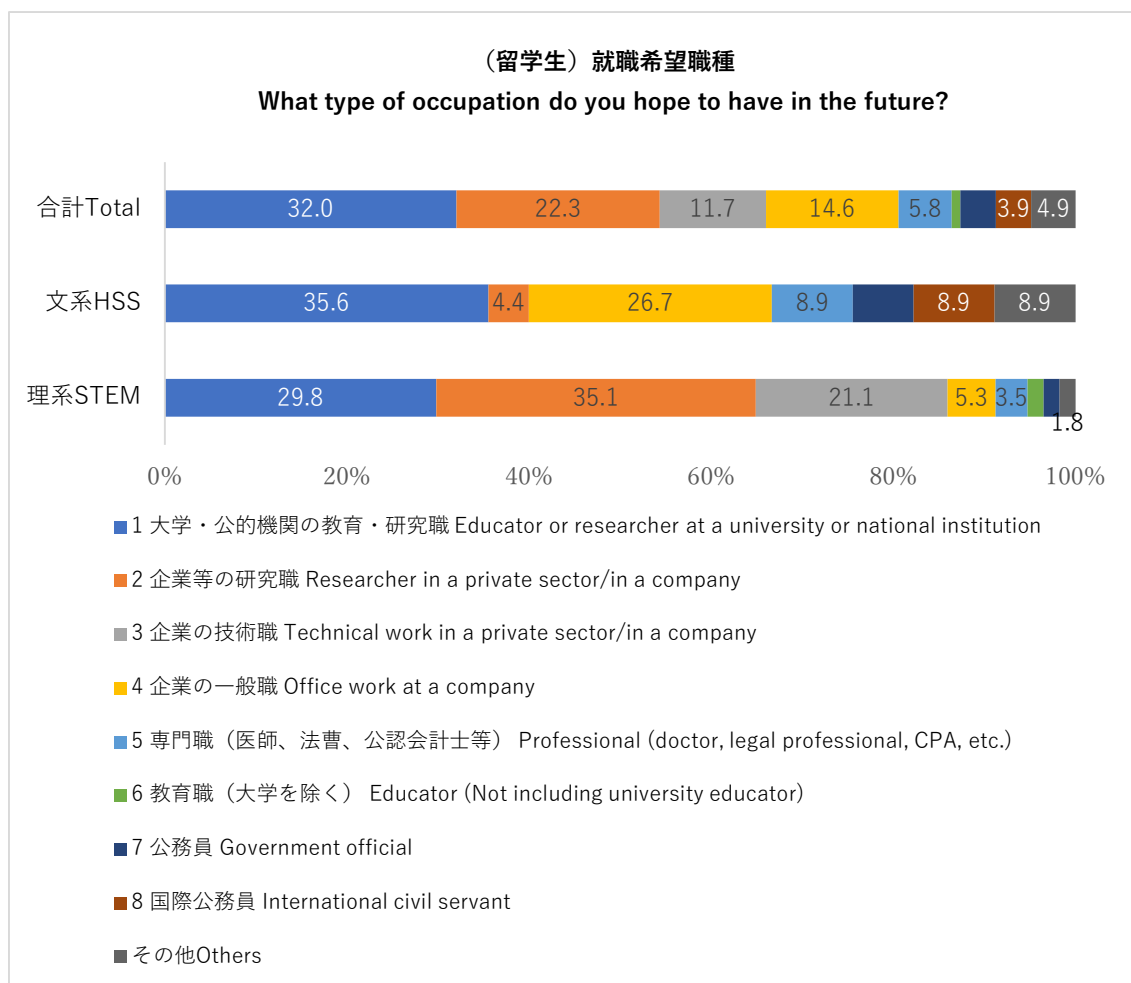
就職希望職種（文理別）



## 【学部学生】

文科系の上位2項目は「専門職」（前回調査 21.3%、今回調査 22.3%）と「行政職」（前回調査 19.0%、今回調査 16.3%）で、「大学・公的機関の教育・研究職」（前回調査 11.3%、今回調査 13.7%）は前回調査より 2.4%ポイント増加し、「事務職」（前回調査 11.6%、今回調査 12.2%）を超えて上位3項目に入った。

理科系の学生は大学院への進学率が高いため、大学と企業での研究職を志望する割合は合わせて 49.1%で半数に近づく。一方、この数値は前回調査の 50.2%より微減した。今回調査で「大学・公的機関の教育・研究職」は 22.5%(前回調査 22.8%)であるが、「技術職」（前回調査 23.5%、今回調査 21.6%）の減少により、第2位となった。



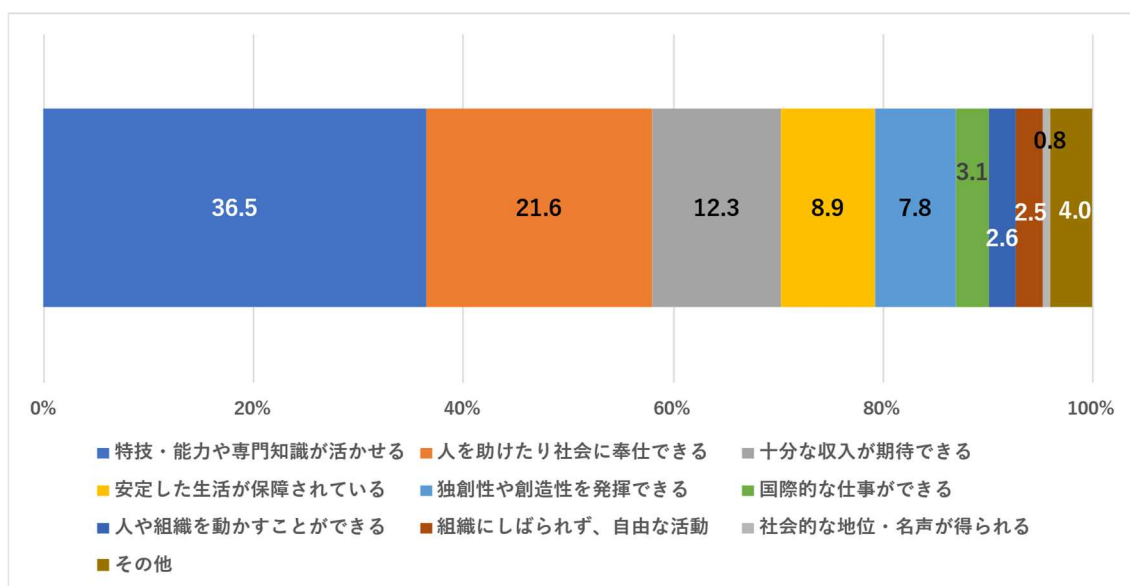
学部留学生の将来の職業に関しては、文系学生で研究職希望者が 35.6% (27.3%) を占めている点が、日本人学生と比較した際の特徴といえる。この傾向は例年みられるが、本年度調査ではさらに強まっている。理系学部留学生では、企業の研究職 35.1% (19.8%) を志向する学生が増えている。母数が小さいため、今後の変化に注目する必要があるが、理系学生においては、大学等の研究職につく競争の激しさが、学部留学生の進路選択にも影響を及ぼしている可能性がある。

## 【学部学生】

### 13. 就職希望職種選択理由

- 就職希望職種選択理由の上位3項目「特技・能力や専門知識が活かせる」、「人を助けたり社会に奉仕できる」、「十分な収入が期待できる」
- 理科系では「特技・能力や専門知識が活かせる」、文科系では「人を助けたり社会に奉仕できる」が最も選ばれた

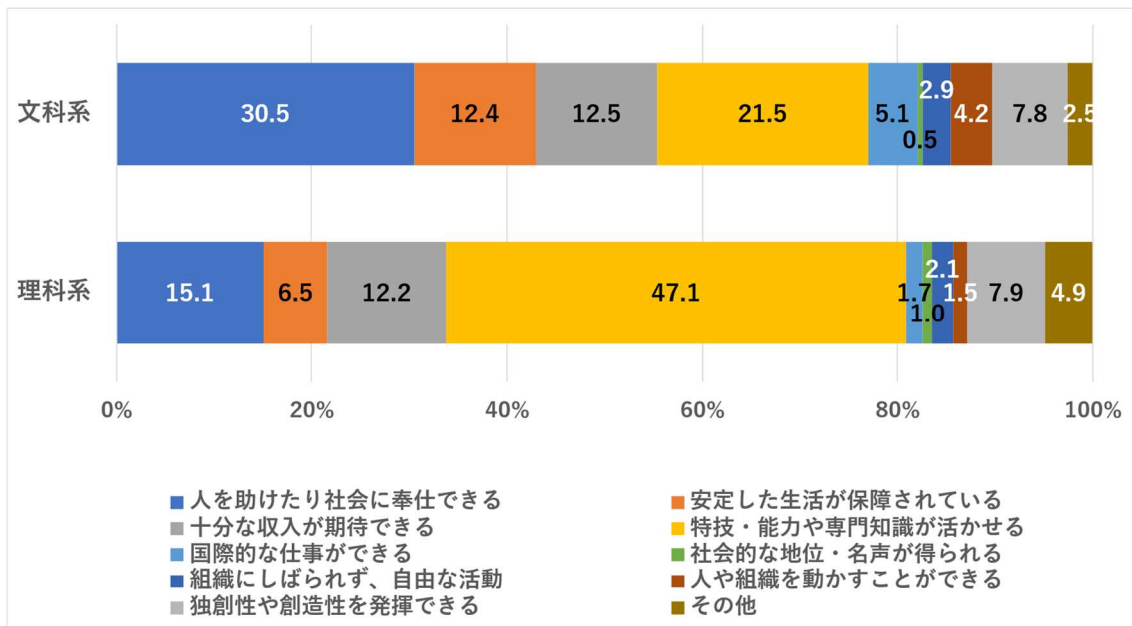
13. 設問12で答えていただいた「その職業に就きたい」と思っている理由は何ですか。  
あてはまるものを1つ選んでください。



希望する職業に就きたい理由の上位3項目は「特技・能力や専門知識が活かせる」（前回調査 37.4%、今回調査 36.5%）、「人を助けたり社会に奉仕できる」（前回調査 24.2%、今回調査 21.6%）、「十分な収入が期待できる」（前回調査 10.0%、今回調査 12.3%）である。一方で「人や組織を動かすことができる」（前回調査 2.0%、今回調査 2.6%）といったリーダーシップ志向の割合や、「組織にしばられず、自由な活動」（前回調査 2.4%、今回調査 2.5%）といった個性を強調する志向の割合は高くはなく、名声を求める志向も非常に低い。

## 【学部学生】

就職希望職種選択理由（文理別）



文理間で就職希望職種の選択理由に差がみられた。文科系の一番の志望理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」（前回調査 30.6%、今回調査 30.5%）である一方、理科系は「特技・能力や専門知識が活かせる」（前回調査 45.6%、今回調査 47.1%）であり、大学で学んだ知識をすぐに活用したいという傾向が読み取れる。

## 【学部学生】

### 「Ⅲ. 就職」の分析（まとめ）

就職希望職種とその理由を尋ねたところ、職種は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「専門職」が挙げられた。特に、文理問わず「大学・公的機関の教育・研究職」の順位が上昇したのは今回調査の特徴的な点である。

文科系の第一の職種選択理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」であるが、理科系の場合は「特技・能力や専門知識が活かせる」で、大学院進学の第1位の理由である知識や技術を身につけたいことと合致している。一方で、どちらにおいてもリーダーシップ志向の割合や、個性を強調する志向の割合が高いといえず、名声を求める志向も非常に低い。先行きが見通せない時勢で安定志向の選択がなされている感がある。

留学生は、日本人学生と比較すると例年から、文系学生にも研究者志向が強くみられるが、今年度調査でも同様の結果がみられた。



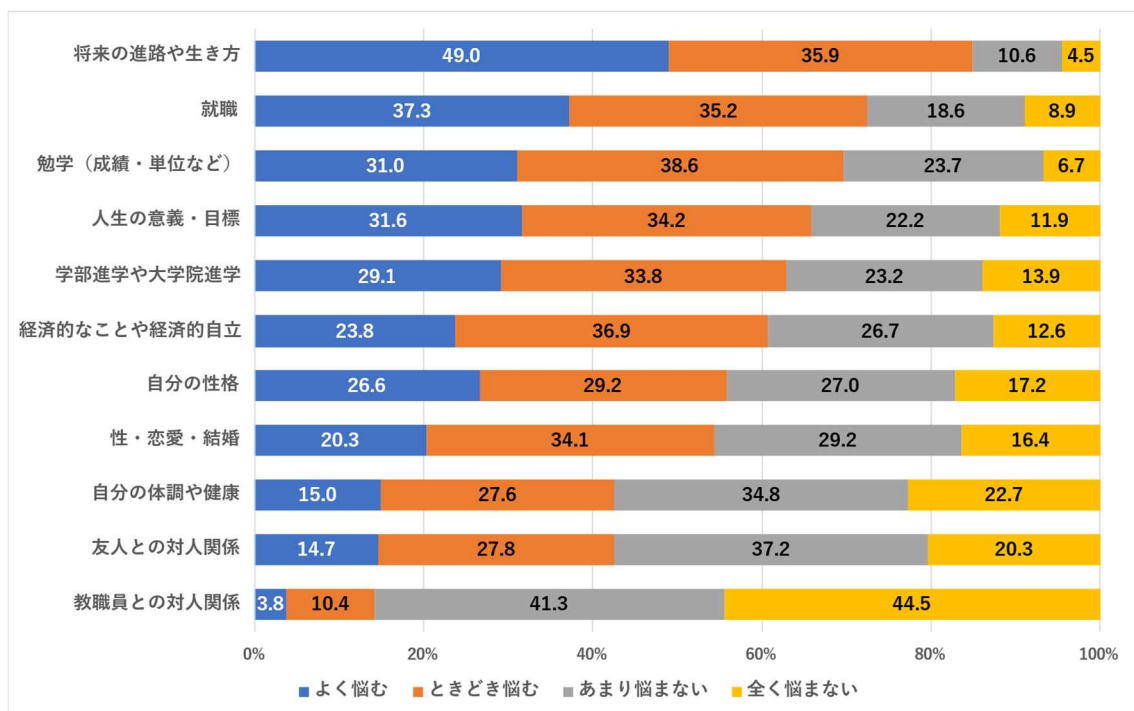
## 【学部学生】

### IV. 不安・悩み

#### 14. 不安・悩みの程度

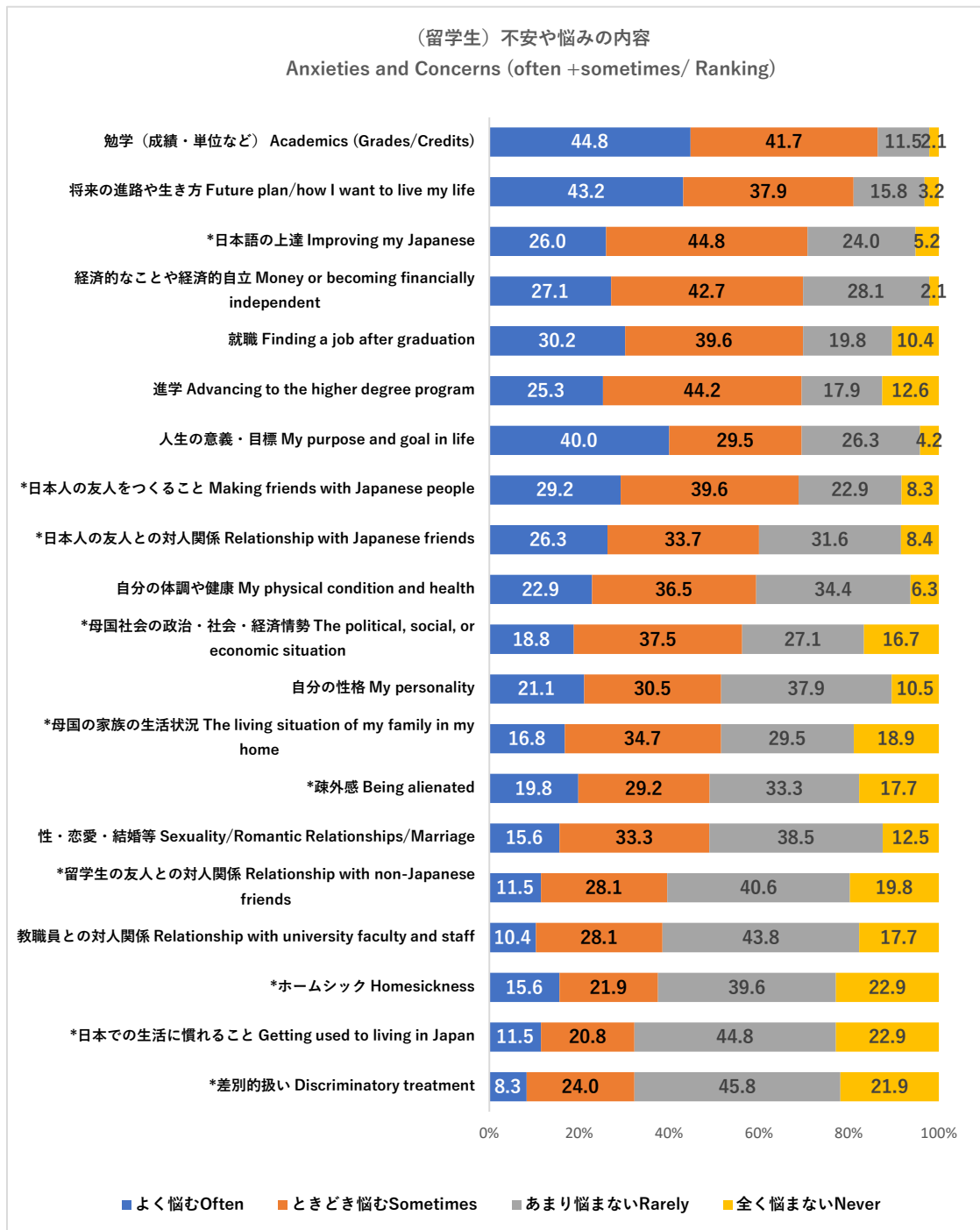
- 不安・悩みをもたらす上位3項目「将来の進路や生き方」、「就職」、「勉学(成績・単位など)」
- 最も少ない悩みは「教職員との対人関係」

14. 現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか。



学生生活の中で悩みや不安を感じるものとして、「よく悩む」と「ときどき悩む」の合算値が最も大きかった項目は「将来の進路や生き方」で合計84.9%（前回84.9%）であった。次いで「就職」の72.5%（前回73.6%）、「勉学(成績・単位など)」の69.6%（前回65.6%）と続く。「人生の意義・目標」は65.8%（前回66.4%）で「勉学(成績・単位など)」と順位が入れ替わった。「あまり悩まない」「全く悩まない」の合算値が最も大きかった項目は「教職員との対人関係」で85.8%（前回83.3%）。次いで、「友人との対人関係」で57.5%（前回55.3%）、「自分の体調や健康」で57.5%（前回61.0%）であった。下位3項目は前回調査と同様であった。

## 【学部学生】



学部留学生の不安・悩みの上位は、「勉学」86.5%（前回2020年度：77.0%、前々回2018年度73.6%）「将来の進路や生き方」81.1%（87.4%、84.7%）「日本語の上達」70.8%（59.8%、52.8%）であり、日本人学生と比較すると、「勉学」に対する不安・悩みがより高い。過去調査と比較すると、「日本語の上達」に関する不安の上昇が特徴といえる。

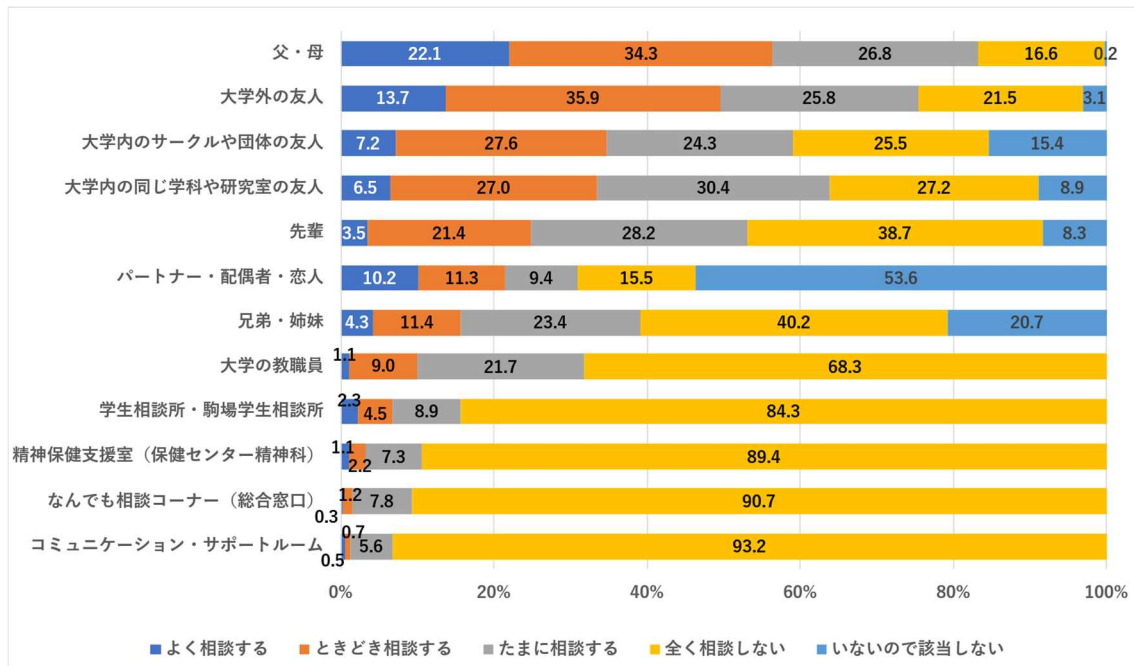
その他の領域に関しても、過去調査と比較して、不安や悩みを抱える学生の割合が多くの項目で高まった。

## 【学部学生】

### 15. 悩みの相談相手

- 悩みを相談する相手の上位3項目は「父・母」、「大学外の友人」、「大学内のサークルや団体の友人」
- 大学の相談施設の利用は多くない

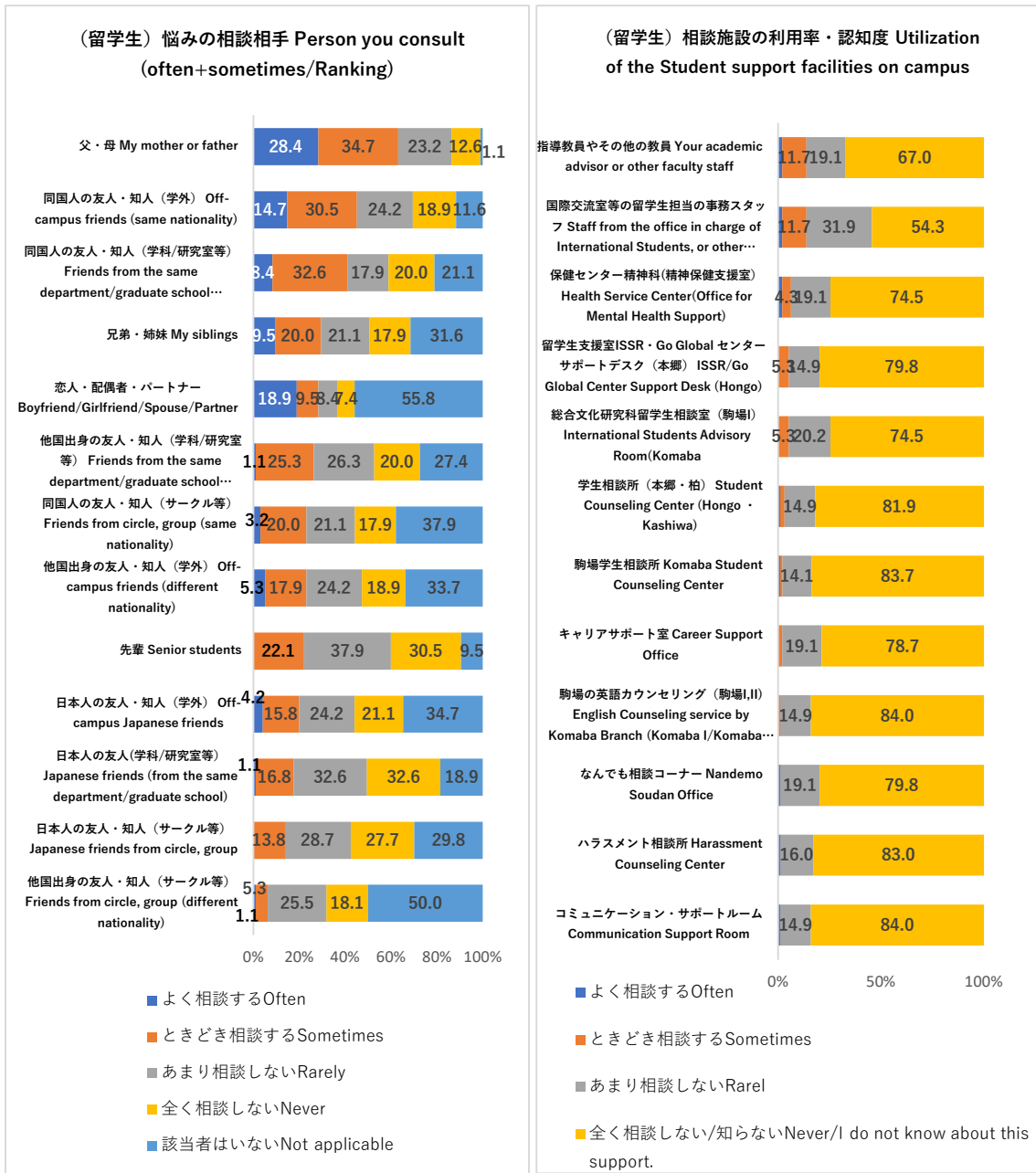
15. あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか。



不安や悩みを誰に相談するか尋ねたところ、「よく相談する」、「ときどき相談する」の合算値が最も多かった項目は「父・母」で合計 56.4%（前回 45.6%）で、前回調査よりも 10%ポイント以上増加した。次いで、「大学外の友人」49.6%（前回 41.5%）、「大学内のサークルや団体の友人」34.8%（前回 29.3%）が続く。一方、悩みの相談相手としての教職員や大学の相談施設の利用は多くないのも例年同様である。

なお、今回調査から設問項目に「精神保健支援室（保健センター精神科）」、「コミュニケーション・サポートルーム」を、回答の選択肢に「いないので該当しない」を追加している。

# 【学部学生】



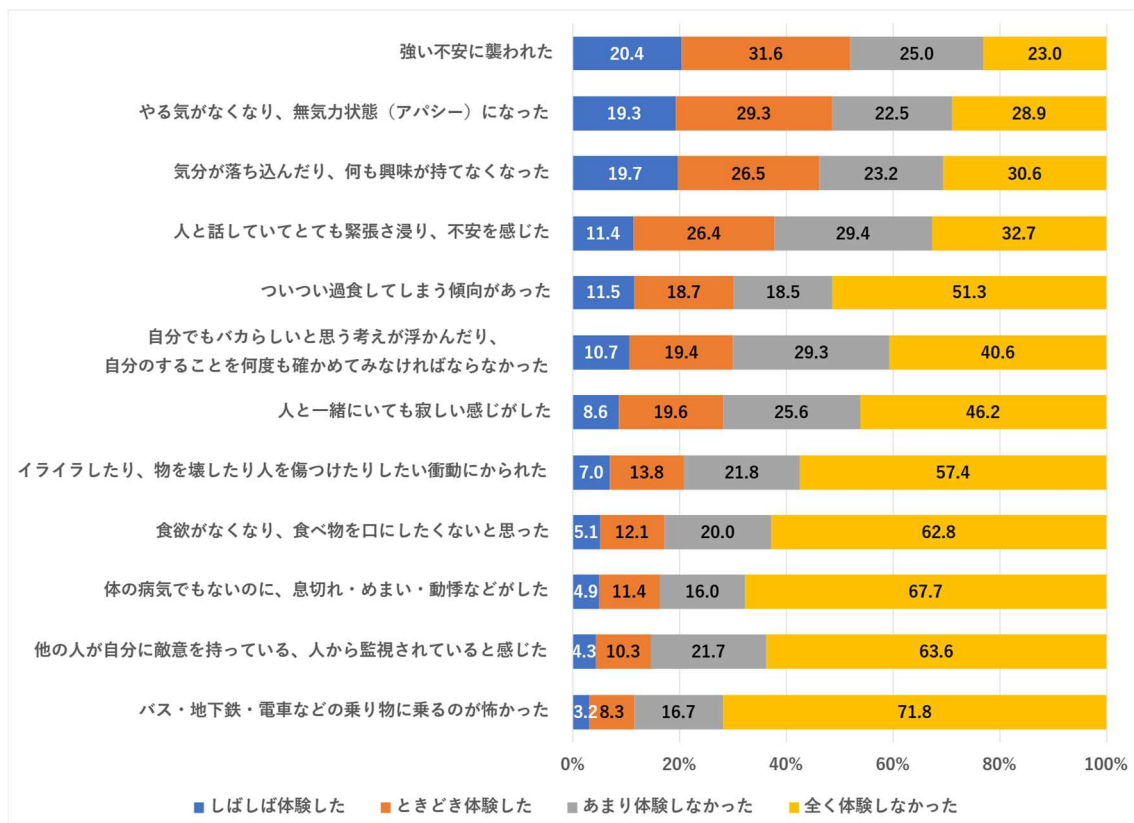
学部留学生が最もよく相談する相手は、「父・母」であり、大学外・内の同国人の友人が続く。この傾向は、過去の調査においても同様にみられる。本年度調査から「該当者がいない」の選択肢を設けているが、サークル活動を通じた友人は「該当者がいない」との回答が多く、回答時に未入国であったことの影響、入国後も、学内で相談できる友人を得にくい状態が継続していると考えられる。前回までの留学生調査項目と、選択肢が変更されており、直接比較はできないが、大学内の相談施設のうち相対的に利用割合が高いのは、保健センター、駒場・本郷の留学生対応の相談室であった。指導教員や国際交流室等に相談している学生は大学院留学生と比較すると少ない。

## 【学部学生】

### 16. メンタルヘルスの状態

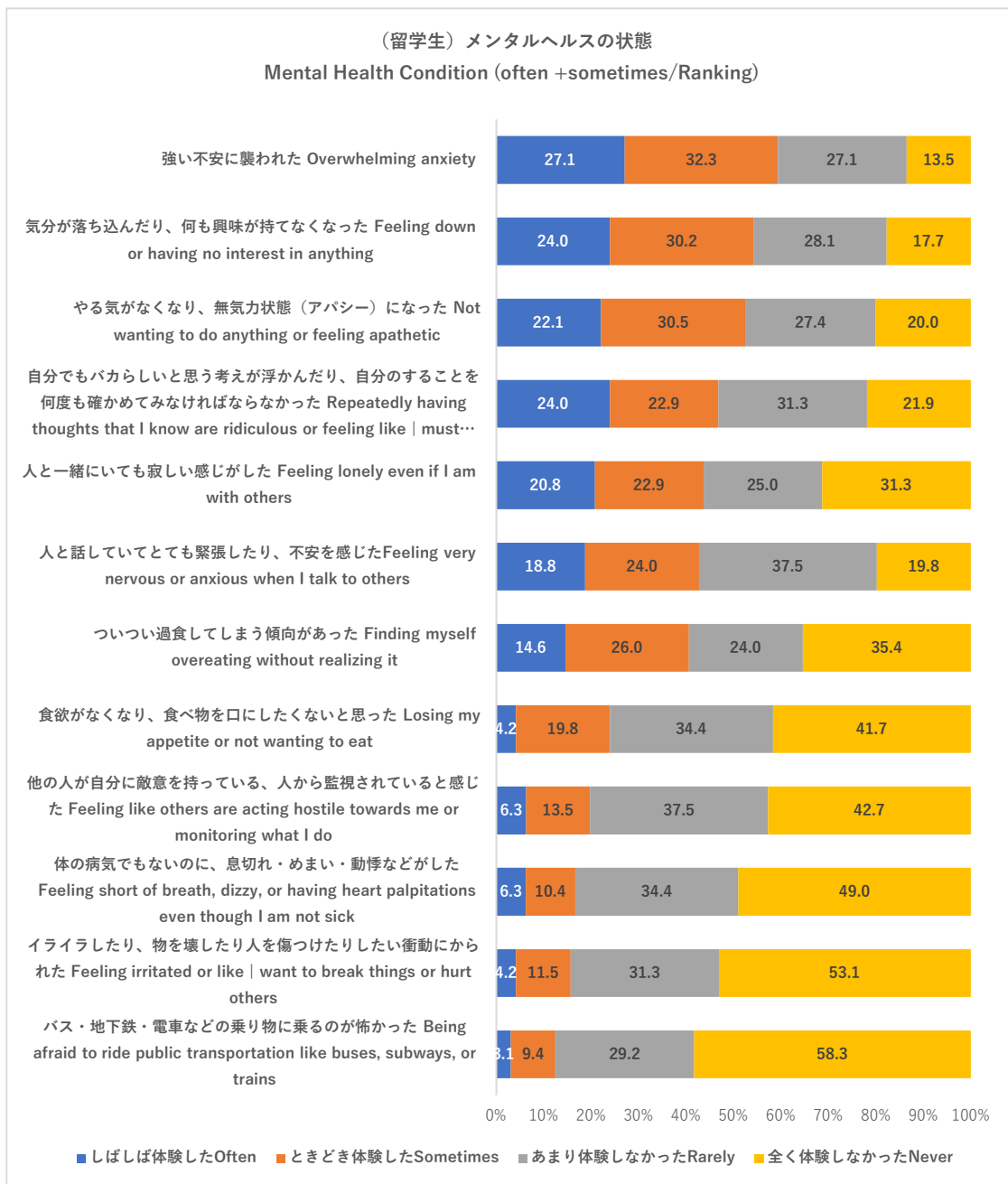
- 上位3項目は、「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」
- 「ついつい過食してしまう傾向があった」が7.6%ポイントの増加

16. あなたは、最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか。



メンタルヘルスの不調を「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が最も多かった項目は「強い不安に襲われた」で52.0%（前回55.8%）であった。次いで、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」48.6%（前回45.5%）、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」46.2%（前回44.1%）が続く。「ついつい過食してしまう傾向があった」は前回調査より7.6%ポイント増加し、30.2%であった。

## 【学部学生】



学部留学生のメンタルヘルスの不調状態については、「強い不安に襲われた」59.4% (64.0%, 58.1%) 「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」54.2% (51.2%, 50.6%) 「やる気がなくなり、無気力状態になった」52.6% (59.3%, 48.8%) であった。上位3項目は日本人学生等と重なっているが、留学生のほうが不調を報告する学生の割合が高い。

また、「しばしば体験」「ときどき体験」を合算した割合は、2020年度調査と比較すると、減少した項目もみられるが、「しばしば」体験した学生の割合はむしろ増加している場合がある。

多くの学生が強い不安に襲われたコロナ禍初年度から、時間の経過とともに、不調状態が継続、悪化する学生と、コーピングが可能となった学生とが生じている可能性がある。

## 【学部学生】

### 「IV. 不安・悩み」の分析（まとめ）

学部学生は、「将来の進路や生き方」、「就職」、「勉強(成績・単位など)」でとくに不安や悩みを抱えていることが多く、11項目中8項目で半数以上が「よく悩む」「ときどき悩む」と回答しており、多くの学生が悩みを抱えていることが示された。主な悩みの相談相手としては、「父・母」、「大学外の友人」、「パートナー・配偶者・恋人」が挙げられ、今回調査ではそれぞれ割合が増加した。相談施設の利用率は他大学と比較して極端に低いわけではないが、悩みを抱えた学生の援助要請を促進するための、スティグマの軽減や認知度の向上を図る必要があるだろう。

学部学生が経験したメンタルヘルス不調としては、「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」が多く挙げられ、約半数の学生がこれらを経験していることが示された。

留学生においては、日本語の悩みの増加や、大学内の友人が不在である状態などがコロナ前よりみられるが、コロナ禍でさらに顕著になっている。またメンタルヘルスの不調状態については、回復傾向を示す学生と、継続して不調状態にある学生とに分化している可能性がある。

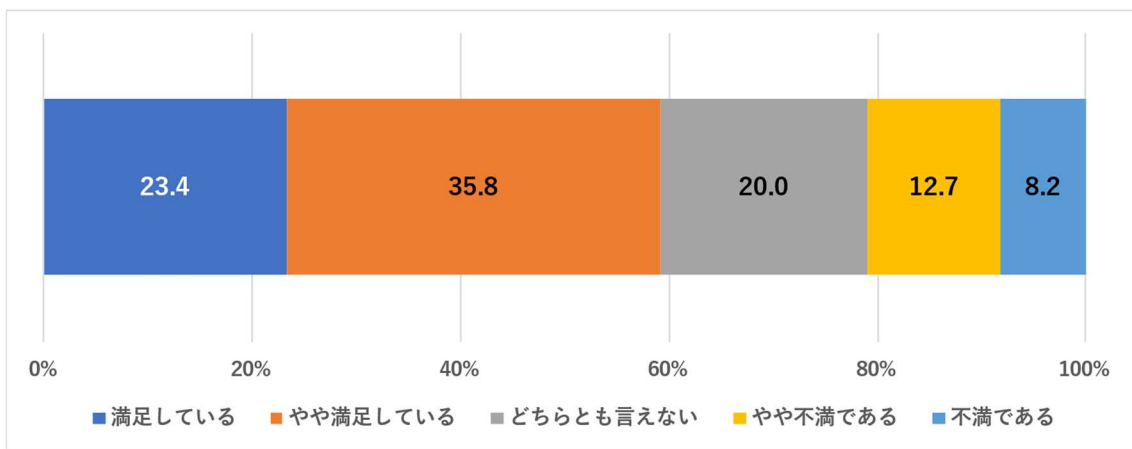
## 【学部学生】

### V.新型コロナウイルス感染症の影響

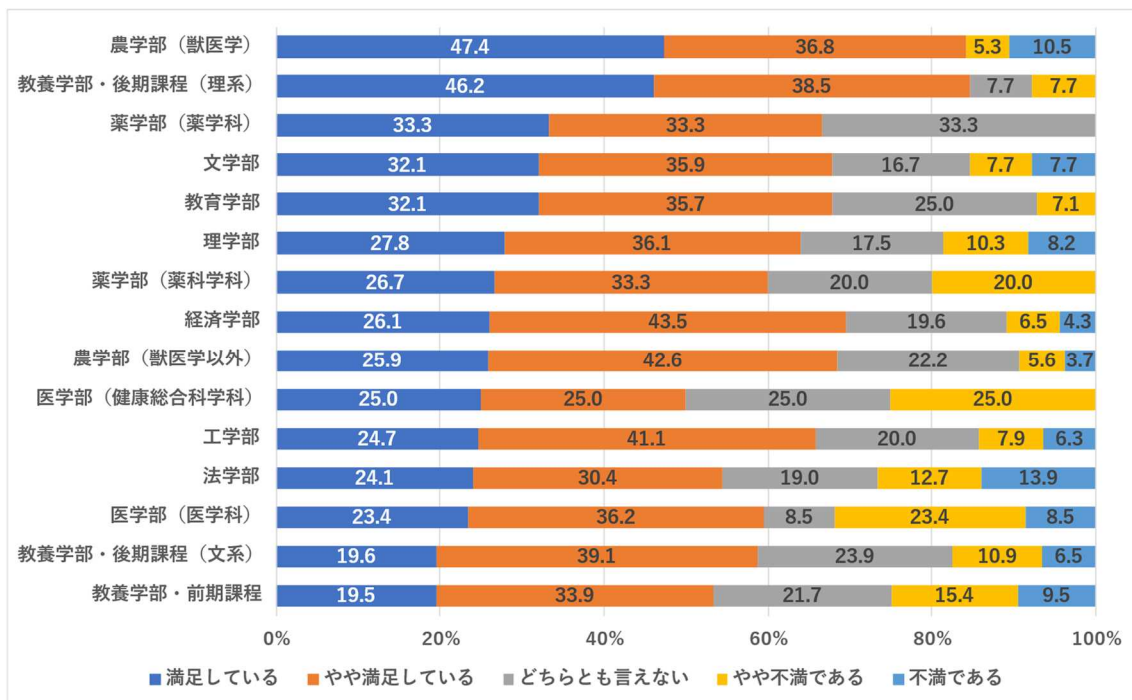
#### 17. オンライン授業満足度

- 半数以上はオンライン授業に満足、前回調査より 6.5%ポイントの増加
- 教養学部・後期課程(理系)、農学部(獣医学)の満足度は 8 割を超える
- 1 年生の満足度は大きく増加した

17. オンライン授業に満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。



#### オンライン授業満足度（部局別）

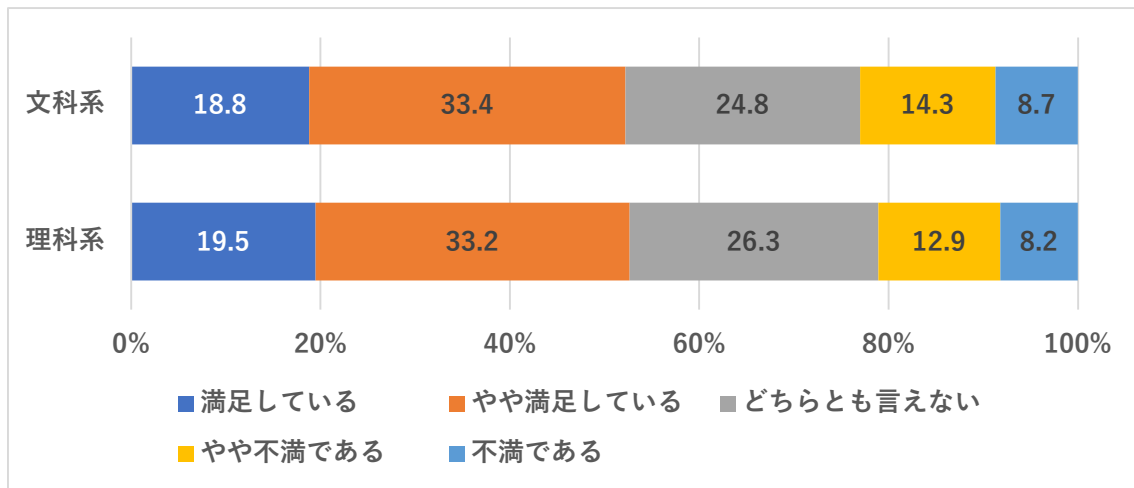




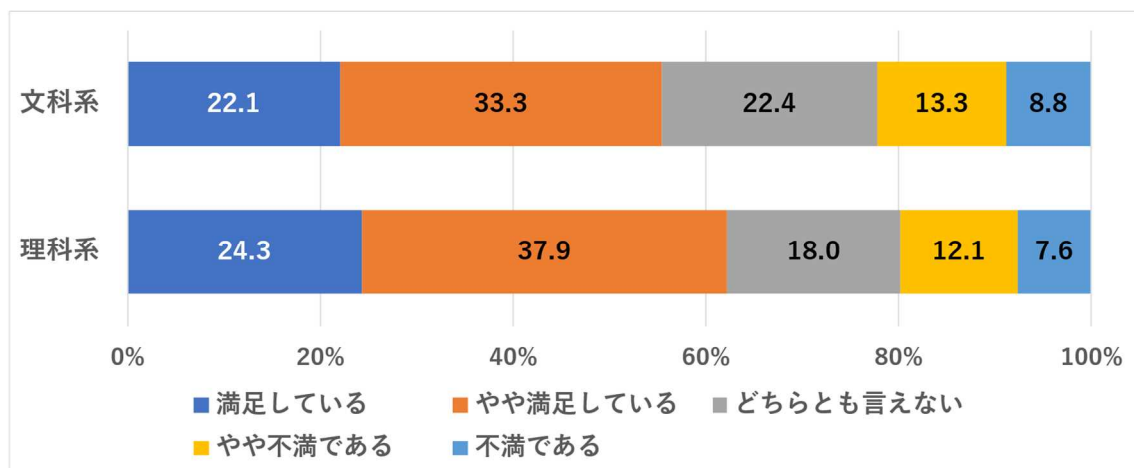
## 【学部学生】

全体的に、オンライン授業に「満足している」「やや満足している」の合計値は59.2%で、前回調査よりの6.5%ポイントの増加である。前回調査で教養学部・前期課程において、オンライン授業への満足度は40.6%であったが、今回調査では53.4%に増加した。後述するように新入生の満足度は高くないものの、いずれの部においても半数以上はオンライン授業に満足している。特に、教養学部・後期課程(理系)及び農学部(獣医学)の満足度は8割超えと非常に高い。一方、前回調査と比べて、「満足している」の割合が減少したところもある。特に、法学部において、前回調査で一番多くの40.4%の学生が「満足している」と回答したが、今回調査では24.1%に下がって、16.3%ポイント減少した。

オンライン授業満足度（文理別）【前回（2020年度）調査】

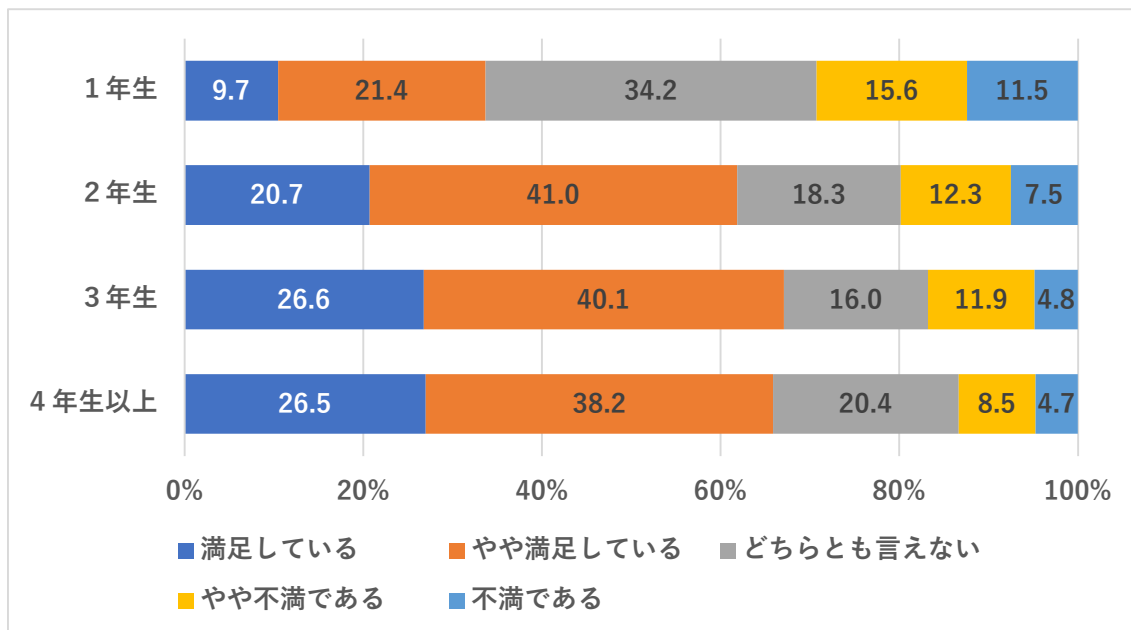


オンライン授業満足度（文理別）【今回（2021年度）調査】

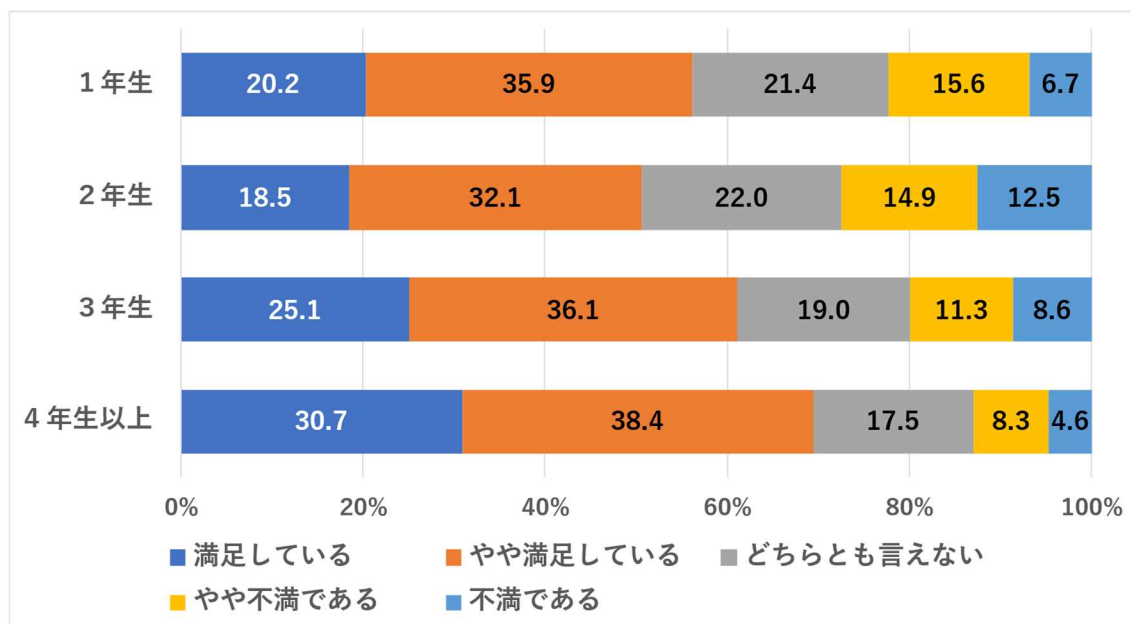


## 【学部学生】

オンライン授業満足度（学年別）【前回（2020年度）調査】

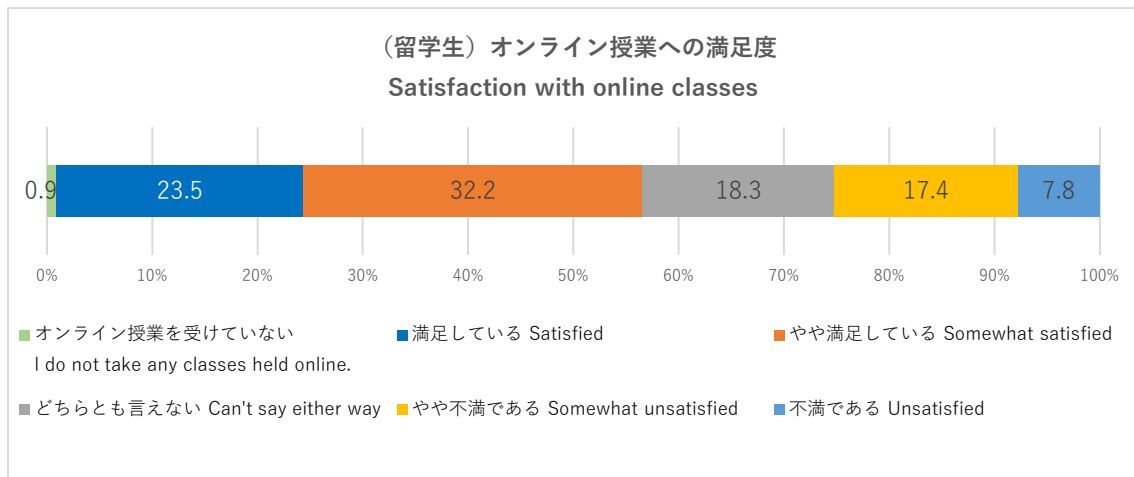


オンライン授業満足度（学年別）【今回（2021年度）調査】



文科系と理科系で満足度の差が前回調査よりやや拡大し、理科系の満足度が高い。一方、年次での差は縮小した。特に、1年生について、前回調査では「満足している」「やや満足している」と回答した合計値は31.1%で一番低かったが、今回調査では56.1%で過半数となった。しかし、高年次(3年生61.2%、4年生以上69.1%)と比べて、1年生と2年生の満足度は依然として低い。特に、2年生の中で、「不満である」と回答した者の割合は12.5%もあり、4年生以上と比べて7.9%ポイントの差がみられる。

## 【学部学生】



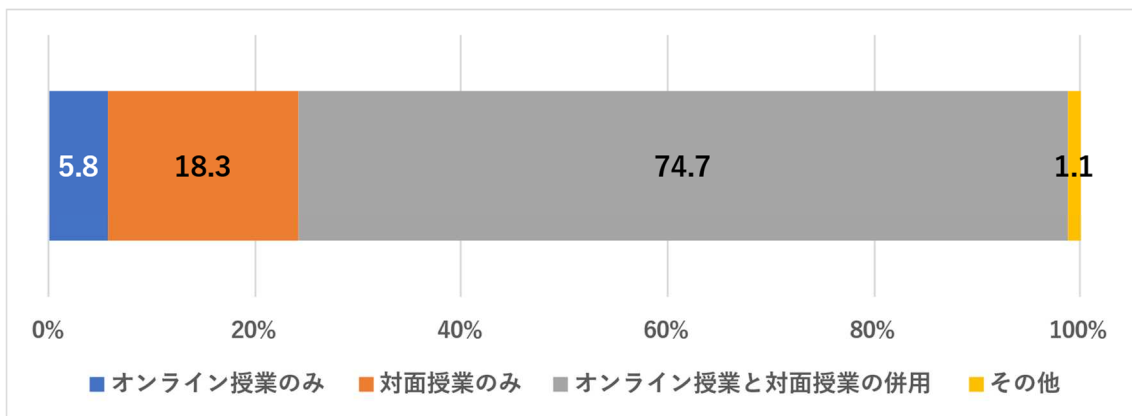
留学生のオンライン授業への満足度は、国内生と大きくは変わらず、「やや不満である」と感じている学生は若干多いが、回答者に占める1年生の割合が高いことなども影響している可能性がある。

## 【学部学生】

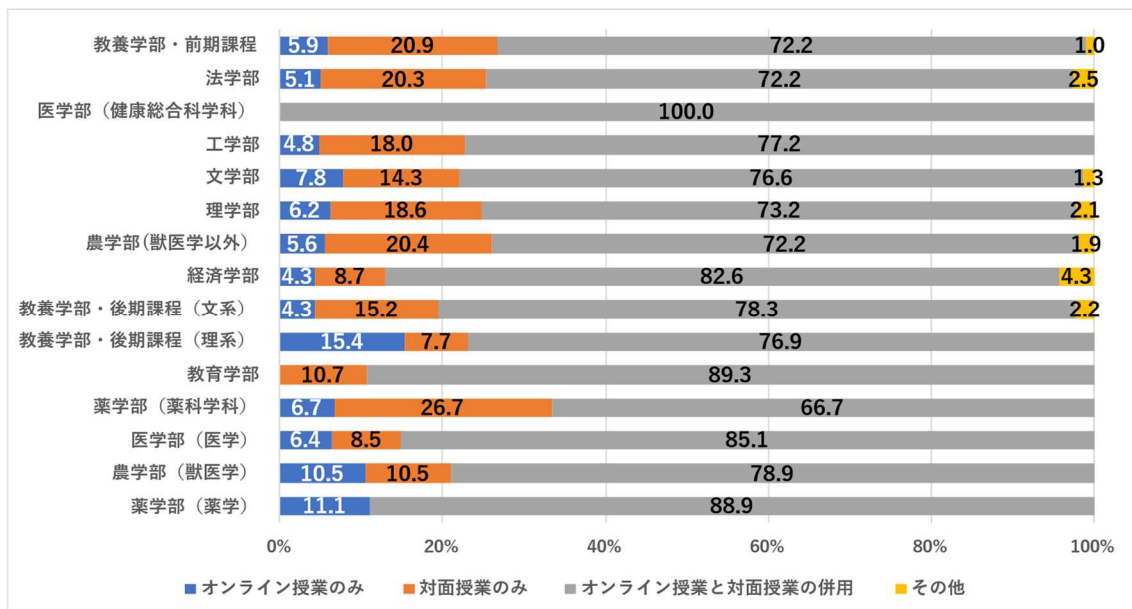
### 18. コロナ収束後の希望授業形態

- 新型コロナウイルス収束後の授業形態「オンライン授業と対面授業の併用」が最も多く、学年・部局問わず7割程度の希望

18. 新型コロナウイルス感染症が収まり、感染の心配がなくなったとしたら、あなたはどの授業形態を希望しますか。あてはまるものを1つ選んでください。



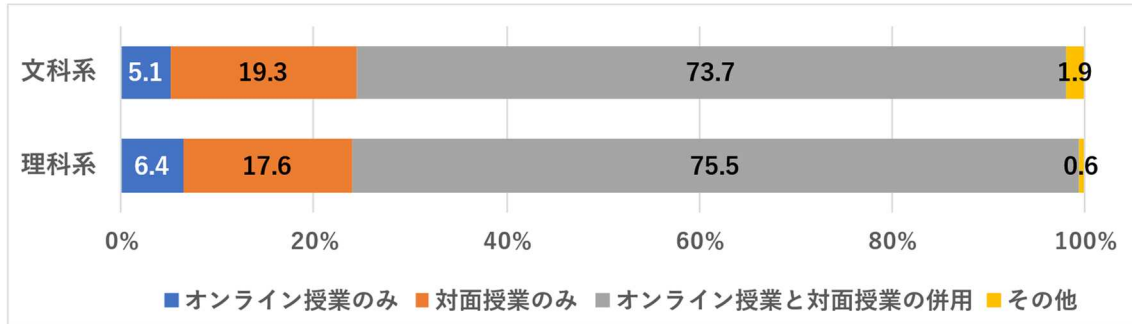
#### コロナ収束後の希望授業形態（部局別）



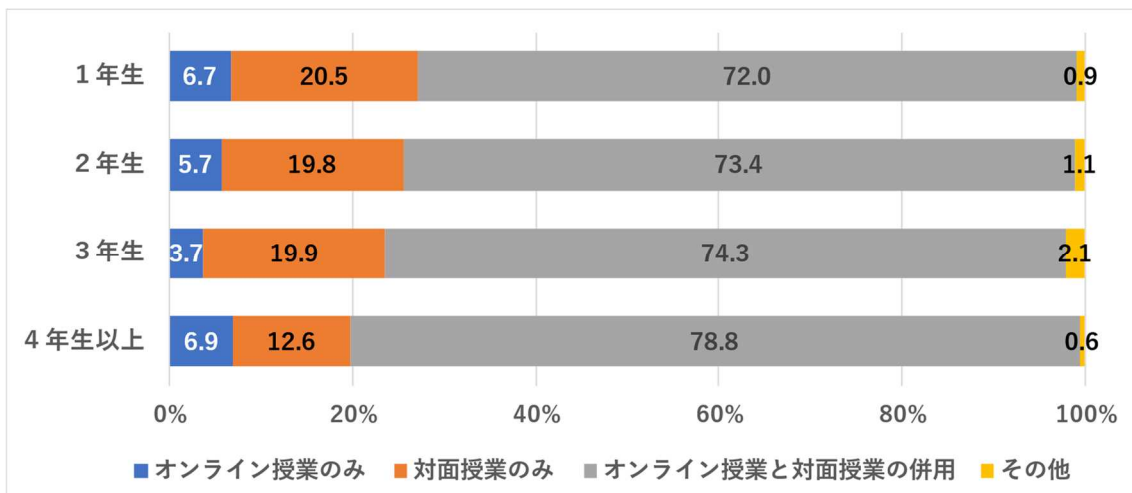
新型コロナウイルス収束後の授業形態は「オンライン授業と対面授業の併用」を希望する割合が高く、74.7%で前回調査よりも8.3%ポイント増加した。学部別にみても、全ての部局において「オンライン授業と対面授業の併用」への希望は6割を超えている。特に、医学部(健康総合科学科)では回答者全員が併用型授業形態を希望している。「対面授業のみ」を希望する割合が最も高いところは薬学部(薬科学科)であるが、3割未満と低い。

## 【学部学生】

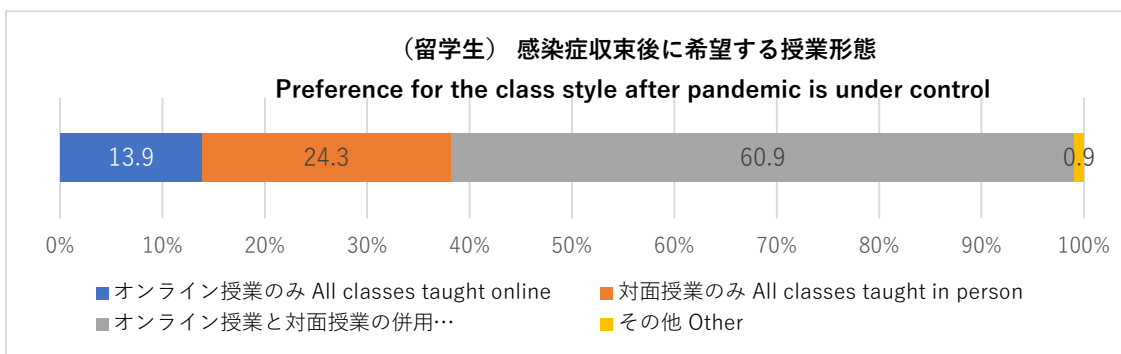
コロナ収束後の希望授業形態（文理別）



コロナ収束後の希望授業形態（学年別）



文科系と理科系とで新型コロナウイルス収束後の授業形態希望に差がみられなかったものの、年次によっては差がみられた。それは主に「対面授業のみ」への希望度に関わる差である。4年生以上は「対面授業のみ」を希望する割合が最も低く、1年生と7.9%ポイントの差がある。1年生は「対面授業のみ」への希望度が全学年を通じて最も高いが、前回調査より22.2%ポイント減少した。いずれの学年においても、「オンライン授業と対面授業の併用」を希望する割合が7割を超えている。



留学生は、回答時に入国していない学生もいたことから、希望が割れており、結果「併用」を選択した学生は国内生よりも少ない。

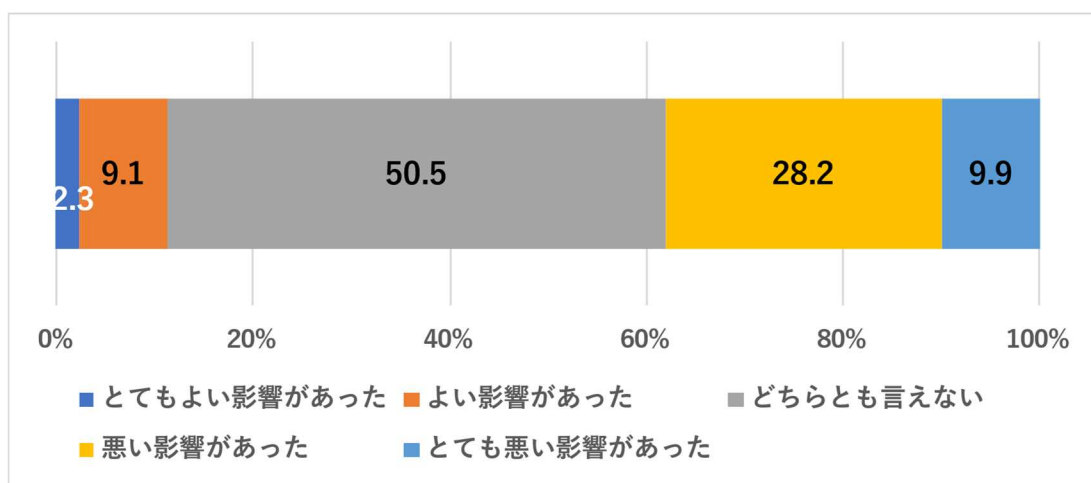
## 【学部学生】

### 19. 活動制限による影響

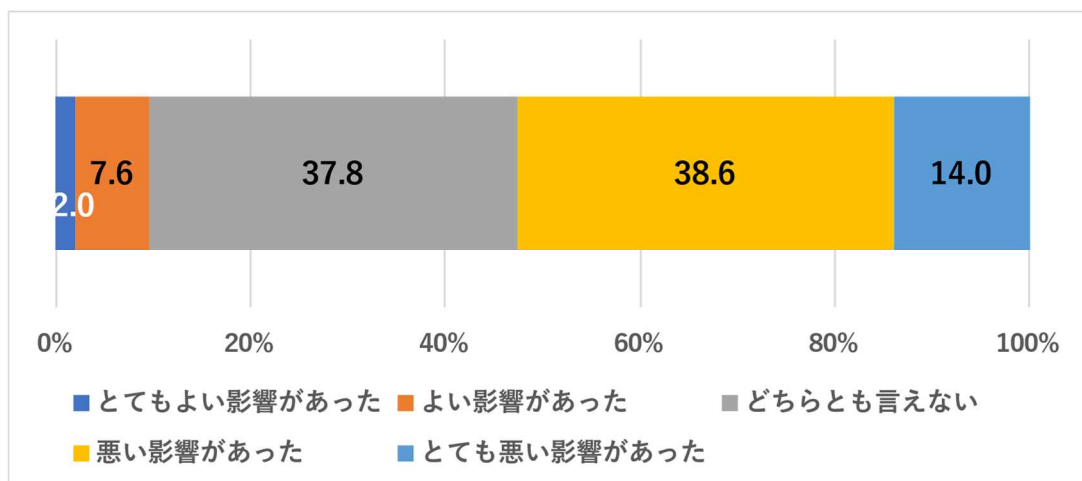
- 活動制限で悪い影響が過半数であった項目「課外活動等の余暇時間の過ごし方」、「家族関係や友人との関係」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」
- 低年次は「自身のキャリア形成や就職・進学」で悪影響を受けた

19. 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限は、今現在あなたの生活にどのような影響がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。

自身のキャリア形成や就職・進学

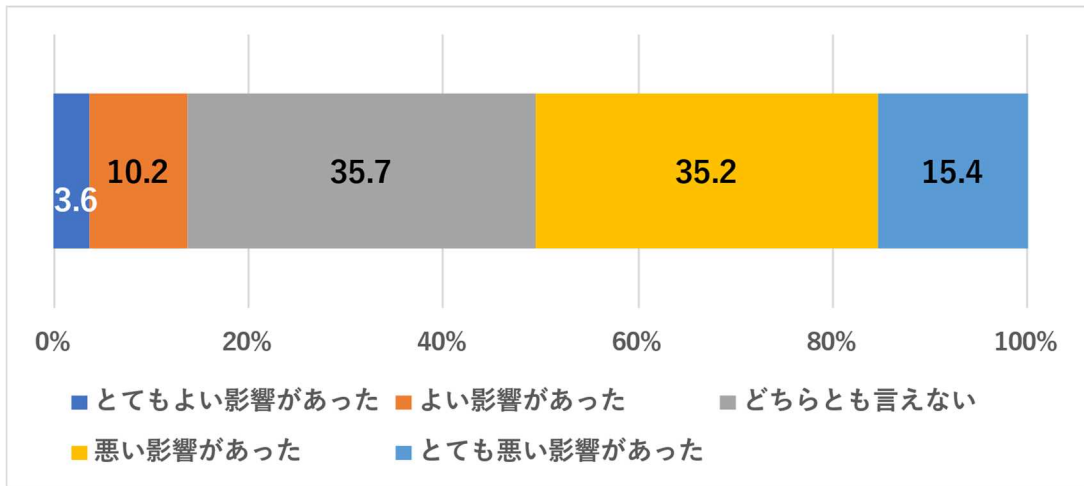


家族関係や友人との関係

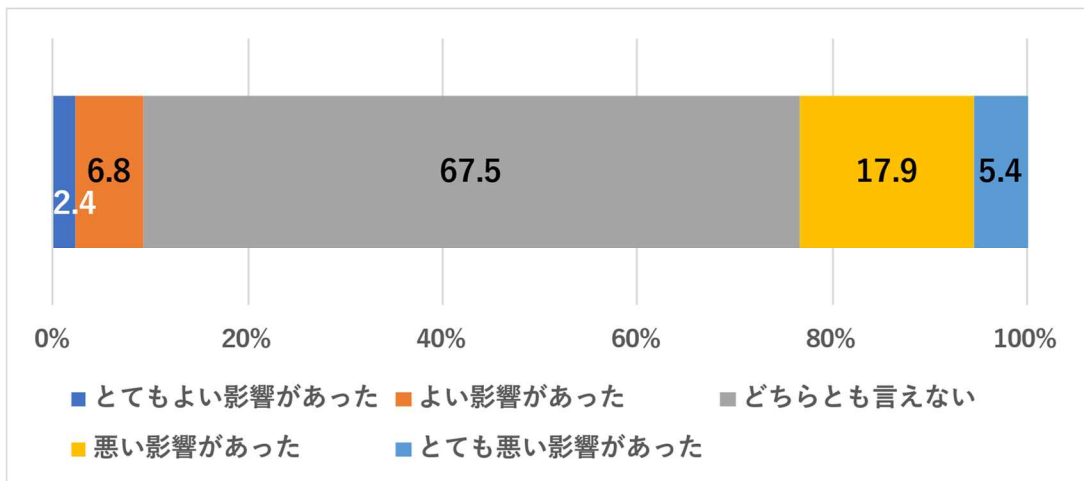


## 【学部学生】

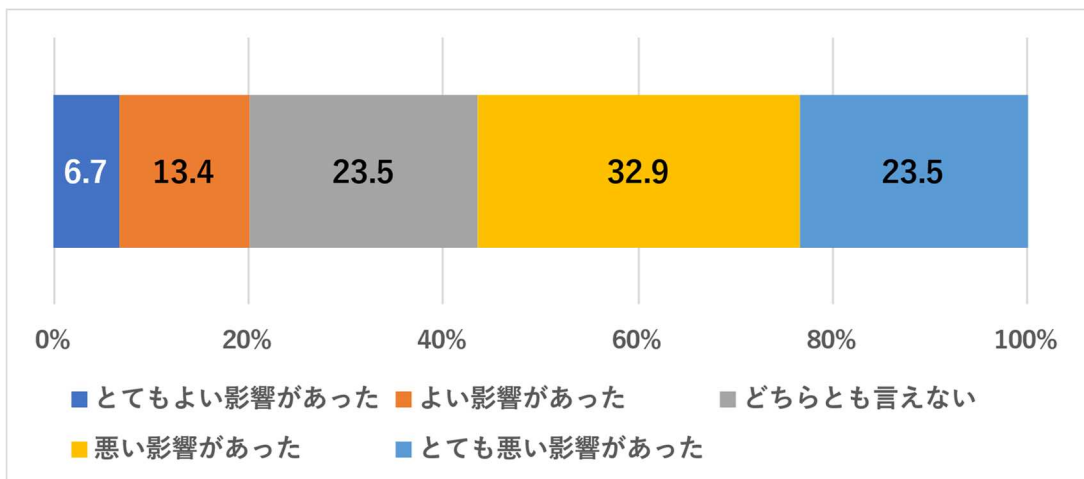
自身のメンタルヘルスや健康状態



アルバイト収入や家族の収入



課外活動等の余暇時間の過ごし方



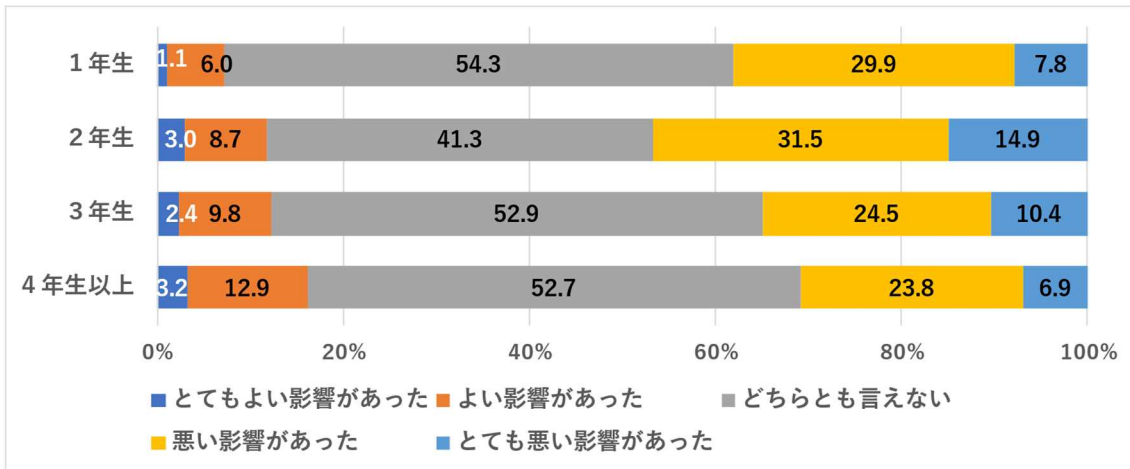
## 【学部学生】

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う制限は、学生生活に良い影響を及ぼしたとはいえない。各項目に関して「とてもよい影響があった」「よい影響があった」と回答した割合は高くても20%程度(「課外活動等の余暇時間の過ごし方」)で、低いところは10%未満(「家族関係や友人との関係」「アルバイト収入や家族の収入」)である。「自身のキャリア形成や就職・進学」に対してよい影響とした回答は11.4%と、前回調査(20.2%)より8.8%ポイント減少した。それに対して、多くは「どちらとも言えない」もしくは「悪い影響があった」と回答している。「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」の合算値は「課外活動等の余暇時間の過ごし方」が56.4%(前回調査53.5%)で最も多く、「家族関係や友人との関係」52.6%(前回調査38.6%)、「自身のメンタルヘルスや健康状態」50.6%(前回調査49.0%)と続き、いずれも前回調査より増加した。

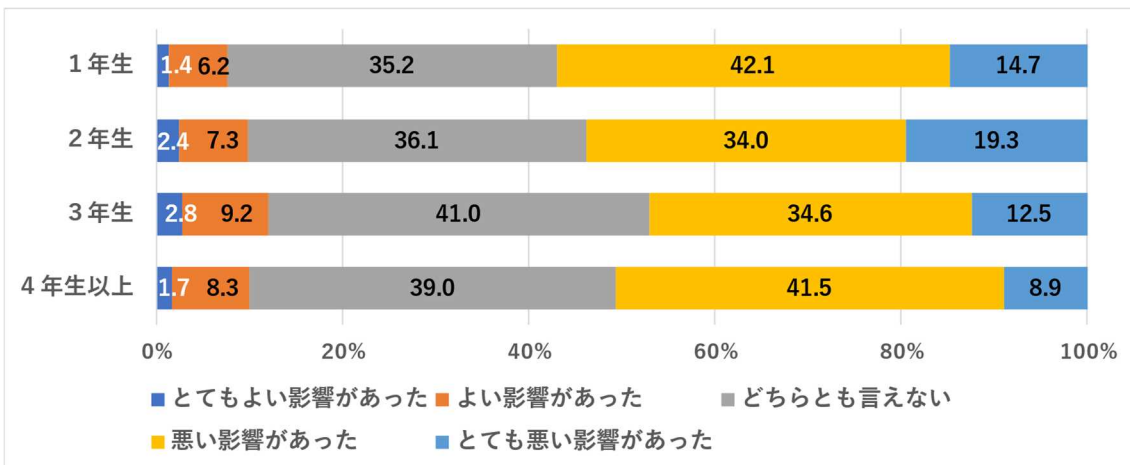


## 【学部学生】

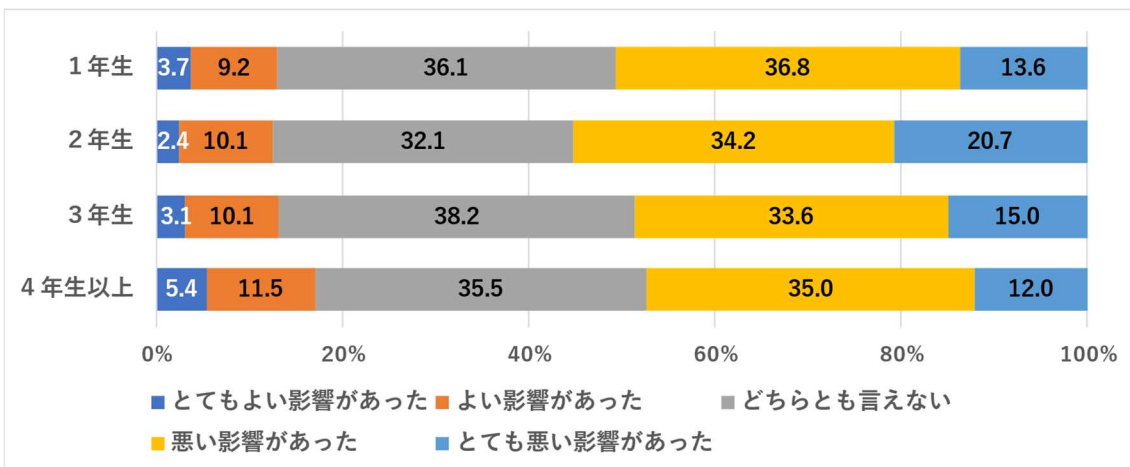
自身のキャリア形成や就職・進学（学年別）



家族関係や友人との関係（学年別）

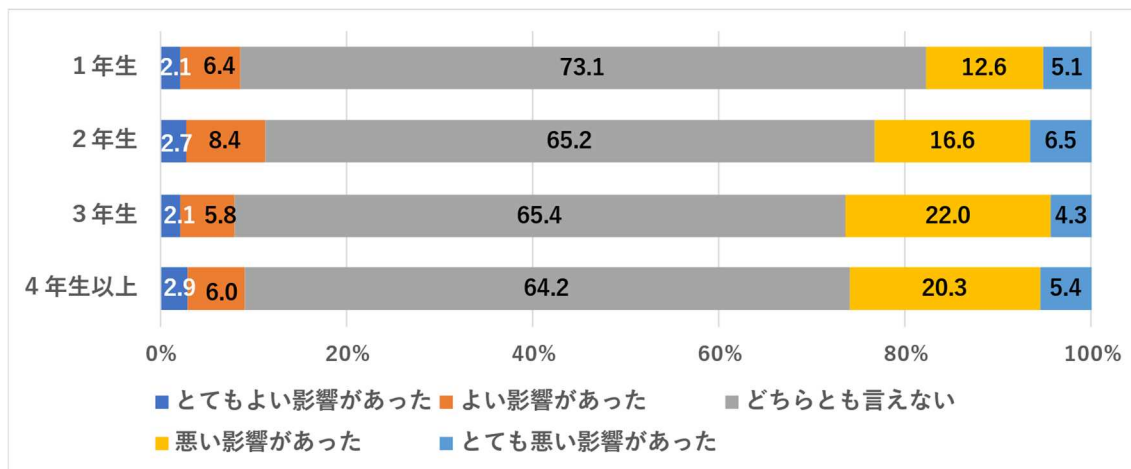


自身のメンタルヘルスや健康状態（学年別）

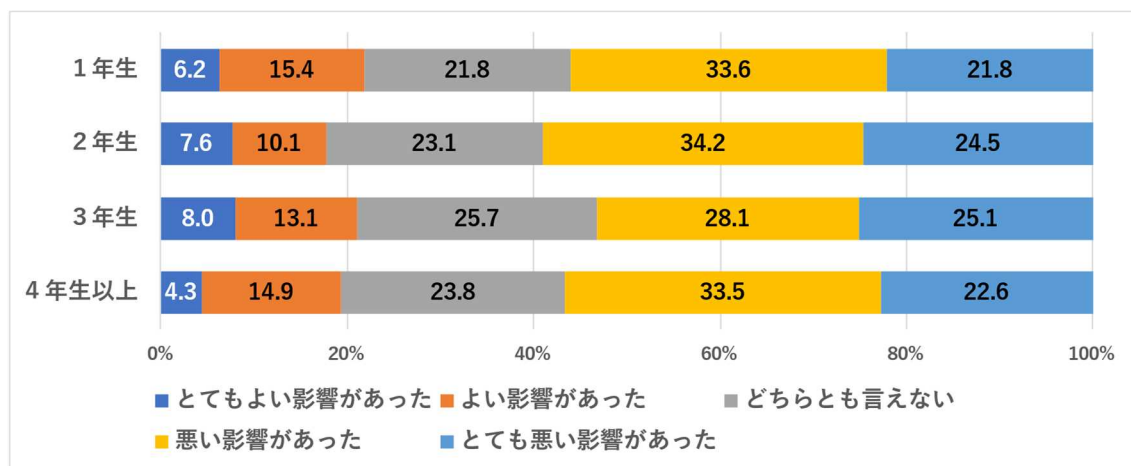


## 【学部学生】

アルバイト収入や家族の収入（学年別）

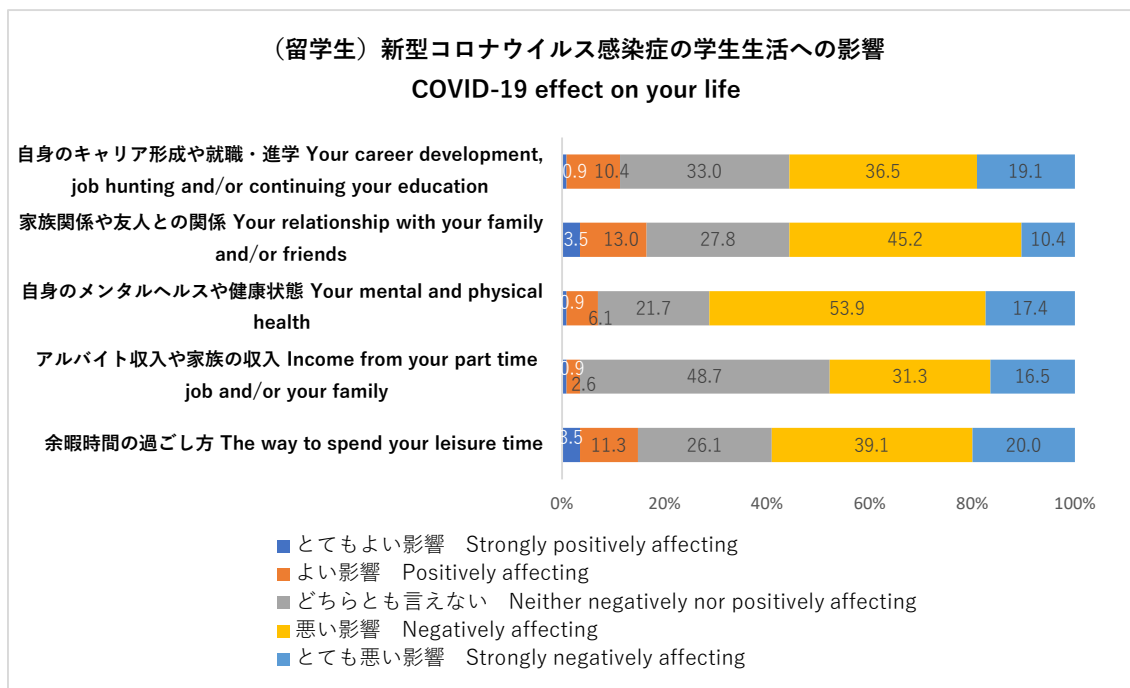


課外活動等の余暇時間の過ごし方（学年別）



学年によって新型コロナウイルス感染症の流行に伴う各種制限の影響に差がある項目とない項目がある。例えば、「自身のキャリア形成や就職・進学」に対するよい影響は1年生で最も少なく、4年生と比べて9%ポイントの差がある。同じテーマで、悪影響があると回答した2年生は46.4%で、4年生以上より15.7%ポイント多い。

## 【学部学生】



2020年度とのコロナ初年度と比べると「悪い影響」「とても悪い影響」を選択した留学生は、「自身のキャリア形成や就職・進路」55.6% (39.3%)、「家族関係や友人との関係」55.6% (41.7%)、「自身のメンタルヘルスや健康状態」71.3% (63.0%)、「アルバイト収入や家族の収入」47.8% (45.2%)、「余暇時間の過ごし方」59.1% (48.9%)であり、すべての項目で初年度よりも影響が強くと報告されている。また、日本人学生と比較すると、より強くネガティブな影響を体験している学生が多い。

## 【学部学生】

### 「V.新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ）

今回調査が実施された2021年度には、新型コロナウイルス感染拡大防止のための活動制限指針に基づき、授業のオンライン化や課外活動の制限などが引き続き実施された。オンライン授業の満足度に関しては、今回調査で満足していると回答した割合は59.2%であり、前回調査の52.7%より増加しているが、各学部でばらつきがある。また、低年次のオンライン授業の満足度は上がったものの、高年次との差はまだ残っている。一方、感染症収束後の希望授業形態に関して、学部・学年問わず7割程度の回答者が「オンライン授業と対面授業の併用」を選択した。授業内容と学生個人の状況によって差はあるが、オンライン授業と対面授業でそれぞれのメリットを享受したい気持ちの表れであろう。コロナの事情で対面授業をやむを得ず中止することになったが、このことのみならず、大学外部環境の変化によって様々な状況が生じる可能性もあるため、授業方法を柔軟に調整できる仕組みの構築は重要である。

新型コロナウイルス感染症で「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」項目は「課外活動等の余暇時間の過ごし方」、「家族関係や友人との関係」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」であり、いずれも過半数が悪い影響を被ったと回答していた。また、1年生、2年生で「自身のキャリア形成や就職・進学」で悪影響を受けた割合は高年次より高い。新型コロナウイルス感染症の影響が出た後に入学した学生に対して、適切なキャリア・進学アドバイスを提供することが大事である。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響については、「II. 入学・進学・学業」の分析（まとめ）、「20. 大学への要望・期待」、「VI. 大学への要望」の分析（まとめ）、「21. 収入・支出」、「VII. 生活費の状況」の分析（まとめ）、「X. アルバイト」の分析（まとめ）、「XI. 家庭の状況」の分析（まとめ）などにも記載があるので参照されたい。

留学生は、2020年度より2021年度調査で、より悪い影響が高いと回答している学生が増えており、また日本人学生よりも、悪い影響を強く認知している。来日できない学生や、来日後も対人関係が広げられない学生が多かったことなどから、影響が長期化している可能性がある。

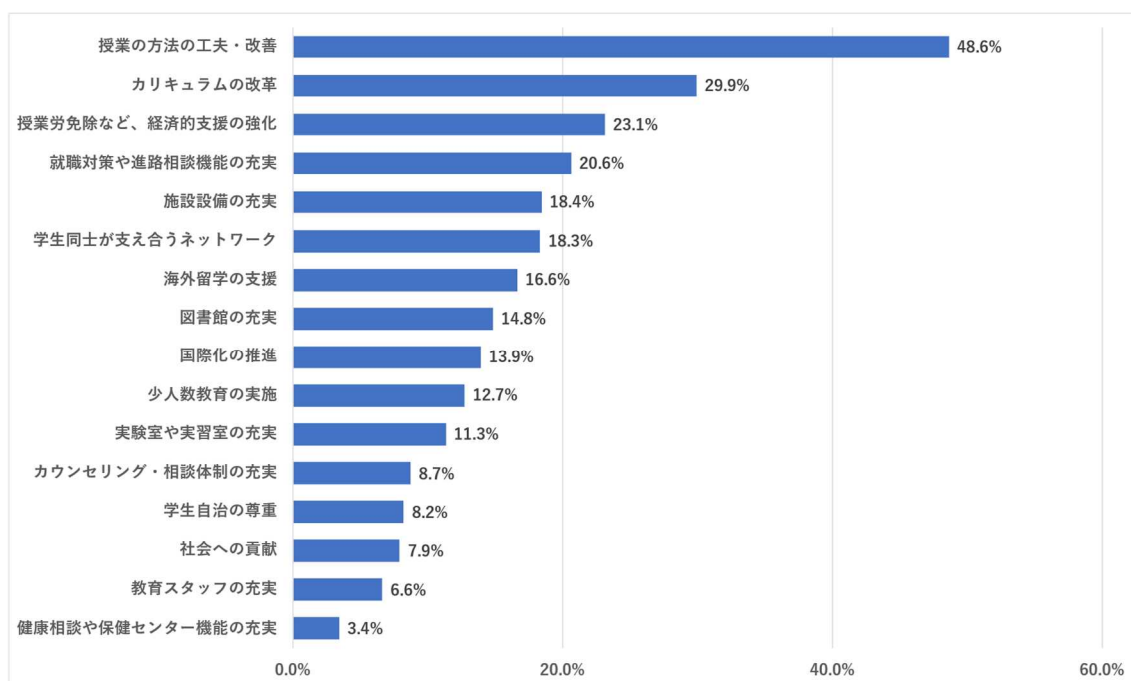
## 【学部学生】

### VI.大学への要望

#### 20. 大学への要望・期待

- 大学に期待すること「授業の方法の工夫・改善」、「カリキュラムの改革」、「授業料免除など、経済的支援の強化」
- 「図書館の充実」、「施設設備の充実」前回調査と比べて期待する割合は減少

20. 大学へ特に要望したいことや期待することは何ですか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。



大学への要望で期待されるのは、上から「授業の方法の工夫・改善」48.6%、「カリキュラムの改革」29.9%、「授業料免除など、経済的支援の強化」23.1%であった。前回調査で期待される上位の「図書館の充実」や「施設設備の充実」は14.8%と18.4%でそれぞれ減少した。減少の理由として、各施設で改善がなされたのか、それとも新型コロナウイルスの影響により、目先の要望が上位になったのかについては、さらに詳細な分析が必要であろう。

なお、前回調査では各要望項目に対して要望度合いを尋ねる形であったが、今回調査では要望項目を3つまで選ぶ形としている。

## 【学部学生】



留学生に提示した選択項目は大きく異なるため、詳細は留学生版で報告するが、日本人学生版と共通する選択肢の中で上位に位置したのは、「授業料免除など、経済的支援の強化」「授業の方法の工夫・改善」等であった。

日本人学生において上位であった「カリキュラムの改革」は、2018年度版では最も要望の多かった項目であったが、2020年度版で5位、本年度版では6位となっている。一方、国際化の推進は、2018年度2位、2020年度、本年度は1位であり、一貫して、日本人学生よりも留学生が強く要望する項目となっている。

## 【学部学生】

### 「VI.大学への要望」の分析（まとめ）

大学への要望は「授業の方法の工夫・改善」、「カリキュラムの改革」、「授業料免除など、経済的支援の強化」があげられ、コロナ禍により授業が対面からオンラインへ移行されても重要な項目となっている。それに対して、「図書館の充実」や「施設設備の充実」は前回調査と比べて期待する割合は減少した。通学機会が減少するなかで、在学生による学内施設の利用状況との関連性がうかがわれる。

留学生の要望においては、コロナ禍以前から「国際化の推進」が強い特徴があり、今回調査においても同様であった。

## 【学部学生】

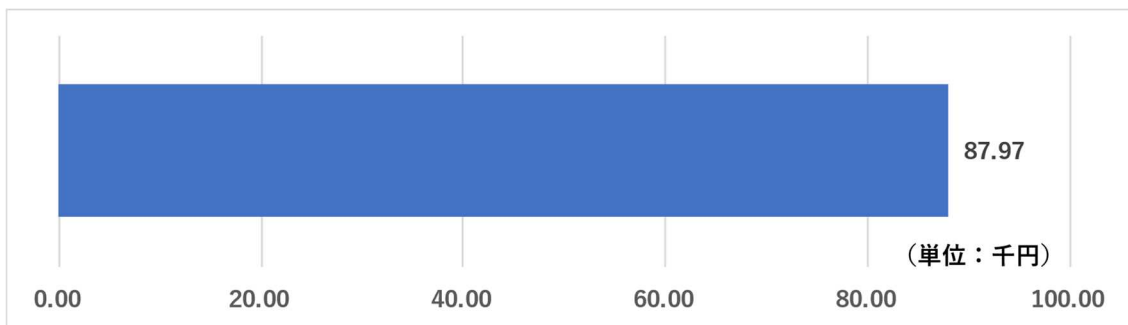
### Ⅶ. 生活費の状況

#### 21. 収入・支出

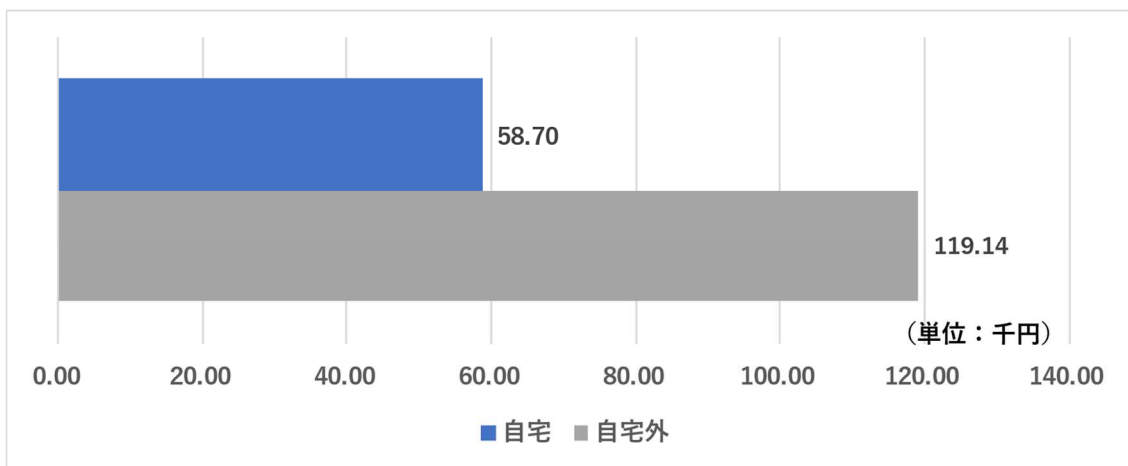
- 収入金額が増加し、収支の差が拡大

21. あなた自身の生活費の状況について、金額を選んでください。(最近3ヶ月の実績から、平均1ヶ月の収支額を、該当しない場合は「0円」を選んでください。)

##### 収入合計



##### 収入合計 (自宅生・自宅外生)

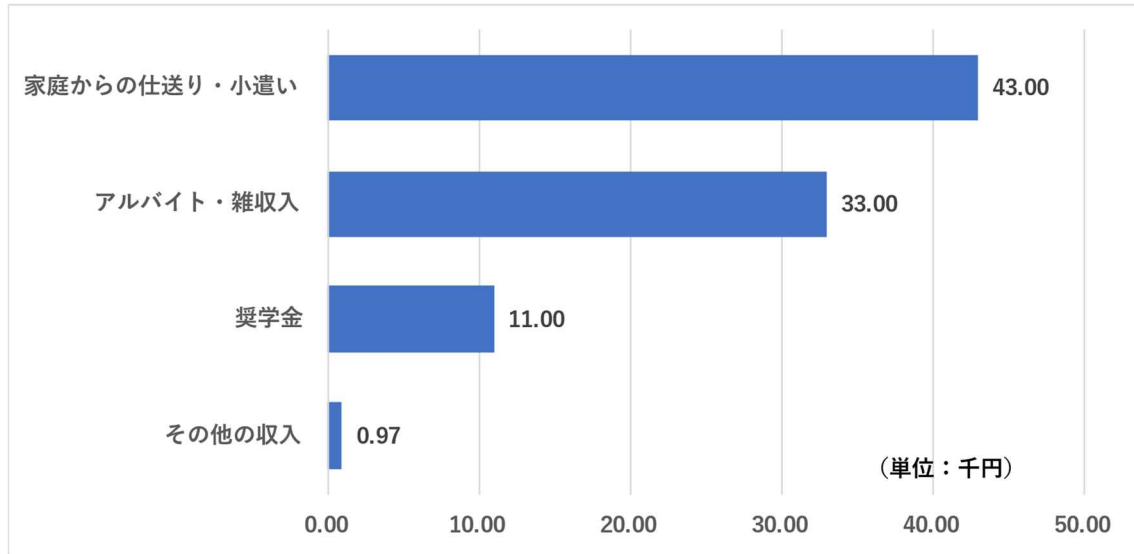


収入の中身をみると、自宅生は「アルバイト」が61.9%、「仕送り・小遣い」が29.0%となっており、この2項目で9割以上を占めている。自宅外生では、「仕送り・小遣い」が59.0%、「アルバイト」が26.5%となっており、「アルバイト」と「仕送り・小遣い」の順位が逆転している。



## 【学部学生】

### 主な収入項目



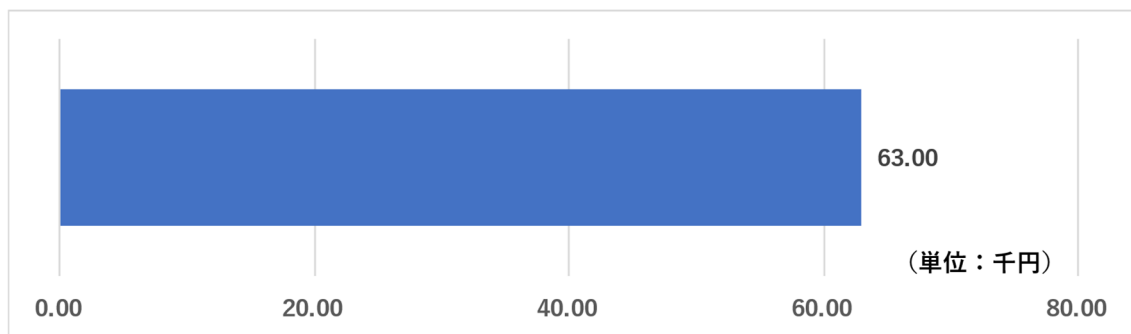
収入項目は、「家庭からの仕送り・小遣い」が最も高く43,000円、「アルバイト・雑収入」33,000円と続く。「家庭からの仕送り・小遣い」は前回調査から17,910円の減少となっている一方、「アルバイト・雑収入」は6,170円増加した。なお、奨学金については、受給していない人も含めての平均としている。

これまでの調査では収入合計額を直接尋ねていたが、今回調査ではその設問を無くしているため、収入項目（家庭からの仕送り・小遣い、アルバイト・雑収入、奨学金、その他の収入）のそれぞれの回答結果の平均額合計により収入合計額を算出している。

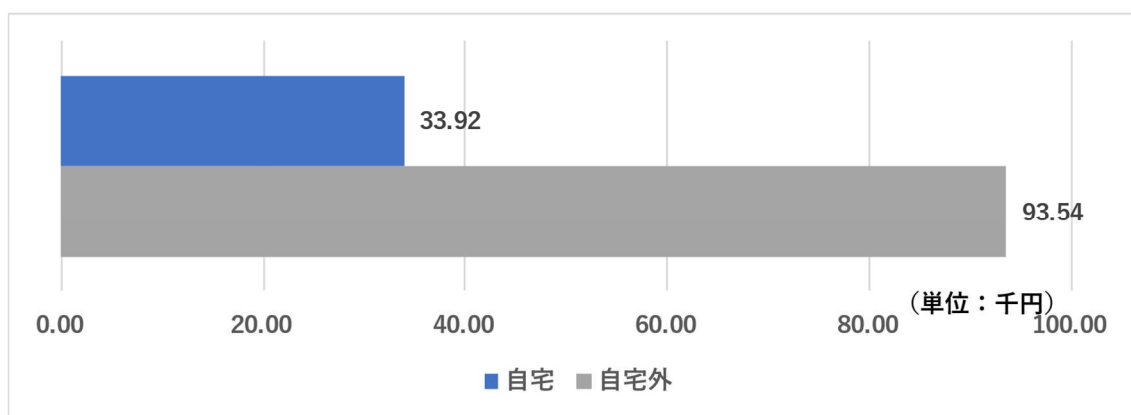
また、回答方式についても、これまでの調査では金額を記入する形であったが、今回調査では「その他の収入」を除き、金額区分から選ぶ形としているため、これまでの調査結果と傾向が異なっている可能性があることに留意する必要がある。

## 【学部学生】

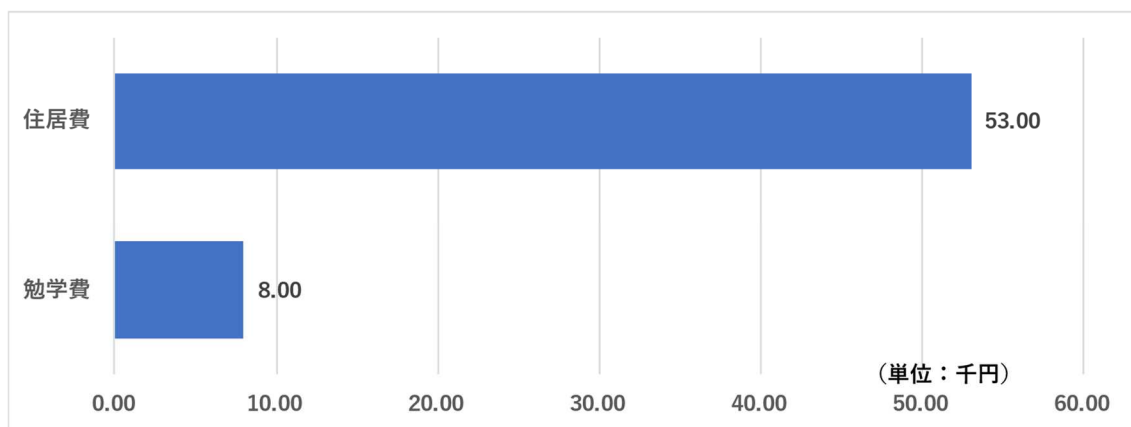
### 支出合計



### 支出合計 (自宅生・自宅外生)



### 主な支出項目

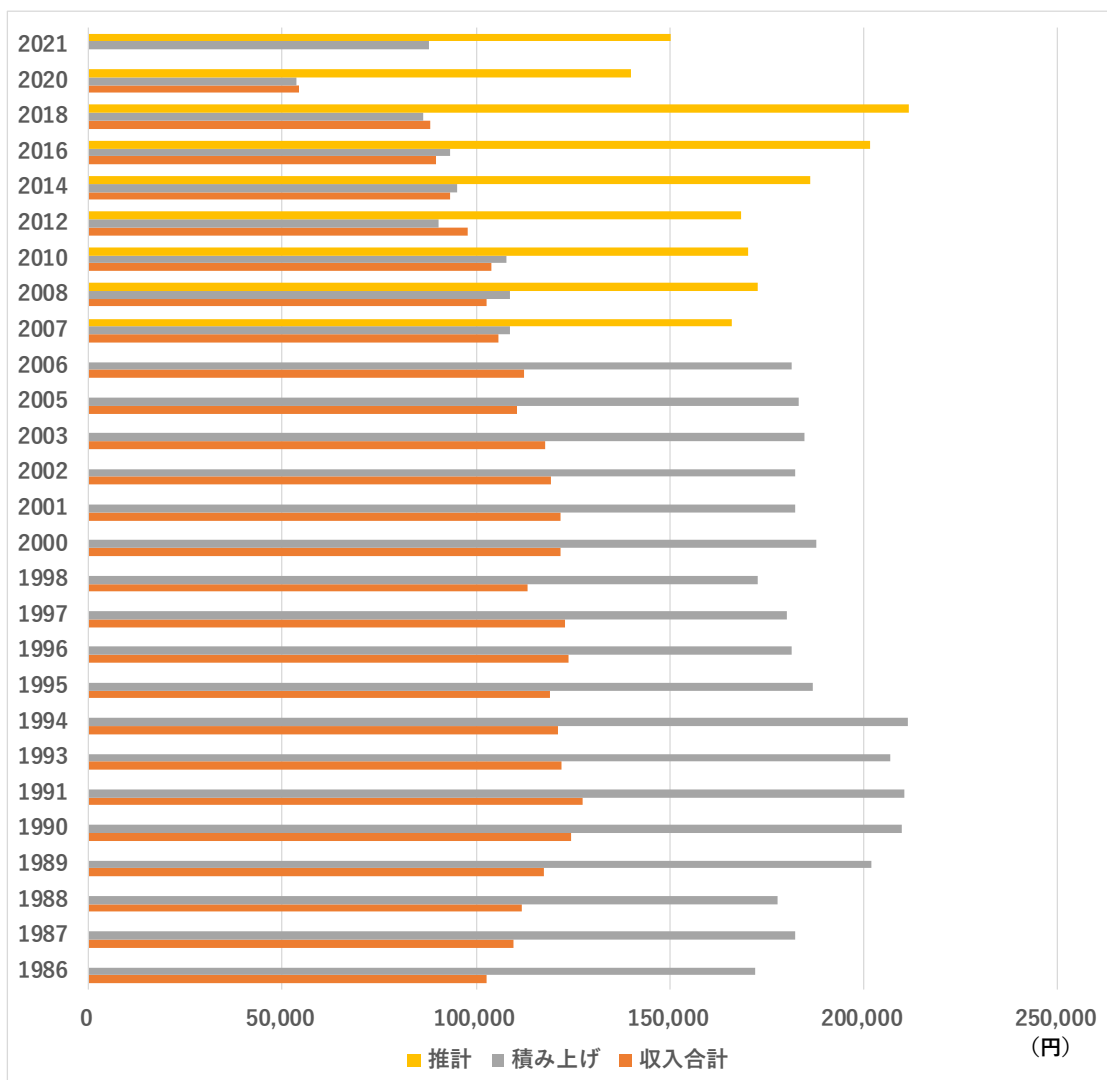


今回調査の収入合計は 87,970 円で前回調査より 33,750 円増加しており、コロナ禍前の 2018 年調査に近づいた。支出合計は 63,000 円で前回調査より 8000 円弱の増加となるが、コロナ禍前よりは大きく減少した。前回調査の収入合計は 54,220 円、支出合計は 55,070 円であり、収支の差はみられなかったが、今回調査では 24,970 円の差がみられた。

なお、支出合計の回答方式についても、これまでの調査では金額を記入する形であったが、今回調査では金額区分から選ぶ形としている。

## 【学部学生】

収入合計の経年変化

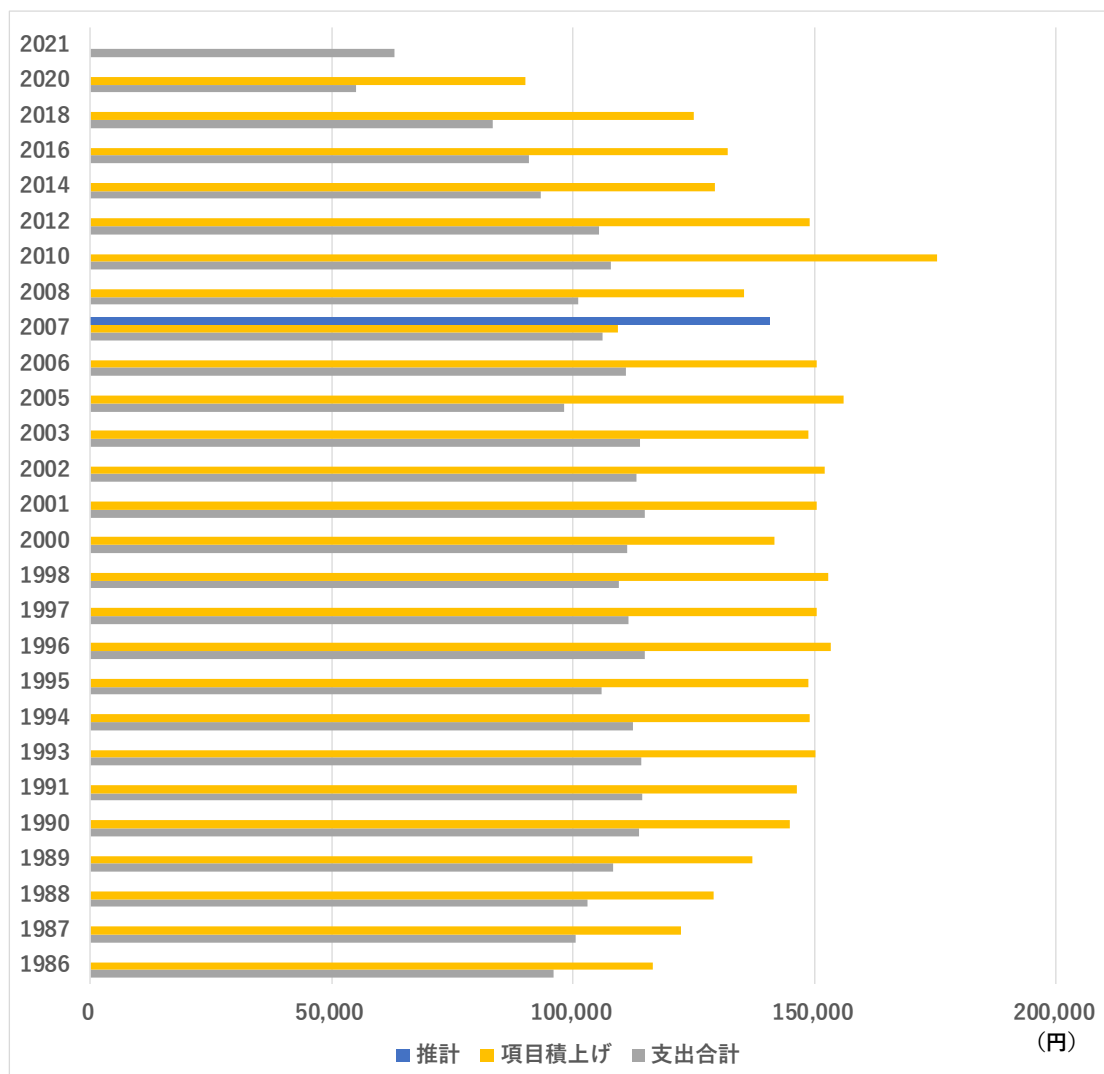


2006年までの調査では、各項目別の収入は該当者のみの平均額としていたが、2007年以降は全回答者の平均額に記載を変更したため、経年変化をみるグラフでは「推計」を出して補正している。

- 収入合計・・・「収入合計」全回答結果の平均額
- 積み上げ・・・「家庭からの仕送り・小遣い」「奨学金」「アルバイト・雑収入」「ローン・クレジット・借入金」「その他の収入」それぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計
- 推計・・・「奨学金」、「アルバイト・雑収入」、「ローン・クレジット・借入金」、「その他の収入」は、それぞれ該当者のみの平均額を計算し、「家庭からの仕送り・小遣い」は全体の平均額のままとし、これを合計した推計値を推計額としている。

## 【学部学生】

支出合計の経年変化



- 支出合計・・・「支出合計」全回答結果の平均額
- 項目積上げ・・・「衣料費」「食費【自宅生は外食代】」「住居費【自宅外生のみ回答】」「勉学費」「教養・娯楽費」「通学費」「雑費」のそれぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計

※ 2007年の「推計」

当該年調査において、住居費を「全学生の」平均額と誤って算出してしまったと推察されることが調査報告書発行以降に発覚した。そのため、2015年の報告書以降のグラフでは、自宅外学生のみ平均額に差替えたものを推計値として掲載している。

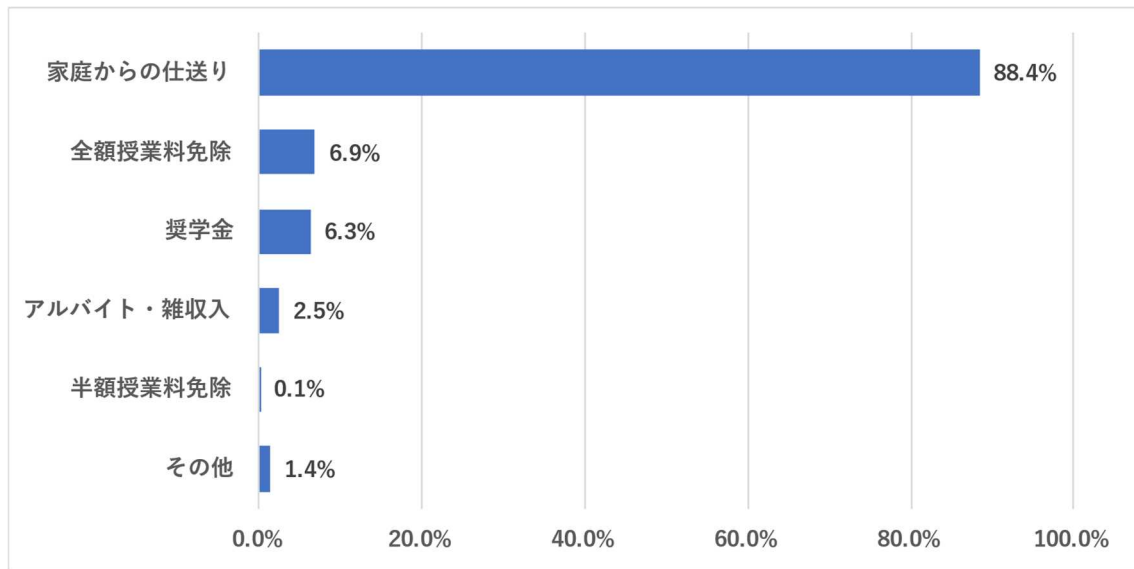
なお、今回調査では支出内訳（支出項目）の設問を大幅に減らしたため、項目積上げについては掲載していない。

## 【学部学生】

### 22. 授業料負担

- 前回調査同様「家庭からの仕送り」が9割程度
- 全額授業料免除の割合が増加

22. 大学の授業料はどのように負担していますか。あてはまるものを全て選んでください。



授業料の負担は「家庭からの仕送り」が9割近くを占める。前回調査で第3位の「全額授業料免除」は6.9%と増加し第2位となった。「奨学金」は6.3%で第3位となっている。

## 【学部学生】

### 「Ⅶ. 生活費の状況」の分析（まとめ）

収入、支出とも新型コロナウイルスが発生して以降大きく落ち込んでおり、収入については発生前の水準に回復傾向ではあるものの、コロナ禍の影響を無視することはできないと思われる。

支出については例えば、オンライン授業に伴い、本来であれば一人暮らしをはじめの予定であった層が一人暮らしをしなかったためなど、金額の減少に対するいくつかの理由が想定される。コロナ禍の前と後とで支出項目が変わった可能性があり、より詳細な分析が必要となる。

留学生の収入・支出状況は、国内に保護者がいる学生とかなり異なる状況にあり、数字の比較が困難であるため、留学生版に詳細を記載する。

なお、国内生の自宅外学生と留学生に関しては、収入・支出の状況を比較できることが望ましいが、回答がスキップされやすい項目であり、母集団サイズの小さい留学生は、実態把握に限界がある。また国内生調査の結果も、年度による数字の変化が大きく、より現状を把握することができる指標を用いて、収入・支出状況の変化を正確にとらえていく調査上の工夫が必要である。

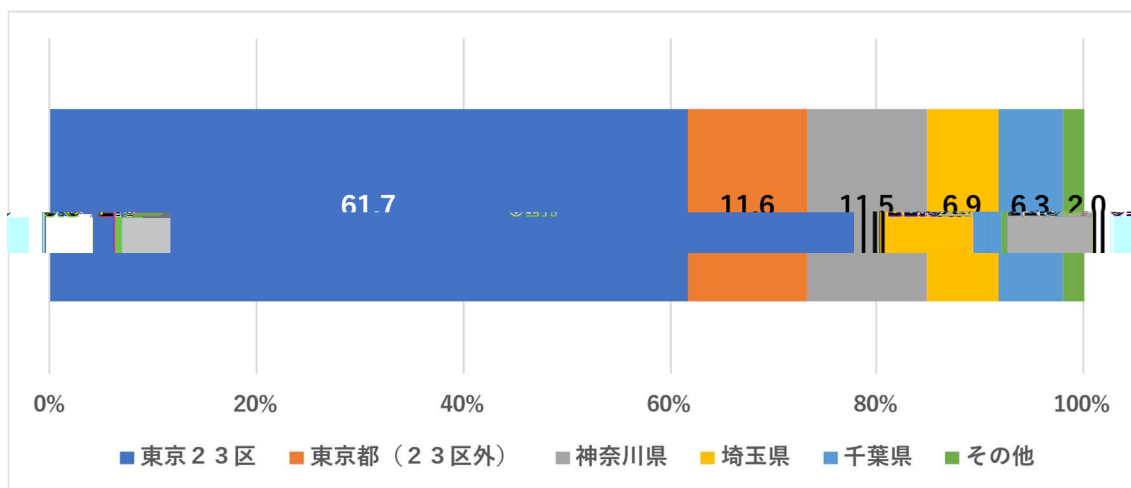
## 【学部学生】

### Ⅷ.通学・住居

#### 23. 居住地

- 現在の居住地上位3項目「東京23区」、「東京都（23区外）」、「神奈川県」

23. あなたは、現在どこに住んでいますか。あてはまるものを1つ選んでください。



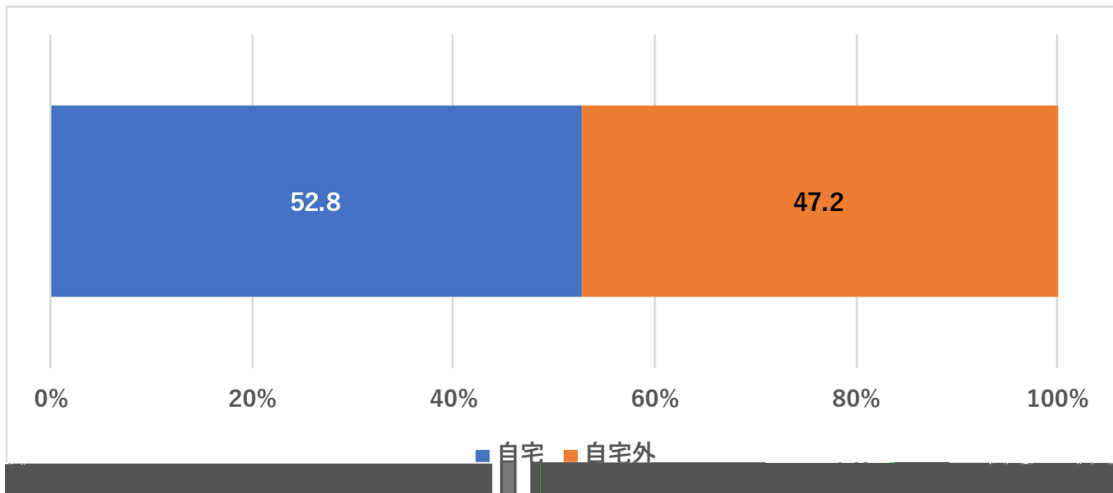
現在の居住地は「東京23区」が61.7%（前回調査57.0%）で、第1位を維持している。「東京都（23区外）」11.6%（前回調査10.9%）が「神奈川県」11.5%（前回調査13.2%）を超えて第2位となった。

## 【学部学生】

### 24. 居住形態（自宅／自宅外）

- 半数以上が「自宅」に住んでいるものの、減少傾向

24. あなたの居住形態はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



現在の居住形態は自宅が52.8%（前回調査58.1%）、自宅外が47.2%（前回調査41.9%）であった。自宅外の割合に増加傾向がみられる。

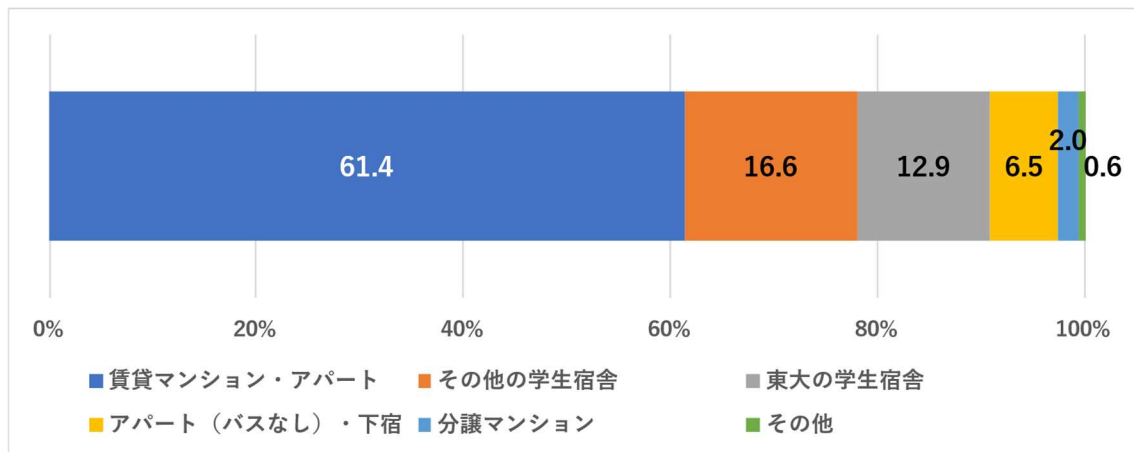


## 【学部学生】

### 25. 居住形態（自宅外選択者への設問）

- 居住形態上位3項目は、「賃貸マンション・アパート（バス付）」、「その他の学生宿舎」、「東大の学生宿舎」
- 「その他の学生宿舎」、「東大の学生宿舎」が前回調査より増加

25. 設問24で【居住形態が「2. 自宅外」】を選んだ方にお伺いします。現在あなたが住んでいるのはどれですか。あてはまるものを1つ選んでください。



自宅外生の居住形態をみると、「賃貸マンション・アパート（バス付）」（前回調査 64.4%、今回調査 61.4%）の割合が最も多い。次いで「その他の学生宿舎」（前回調査 15.6%、今回調査 16.6%）「東大の学生宿舎」（前回調査 11.7%、今回調査 12.9%）と続く。「その他」が前回調査の 1.3%から減少している。

## 【学部学生】

### 「Ⅷ.通学・住居」の分析（まとめ）

居住地は「東京 23 区」、「東京都（23 区外）」、「神奈川県」が上位 3 項目を占め、駒場キャンパスまたは本郷キャンパスに近い居住地の割合が高かった。居住形態は「自宅外」が引き続き増加している。「自宅外」のうちでは「その他の学生宿舎」と「東大の学生宿舎」の割合が増加した。2019 年 9 月より「目白台インターナショナル・ビレッジ」が開寮し、三鷹学生宿舎・豊島学生宿舎・追分国際学生宿舎以外の選択肢が増え、増加につながったことが推察される。一方で、「自宅外」のうちでは「賃貸マンション・アパート（バス付）」の割合が最も高く、依然として 6 割以上を占めている。

留学生の宿舎状況も、目白台インターナショナル・ビレッジの開寮による影響がみられるが、詳細は留学生版でまとめて報告を行う。

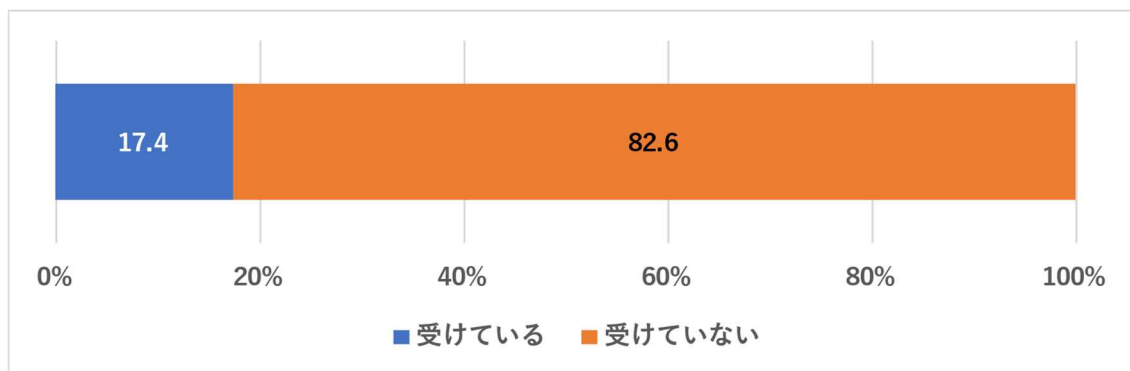
## 【学部学生】

### IX.奨学金

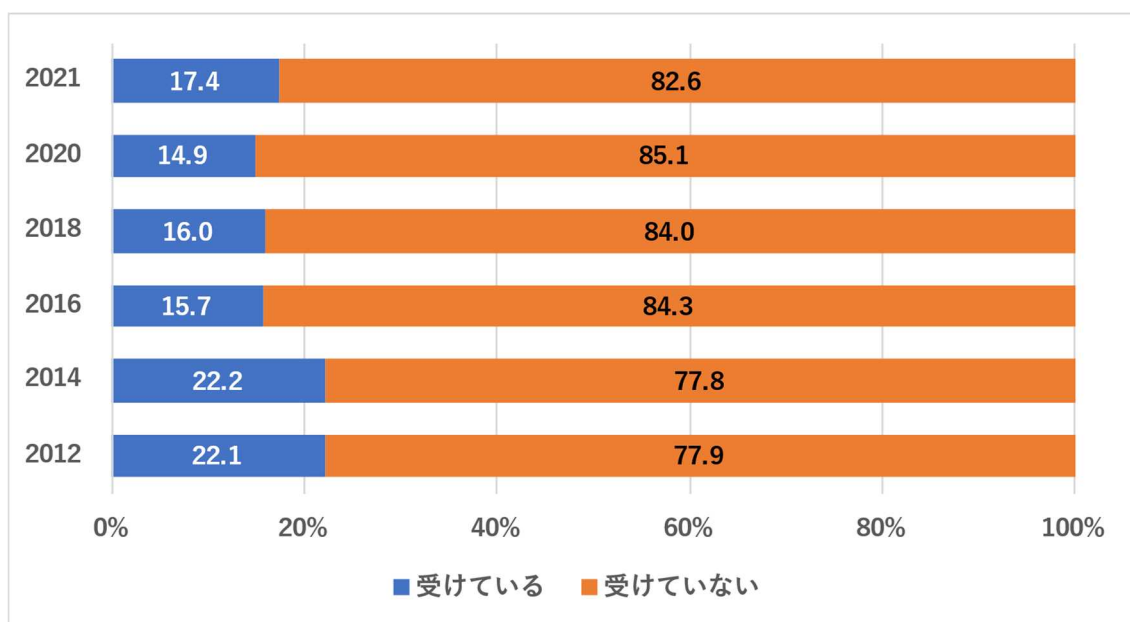
#### 26. 奨学金受給の有無

- 前回調査同様、8割以上が定期的な奨学金を「受けていない」

26. 現在、定期的な奨学金を受けていますか。あてはまるものを1つ選んでください。



受給状況の経年変化



定期的な奨学金は82.6%が受けていない。前回調査より2.5%ポイント減少したが、2016年以降大きな変動はない。

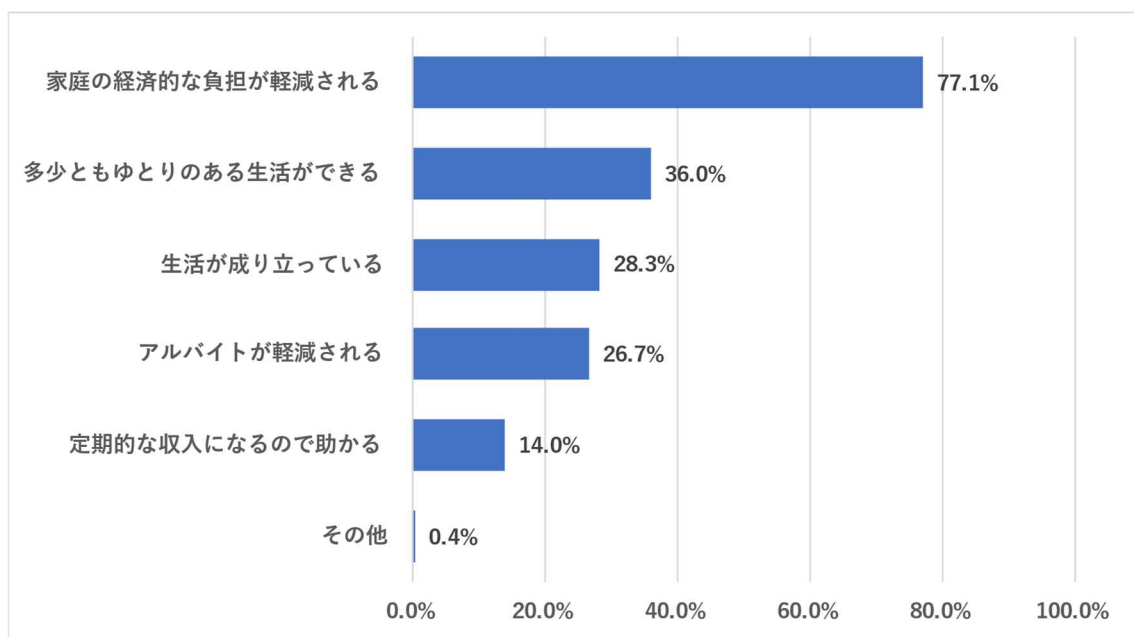
学部留学生については、奨学金を受けている学生は69.0%（前回62.2% 前々回74.3%）であった。また、そのうち日本政府の国費奨学金の受給者が38.3%（36.5% 43.6%）、民間奨学金23.3%（28.8% 21.8%）、東京大学の支給する奨学金受給者が20.0%（21.2% 14.5%）であった。

## 【学部学生】

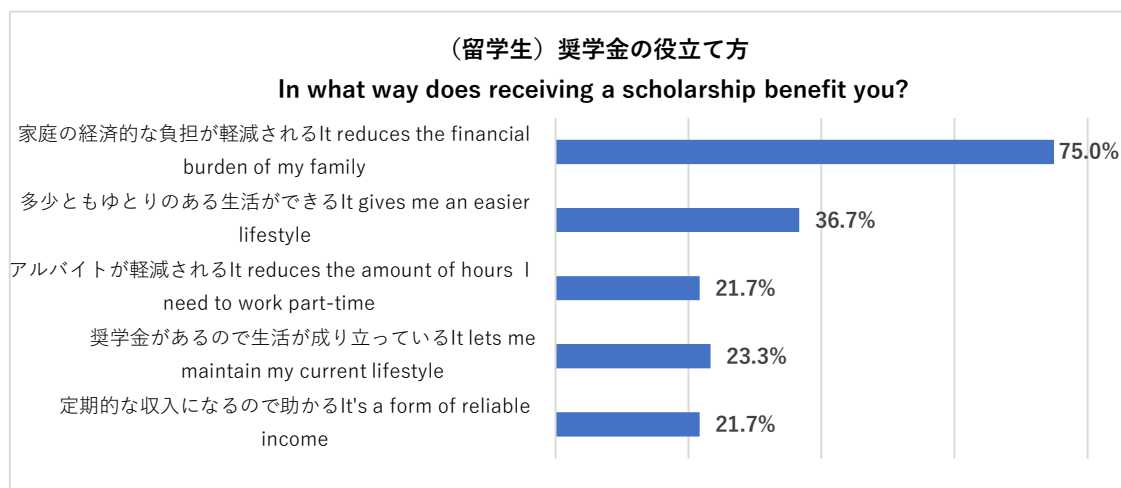
### 27. 奨学金の役立て方

- 奨学金の役立て方は、「家庭の経済的な負担が軽減される」、「多少ともゆとりのある生活ができる」、「生活が成り立っている」
- 「奨学金があるので生活が成り立つ」の回答割合を所得階層別でみると、450万円未満の者が過半数を占める

27. 設問26で【奨学金を「受けている」】と答えた方にお伺いします。奨学金はどんな面で役に立っていますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。



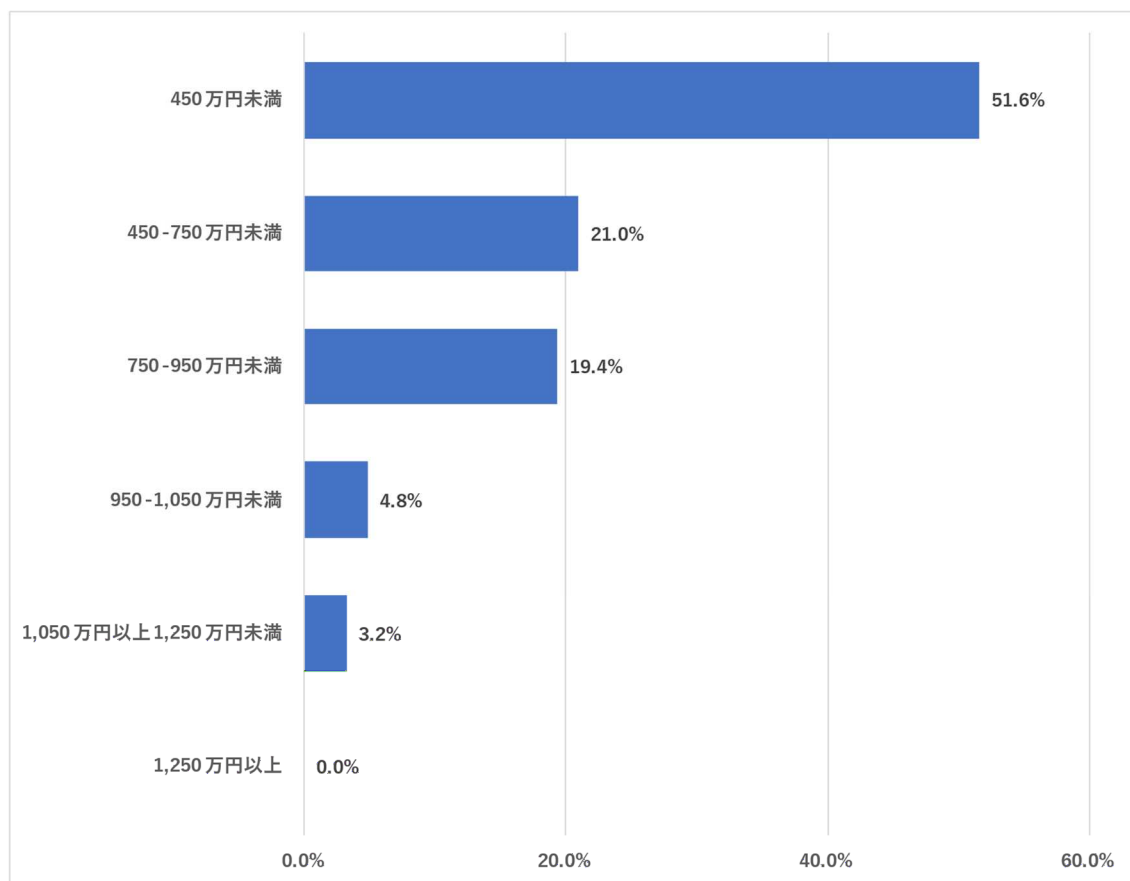
奨学金が役に立つ面は「家庭の経済的な負担が軽減される」が最も多く77.1%、「多少ともゆとりのある生活ができる」36.0%、「生活が成り立っている」28.3%と続く。



## 【学部学生】

受給している学部留学生のうち、奨学金受給の効果として最も選択されたのは、「家庭の経済的な負担の軽減」75.0% (84.3%,72.7%) であった。奨学金の役立て方として、各項目の選択状況は、国内生と大きく変わらない。

「奨学金があるので生活が成り立っている」 (所得階層別)



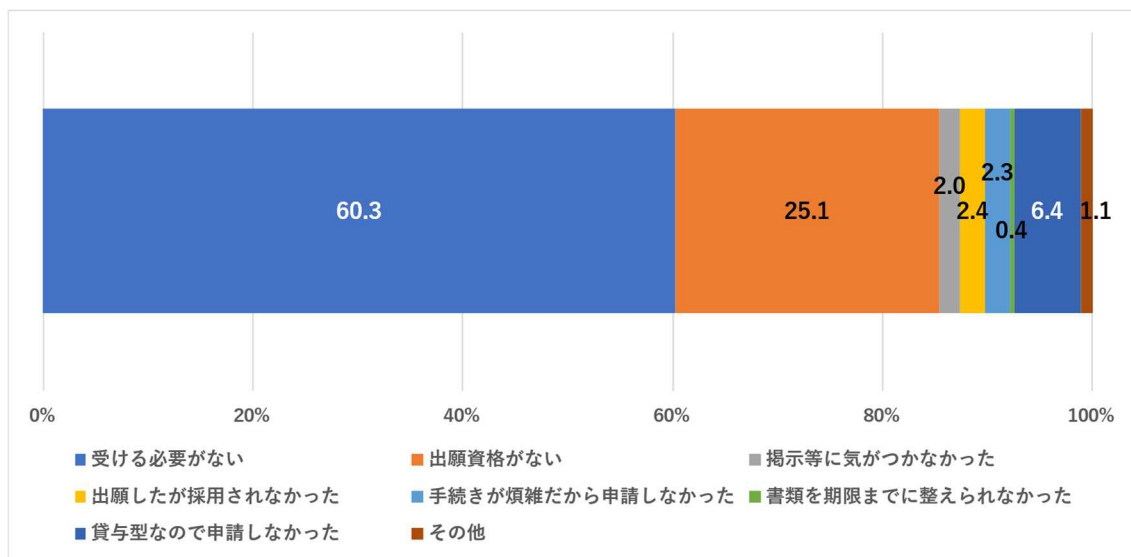
「奨学金があるので生活が成り立つ」の回答割合を所得階層別に確認したところ 450万円未満の割合が51.6%と前回調査より11%ポイント増加した。第2位の450-750万円未満との差も30.6%ポイントある。所得階層が低くなるほど生活が奨学金によって支えられていることが示唆された。

## 【学部学生】

### 28. 奨学金不受給理由

- 奨学金不受給理由「受ける必要がない」、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」

28. 設問26で【奨学金を「受けていない」】と答えた方にお伺いします。その理由はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



奨学金不受給理由は「受ける必要がない」が過半数を占め、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」と続く。概ね全体的な傾向としては前回と同じである。

## 【学部学生】

### 「IX.奨学金」の分析（まとめ）

全体では、およそ 80%以上が定期的な奨学金を受給していないこと、受給者にとっては、奨学金は「家庭の経済的な負担が軽減される」といったメリットがあり、所得階層が低い層では生活を支える役割を果たしていることなど、前回同様の傾向を示していた。なお、奨学金不受給理由は「受ける必要がない」が過半数を占める。

留学生のうち、69.0%の学生が奨学金を受給しており、近年実施した調査と同様の状況である。奨学金の効果については、国内生と留学生の回答傾向に大きな相違はない。

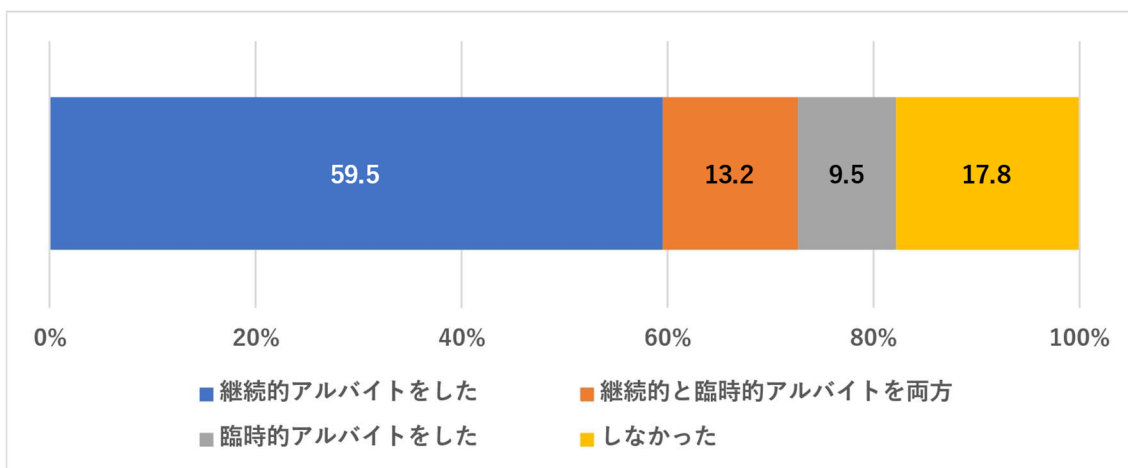
## 【学部学生】

### X. アルバイト

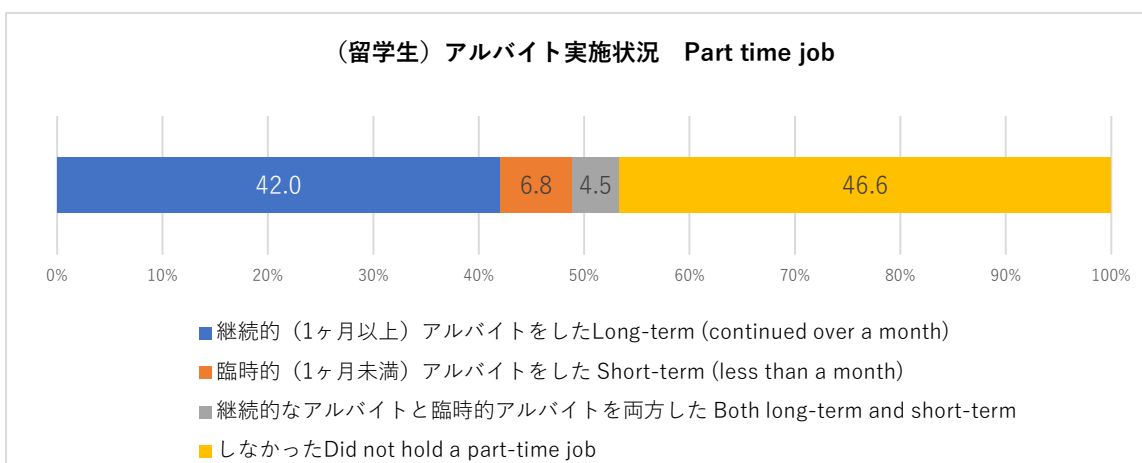
#### 29. 過去1年間のアルバイト実施状況

- アルバイト従事率 82.2%、前回調査より 15.1%ポイント増加
- 男子より女子の方がアルバイトをしている傾向がある

29. 過去1年間にアルバイトをしましたか。あてはまるものを1つ選んでください。



「継続的アルバイトをした」の割合が一番高く、59.5%で前回調査より 8.3%ポイント増加した。

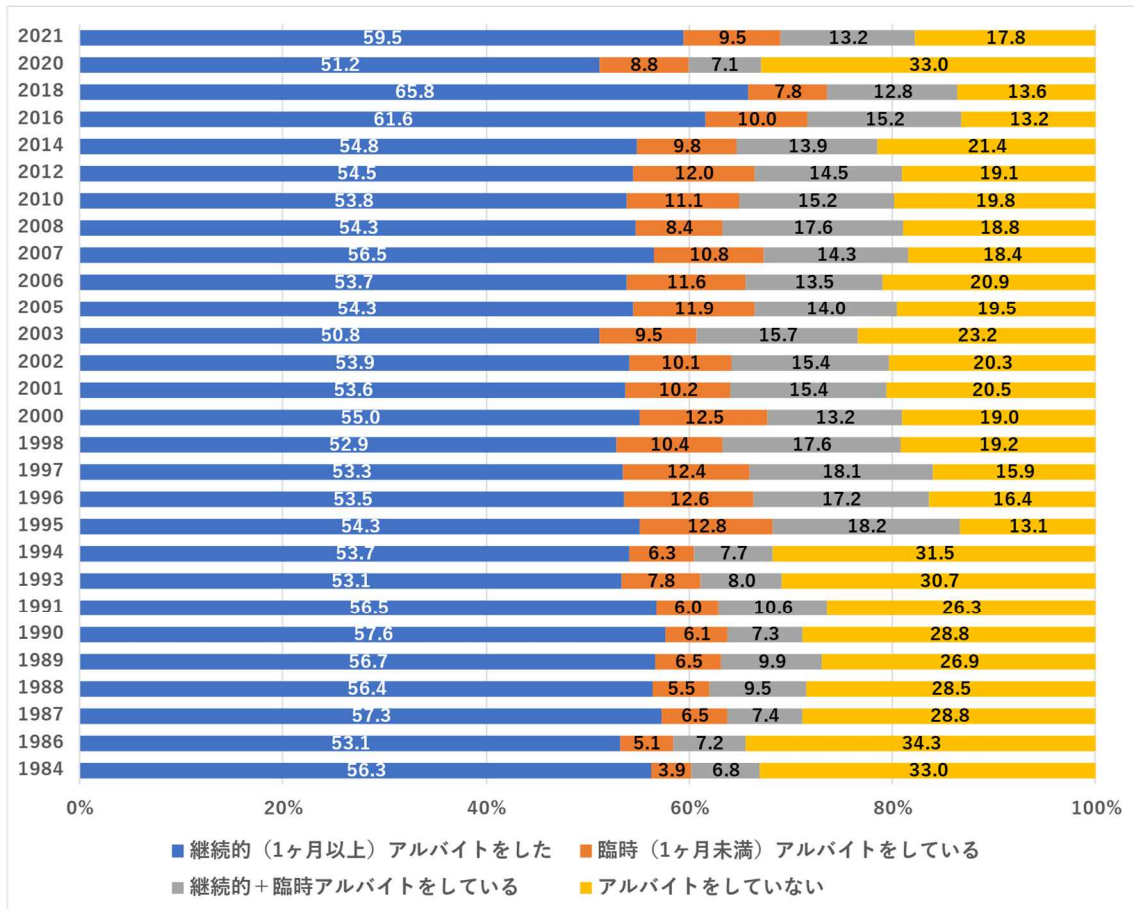


学部留学生で、継続的アルバイトをした学生は 42.0% (前回 42.9% 前々回 49.3%)、継続的なアルバイトと臨時的なアルバイトの両方をした学生は 6.8% (6.5% 8.2%)、しなかった学生は 46.6% (36.4% 30.1%) であった。日本人学生と比較すると、アルバイトをしていない学生が多い。



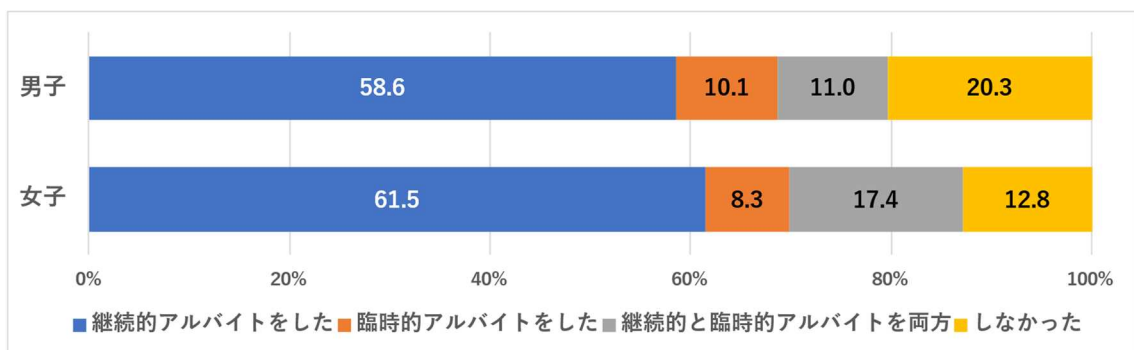
## 【学部学生】

アルバイト実施状況の経年変化



アルバイト従事率は前回調査より増加し、「アルバイトをしていない」の割合は2007年~2012年の数値に近く、17.8%である。

アルバイト実施状況 (男女別)



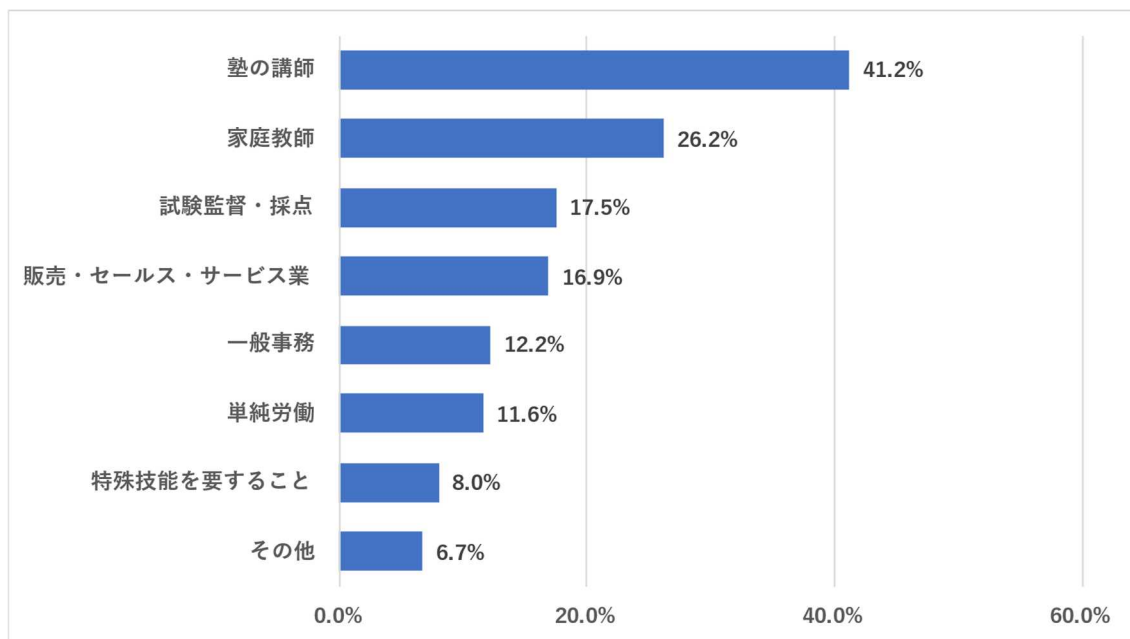
男女間でアルバイト実施の有無に差はあるが、概して男子よりも女子のアルバイト実施率が高い。「継続的アルバイトをした」、「臨時的アルバイトをした」、「継続的と臨時的アルバイトを両方した」の合算値は男子で79.7%、女子で87.2%と7.5%ポイントの差が認められるが、前回調査よりは縮小した。前回調査と比べて男女ともにアルバイト実施率が増加した。

## 【学部学生】

### 30. アルバイトの種類

- アルバイトの種類は前回調査同様「塾の講師」、「家庭教師」、「試験監督・採点」

30. 設問29で「過去1年間にアルバイトをした」と答えた方にお伺いします。そのアルバイトの種類はどれにあたりますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。



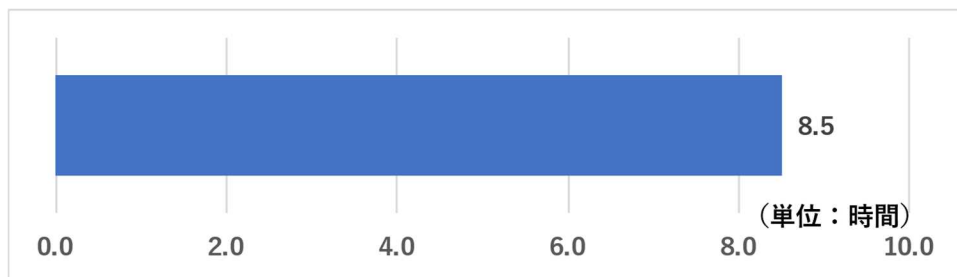
アルバイトの種類は「塾の講師」が最も多く41.2%（前回42.3%）、「家庭教師」26.2%（前回23.2%）、「試験監督・採点」17.5%（前回18.1%）と続く。「単純労働」と「一般事務」の順位が逆転したが、前回調査と概ね同じ割合で分布している。

## 【学部学生】

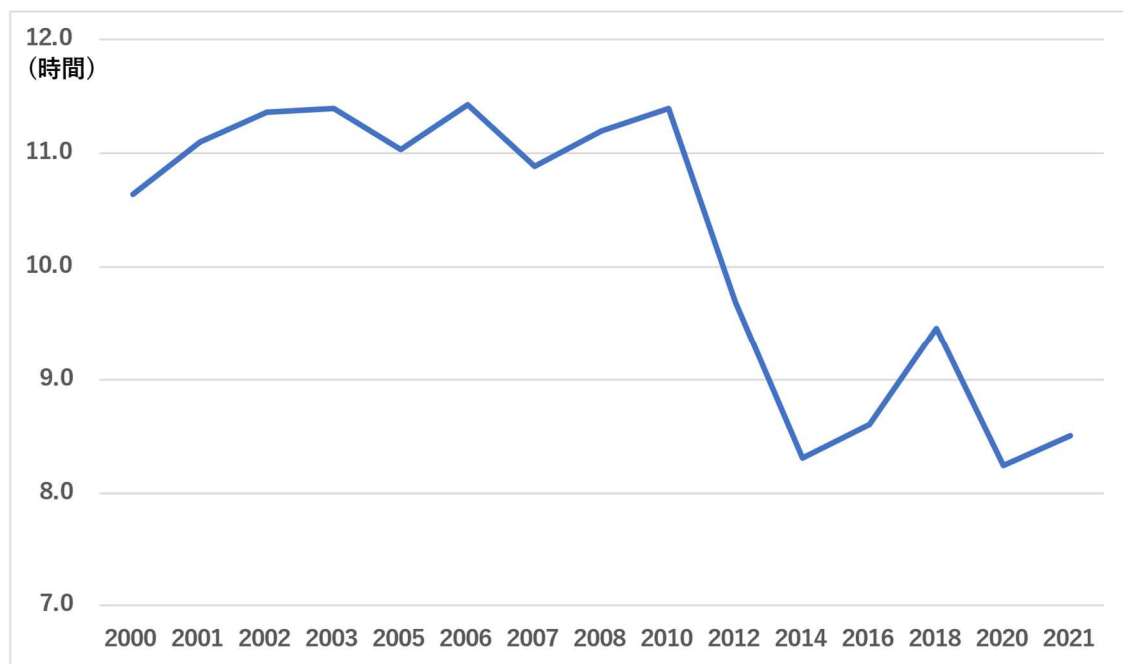
### 31. アルバイトの時間

- アルバイトの時間は週およそ 8.5 時間

31. アルバイトに費やした時間はどのくらいでしたか。(往復時間を含め、一週間の合計時間)



アルバイト従事時間の経年変化



アルバイトに費やした時間は 8.5 時間であり、前回の 8.2 時間よりやや増加したものの 2010 年以降は減少傾向である。

なお、回答方法について、これまでの調査では 1 週間あたりの平均時間を記入する形であったが、今回調査では 1 週間あたりの合計時間を選択する形としている。

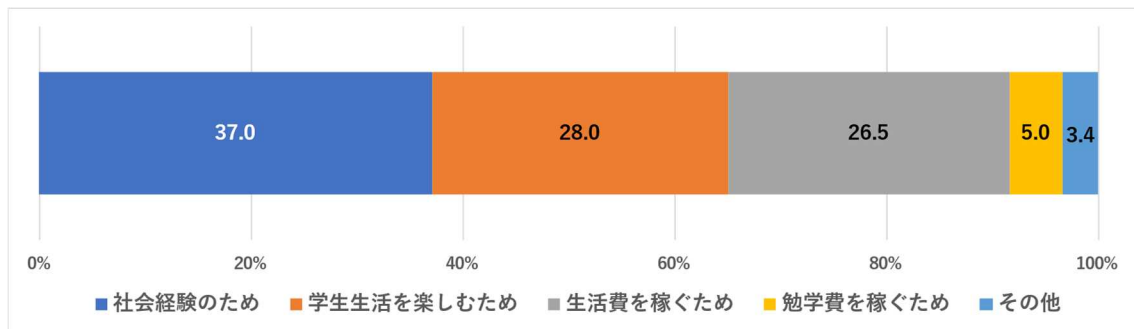
留学生のアルバイト従事平均時間は、10.8 時間 (SD=9.56) であった (ただし、アルバイト経験のある学生のみを対象として算出しているため、国内生のアルバイト時間との比較はできない)。前回 2020 年度調査では 8.0 時間、2018 年度調査では 11.4 時間であり、従事経験のある学生に関しては、従事時間はコロナ前に近づいている。

## 【学部学生】

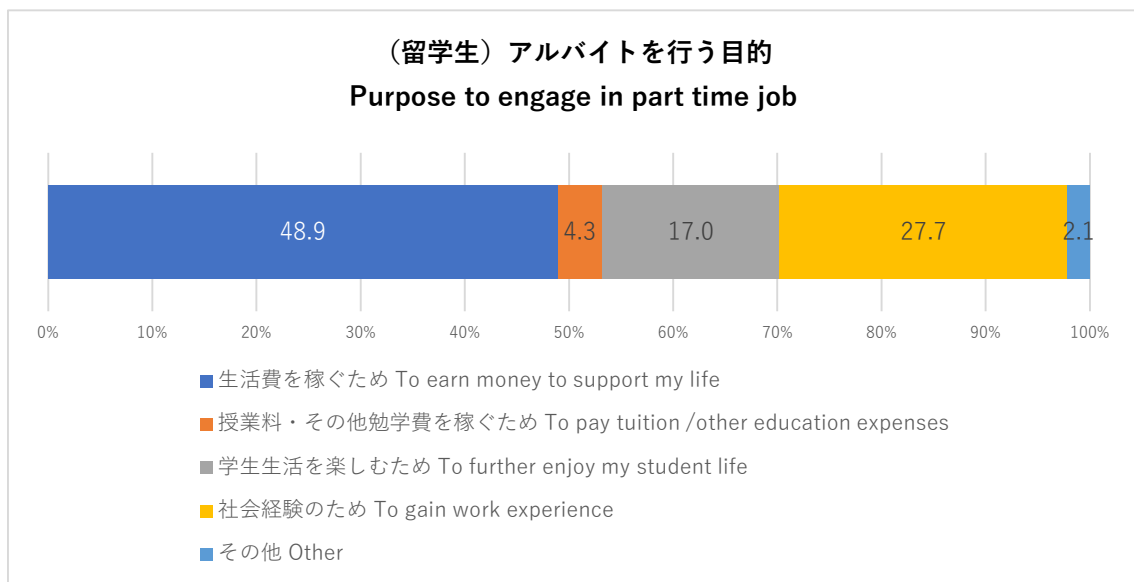
### 32. アルバイトの目的

- アルバイトの目的は「社会経験のため」、「学生生活を楽しむため」、「生活費を稼ぐため」
- 所得が少ない者の約半数が「生活費を稼ぐため」にアルバイトを行っている

32. アルバイトをした目的はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



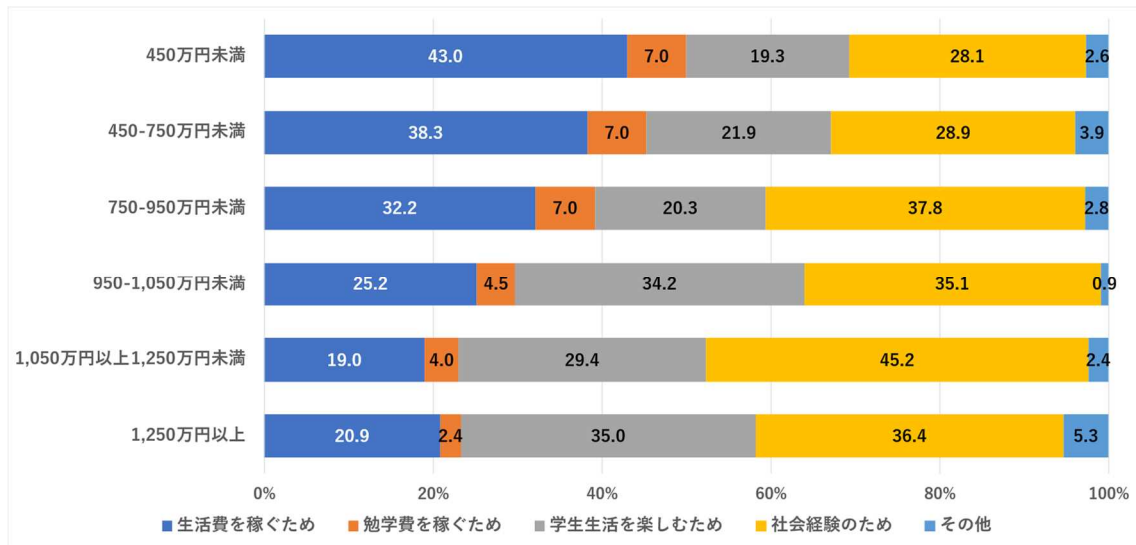
アルバイトの目的は「社会経験のため」が37.0%で最も多く（前回36.5%）、「学生生活を楽しむため」28.0%（前回27.3%）、「生活費を稼ぐため」26.5%（前回25.7%）と続く。前回調査より「勉学費を稼ぐため」が2%ポイント減少した。



学部留学生のアルバイト従事目的は、「生活費を稼ぐため」48.9%（前回53.2% 前々回42.9%）、「社会経験のため」27.7%（25.5% 26.5%）、「学生生活を楽しむため」17.0%（12.8% 22.4%）であった。国内生と比べると生活費を補填する目的でアルバイトをする学生が多い傾向は以前からみられるが、「学生生活を楽しむため」を選択した学生が、2020年度調査時よりも回復している。

## 【学部学生】

### アルバイトの目的（所得階層別）



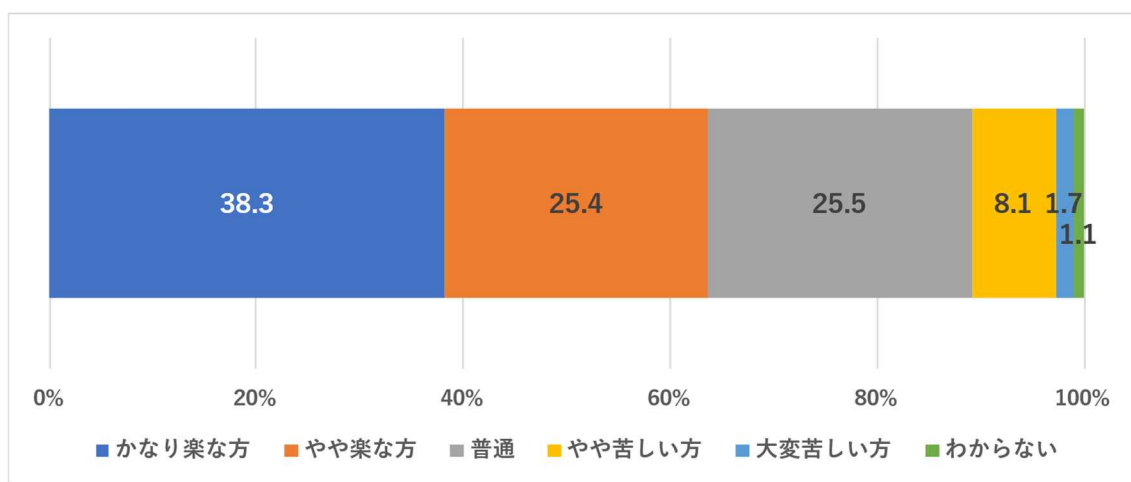
アルバイトの目的を所得階層別にみたところ、450万円未満の層では「生活費を稼ぐため」が43.0%と最も多く（前回調査48.5%）、半数近くが生活費のためにアルバイトをしていることがうかがえる。

## 【学部学生】

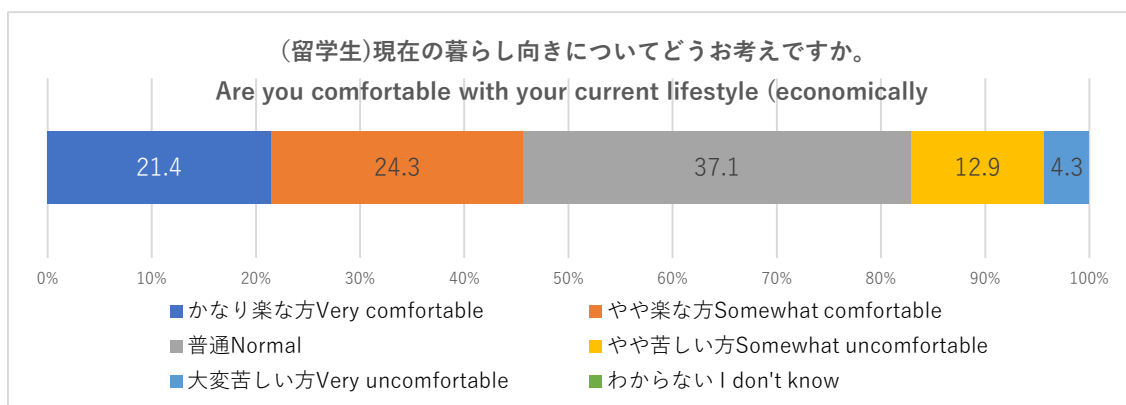
### 33. 現在の暮らし向き

- 暮らし向き「楽な方」63.7%、前回調査より増加
- 所得が450万円未満の層は「楽な方」の割合が低く、「苦しい方」の割合が高い

33. 現在の暮らし向きについてどうお考えですか。あてはまるものを1つ選んでください。



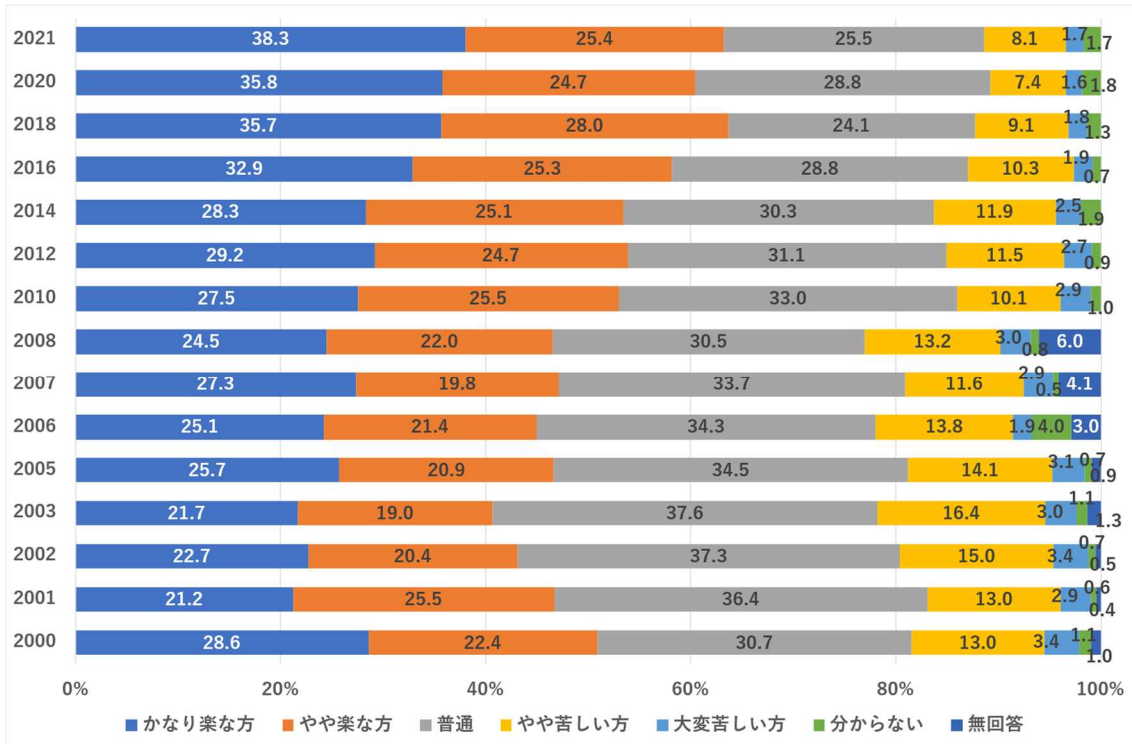
現在の暮らし向きについて、「かなり楽な方」「やや楽な方」は合計で63.7%である。



学部留学生のうち、回答時未入国の学生を除くと、「かなり楽な方」(21.4%)、「やや楽な方」(24.3%)、「普通」(37.1%)、「やや苦しい」(12.9%)「大変苦しい」(4.3%)であった。日本人学生よりも、「かなり楽」と回答した学生の割合は少なく、「苦しい」と感じている学生の割合も高めである。ただし、大学院留学生と比較すると、学部留学生の方が、暮らし向きが楽であると感じている割合が高い。なお、「かなり楽」「やや楽」を選じた留学生は、2020年度の前回調査では44.6%、2018年度調査では38.5%であった。

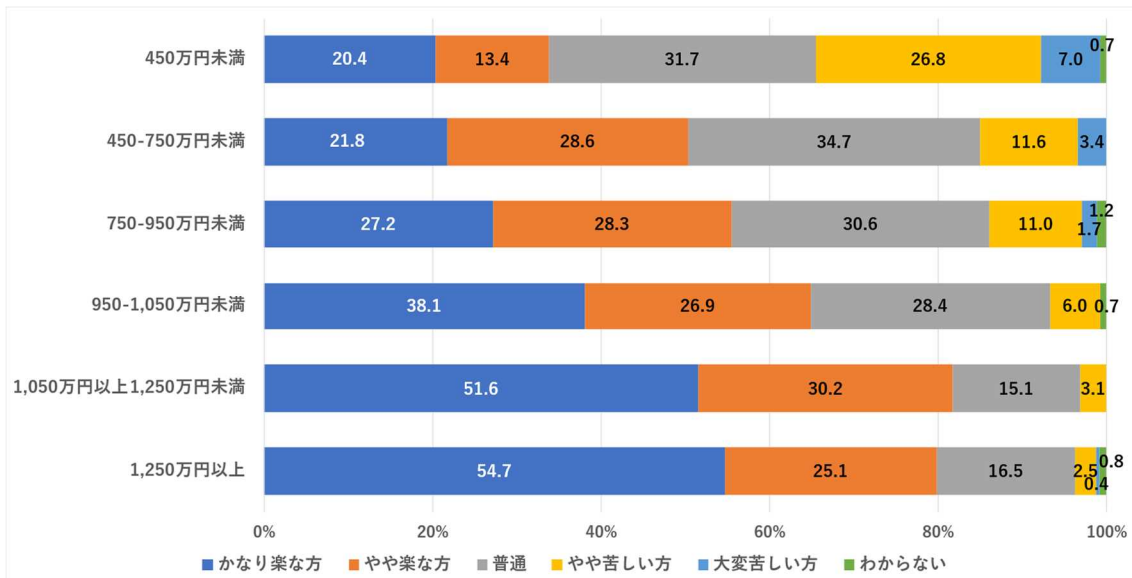
## 【学部学生】

「現在の暮らし向き」の経年変化



前回調査と比べて「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は3.2%ポイント増加し、2018年調査と同水準となった。

「現在の暮らし向き」（所得階層別）



所得階層別に暮らし向きに違いがみられた。暮らし向きが「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は450万円未満の層では33.8%、「やや苦しい方」「大変苦しい方」の合算値も33.8%となった。この数値は回答者全体と比べて大きな差がある。

## 【学部学生】

### 「X. アルバイト」の分析（まとめ）

過去1年間にアルバイトをしたことがある者は82.2%で、前回調査より15.1%ポイント増加した。飲食店などの営業再開も背景の一つと考えられるが、アルバイトの種類をみると、「塾の教師」と「家庭教師」が合計で67.4%である。一方、男子よりは女子の方がアルバイトをしている傾向は変わっていない。アルバイトの目的について、「社会経験のため」が最も多いが、所得が少ない者(450万円未満)の約半数が「生活費を稼ぐため」にアルバイトを行っている。暮らし向きについては、新型コロナウイルスの発生前と比べて大きな変化はみられず、所得が少ない者(450万円未満)の3割以上が「苦しい方」と回答していた。

学部留学生は、奨学金受給者の割合が国内生よりも高いこともあり、アルバイト従事経験のある学生の割合は国内生よりも低い。アルバイトを行っている学生は、生活費を補填する目的でアルバイトをする学生が多い傾向は変わらずみられるが、「社会経験のため」の学生もおり、目的は多様であると考えられる。ただしこれらは、入国済みの学生のみを対象とした傾向である。



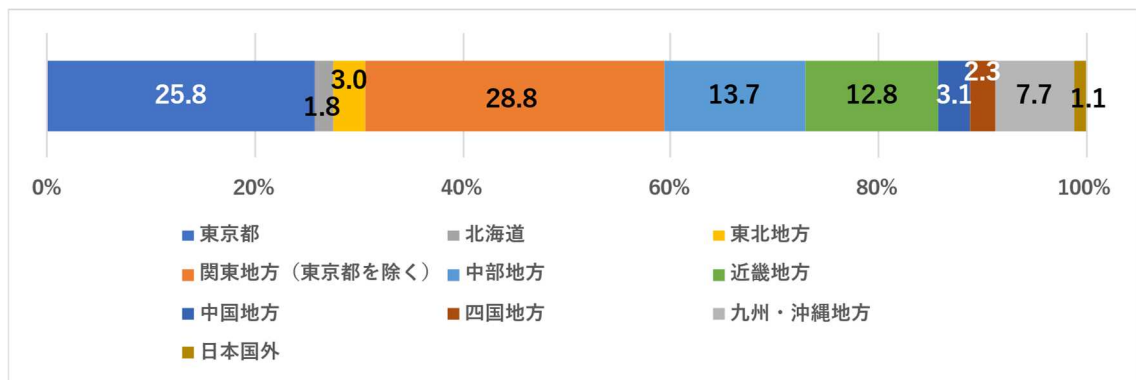
## 【学部学生】

### XI. 家庭の状況

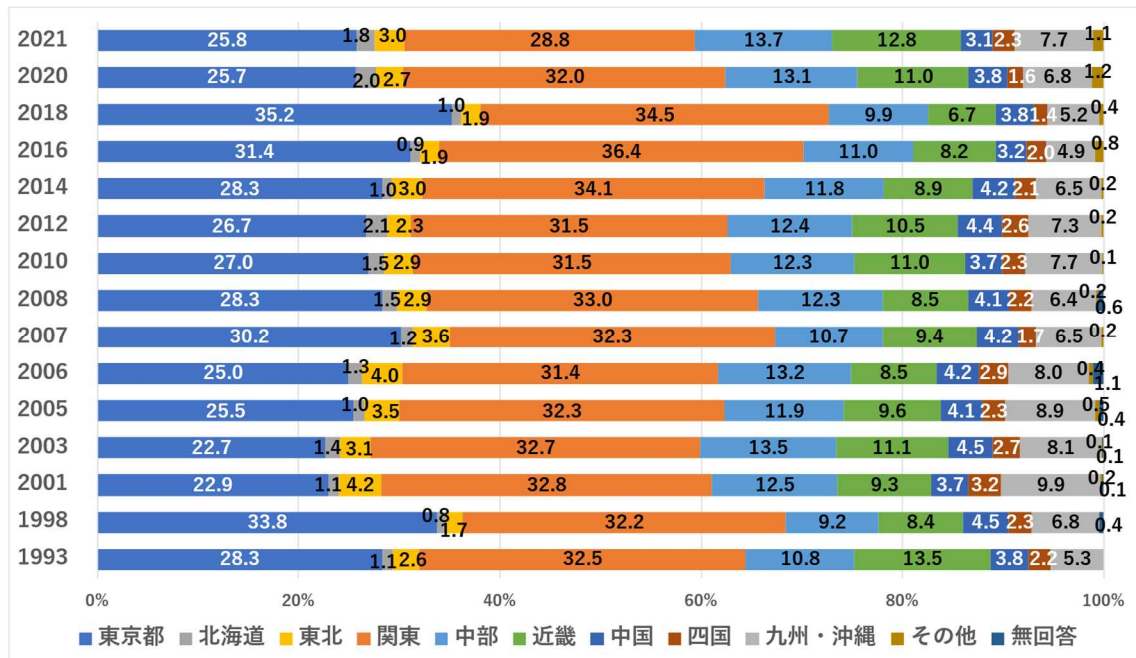
#### 34. 高校時代の居住地

- 高校時代の居住地の上位は「関東地方（東京都を除く）」、「東京都」、「中部地方」
- 男子は「関東地方（東京都を除く）」が多く、女子は「東京都」が多い

35. あなたが大学入学前の高校時代（その年齢当時）に住んでいた地方を1つ選んでください。



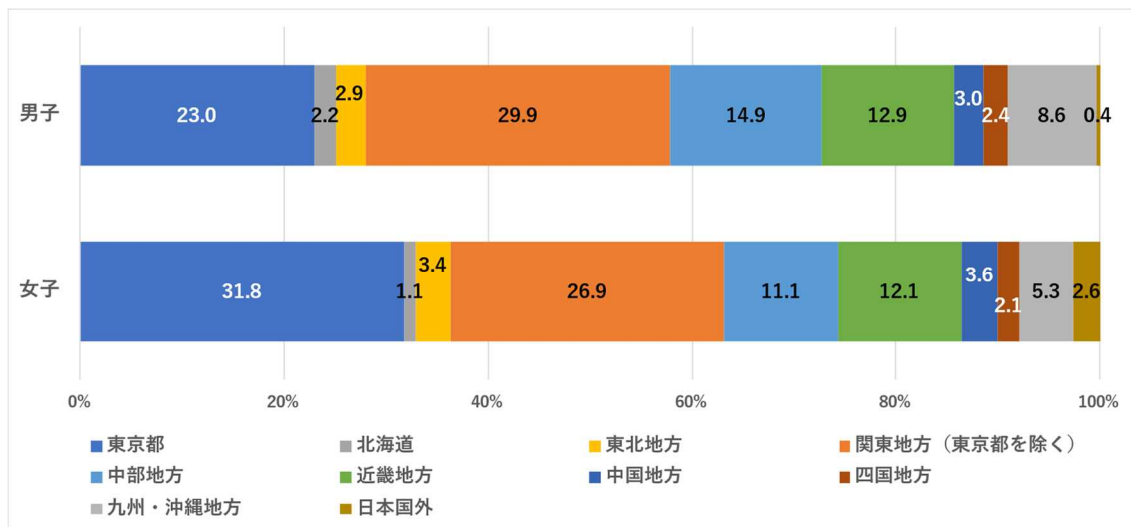
「高校時代の居住地」の経年変化



高校生相当の年齢のときの居住地は「関東地方（東京都を除く）」が最も多いが、前回調査より3.2%ポイント減少した。東京都を含めた関東地方の割合は近年減少傾向ではあるものの、長い期間で見ると大きな変動はない。

## 【学部学生】

「高校時代の居住地」（男女別）



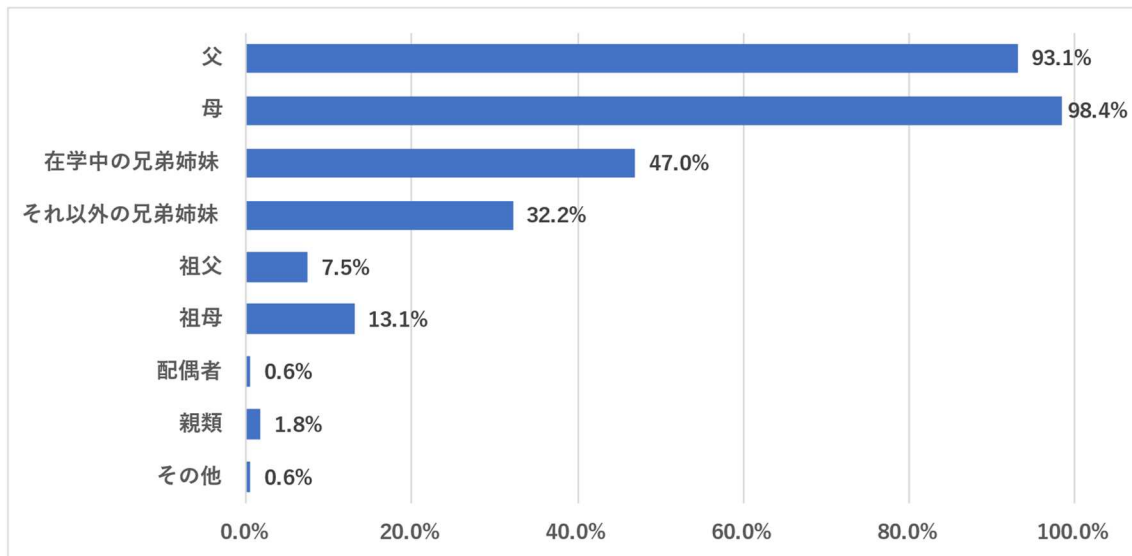
男女間の高校時代の居住地は、前回調査と同じ傾向で、どちらかといえば男子は「関東地方（東京都を除く）」が多く、女子は「東京都」が多いものの、全体的な傾向としては大きな変化はみられない。

## 【学部学生】

### 35. 家族構成

- 家族構成は前回調査と概ね変わらなかったものの、「在学中の兄弟姉妹」が減少、「それ以外の兄弟姉妹」が増加

35. 家族構成について、あてはまるもの全てを選んでください。



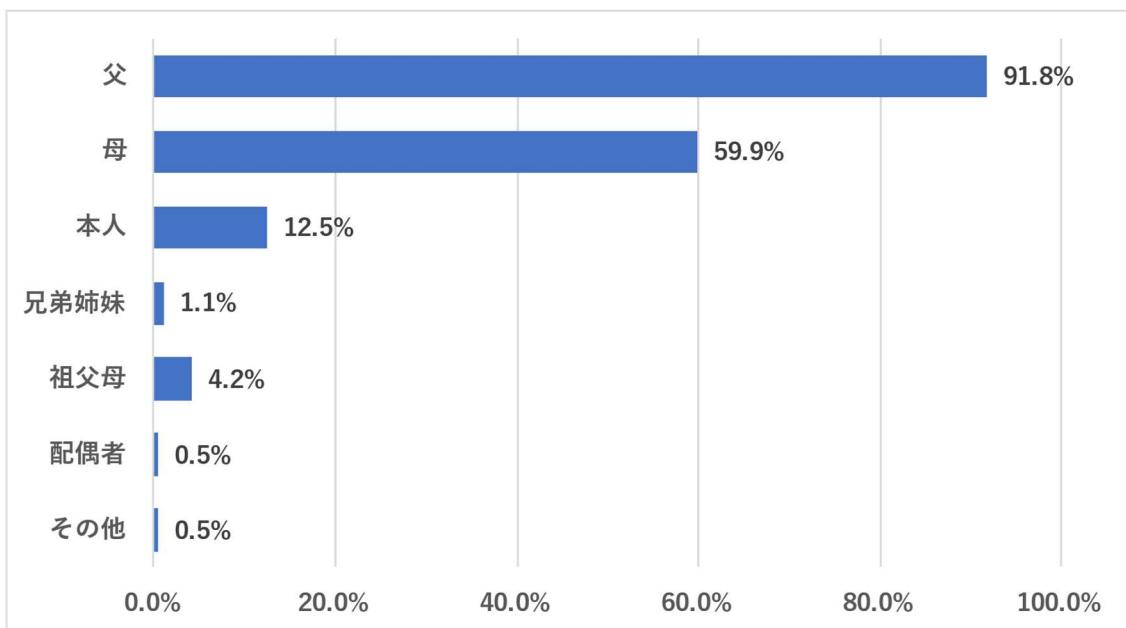
家族構成は前回調査と概ね変わらず、「父」「母」が多数を占め、「在学中の兄弟姉妹」「それ以外の兄弟姉妹」と続く。「在学中の兄弟姉妹」の割合が前回調査の 51.1% から 4.1% ポイント減少し、「それ以外の兄弟姉妹」が前回調査の 27.3% から 4.9% ポイント増加している。

## 【学部学生】

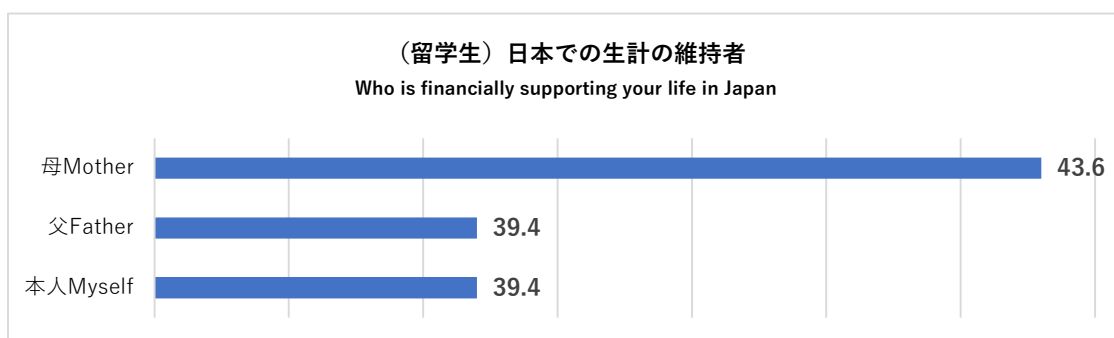
### 36. 生計維持者

- 生計維持者（複数回答可）については「父」91.8%
- 「母」が13.8%ポイント増加して約60%

36. あなたの現在の生計を支えている方について、あてはまるもの全てを選んでください。



生計を支えている者は「父」が91.8%（前回93.1%）で、「母」59.9%（前回46.1%）、「本人」12.5%（前回5.6%）と続く。前回調査ですでに増加傾向であった「母」が今回調査においても13.8%ポイント増加した。



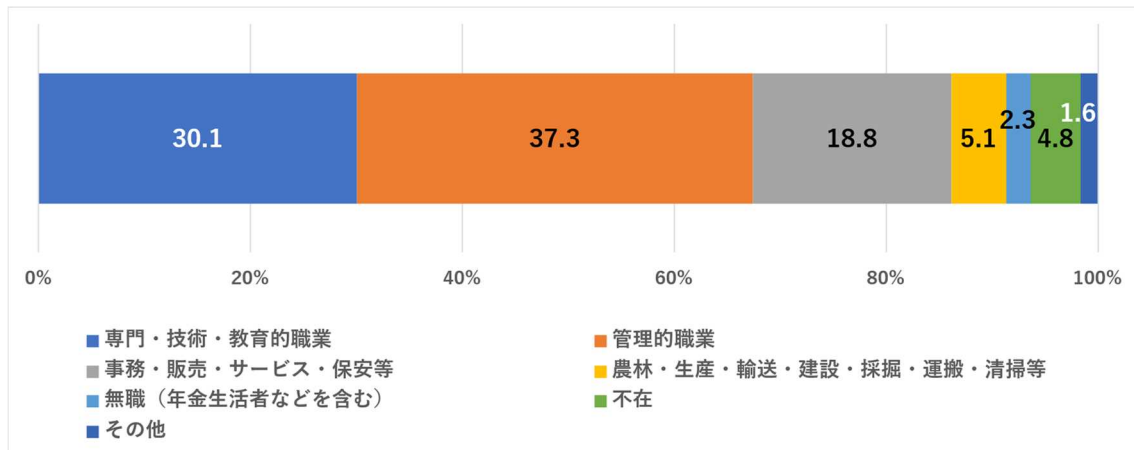
学部留学生調査は、「日本での生計」を支えている人について回答を求めたため、未入国の学生を除く94名を分析対象とした。主たる家計の支持者は「父」(39.4%)、「母」(43.6%)、「本人」(39.4%)であった。留学生は、奨学金によって生計を支えている学生が一定数いることから、「本人」の占める割合が高いのに加え、「父」「母」の選択割合の差が、日本人学生ほど大きくないことも特徴といえる。

## 【学部学生】

### 37. 父親の職業

- 父親の職業の上位は「管理的職業」、「専門・技術・教育的職業」、「事務・販売・サービス・保安等」

37. あなたの父親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。



父親の職業は「管理的職業」が37.3%と最も多く（前回38.4%）、「専門・技術・教育的職業」は30.1%（前回32.1%）、「事務・販売・サービス・保安等」18.8%（前回18.1%）と続く。ほぼ前回同様の傾向にある。

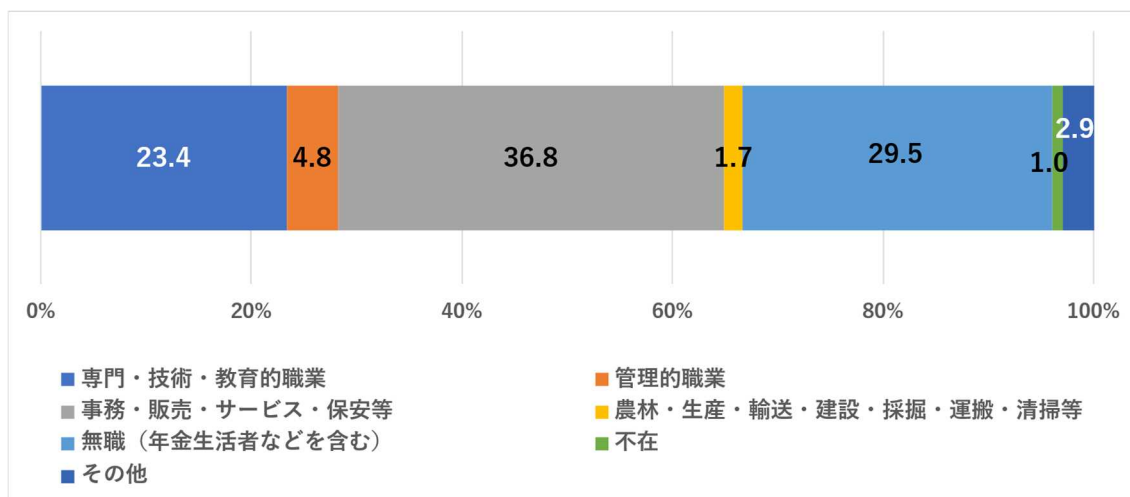
なお、選択肢の分類について、これまでの調査では「専門・技術」、「教育的職業」、「管理的職業」、「事務」、「販売」、「サービス業」、「保安」、「農林」、「生産」、「輸送」、「建設・採掘」、「運搬・清掃」、「無色」、「その他」としていたが、今回調査では「専門・技術・教育的職業」、「管理的職業」、「事務・販売・サービス業・保安等」、「農林・生産・輸送・建設・採掘・運搬・清掃等」、「無職」、「その他」の分類とし、選択肢に「不在」を追加している。

## 【学部学生】

### 38. 母親の職業

- 母親の職業は「事務・販売・サービス・保安等」、「無職」、「専門・技術・教育的職業」が多い
- 「無職」が減少傾向

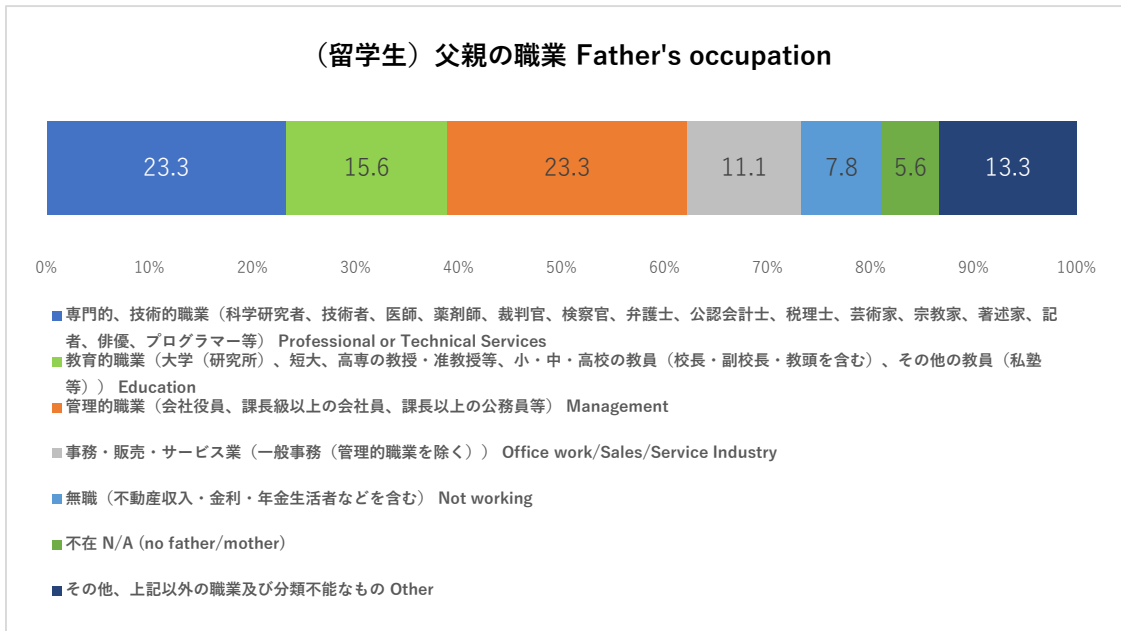
38. あなたの母親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。



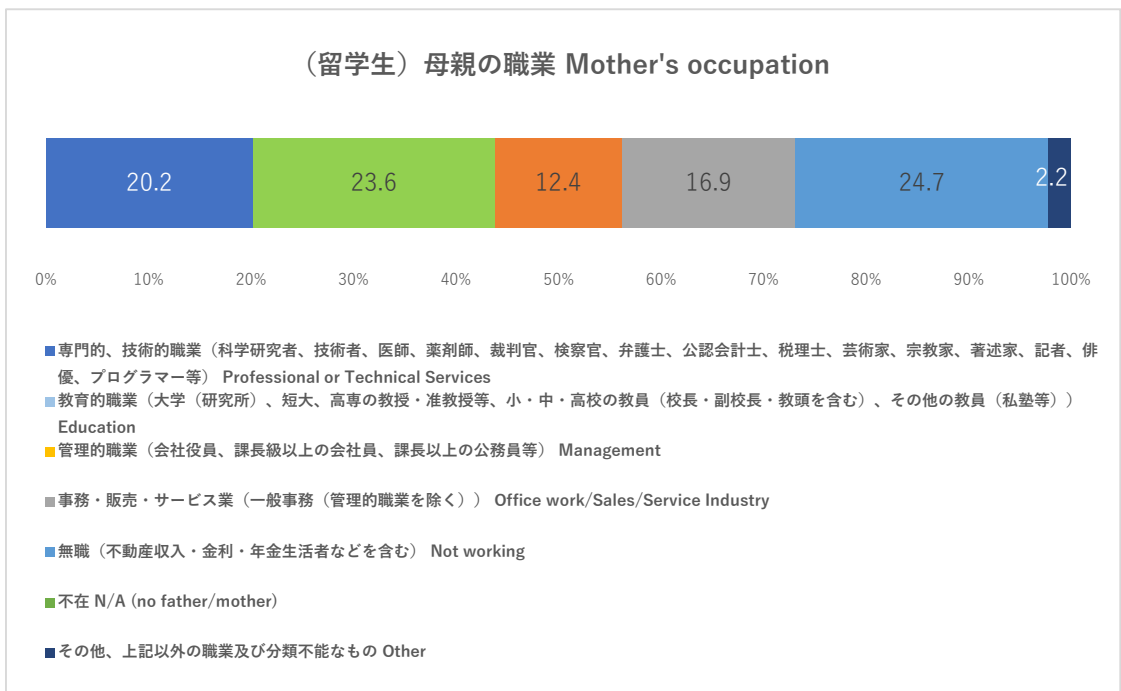
母親の職業は「事務・販売・サービス・保安」36.8%（前回 33.3%）が最も多い。第2位の「無職」は29.5%で、前回より2.2%ポイント減少した。第3位は「専門・技術・教育的職業」23.4%で、前回とほぼ同じ。

選択肢の変更については、父親の職業と同様である。

## 【学部学生】



日本人学生の父親と比較すると、留学生の父親は、「管理的職業」(23.3%)が少なく、一方、「専門的」「教育的職業」(38.9%)の割合が高い。また「無職」(7.8%)も国内生の親に比べると多い。



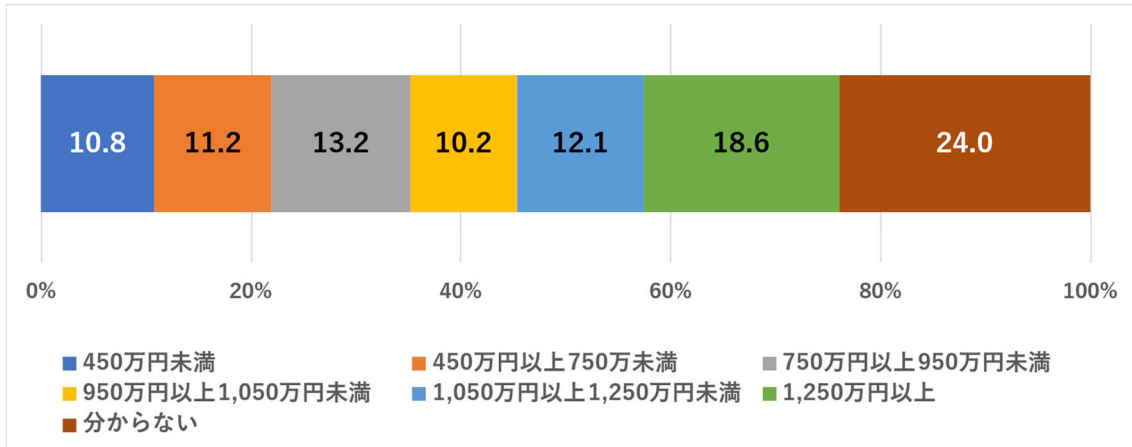
留学生の母親の職業は、日本人学生の母親と、職業の分布に相違がみられ、「専門的」「教育的」職業が43.8%を占めており、また「管理的職業」も12.4%と高い。また母親が「無職」の割合が高いものの、父母の職業分布に国内生ほど差がないのも、留学生の親の職業の特徴である。

## 【学部学生】

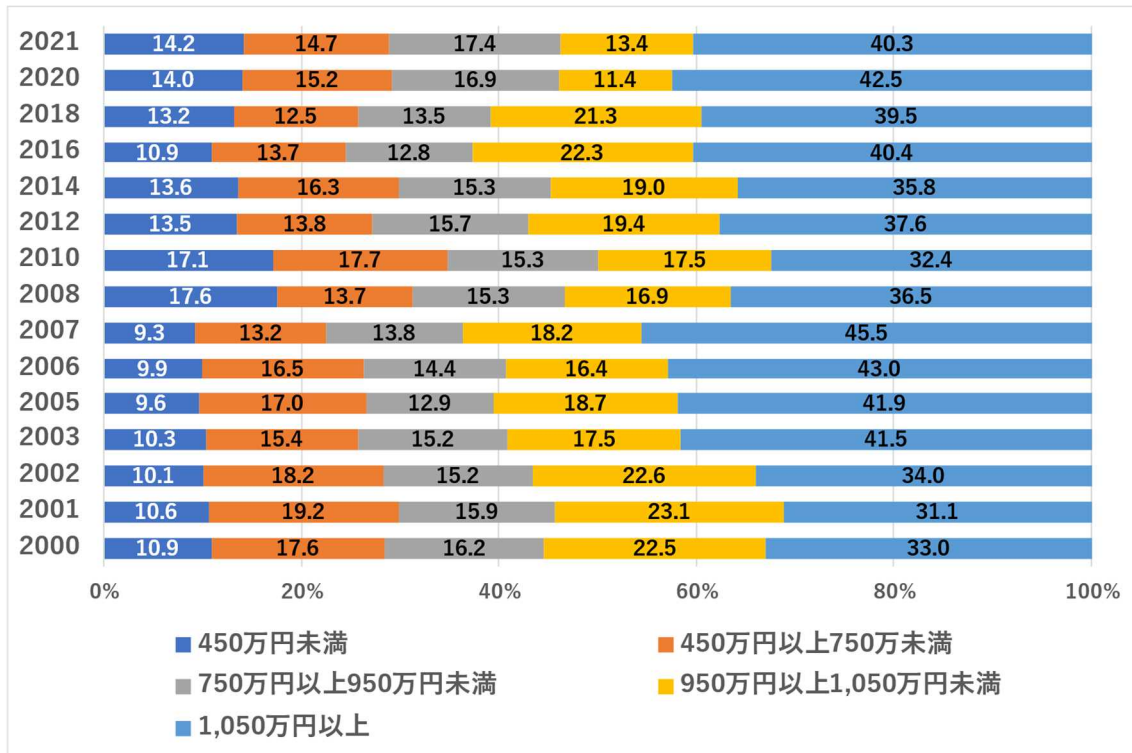
### 39. 世帯収入

- 世帯収入は概ねこれまでの傾向と同様
- 前回調査同様、男子よりも女子で世帯収入が高い割合が多い

39. あなたの現在の生計を支えている方の昨年（2021年1月～12月）の年間税込み収入（世帯年収）はどれくらいですか。おおよその金額を選択してください。（設問36で複数回答している場合には、その全員分を合算してください。）



生計維持者の年間税込み収入の経年変化

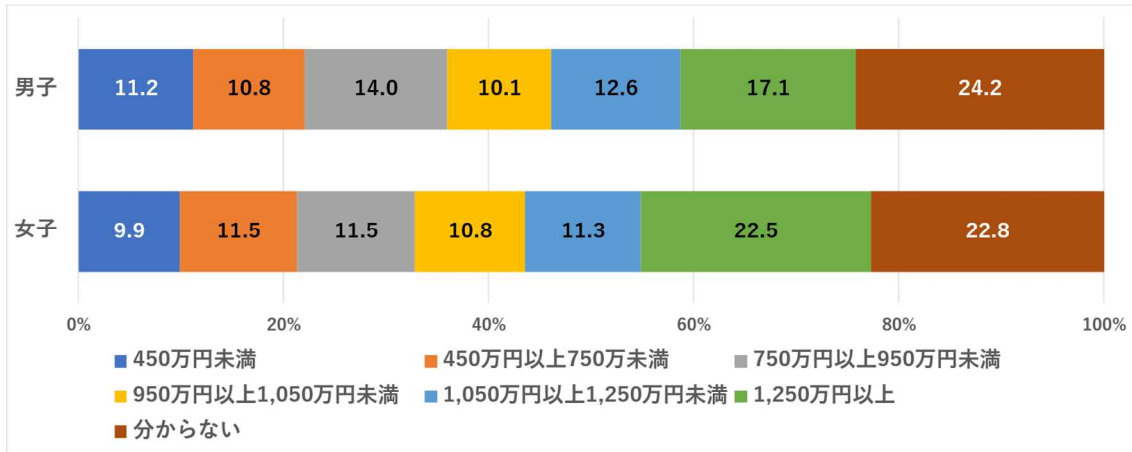




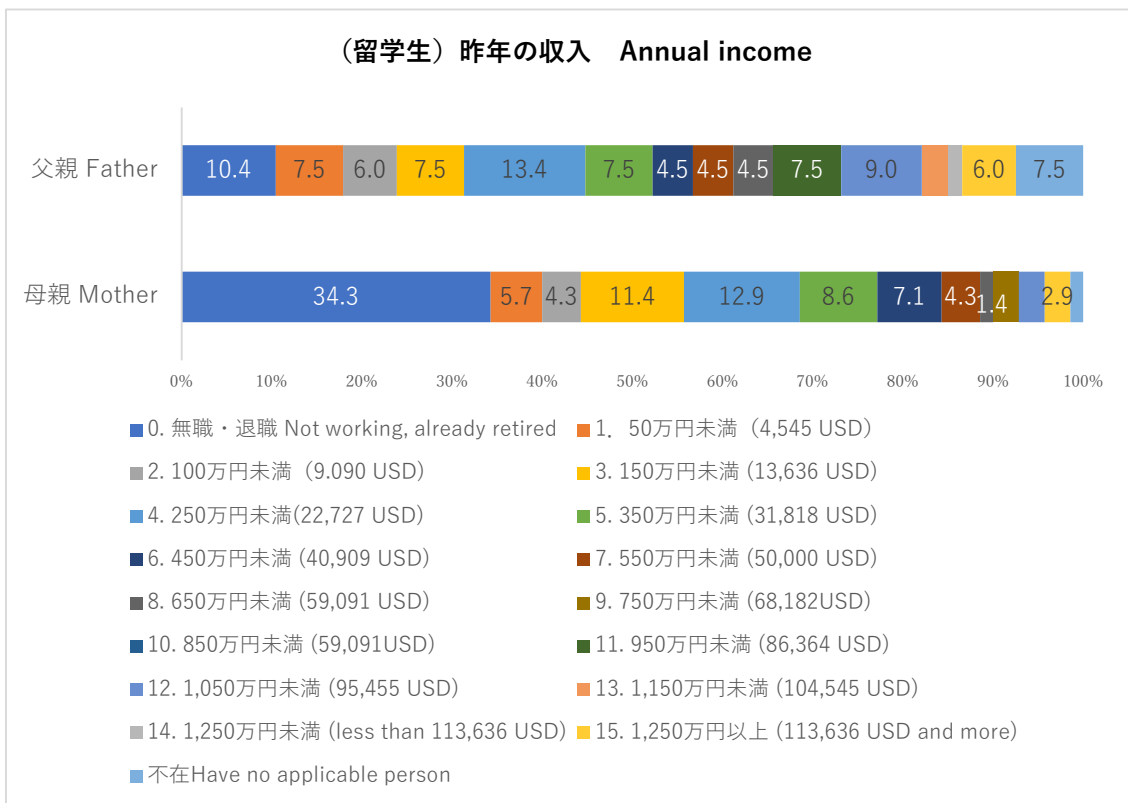
## 【学部学生】

今回調査では回答選択肢の金額区分を変更しているが、これまでの調査の金額区分と合わせてみると、生計を支えている者の年間税込み収入は、これまでの傾向と概ね整合的である。「950万円以上1,050万円未満」の層は2016年から減少している。また、「分からない」の割合も前回の35.7%より11.7%ポイント減少した。

生計維持者の年間税込み収入（男女別）



世帯収入は男子よりも女子で「1,250万円以上」と回答した割合が5.4%ポイント高いほかは、明確な違いはみられない。



## 【学部学生】

留学生については、父・母それぞれの昨年度の年間収入について回答を求めている。国内生と比較すると450万円未満世帯の割合が高く、経済的な格差は大きい。一方で収入の高い層にも分布がみられ、留学生集団内の差も大きい。

また学部留学生は母数が少ないため、数値の解釈には注意が必要であるが、大学院留学生と比較すると、学部留学生の保護者の収入は高い傾向がある。詳細は、留学生版を参照のこと。

## 【学部学生】

### 「XI. 家庭の状況」の分析（まとめ）

「IV. 不安・悩み」の調査結果のとおり、心の悩みやアルバイト状況など、新型コロナウイルス感染症の影響によって分布が変化した項目がいくつかあったものの、家庭の状況は本調査においては以下の点を除くと、大きな変化はそれほどみられなかった。前回調査と比べて、母親の「無職」が減少し、生計維持者（複数回答可）として母親を挙げる者が増加した。また、「在学中の兄弟姉妹」の減少、「それ以外の兄弟姉妹」の増加がみられた。コロナ禍によって影響が生じやすい世帯収入については、目立った変化はみられなかった。

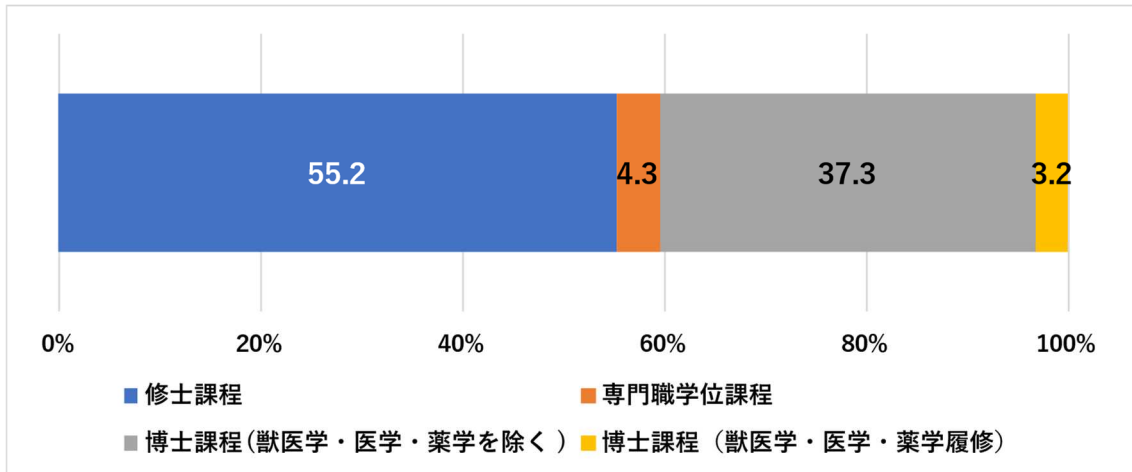
留学生と国内生の世帯の年間収入には大きな差はあるものの、母国の親の収入が高い層の留学生もみられ、留学生集団内の差にも留意が必要といえる。

また留学生の母親の職業は、日本人学生の母親と比べると「専門的」「教育的」「管理的職業」に従事する人の割合が高く、父母間の職業分布の差も国内生に比べると小さい。こうした点は、留学生の職業選択やジェンダー観等にも、影響を及ぼしうるだろう。

# 【大学院学生】

## I. 基本的事項（回答者の特性）

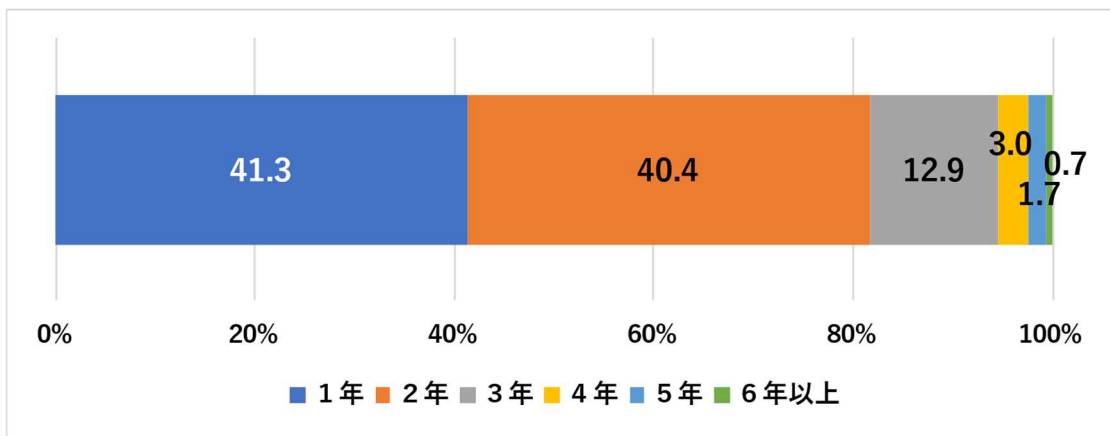
### 1. 課程



回答者は、修士課程が 55.2%、専門職学位課程が 4.3%、博士課程（獣医学・医学・薬学を含む）が 40.5%となっている。全学の構成と比べて、修士課程の回答者がやや多い。

留学生版回答者は、修士課程が 55.2%、専門職学位課程が 4.3%、博士課程（獣医学・医学・薬学を含む）が 40.5%となっている。全学の構成と比べて、修士課程の回答者がやや多い。大学院研究生（9.8%）、修士課程（49.5%）、専門職学位課程（2.2%）、博士課程（獣医学、医学又は薬学を除く）（35.6%）、獣医学、医学又は薬学を履修する博士課程（2.9%）であり、留学生の構成と比べると、修士課程の留学生の回答者がやや多いが、概ね在籍者の比率を反映している。

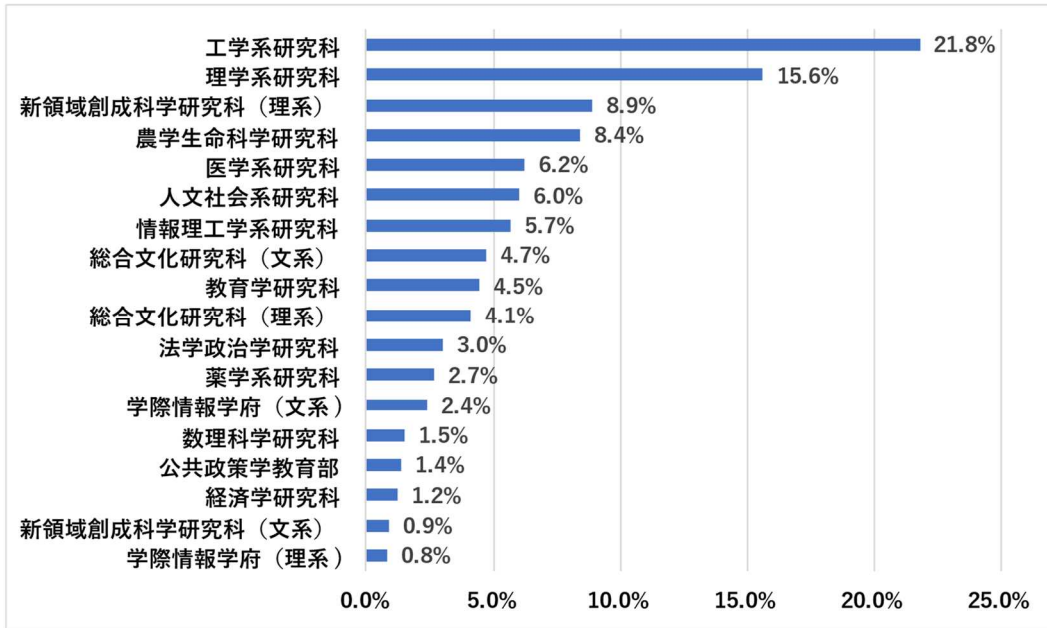
### 2. 学年



課程に入学してからの年数は 1 年～2 年が 8 割以上で、3 年以上の者は合計 18.3%であった。

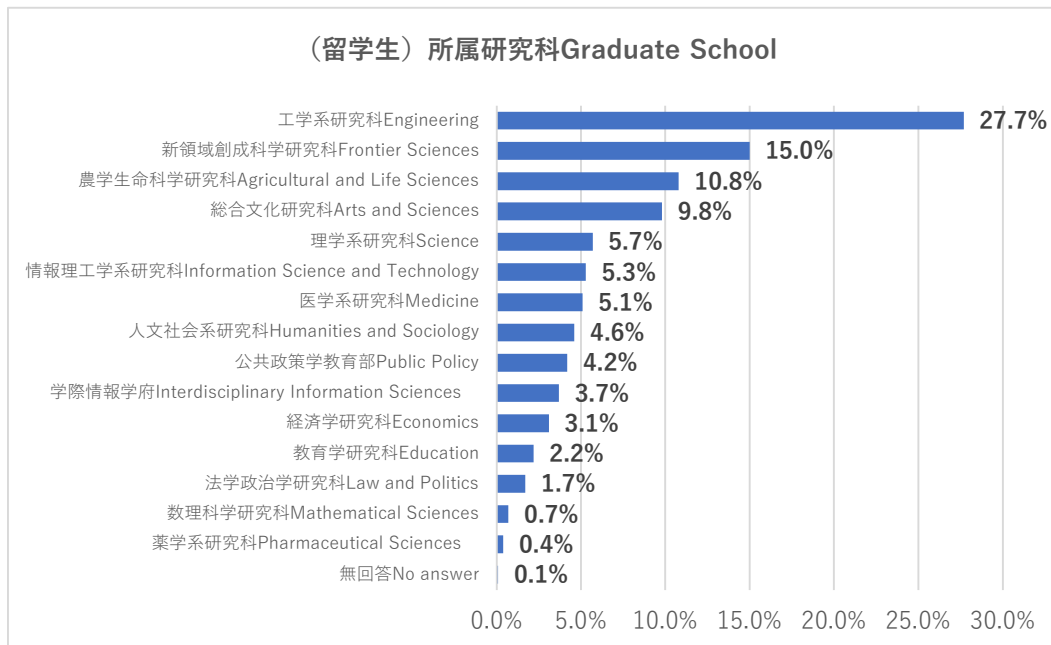
## 【大学院学生】

### 3. 所属研究科



研究科別の回答数は工学系研究科が最も多く、次いで、理学系研究科が多い。全学の構成比と大きくは異なっておらず、各研究科から均等に回答が得られている。

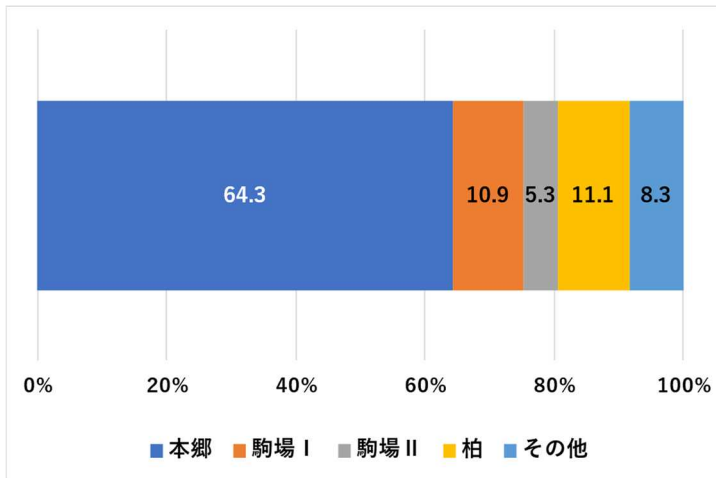
なお、今回調査から、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府については文系と理系を分けている。



留学生の回答者は、工学系（在籍者に占める比率 31.6%、回答者に占める比率 27.7%）、新領域（同 13.9%、同 15.0%）、農学生命科学（同 9.5%、同 10.8%）であり、その他も概ね在籍者の比率を反映していた。

## 【大学院学生】

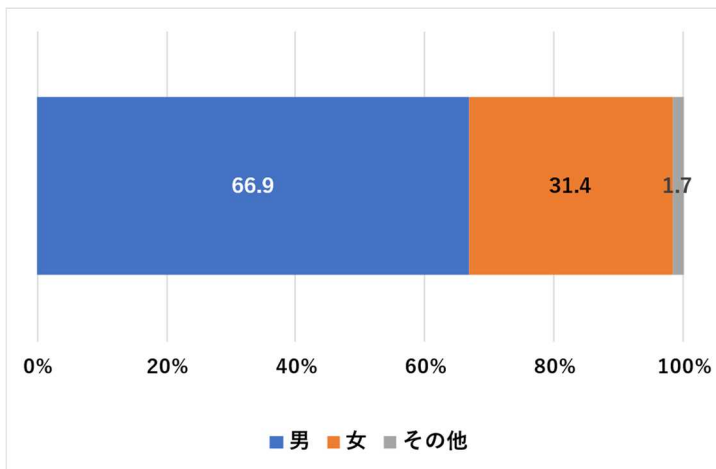
### 4. キャンパス



通っているキャンパスは「本郷」が過半数を占め、「柏」「駒場 I」と続く。2019 年度（第 69 回）調査（以下、「前回調査」という。）とほぼ同じである。

留学生の回答者は、「本郷」が 48.1%、駒場 I（8.3%）、駒場 II（6.9%）、柏（12.6%）、その他（3.7%）であり、回答時に入国しておらず、所属キャンパスが選択されていない学生が 20.5%であった。

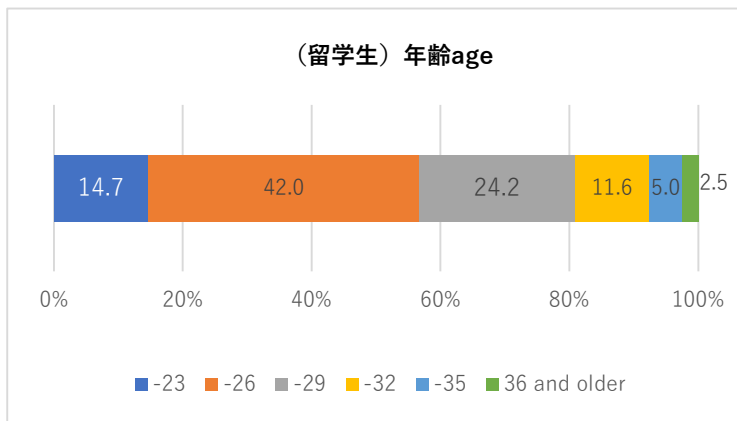
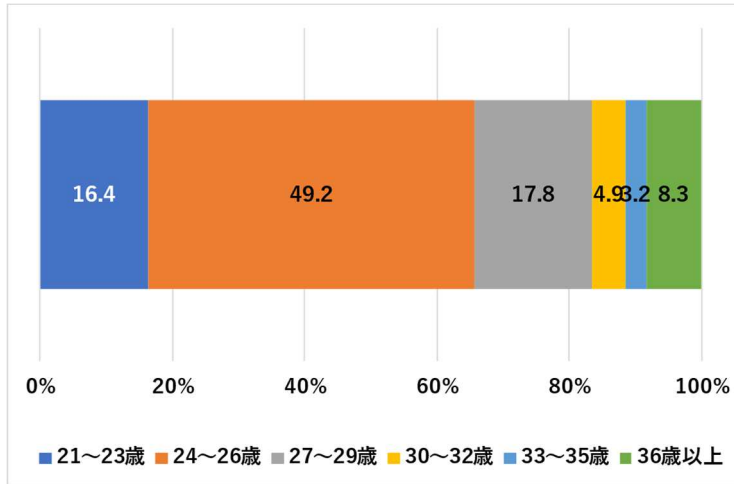
### 5. 性別



回答者の性別は男性が 66.9%、女性が 31.4%で、在籍者比率（男性 72.8%、女性 27.2%）と比較して、女性の回答率が高い。留学生は、男性（56.5%）、女性（42.2%）、その他・回答しない（1.2%）であり、在籍者比率（男性 59.1%、女性 40.9%）を概ね反映している。

## 【大学院学生】

### 6. 年齢

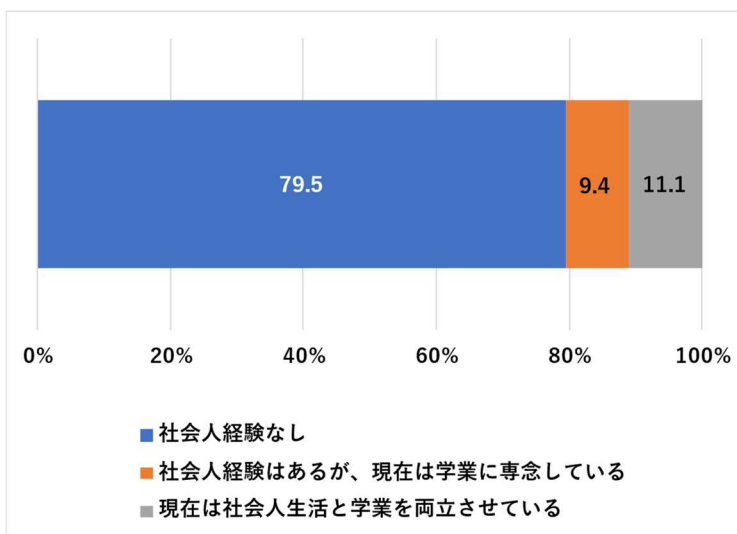


年齢は 20 代が 83.4%と過半数を占める。特に 24～26 歳は 49.2%と半数近くを占める。

留学生の年齢は 20 代が 80.9%、24～26 歳が 42.0%を占めるが、国内生と比較すると、30～35 歳の層の割合が高いのが特徴である。

平均 26.8 歳 (SD=3.52) であるが、出身地域による差がある。中国出身学生の年齢平均は日本人学生と比較的近いが、その他の地域出身者は、全体的に国内生よりも年齢が高い。

### 7. 社会人経験



8 割弱は社会人経験なしと回答している。一方、社会人生活と学業を両立させている者も 11.1%あった。

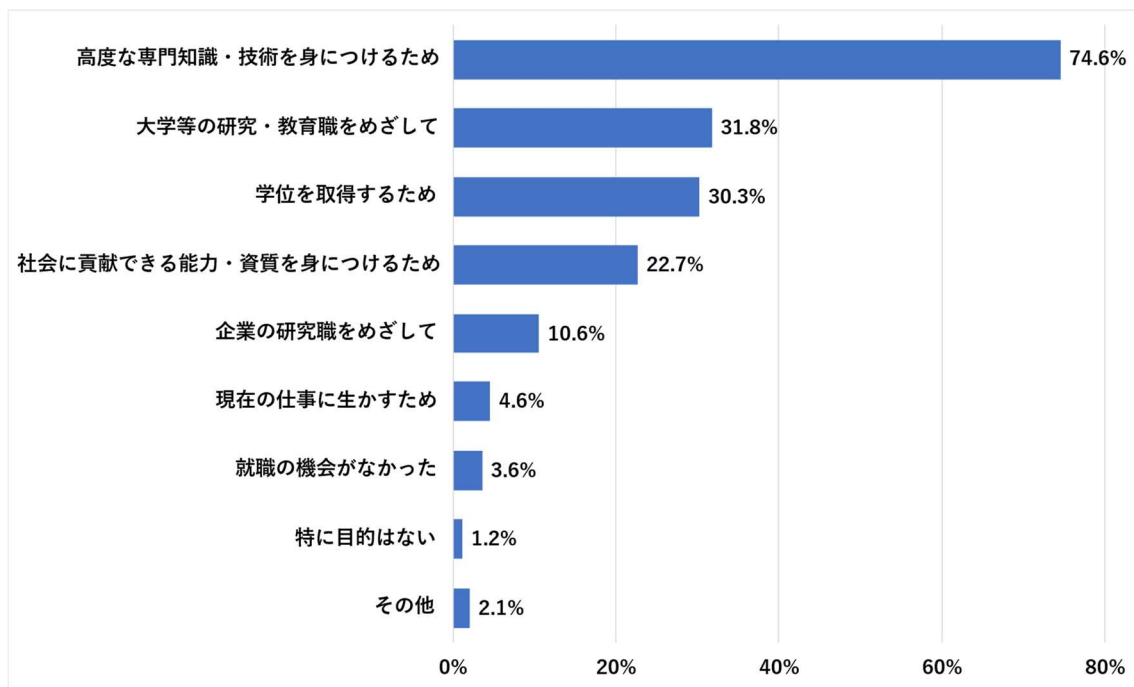
## 【大学院学生】

### Ⅱ. 大学院入学の目的

#### 8. 入学目的

- 大学院に入学した目的は「高度な専門知識・技術を身につけるため」が74.6%
- 「大学等の研究・教育職を目指して」は「学位を取得するため」を超えて第2位

8. 本学の大学院に入学した目的は、どれにあたりますか。（2つまで選んでください。）

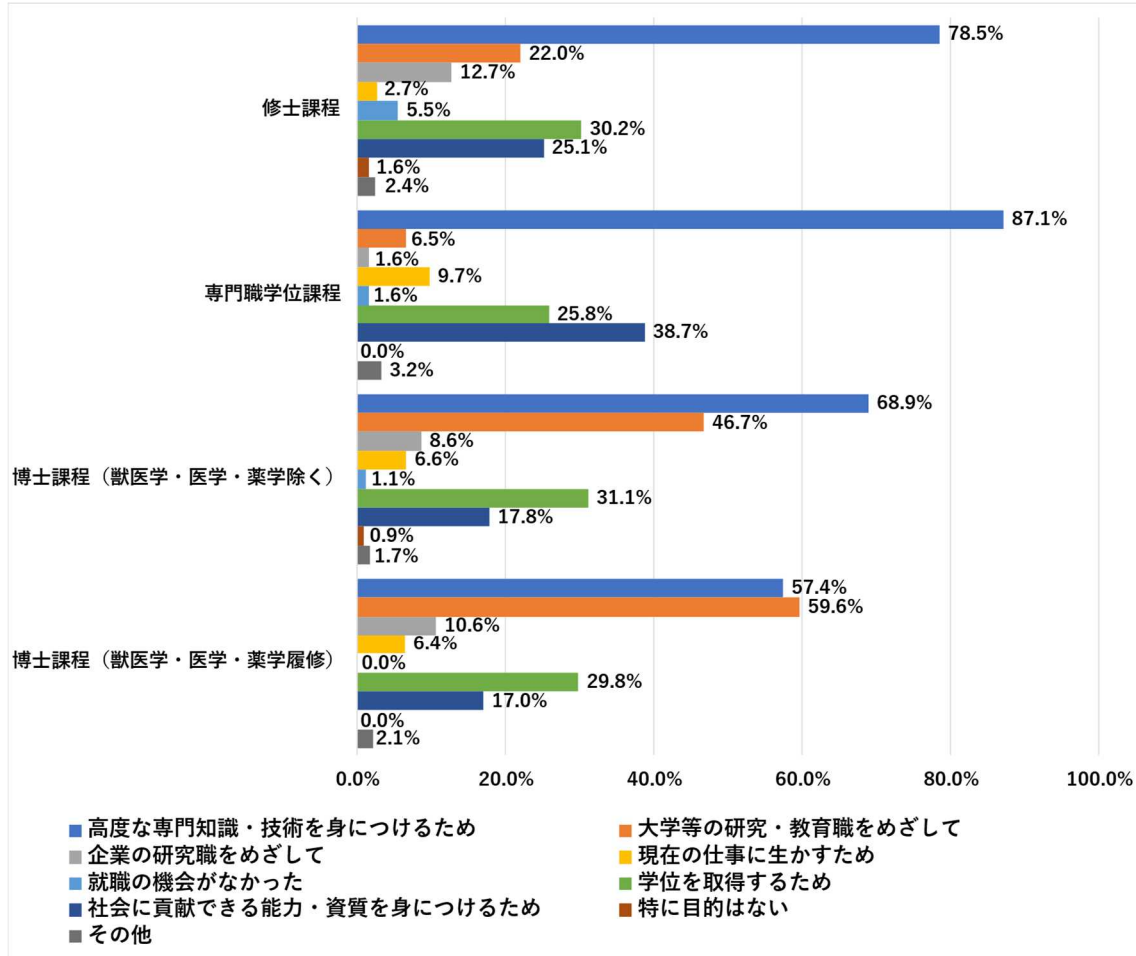


大学院入学の目的は1999年（第49回）調査から続けて「高度な専門知識・技術を身につけるため」が74.6%（前回調査74.1%）で最も多い。第2位の「大学等の研究・教育職を目指して」は31.8%（前回調査24.2%）で、前回調査より7.6%ポイント増加し、「学位を取得するため」との順位を逆転した。次いで、「学位を取得するため」が30.3%（前回調査29.8%）、「社会に貢献できる能力・資質を身につけるため」が22.7%（前回調査23.0%）である。



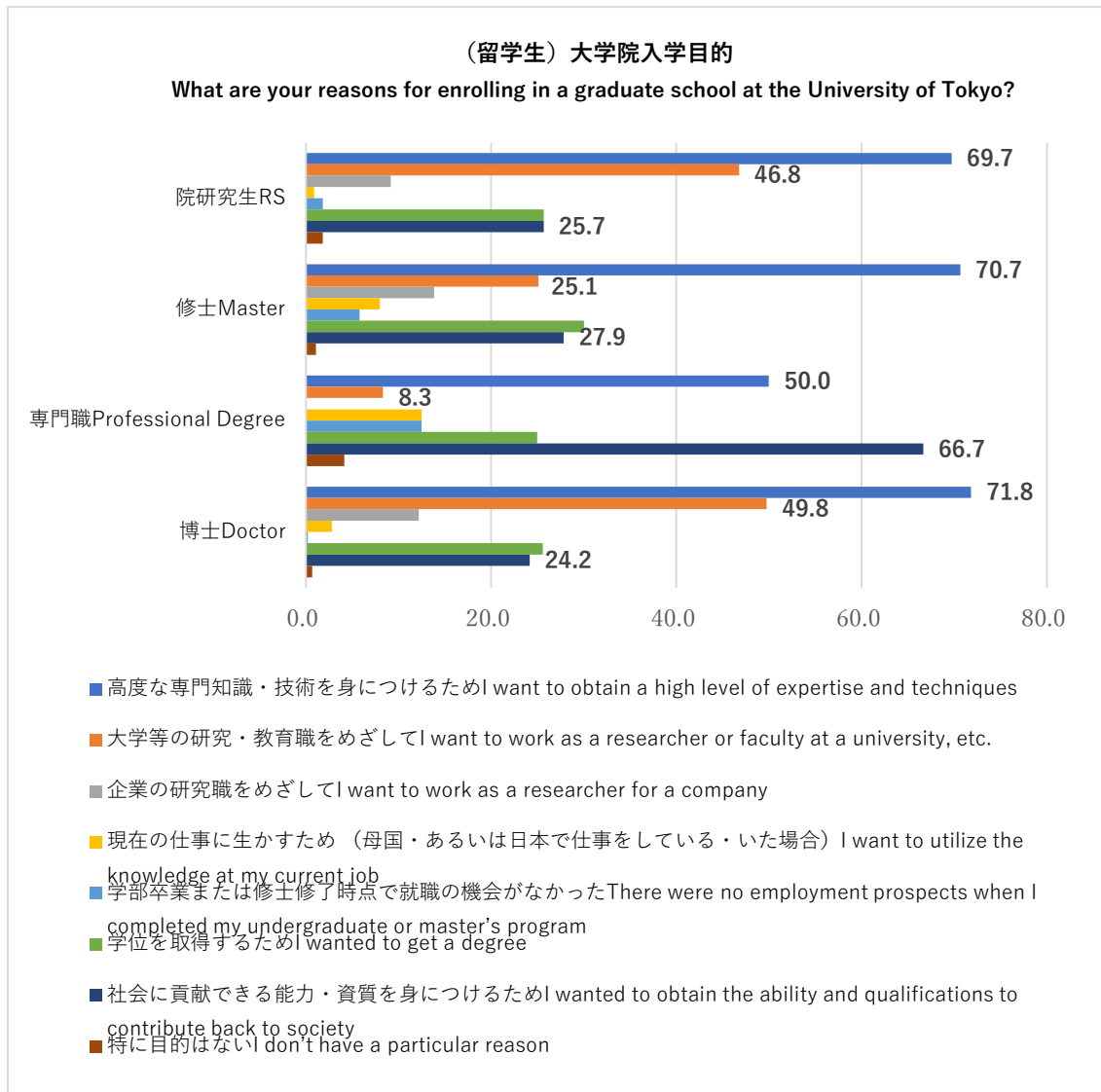
## 【大学院学生】

### 入学目的（課程別）



課程別でみると、「高度な専門知識・技術を身につけるため」が修士課程 78.5%（前回調査 77.7%）、専門職学位課程 87.1%（前回調査 80.0%）、博士課程（獣医学・医学・薬学除く）68.9%（前回調査 69.7%）、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）57.4%（前回調査 61.9%）と、いずれの課程においても過半数を超えているものの、課程によってその割合の差も大きい。その他、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）の「大学等の教育・研究職を目指して」（前回調査 26.2%、今回調査 59.6%）、「学位を取得するため」（前回調査 48.8%、今回調査 29.8%）において、前回調査との大きな差がみられる。

## 【大学院学生】



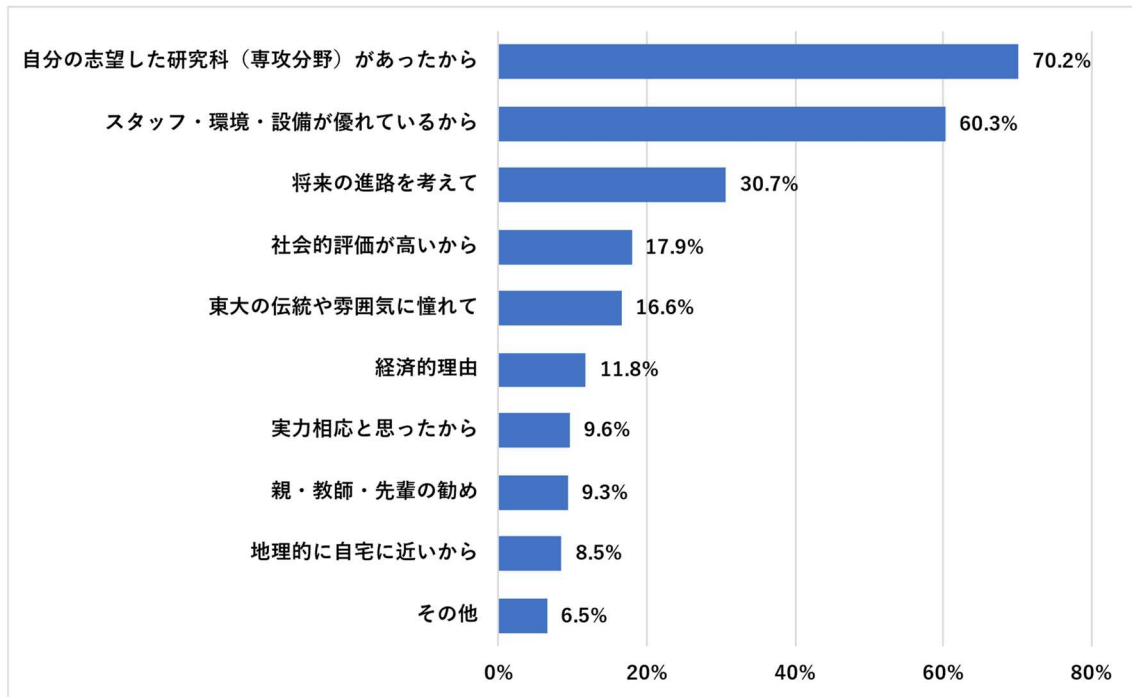
大学院留学生の大学院入学目的については、日本人学生と概ねの傾向は重なり、「高度な専門知識・技術を身につけるため」が7割前後を占めるが、専門職大学院のみ傾向が異なっており、「社会に貢献できる能力・資質を身につけるため」を選択した学生の割合が高い。

## 【大学院学生】

### 9. 入学理由

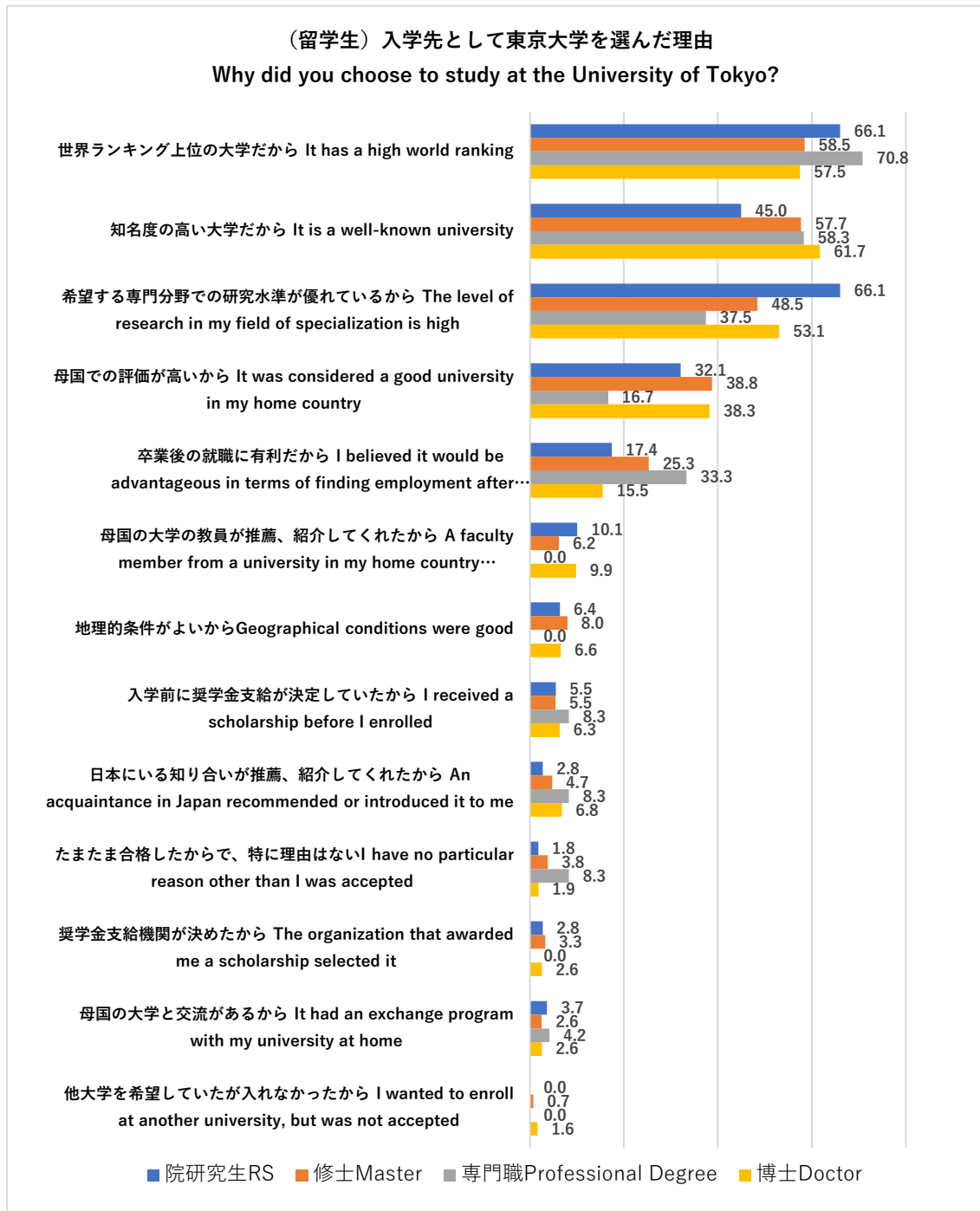
- 大学院に入学した理由は「自分の志望した研究科(専攻分野)があったから」が70.2%
- 前回調査より「経済的理由」と「実力相応と思ったから」の順位が逆転

9. 本学を選んだ理由は、どれにあたりますか。(3つまで選んでください。)



選択項目は「自分の志望した研究科(専攻分野)があったから」が70.2%と最も多く、前回調査(70.8%)とほぼ同じである。第2位の「スタッフ・環境・設備が優れているから」が60.3%で、前回調査(50.9%)より9.4%ポイント増加した。第3位の「将来の進路を考えて」が30.7%となり、前回調査(35.5%)より4.8%ポイント減少した。第1位から第3位の順位は2013年以降変化していない。なお、「経済的理由」と「実力相応と思ったから」の順位が逆転し、「親・教師・先輩の勧め」と「地理的に自宅に近いから」も今回調査でわずかな差で順位が逆転した。

## 【大学院学生】



本学選択理由は、日本人学生とは選択肢が異なるため、留学生版報告書で詳細は述べる。在学段階によって回答に若干相違はあるものの、「世界ランキング上位」と「知名度の高さ」は、いずれの在籍段階においても上位に位置している。

## 【大学院学生】

### 「Ⅱ.大学院入学の目的」の分析（まとめ）

大学院入学の目的自体は「高度な専門知識・技術を身につけるため」が1999年から変わらず、大多数が専門的な知識を得るために大学院への入学を検討していた。

一方、「大学等の研究・教育職を目指して」の割合が、特に博士課程（獣医学・医学・薬学履修）において、前回調査より33.4%ポイント増加し、「学位を取得するため」を超えて第2位の目的となった。そして、入学した理由は「自分の志望した研究科（専攻分野）があったから」、「スタッフ・環境・設備が優れているから」、「将来の進路を考えて」が上位層を占め、研究科や環境の充実度、そしてそうした環境で高度な専門知識を得られると考えていることが見て取れる。特に、「スタッフ・環境・設備が優れているから」の割合が前回調査より9.4%ポイント増加した。ソフト面とハード面双方が東京大学の魅力であることを示している。

大学院留学生の本学入学目的は、日本人学生同様に「高度な専門知識・技術を身に着けるため」が多く、また在学段階によって回答に若干相違はあるものの、本学を選択した理由は、「世界ランキング上位」と「知名度の高さ」が主要な選択理由になっている。

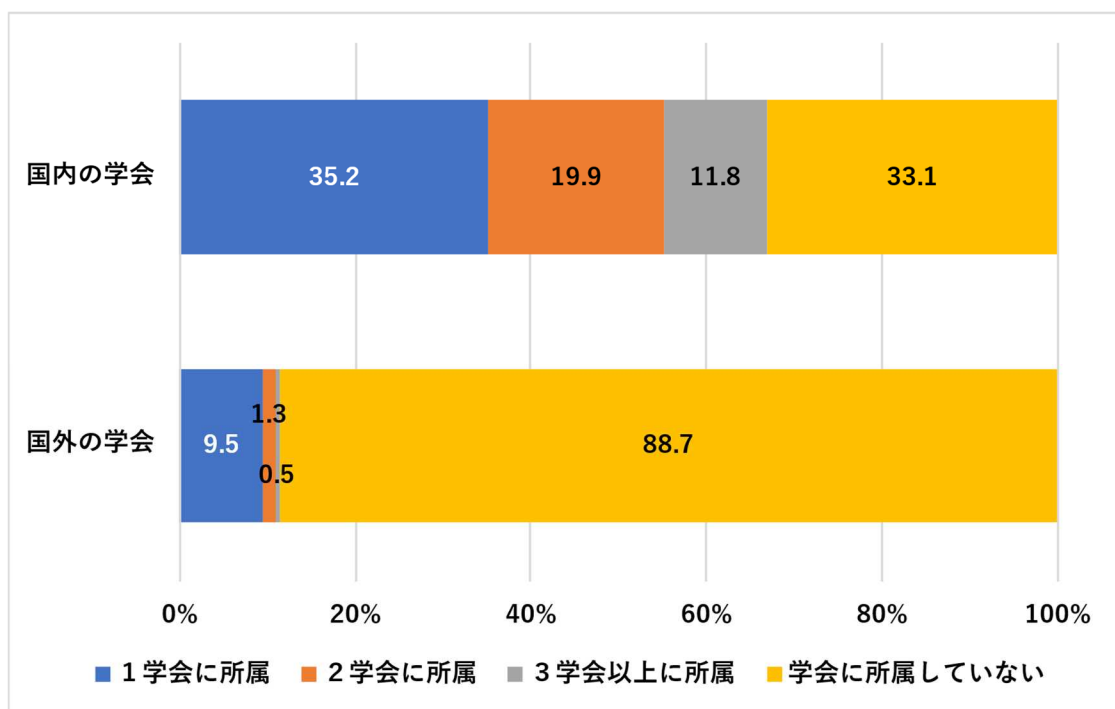
## 【大学院学生】

### Ⅲ.学会参加・研究活動

#### 10. 所属学会

- 国内の学会に所属している割合は 66.9%
- 国外の学会に所属している割合は 11.3%

10. 現在所属している日本国内・外の学会数はいくつですか。(1)国内と(2)国外のそれぞれ1～4のどれか1つを選んでください。



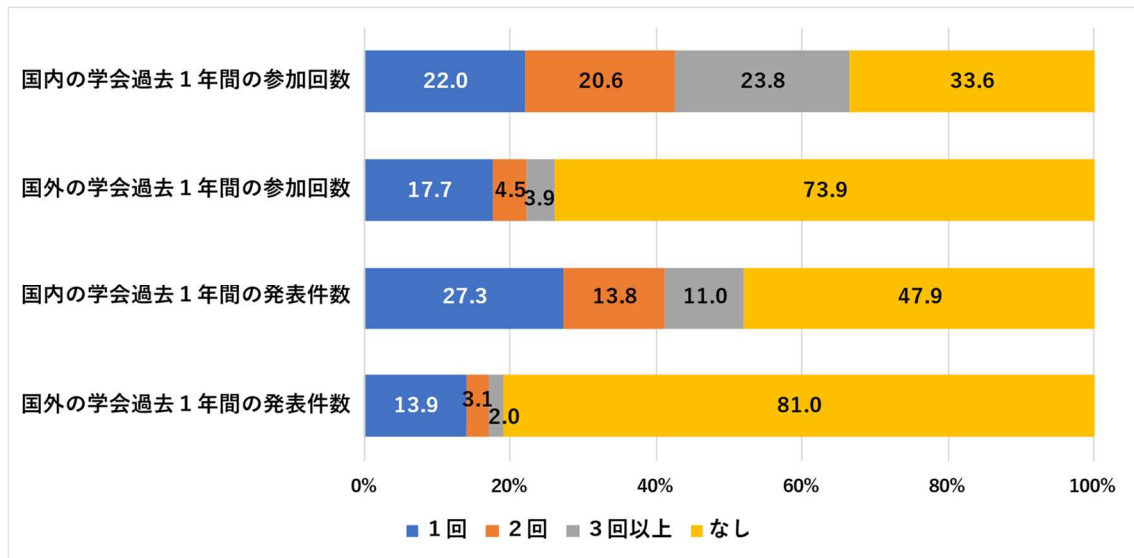
所属学会数は国内の学会は1学会以上所属している者は66.9%（前回64.8%）であったのに対し、国外の学会に1学会以上所属している者は11.3%（前回13.8%）と、55.6%ポイントの差がみられ、この差が前回調査よりも4.6%ポイント拡大した。

## 【大学院学生】

### 11. 学会参加・発表

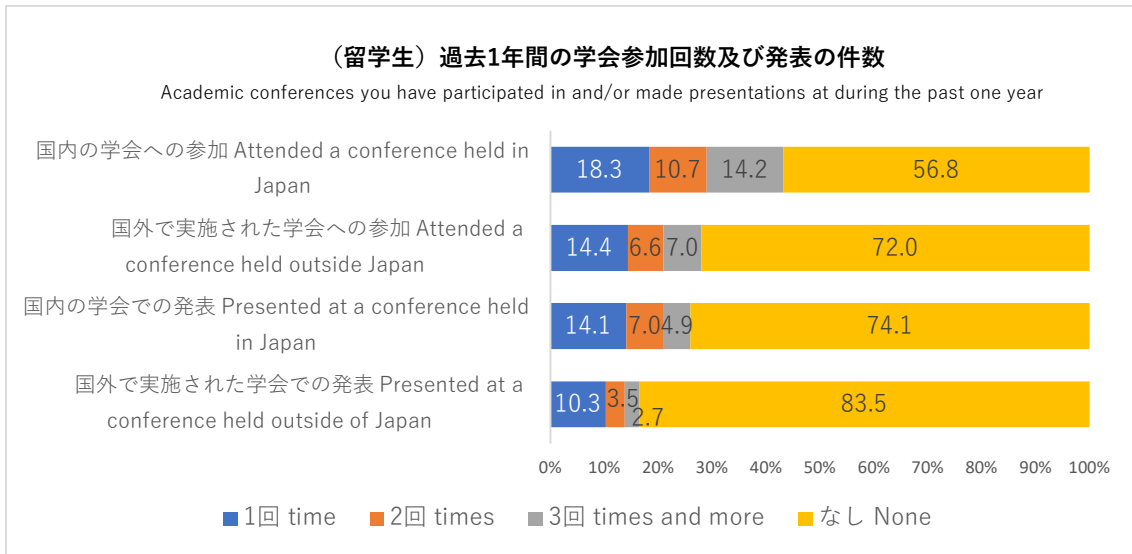
- 国内学会に「1回以上参加」66.4%、「1件以上発表」52.1%
- 国外学会に「1回以上参加」26.1%、「1件以上発表」19.0%

11. 過去1年間の学会参加回数及び発表の件数を回答してください。



過去1年間の学会参加および発表の回数を尋ねたところ、国内の学会に1回以上参加した割合は66.4%（前回70.7%）、1件以上発表した割合は52.1%（前回55.9%）であり、いずれも減少した。前回調査(2019年)と比べて、コロナ禍中には国内の学会が開催中止となることもあるため、参加と発表に影響を及ぼした可能性がある。国外の学会に関しては、1回以上参加した者は26.1%で前回の27.7%より若干減少した。コロナ禍中には学会がオンラインで開催されることもあるが、学会の参加回数に関しては、大きな変化はみられなかった。一方、国外の学会で1件以上発表した者は19.0%（前回25.1%）と少なかった。

## 【大学院学生】



留学生の学会参加状況は、国外で実施された学会に関しては国内生と大きな相違はないが、国内実施の学会への参加経験（56.8%）、発表経験（74.1%）のない学生が、留学生は多い。留学生の回答者には、研究生段階の学生が含まれていることと、未入国の学生がいること、さらには日本語力の問題が影響している可能性があるが、本項目は今年度初めて留学生版にも設定した項目であり、今後継続的に確認していく必要がある。

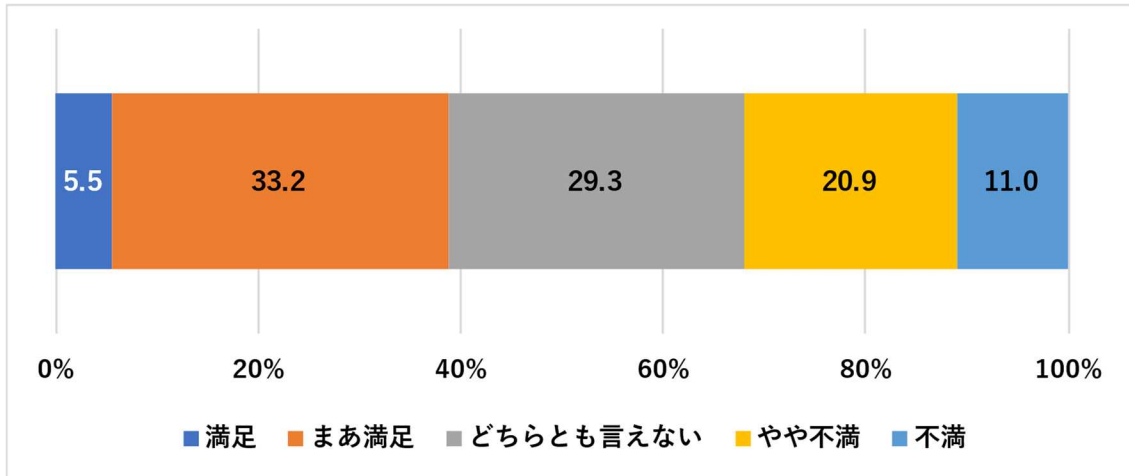


## 【大学院学生】

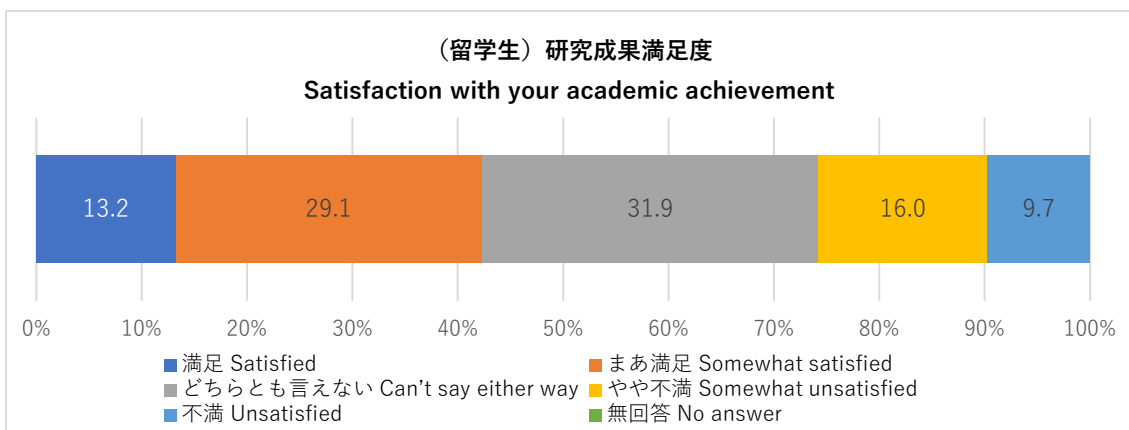
### 12. 研究成果満足度

- 研究成果「満足」38.7%、「不満」31.9%、「どちらともいえない」29.3%
- 長期的にみると、研究成果「不満」は減少傾向

12. あなたご自身のこれまでの研究成果についてどうお考えですか。



自身の研究成果への満足度を尋ねたところ「満足」「まあ満足」と回答した割合が38.7%、「どちらともいえない」と回答した割合が29.3%、「やや不満」「不満」と回答した割合が31.9%と、満足と回答した割合が若干多いものの、ほとんど同程度の分布となっている。不満と回答した者は前々回調査では35.0%、前回調査では32.4%となっており、割合自体は微減傾向にある。同様の設問のある調査が開始された2011年と比べると、「不満」「やや不満」が2011年には40.6%であるが、今回は31.9%と減っており、より長期的にみると研究成果に対する不満度は低下しているといえる。



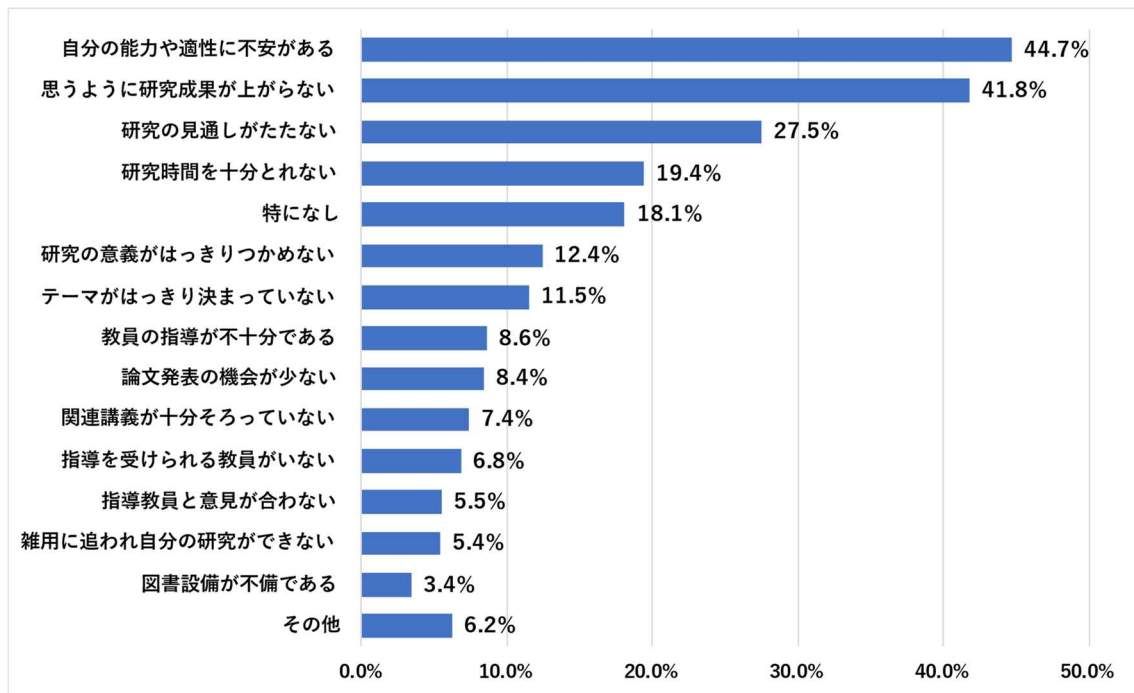
留学生の研究成果への満足度は、「満足」(13.2%)と回答した学生が日本人学生よりも多く、「不満」(9.7%)と回答した学生は少ない。全体的には満足度が、日本人学生よりも高い結果となった。

## 【大学院学生】

### 13. 研究活動に関する不満等

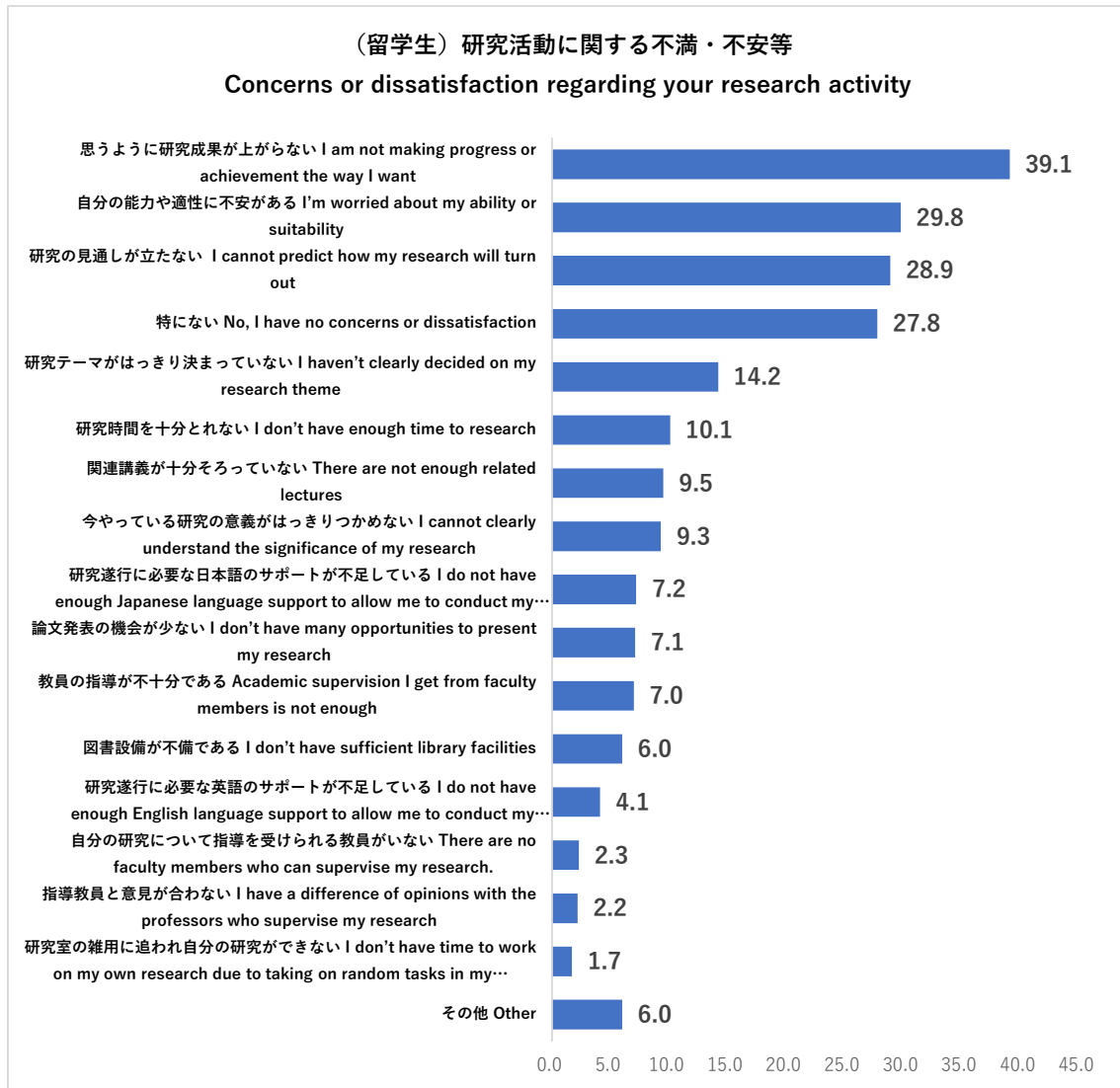
- 研究活動に対する不満のうち上位3項目は「自分の能力や適性に不安がある」、「思うように研究成果が上がらない」、「研究の見通しが立たない」

13 あなたの研究活動に関して、不満や不安はありますか。不満や不安がなければ1を選び、不満や不安があれば他の選択肢からいくつでも選んでください。



研究活動に対する不満や不安について複数回答可で尋ねたところ、「自分の能力や適性に不安がある」（前回調査 36.9%、今回調査 44.7%）が「思うように研究成果が上がらない」（前回調査 38.8%、今回調査 41.8%）を超えて第1位となった。次いで、「研究の見通しが立たない」が 27.5%（前回調査 22.4%）と続く。不満や不安がなく「特になし」と回答した者は 18.1%で、前回調査の 21.4%より 3.3%ポイント減少した。

## 【大学院学生】



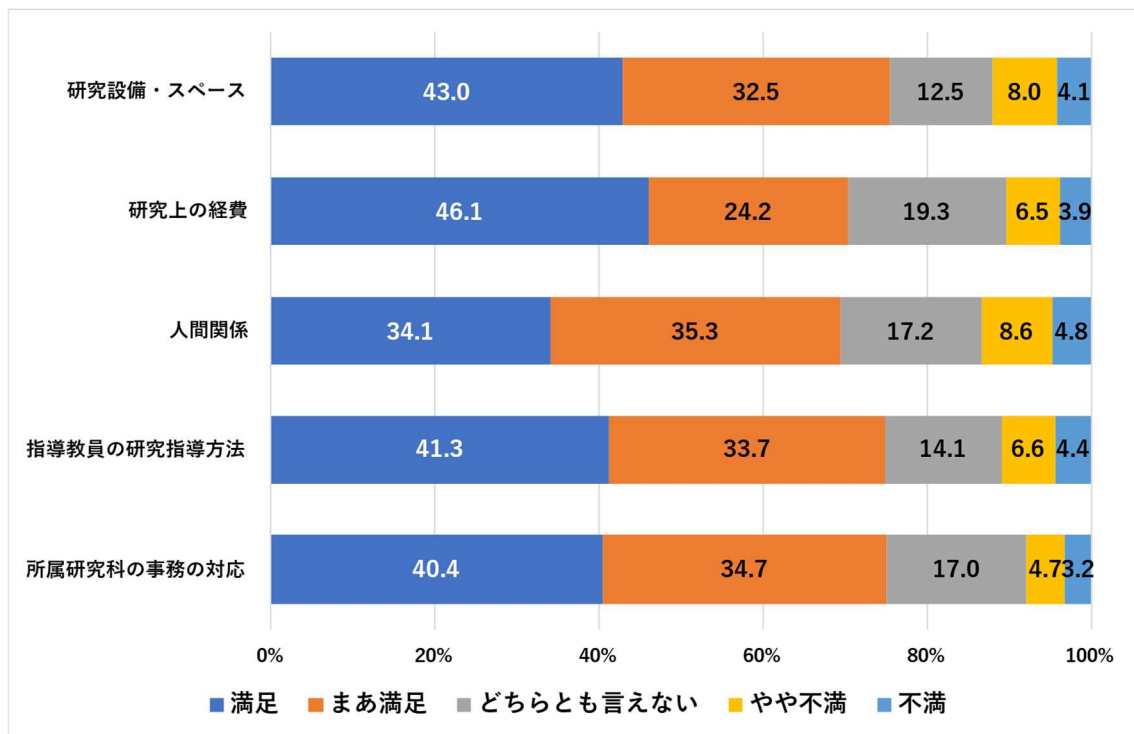
留学生の研究活動に関する不満・不安等として上位に選択されたのは、「思うように研究成果が上がらない」「自分の能力や適性に不安がある」「研究の見通しが立たない」であり、概ね日本人学生等の回答傾向と重なっている。

## 【大学院学生】

### 14. 研究室満足度

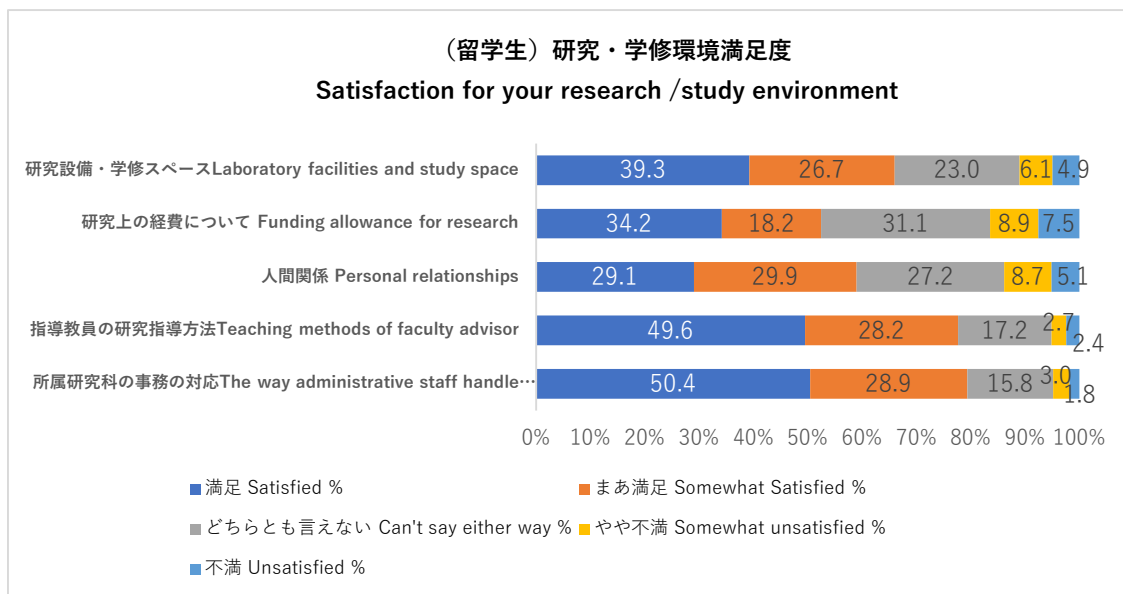
- 全体的にはいずれの項目でも7割程度が「満足」「まあ満足」と回答
- 研究科別の設備満足度で順位変化がみられる
- 「研究上の経費」に関して、文科系は満足度が低く、理科系は満足度が高い

14. 研究室での日常生活の中で、次の各項目を総合的に見て、満足感をどの程度持っていますか。



研究室の満足度について尋ねたところ、研究設備・スペース、研究上の経費、人間関係、指導教員の研究指導方法、所属研究科の事務の対応いずれの項目に関しても、7割程度満足していると回答していた。概ね、前回調査より満足度の向上がみられる。

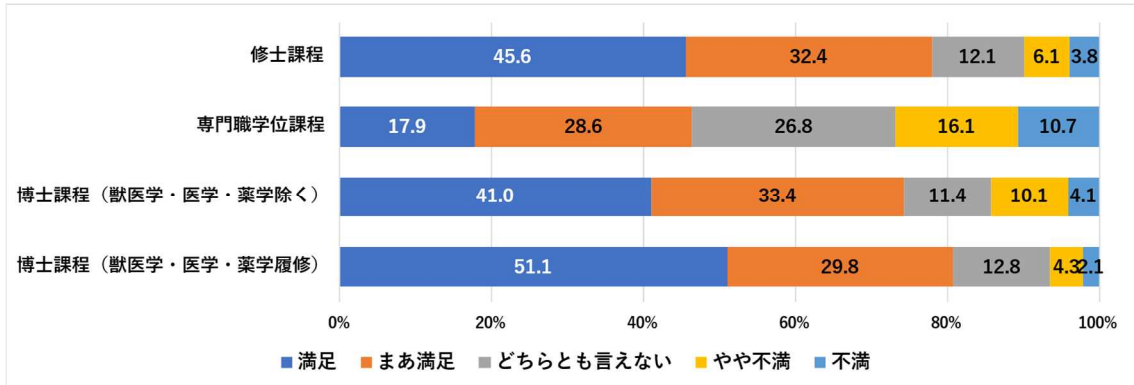
## 【大学院学生】



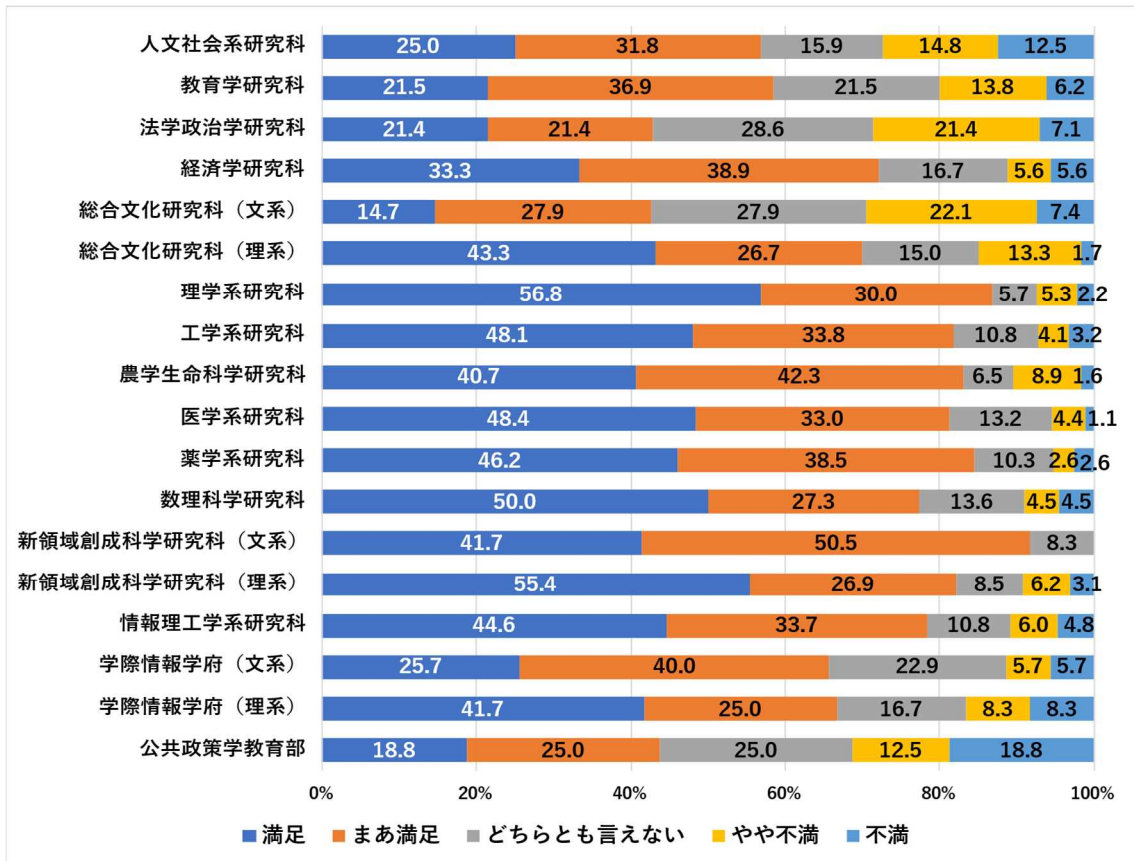
留学生が、日本人学生と同等か、それ以上満足している項目は、「研究科事務対応」と「指導教員の研究指導方法」であり、いずれも半数程度が「満足」と回答している。一方、「研究設備・学習スペース」、「研究上の経費」、「人間関係」については、留学生の方が、「満足」と回答した学生が少ない。

# 【大学院学生】

研究設備満足度（課程別）



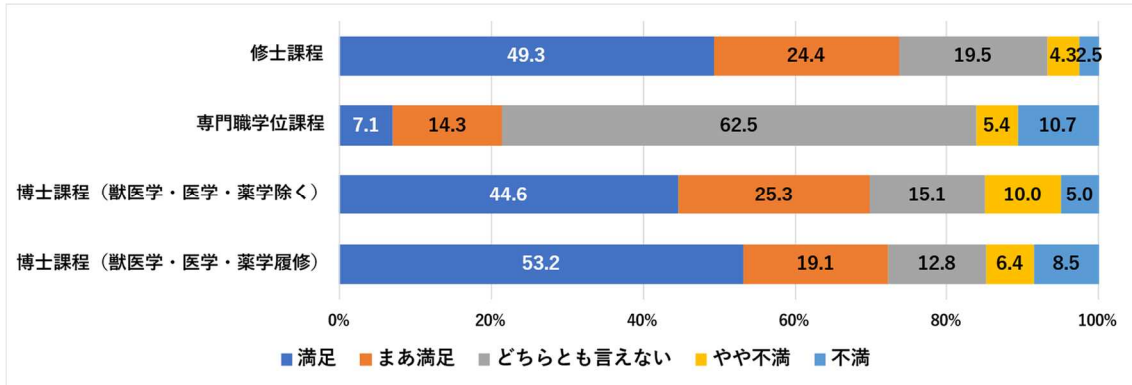
研究設備満足度（研究科別）



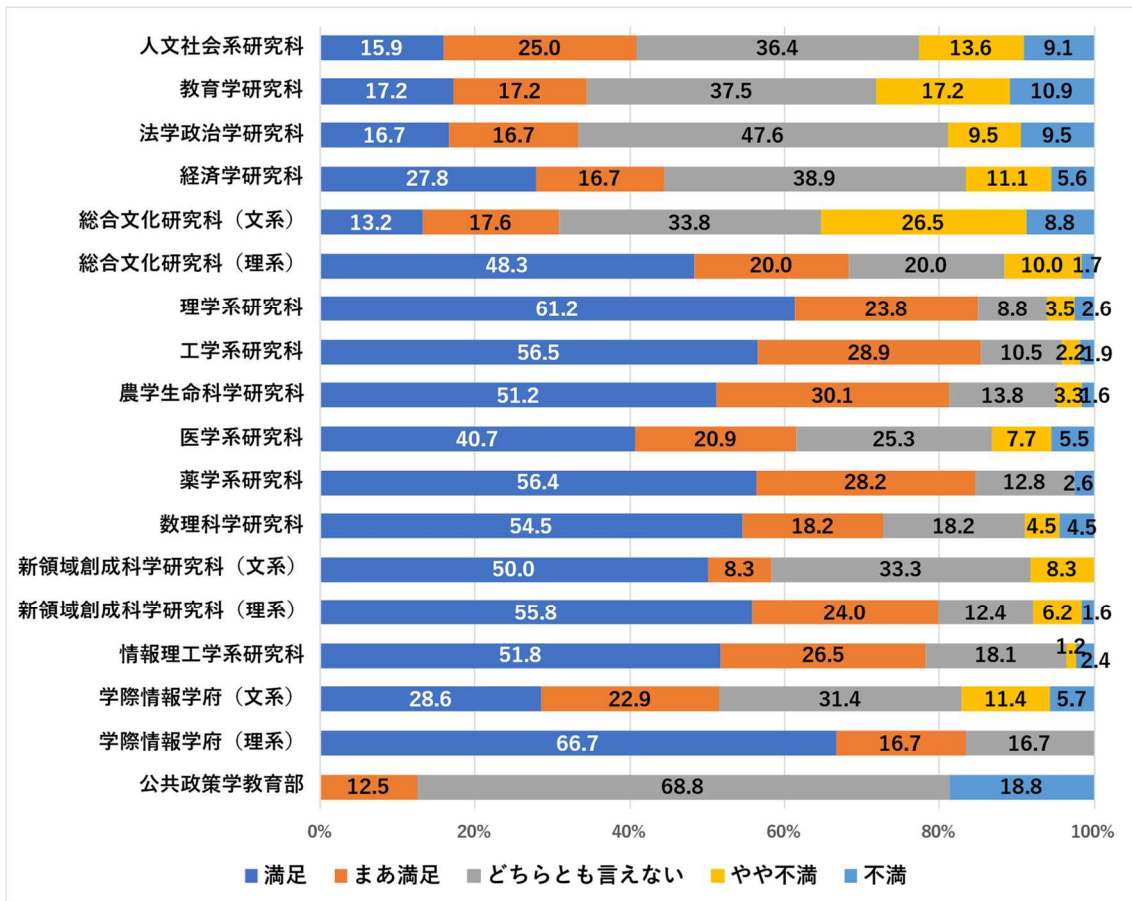
研究科別に研究設備の満足度をみると、新領域創成科学研究科(文系)が 92.2%で最も満足度が高く、次いで、理学系研究科の 86.8%、薬学系研究科の 84.7%、農学生命科学研究科の 83.0%と続く。この順位は前回調査(数理科学研究科 100%、情報理工学系研究科 88.9%、新領域創成科学研究科 83.7%、理学系研究科 83.6%)と大きく異なっている。一方、最も不満度が高かった研究科は公共政策学教育部の 31.3%であり、総合文化研究科(文系)の 29.5%、法学政治学研究科 28.5%と続く。押し並べて、文科系の研究科の方が理科系の研究科よりも不満度が高く、満足度が低い傾向が見て取れる。

## 【大学院学生】

研究上の経費の満足度（課程別）



研究上の経費の満足度（研究科別）



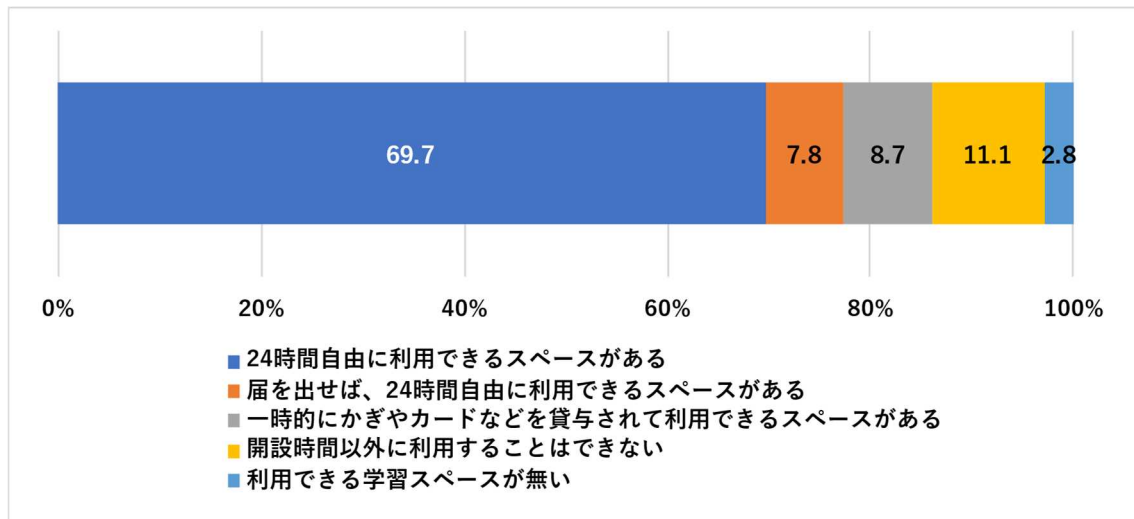
研究科別に研究上の経費の満足度をみると、最も満足度が高かった研究科は工学系研究科 85.4%であり、理学系研究科の 85.0%、薬学系研究科の 84.6%と続く。公共政策学教育部では「どちらとも言えない」の割合が 68.8%と高い。最も不満度が高かった研究科は総合文化研究科(文系)35.3%であり、教育学研究科の 28.1%、人文社会系研究科の 22.7%と続く。研究設備満足度と同様に文科系の研究科の不満足度が高く、理科系の研究科の満足度が高い傾向が確認された。

## 【大学院学生】

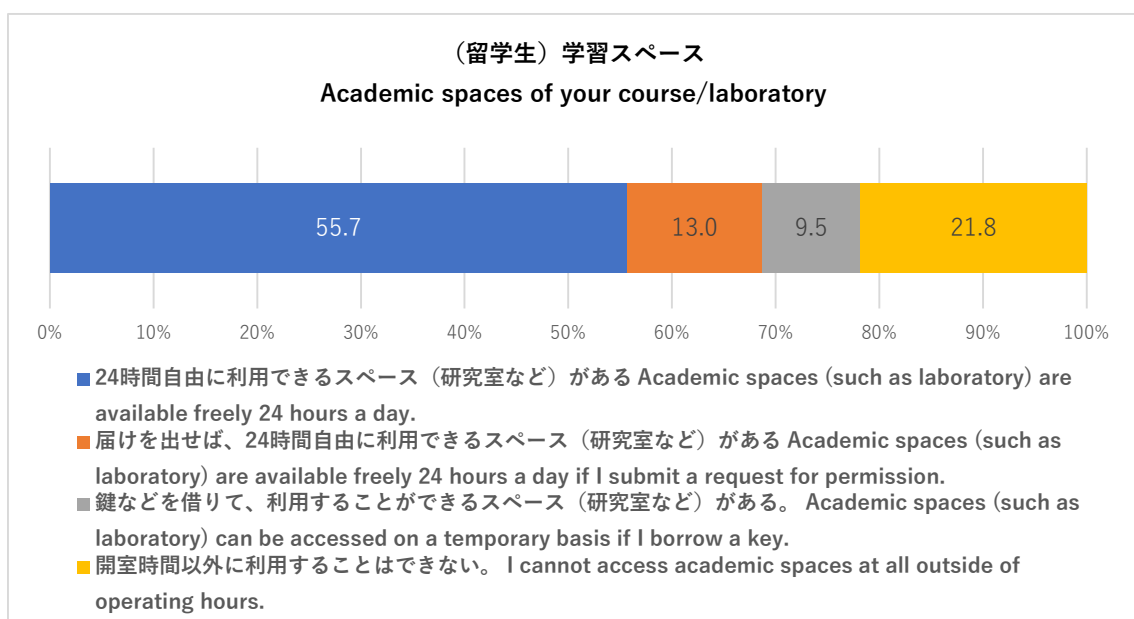
### 15. 研究室スペース

- 69.7%が「24時間自由に利用できるスペースがある」、前回調査より減少

15. あなたの所属している研究室（実験室を含む）や学習スペースの利用について、次の中からどれか1つ選んでください。



研究スペースや学習スペースについて尋ねたところ、「24時間自由に利用できるスペースがある」が69.7%（前回73.6%）で最も多い。「開設時間以外に利用することはできない」「利用できる学習スペースがない」が計13.9%（前回11.1%）であった。コロナ禍の影響で、研究・学習スペースの利用人数、時間が制限されることがあり、24時間自由に利用できるスペースの割合が減少したことが要因の一つである可能性がある。





## 【大学院学生】

留学生版は「利用できる学習スペースがない」という選択肢がなく、「開室時間以外に利用することはできない」に「スペースがない」も含まれていると考えられる。「24 時間自由に利用できるスペースがある」（55.7%）や、その他、条件付きで利用できる場所とあわせても、スペースのない学生の割合が国内生よりも多い。

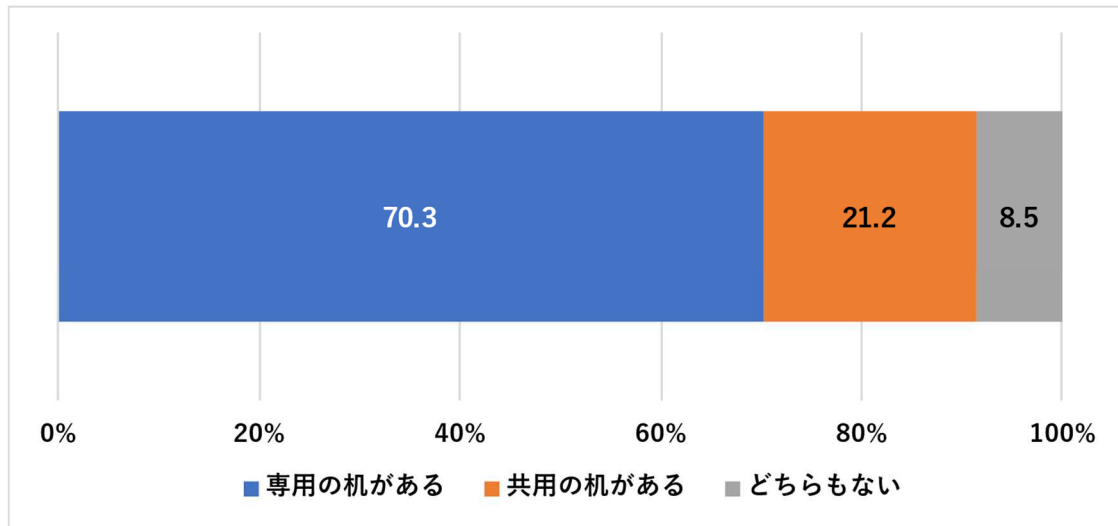
留学生の在籍者の分野・専攻等による偏りや、対象者に研究生が含まれていることの影響などを踏まえ、検討が必要である。

## 【大学院学生】

### 16. 研究室机

- 70.3%は研究室に「専用の机がある」

16. 研究室に、あなたの専用又は共用の机はありますか。



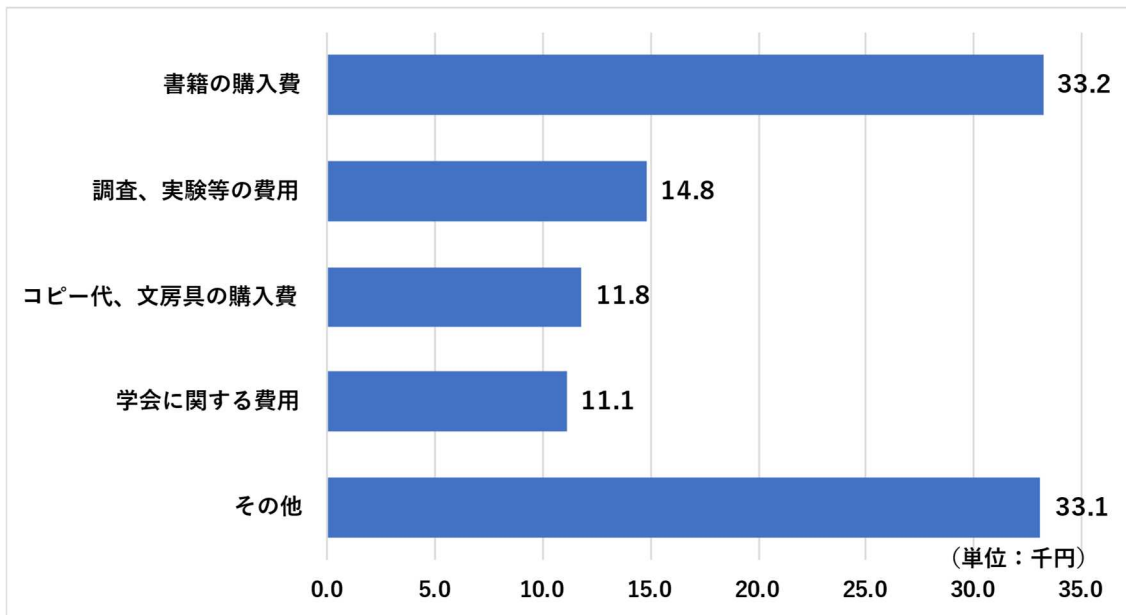
「研究室に、あなたの専用又は共用の机はありますか」と尋ねたところ、「専用の机がある」が70.3%（前回78.8%）、「共用の机がある」が21.2%（前回16.2%）、「どちらもない」が8.5%（前回5.0%）であった。

## 【大学院学生】

### 17. 研究費自己負担額

- 研究のために自己負担している金額は総計 104,000 円で、前回より 43,700 円増加
- 理科系よりも文科系で書籍の購入費・コピー代、文房具の購入費の金額が高い傾向

17. あなたの研究にあなた自身が負担しているお金は過去 1 年間でどれくらいですか。



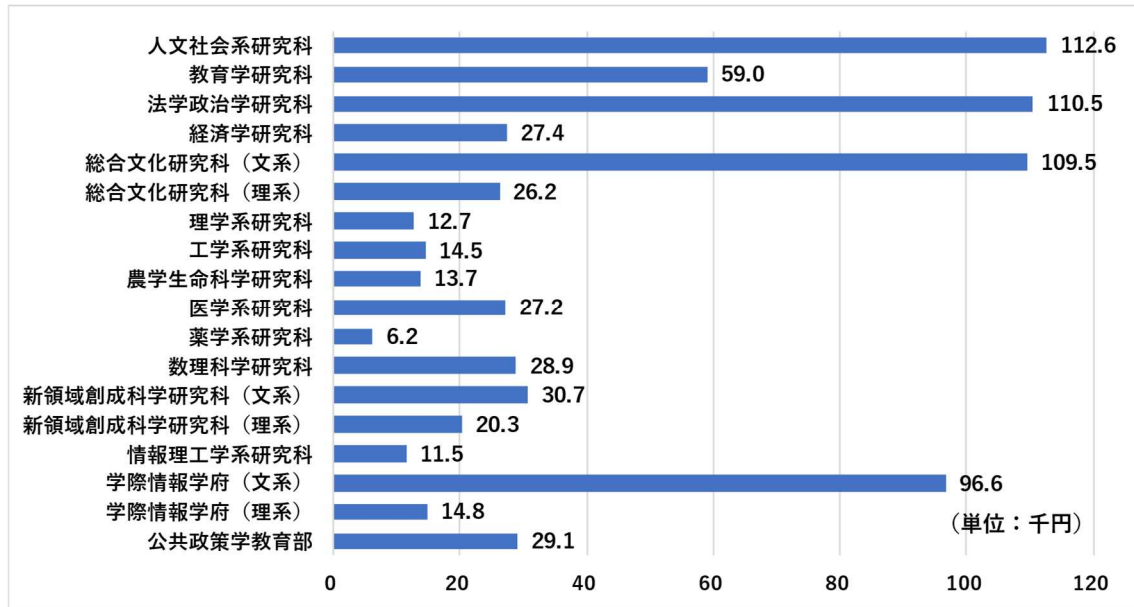
「あなたの研究にあなた自身が負担しているお金は過去 1 年間でどれくらいですか」という質問に対して、各品目の合算値は 104,000 円であり、前回の 60,300 円より 43,700 円も増加した。品目毎にみると、書籍購入費が 33,200 円であり、前回調査の 22,500 円より 10,700 円増加した。調査・実験等の費用も 14,800 円で前回の 7,300 円と比べて 7,500 円増加した。コピー代、文房具の購入費は 11,800 円と、前回調査の 5,100 円と比べて 6,700 円増加した。学会に関する費用は 11,100 円で前回調査の 19,200 円より減少した。これは国内学会参加数の減少と合致している。その他は 33,100 円であり、前回の 6,200 円と比べて 26,900 円も増加した。

前回調査までは減少傾向であった研究費の自己負担額は、今回調査で大きく増加した。それはコロナ禍で通学が難しくなり、図書館の利用頻度が減少し、コピー機や文房具が使える研究室に通う頻度も減少したことが原因である可能性がある。一方で減少となった学会に関する費用については、コロナ禍により開催方式がオンラインに変わったことが原因の一つと推測される。

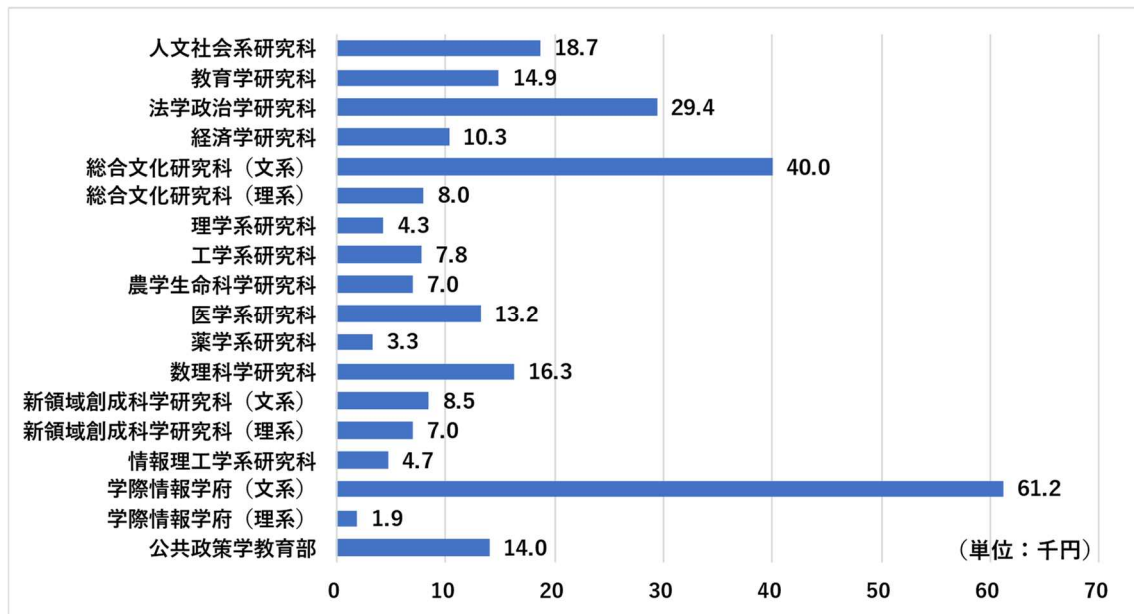
なお、回答方法について、これまでの調査では金額を記入する形であったが、今回調査では金額区分から選ぶ形としている。

## 【大学院学生】

自己負担分の書籍購入費（研究科別）



自己負担分のコピー代、文房具の購入費(研究科別)



研究科別の自己負担分の書籍の購入費をまとめたところ、人文社会系研究科が112,600円と最も多く、法学政治学研究科の110,500円、総合文化研究科(文系)の109,500円と続く。理科系の研究科よりも文科系の研究科で自己負担分の書籍の購入費が高いことがみられるうえに、その金額の増加も目立っている。

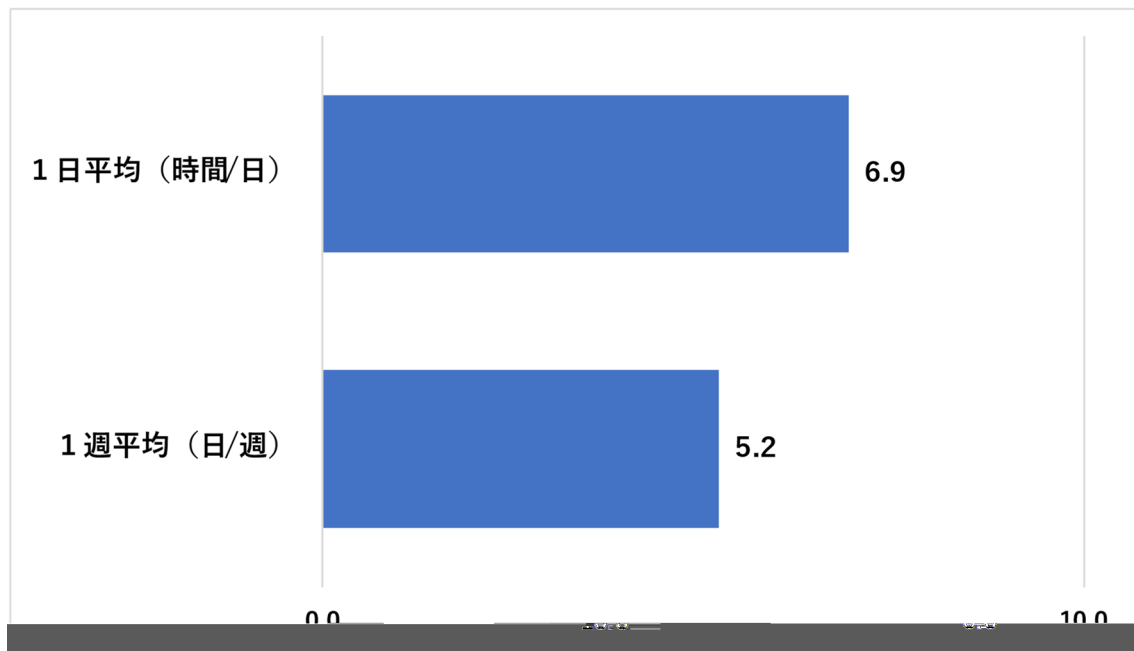
自己負担分のコピー代、文房具の購入費については、学際情報学府(文系)が61,200円と最も多く、総合文化研究科(文系)の40,000円、法学政治学研究科の29,400円と続く。コピー代、文房具についても、理科系の研究科より文科系の研究科で自己負担分の購入費が高い傾向にある。

## 【大学院学生】

### 18. 研究平均時間

- 研究時間は1日あたり6.9時間、1週間あたり5.2日

18. あなたは、どのくらい研究に従事していますか。（自宅等での作業時間も含む）



研究時間は1日あたり6.9時間（修士課程6.5時間、専門職学位課程5.0時間、博士課程7.6時間）、1週間あたり5.2日（修士課程5.1日、専門職学位課程4.9日、博士課程5.4日）であった。1週間の研究時間に換算すると35.9時間となった。前回調査では1日あたり6.8時間、1週間あたり38.2時間であり、前回調査と比べて微減となっている。

なお、回答方法について、これまでの調査では時間数を記入する形であったが、今回調査では時間数、日数を選ぶ形としている。

留学生は、一日の平均の研究時間は6.3時間（SD=2.86）であり、在籍段階別にみると、研究生5.2時間（SD=2.76）、修士課程5.7（SD=2.79）、専門職学位5.1時間（SD=3.01）、博士7.5時間（SD=2.55）であった。特に博士課程の学生の研究時間が長い傾向は、日本人学生・留学生同様にみられる。

## 【大学院学生】

### 「Ⅲ.学会参加・研究活動」の分析（まとめ）

学会参加・研究活動の分析として、学会所属・発表状況、研究室の状況、研究時間などを調査した。大学院生の調査はコロナ禍以降初めてであるため、大きな変化がみられるかと思われたが、学会の参加回数に関してはわずかな変化に留まった。一方で研究に対する学生の金銭的負担は今回大きく増加し、通学頻度の減少による学内施設設備の利用度低下が要因である可能性がある。そして、理科系よりも文科系で自己負担の書籍購入費が高い傾向は依然としてみられるうえ、コピー代、文房具の購入費についても同じである。

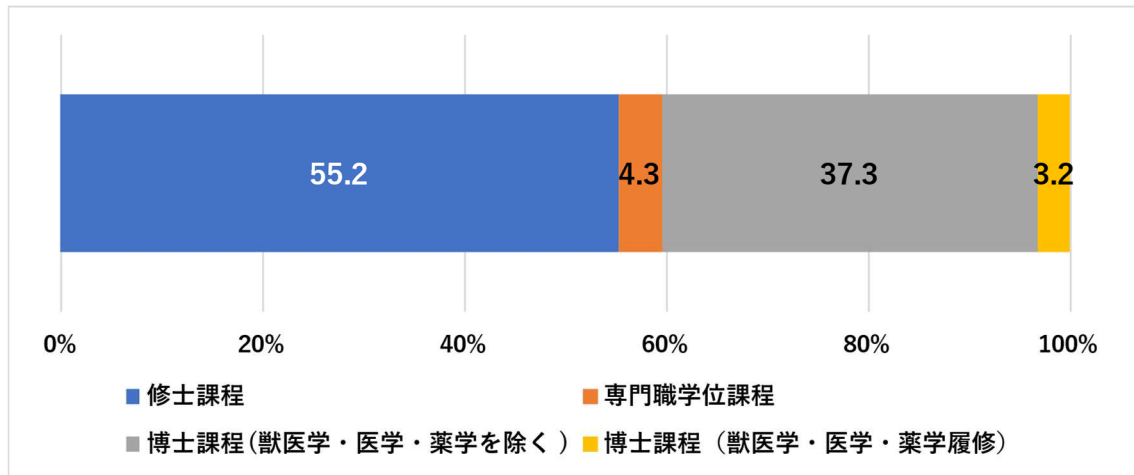
留学生の学会参加は、入国できていない学生が多い時期に調査が実施されたこともあり、国内学会の参加経験が少ないことが一つの特徴としてみられた。また一日の研究時間は、特に博士課程学生において長いですが、研究活動に関する満足度は国内生と比べても高い。ただし研究環境や研究費、研究室内の人間関係等には、不満を感じている留学生もいる。

## 【大学院学生】

### IV. 就職

#### 19. 課程（設問 1 のグラフを再掲）

19. あなたの課程を選んでください。



回答者は、修士課程が 55.2%、専門職学位課程が 4.3%、博士課程（獣医学・医学・薬学を含む）が 40.5%となっている。全学の構成と比べて、修士課程の回答者がやや多い。

## 【大学院学生】

### 20. 修了後の進路予定（修士課程）

- 6割以上の回答者は修了後の進路が決まった

20. 修士課程修了後の進路は決まりましたか。



修士課程の中で、6割以上の回答者は修了後の進路が決まった。

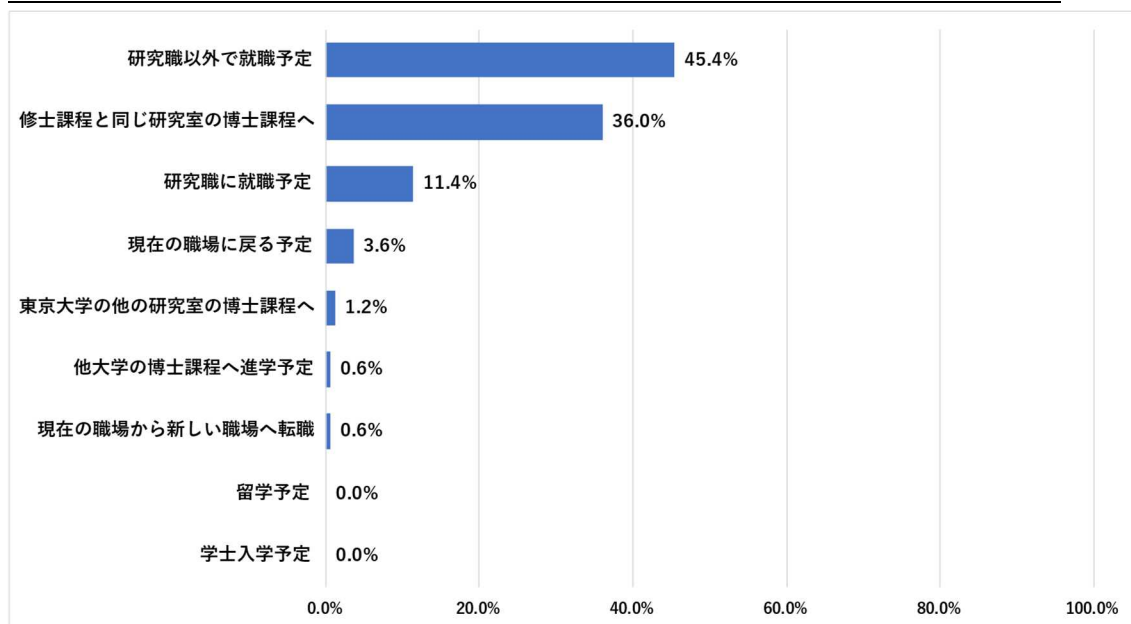


## 【大学院学生】

### 21. 修了後の決定進路（修士課程）

- 修士課程修了後の決定進路は「研究職以外で就職予定」が最も多いが、45.4%で半数未満

21. 修士課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



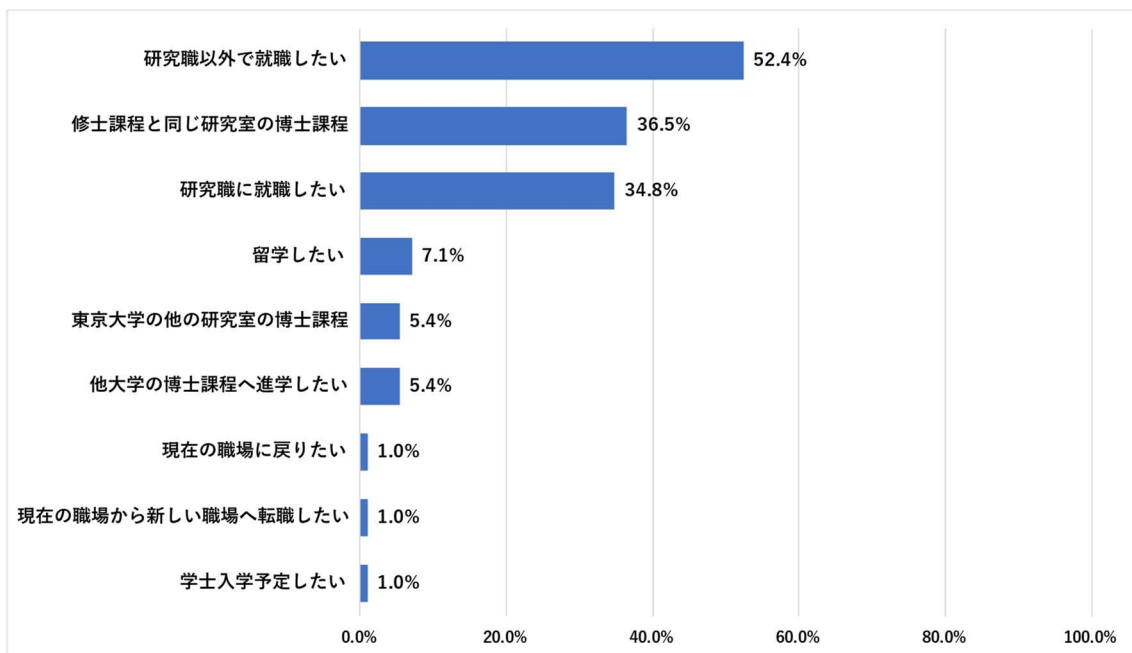
修士課程修了後の決定進路は「研究職以外で就職予定」が45.4%で最も多く、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」の36.0%と「研究職に就職予定」の11.4%と続く。

## 【大学院学生】

### 22. 修了後の希望進路（修士課程）

- 修士課程修了後の進路希望の上位3項目は「研究職以外で就職したい」、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」、「研究職に就職したい」
- 「研究職以外で就職したい」を回答した者は過半数

22. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



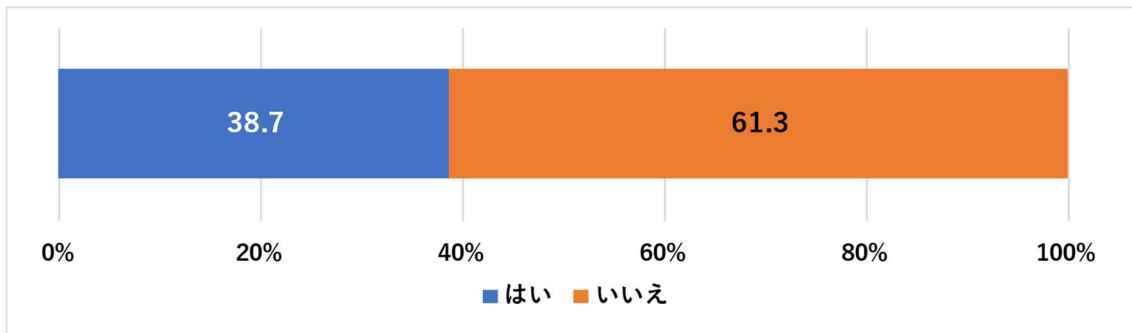
修士課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「研究職以外で就職したい」が52.4%(前回55.2%)と最も多く、「修士課程と同じ研究室の博士課程へ」の36.5%(前回30.1%)と「研究職に就職したい」の34.8%(前回32.5%)と続く。前回調査と比べて、「修士課程と同じ研究室の博士課程」と「研究職に就職したい」の順位が逆転した。この結果は、修士課程修了後の決定進路の順位と同じである。

## 【大学院学生】

### 23. 修了後の進路予定（専門職学位課程）

- 6割以上の回答者は修了後の進路が決まっていない

23.専門職学位課程修了後の進路は決まりましたか。



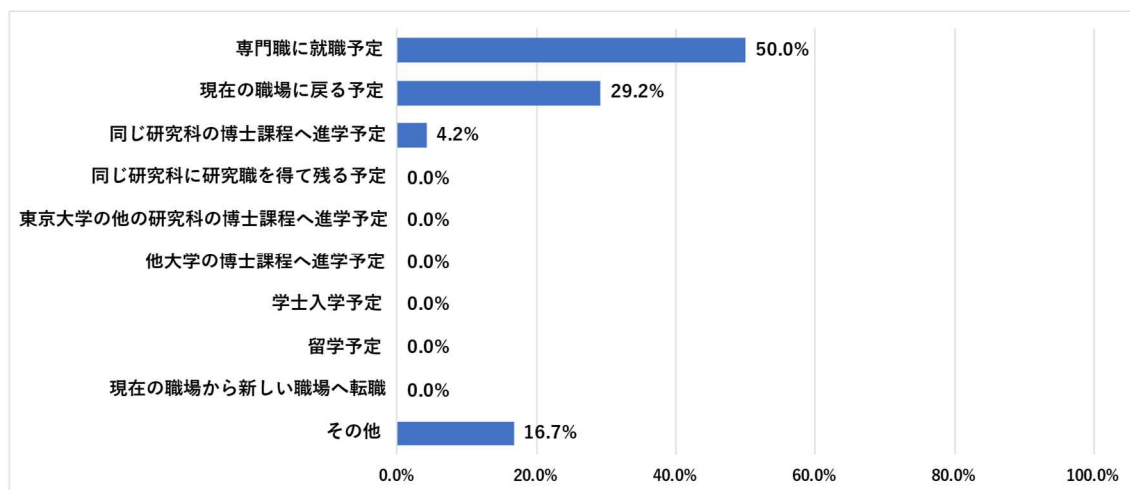
専門職学位課程の中で、6割以上の回答者は修了後の進路が決まっていない。修士課程修了予定者と逆の結果になっている。

## 【大学院学生】

### 24. 修了後の決定進路（専門職学位課程）

- 専門職学位課程修了後の決定進路は「専門職に就職予定」が5割で最も多い

24. 専門職学位課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



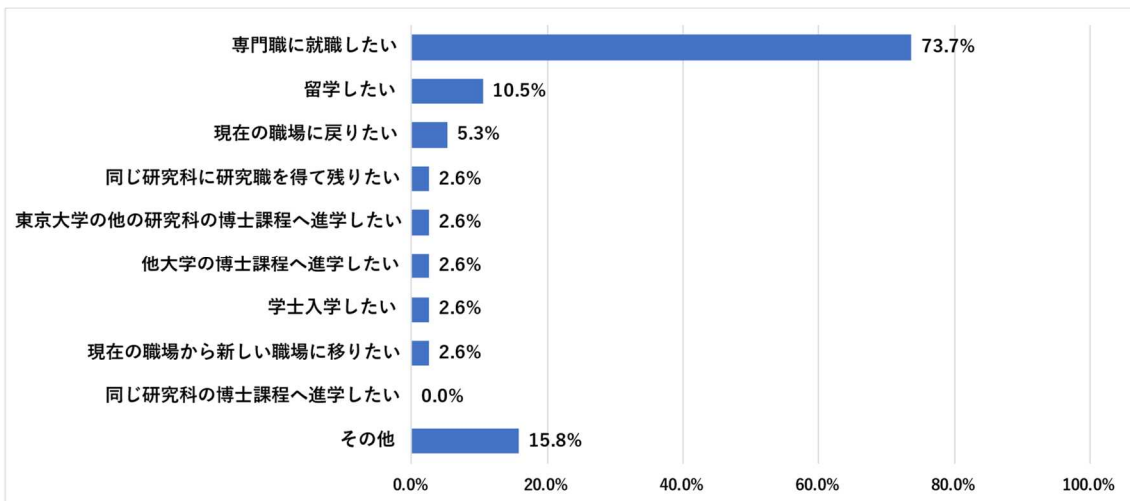
専門職学位課程修了後の決定進路は「専門職に就職予定」が50.0%で最も多く、「現在の職場に戻る予定」の29.2%、「その他」の16.7%と続く。

## 【大学院学生】

### 25. 修了後の希望進路（専門職学位課程）

- 専門職学位課程修了後の進路希望の上位3項目は「専門職に就職したい」、「その他」、「留学したい」
- 前回調査で2位の「現在の職場に戻りたい」は5.3%と低い

25. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



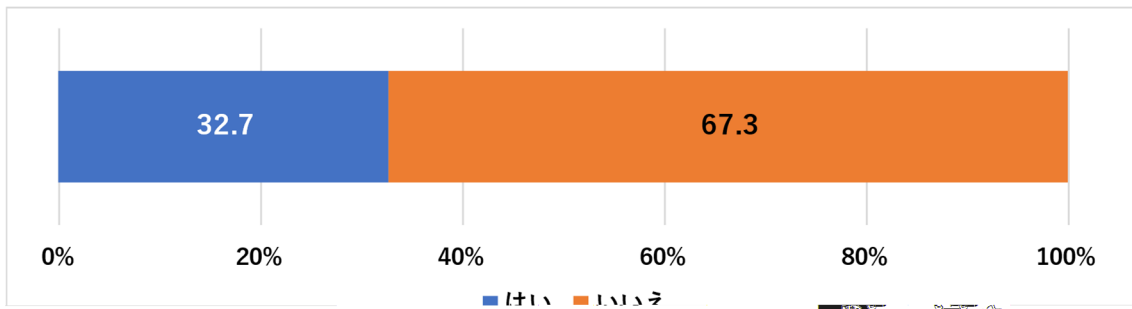
専門職学位課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「専門職に就職したい」が73.7%(前回81.5%)と最も多く、「その他」の15.8%(前回11.1%)と「留学したい」の10.5%(前回5.6%)と続く。決定進路と希望進路両方で第1位となった専門職への就職は、希望の方が予定より23.7%ポイント多い。前回調査で2位の「現在の職場に戻りたい」は5.3%と低く、実際の決定進路における「現在の職場に戻る予定」との差が大きい。留学したい者が一定数いるにも関わらず、実際に留学する予定の割合は0.0%である。新型コロナウイルスの影響により海外渡航が制限されていることが背景にあると思われる。

## 【大学院学生】

### 26. 修了後の進路予定（博士課程）

- 67.3%の回答者は修了後の進路が決まっていない

26.博士課程修了後の進路は決まりましたか。



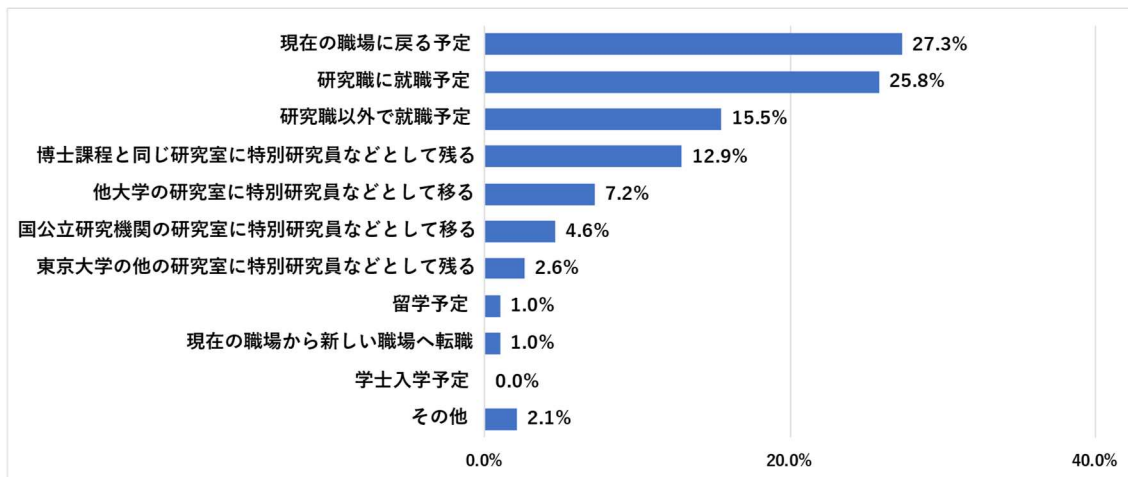
博士課程の中で、67.3%の回答者は修了後の進路が決まっていない。修士課程修了予定者と逆の結果になっている。

## 【大学院学生】

### 27. 修了後の決定進路（博士課程）

- 博士課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」「研究職に就職予定」

27. 博士課程修了後の決定進路について、あてはまるものを1つ選んでください。



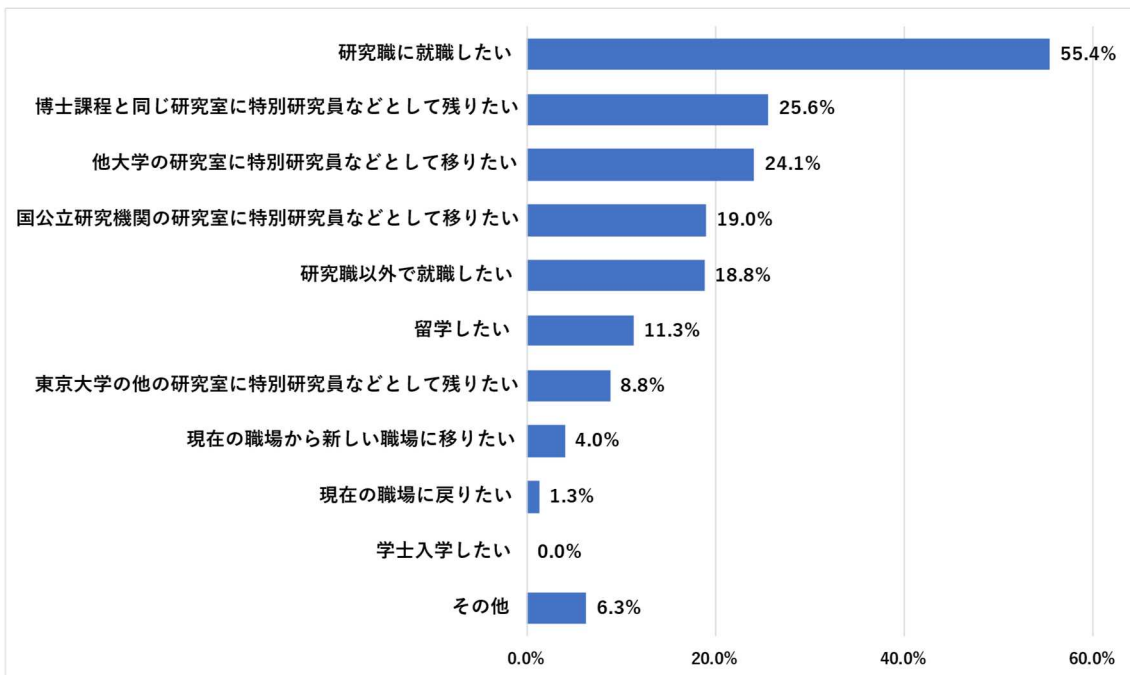
博士課程修了後の決定進路は「現在の職場に戻る予定」が27.3%で最も多く、「研究職に就職予定」の25.8%、「研究職以外で就職予定」の15.5%と続く。

## 【大学院学生】

### 28. 修了後の希望進路（博士課程）

- 博士課程修了後の進路希望の上位3項目は「研究職に就職したい」、「博士課程と同じ研究室に特別研究員などとして残りたい」、「他大学の研究室に特別研究員などとして残りたい」

28. 進路希望について、どのように考えていますか。（2つまで選んでください。）



博士課程修了後の希望進路について2つまで尋ねたところ、「研究職に就職したい」が55.4%(前回44.9%)と最も多く、「博士課程と同じ研究室に特別研究員などとして残りたい」の25.6%(前回21.5%)、「他大学の研究室に特別研究員などとして移りたい」の24.1%(前回17.5%)と続く。この結果は、大学院入学目的において「大学等の研究・教育職を目指して」の増加と合致している。一方、過半数の回答者が「研究職に就職したい」と回答しているが、決定進路では「研究職に就職予定」と回答している者が25.8%で、29.6%ポイントの差がある。

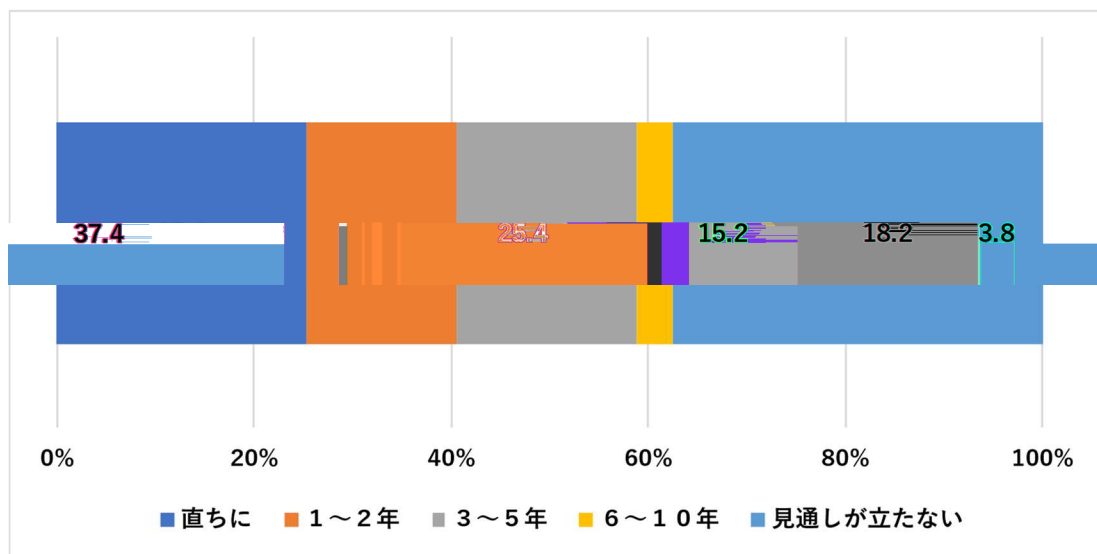


## 【大学院学生】

### 29. 教育職・研究職就職

- 博士課程の修了後、教育職・研究職への就職見込み「2年以内」40.6%、「見通しが立たない」37.4%

29. 教育職、研究職をめざしている方に伺います。博士課程修了後、何年くらいで教育職・研究職に就けるとお考えですか。次の中からどれか1つ選んでください。



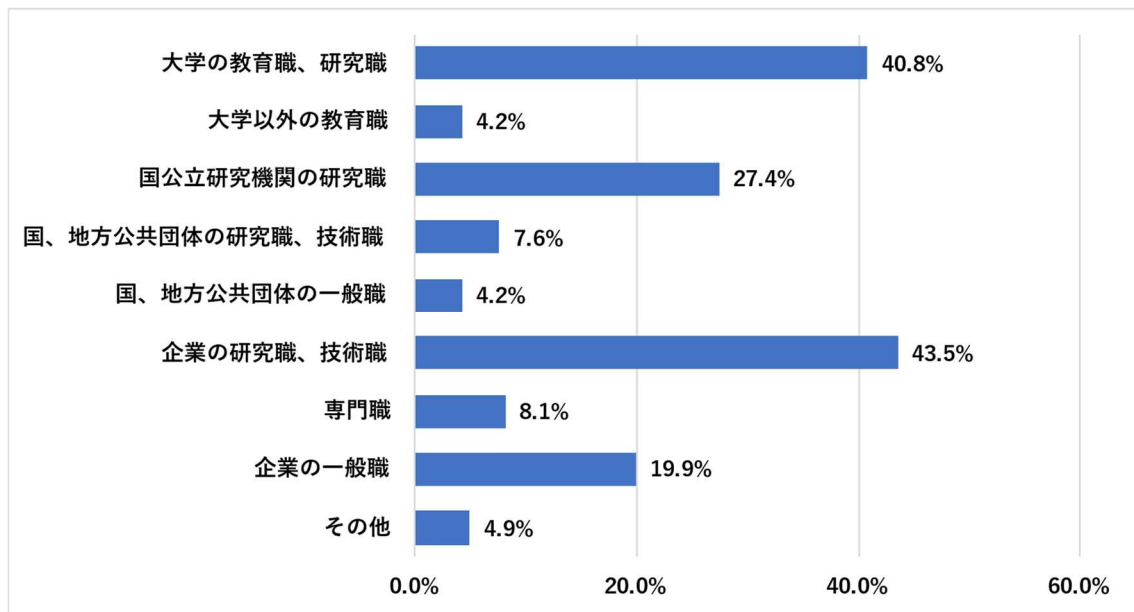
博士課程の修了後、教育職・研究職を目指している者を対象に就職までの期間について尋ねたところ、「見通しが立たない」が37.4%(前回31.6%)で最も多く、「直ちに」の25.4%(前回23.4%)、「3~5年」の18.2%(前回22.7%)と続く。

## 【大学院学生】

### 30. 希望する就職先

- 「企業の研究職、技術職」が43.5%で最も多い
- 文科系では「大学の教育職、研究職」が61.2%で最も多い
- 理科系では「企業の研究職、技術職」が54.3%で最も多い

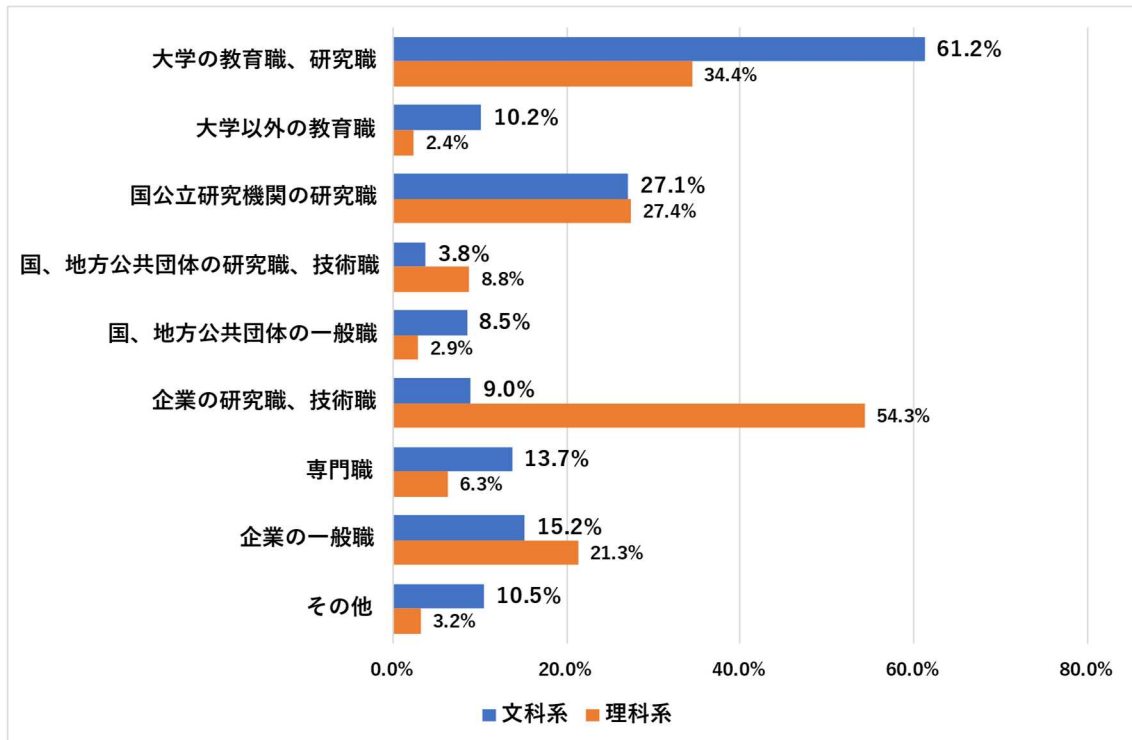
30. 将来どのような方面に就職したいと思っていますか。（2つまで選んでください。）



全員に対して就職希望に関して尋ねたところ、「企業の研究職、技術職」が43.5%（前回45.0%）で最も多く、「大学の教育職、研究職」の40.8%（前回33.5%）、「国公立研究機関の研究職」の27.4%（前回22.3%）と続く。順位は前回調査と同じである。「大学の教育職、研究職」への希望は前回より7.3%ポイント増加し、大学院入学目的における「大学等の研究・教育職を目指して」の増加と合致している。

## 【大学院学生】

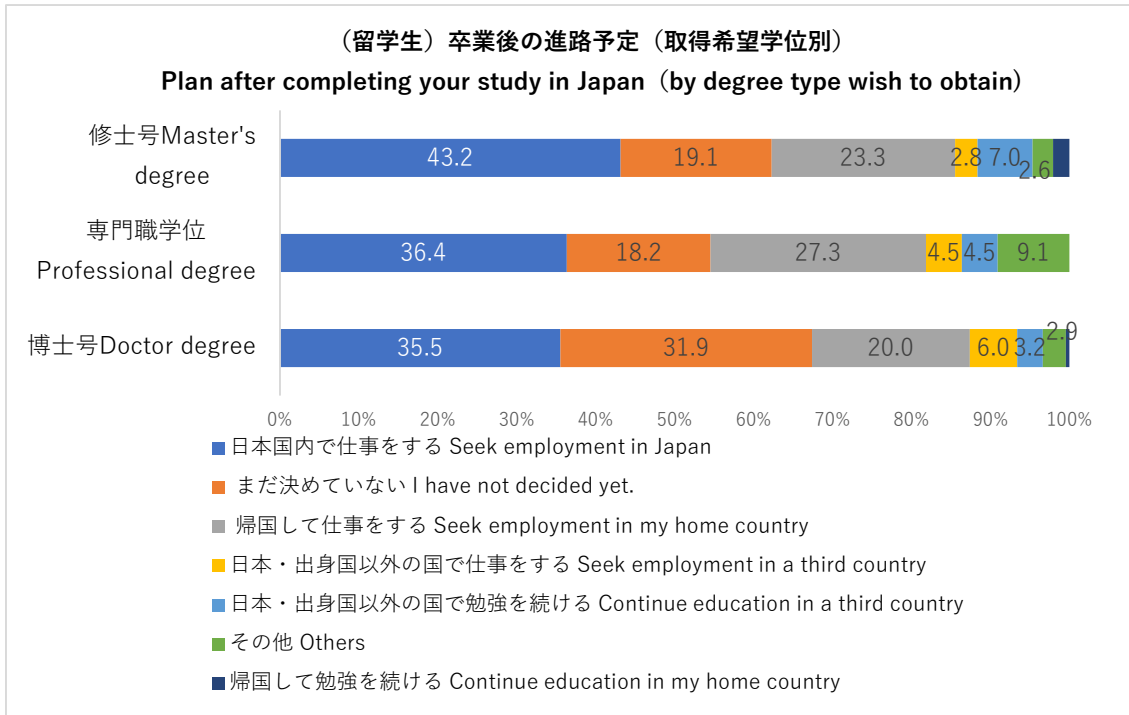
### 希望する就職先（文理別）



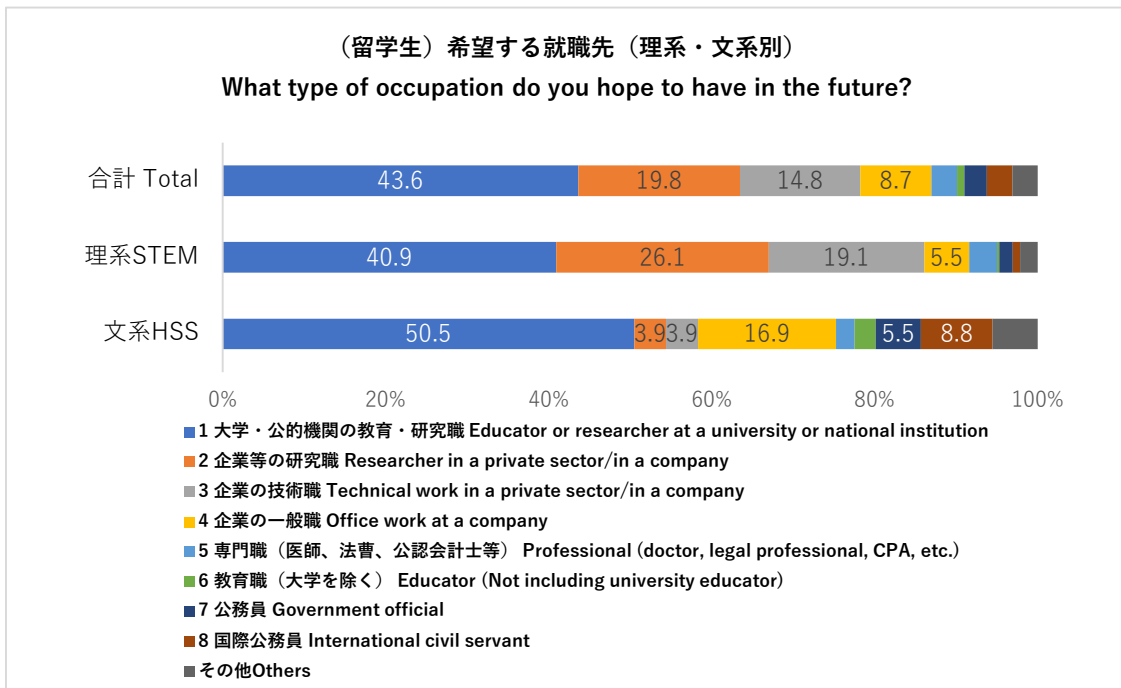
文理別に結果を確認すると、文科系では「大学の教育職、研究職」が 61.2%で半数を超え、(前回 49.2%)より 12%ポイント増加し今回で最も多い。次いで「国公立研究機関の研究職」の 27.1%(前回 22.9%)、「企業の一般職」の 15.2%(前回 21.3%)と続く。一方で理科系では「企業の研究職、技術職」が 54.3%(前回 54.8%)で最も多く、「大学の教育職、研究職」の 34.4%(前回 28.4%)、「国公立研究機関の研究職」の 27.4%(前回 22.1%)と続く。文科系で最も選択された「大学の教育職、研究職」では文理で 26.8%ポイント(前回 20.8%ポイント)の差がみられたのに対し、理科系で最も選択された「企業の研究職、技術職」は文理で 45.3%(前回 40.2%ポイント)の差がみられ、文科系と理科系で明確に志望先が異なっている。

# 【大学院学生】

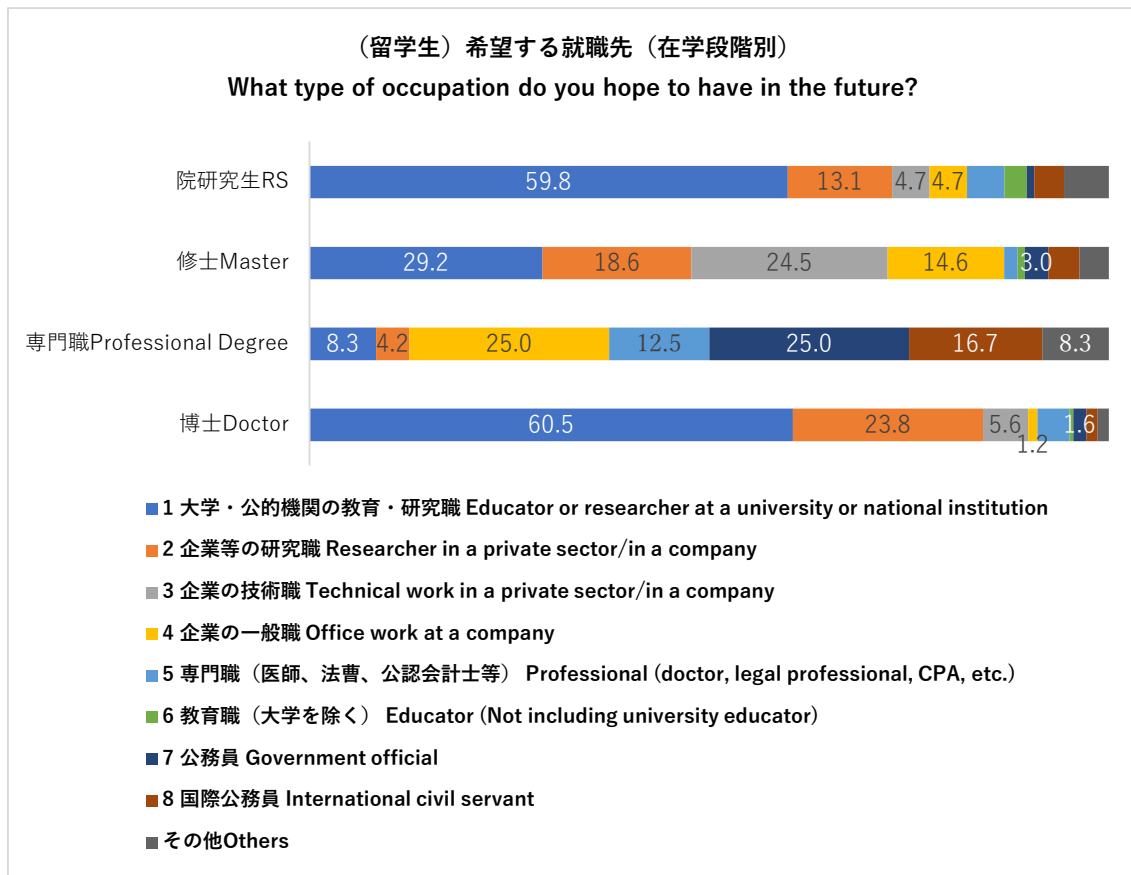
## 大学院留学生の進路



修士号まで取得希望の留学生のうち、43.2%は、日本国内での就職を希望しており、最も日本での就職希望者割合が高い。博士号まで取得予定者は、35.5%が日本国内、31.9%がまだ決めていないと回答している。一方、帰国を予定している学生も、修士号では23.3%、専門職学位では27.3%、博士号取得希望者では20.0%みられる。



## 【大学院学生】



希望する就職先は、大学等の研究職が多く 43.6%を占める。理系の学生は、企業の研究職 (26.1%)、文系学生は企業の一般職 (16.9%) も多い。在学段階別には、修士課程の学生において、研究職以外の進路を検討している学生が半数程度おり、また専門職学位の学生には公務員・国際公務員を目指す (あるいは母国で在職中の学生) 学生も多い。

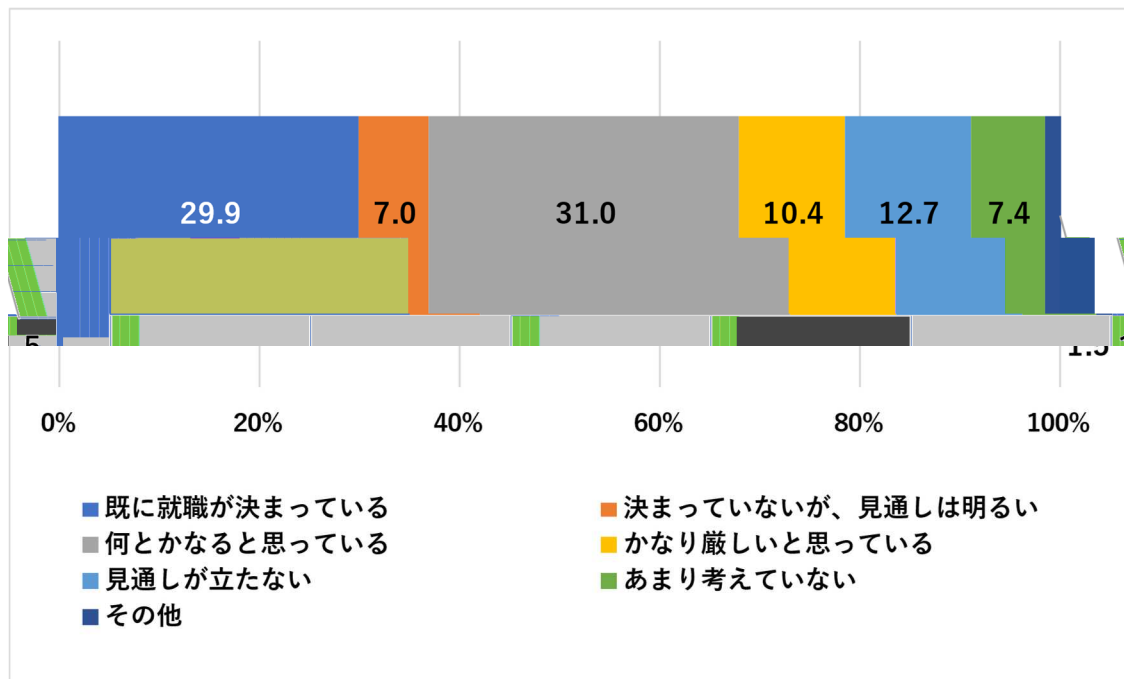
その他、進路に関する質問項目は、留学生と日本人学生版とで異なる項目が多いため、別途留学生版報告書で詳細を述べる。

## 【大学院学生】

### 31. 就職見通し

- 就職の見通し「何とかなると思っている」が31.0%で最も多い
- 「かなり厳しいと思っている」の順位が下がった

31. 就職の見通しについて、どのように考えていますか。次の中からどれか1つ選んでください。



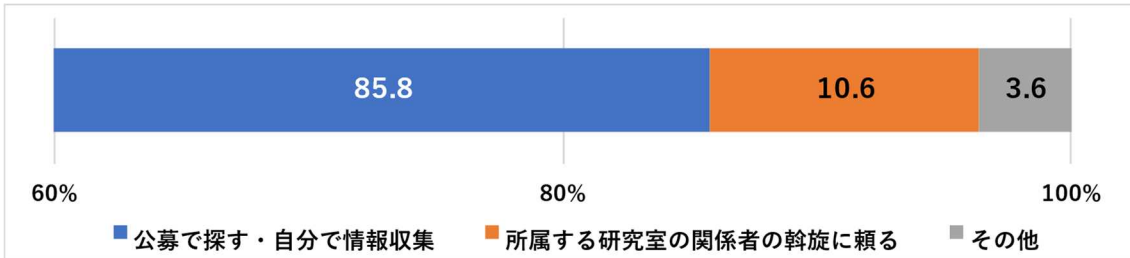
就職の見通しについて尋ねたところ、「何とかなると思っている」が31.0%で最も多く（前回32.3%）、「既に就職が決まっている」の29.9%（前回29.3%）、「見通しが立たない」の12.7%（前回10.0%）と続く。前回調査で第3位の「かなり厳しいと思っている」は10.4%（前回10.7%）で第4位に下がった。

## 【大学院学生】

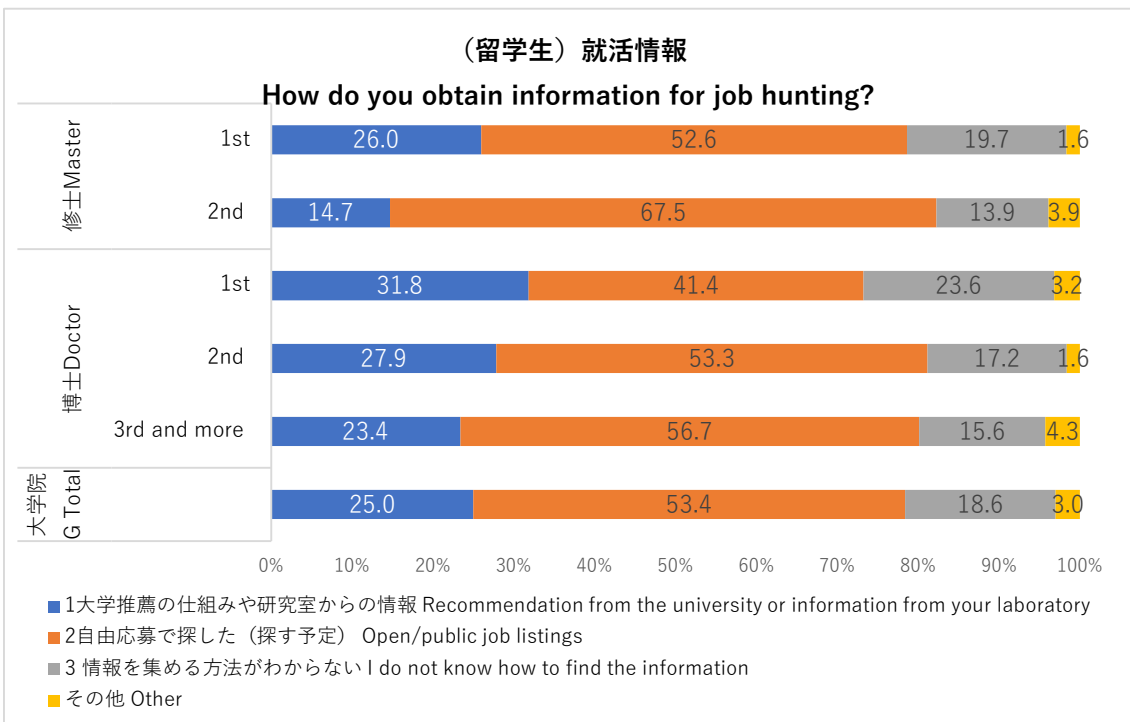
### 32. 就職情報

- 就職情報「公募で探す・自分で情報収集」8割

32. どのように就職活動をしますか。(しましたか。)次の中からどれか1つ選んでください。



就職情報は「公募で探す・自分で情報収集」が85.8%(前回84.5%)で最も多い。「所属する研究室の関係者の斡旋に頼る」は10.6%で前回より2.0%ポイント減少したが、基本的に前回調査と一致する。



選択肢は若干異なるが、大学院留学生のうち「自由応募で探す」が53.4%で最も多く、「大学推薦の仕組みや研究室からの情報」は25.0%、「情報を集める方法がわからない」が18.6%であった。学年が若いほど、「大学推薦」等の方法への期待がみられるが、実際に就職活動経験を持つ人が多い最終学年では、自由応募が増えており、「情報を集める方法」のわかりにくさが生まれていることが見て取れる。

## 【大学院学生】

### 「IV.就職」の分析（まとめ）

進路予定について、修士課程では6割以上が決まったことに対して、専門職学位課程と博士課程の両方ともに6割以上の回答者は修了後の進路が決まっていない。そして、修士課程で「研究職以外で就職予定」が45.4%を占め、専門職学位課程では「専門職に就職予定」が半数であるが、博士課程学生は「現在の職場に戻る予定」と「研究職に就職予定」の割合が比較的高く、それぞれ3割弱である。一方で、いずれの課程においても、希望進路と決定進路の差がみられる。特に、博士課程修了後に「研究職に就職したい」学生は過半数であるが、希望通り就職予定者は3割未満である。教育職・研究職を目指しても、修了から就職までの見通しが立たないと回答した博士課程学生は最も多く4割弱いる。

文理別で希望する就職先をみると、目立った差異を確認できた。文科系では「大学の教育職、研究職」が、理科系では「企業の研究職、技術職」が過半数となった。

大学院留学生のうち、取得希望学位が修士号の場合と、博士号までの場合とでは、進路予定に傾向の相違がみられる。修士までの学生は、日本国内での就職希望割合が高い。博士まで取得希望者は未決定者が多く、また帰国を予定している学生もいずれの在学段階の学生にもみられる。留学生の進路は、職種や仕事を行う場所など、選択肢も多い一方で、進路決定に必要な情報が得にくいため、引き続き、学生の進路希望動向を把握しながら、ニーズに沿った就職支援の在り方を検討していく必要がある。



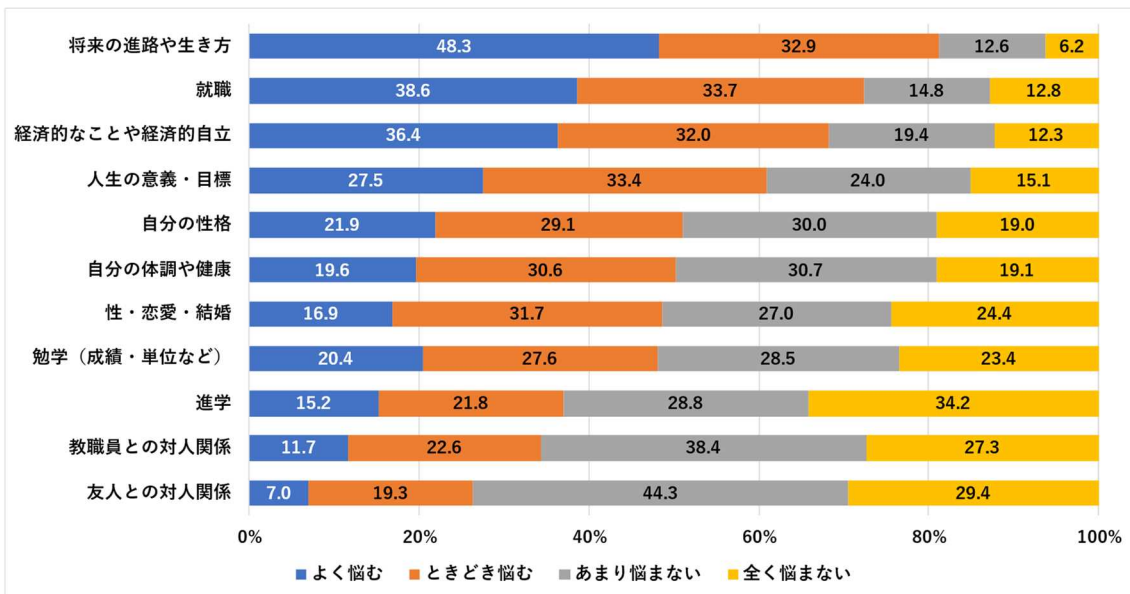
## 【大学院学生】

### V. 不安・悩み

#### 33. 不安・悩みの程度

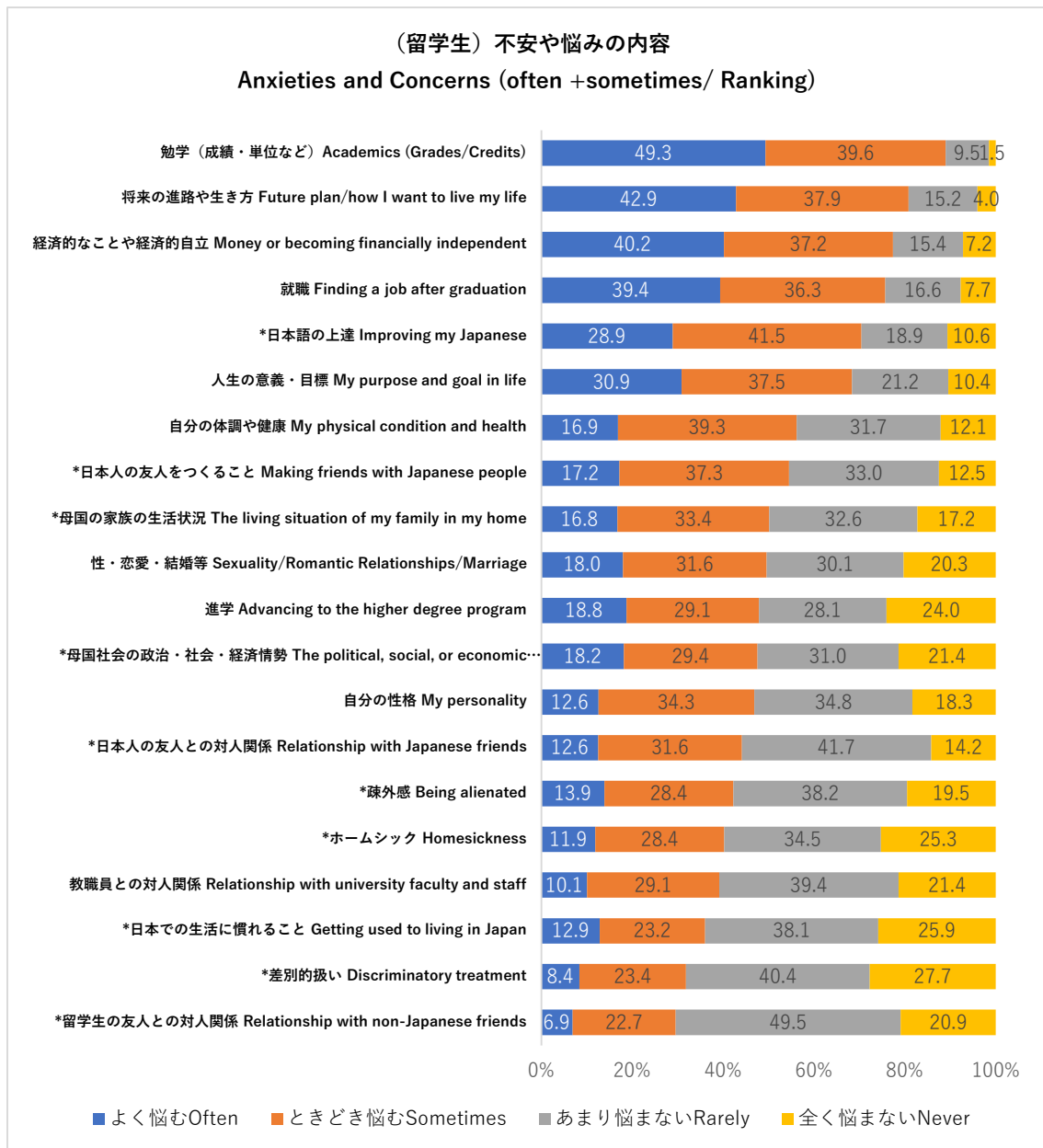
- 不安・悩みをもたらす上位3項目「将来の進路や生き方」、「就職」、「経済的なことや経済的自立」
- 最も少ない悩みは「友人との対人関係」

33. 現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか。



大学院学生が学生生活の中で悩みや不安を感じるものとして、「よく悩む」と「ときどき悩む」の合算値が最も大きかった項目は「将来の進路や生き方」で合計81.2%（前回78.5%）であった。次いで、「就職」の72.3%（前回65.5%）、「経済的なことや経済的自立」の68.4%（前回63.9%）と続く。上記3項目の順位は前回調査と同じである。「あまり悩まない」「全く悩まない」の合算値が最も大きかった項目は「友人との対人関係」で73.7%（前回76.5%）。次いで、「教職員との対人関係」で65.7%（前回69.1%）、「進学」で63.0%（前回68.5%）であった。下位3項目の順位は前回調査と同様であった。

## 【大学院学生】



(\*留学生のみの項目)

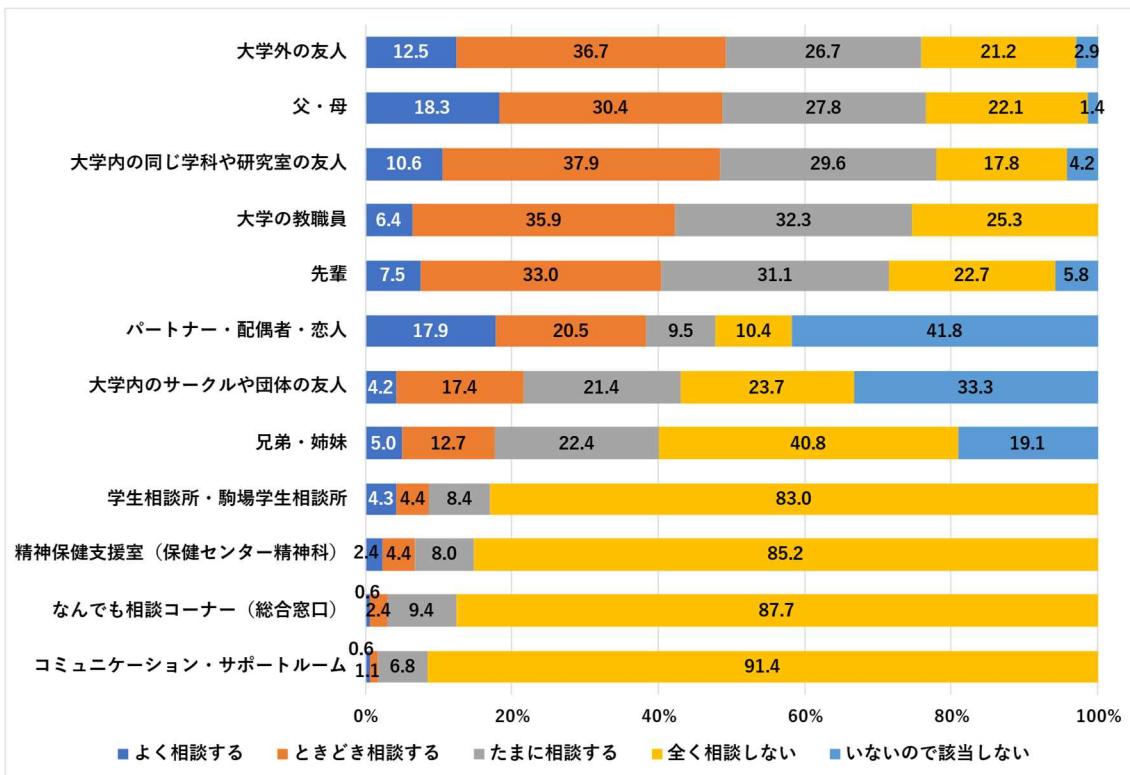
大学院留学生の回答において、「よく悩む」と「ときどき悩む」の選択割合上位は、「勉学」、「将来の進路や生き方」「経済的なことや経済的自立」であった。上位3項目の結果は、2019年度の大学院留学生版調査(69回調査)と同様の結果であるが「よく悩んでいる」「悩んでいる」を選択した学生は、勉学(81.9%→88.9%)「将来の進路や生き方」74.5%→80.8%)、「経済」(70.9%→77.4%)と、いずれも上昇している。「勉学」の選択割合が日本人学生等に比べて上位である点や、共通項目においては、留学生のほうが悩んで学生の回答割合が高い点も、従来からみられた特徴である。

## 【大学院学生】

### 34. 悩みの相談相手

- 悩みを相談する相手の上位3項目は、「大学外の友人」、「父・母」、「大学内の同じ学科や研究室の友人」
- 大学の相談施設の利用は多くない

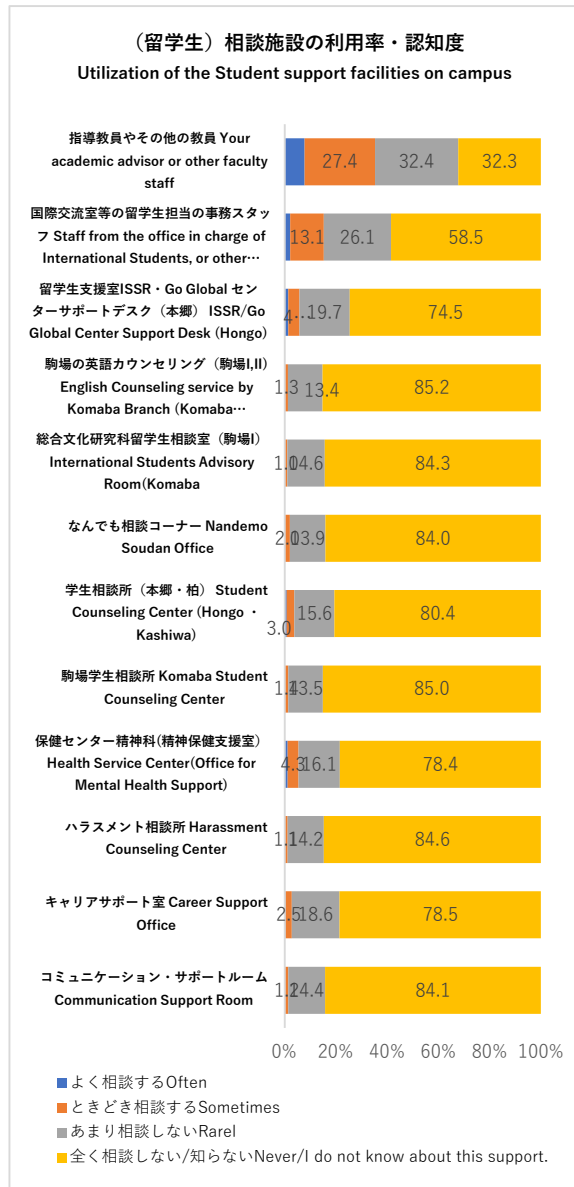
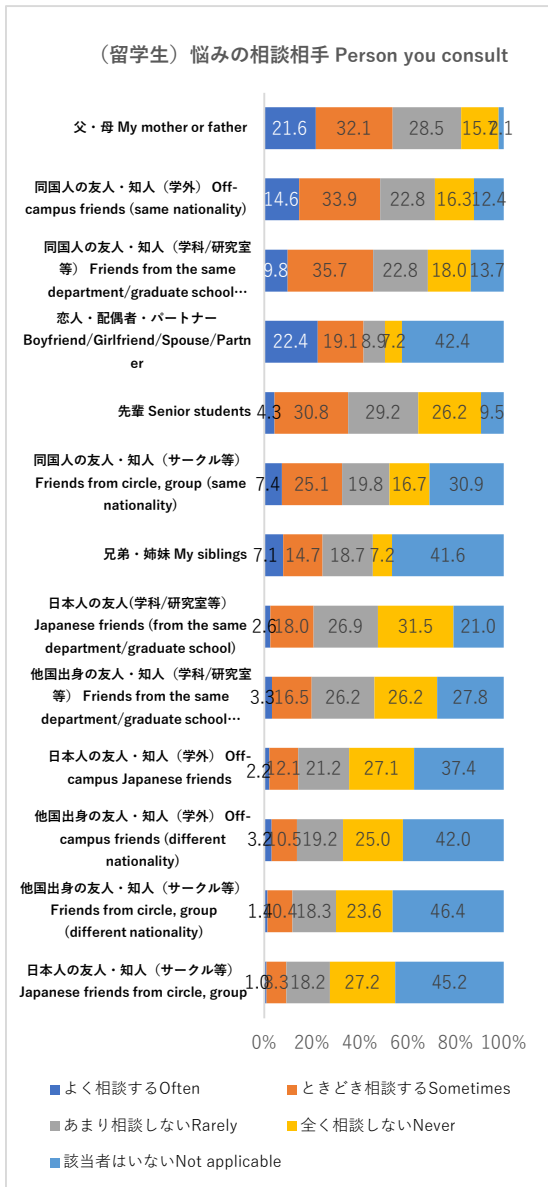
34. あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか。



不安や悩みを誰に相談するか尋ねたところ、「よく相談する」、「ときどき相談する」の合算値が最も多かった項目は「大学外の友人」で合計49.2%（前回39.7%）であった。「父・母」48.7%（前回37.4%）は、「大学内の同じ学科や研究室の友人」48.5%（前回38.0%）を超えて第2位となった。一方、悩みの相談相手としての教職員や大学の相談施設の利用は多くないのも例年同様である。

なお、今回調査から設問項目に「精神保健支援室（保健センター精神科）」、「コミュニケーション・サポートルーム」を、回答の選択肢に「いないので該当しない」を追加している。

## 【大学院学生】



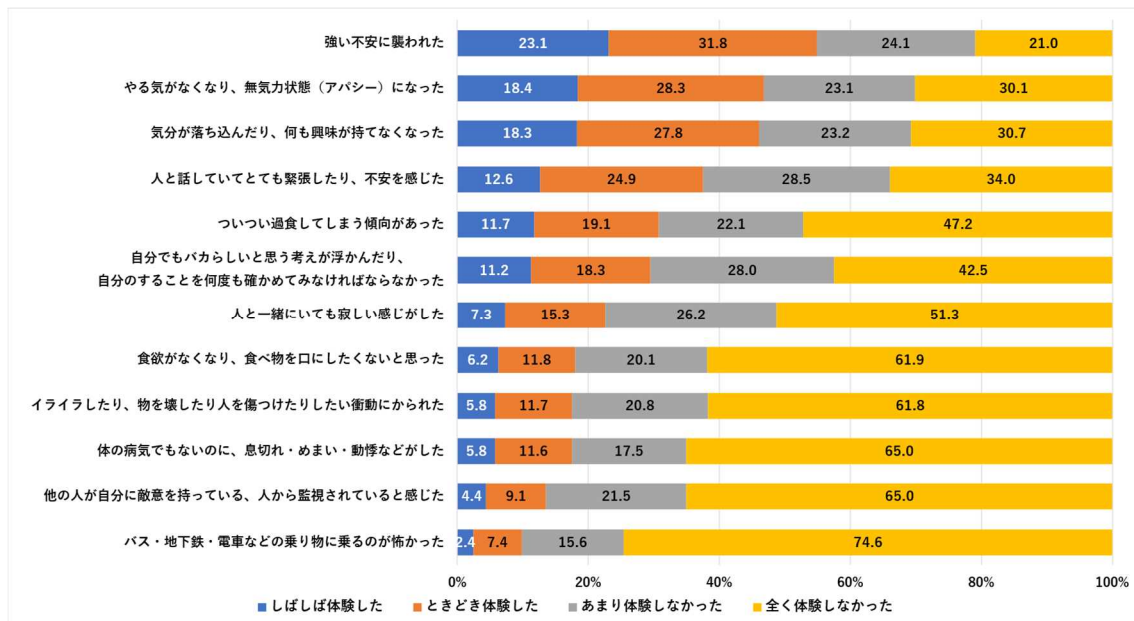
大学院留学生が、不安や悩みを最もよく相談しているのは「父・母」であり、同国人の学外・学内の友人が続く。また日本人の友人を相談相手として選択した学生の割合は極めて小さい。こうした傾向は、コロナ前から同様に示されており、2019年度の前回調査と大きく変化していない。留学生調査では、大学内で相談できる場所に関する項目を別途設けたが、相談先としては指導教員が最もよく選択され、部局の国際交流室等も、身近な相談先となっている。専門的な相談資源としては、留学生支援室、保健センターを利用している学生が5%程度である。

## 【大学院学生】

### 35. メンタルヘルスの状態

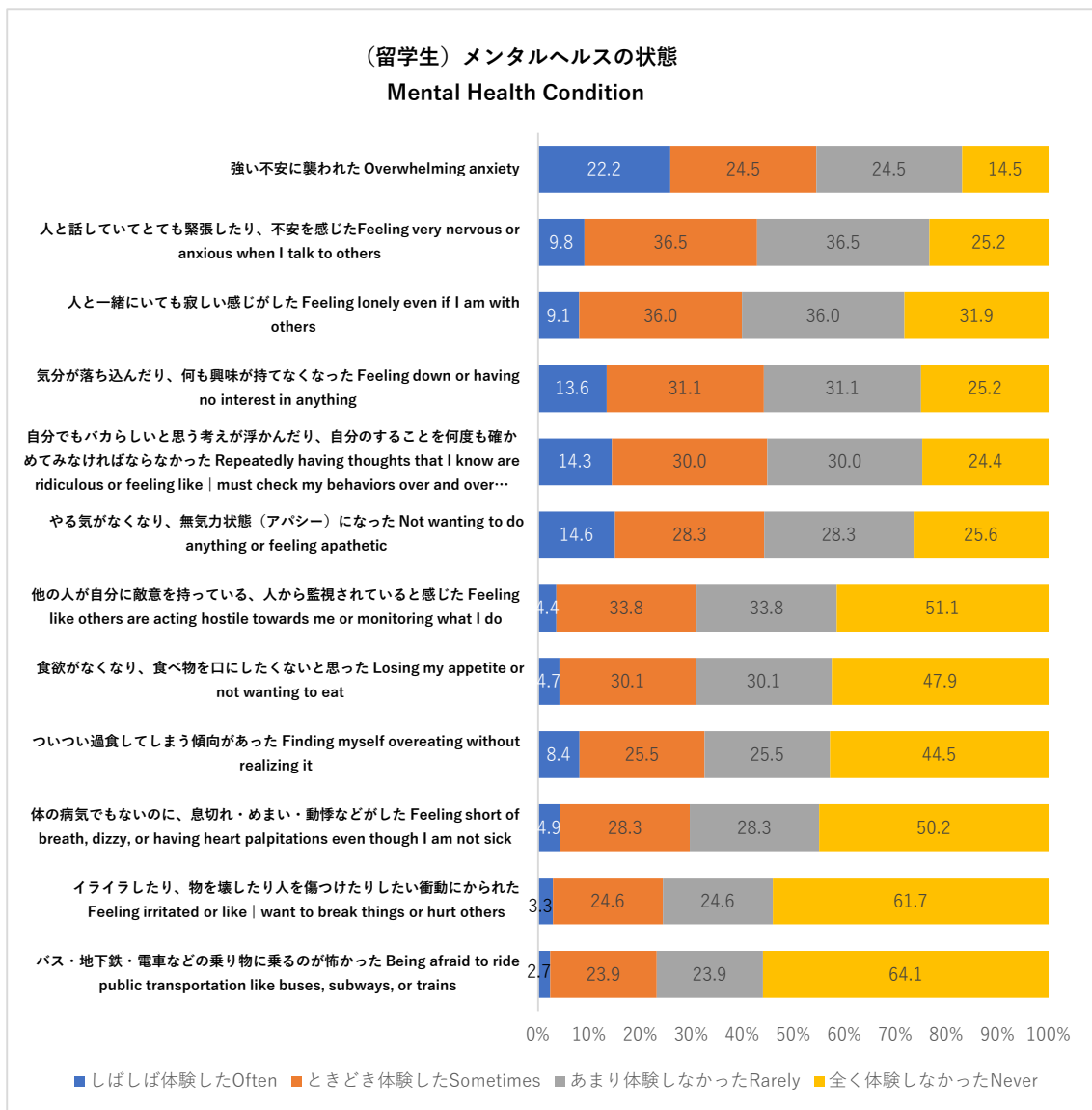
- 上位3項目は「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」
- 過半数が「強い不安に襲われた」経験あり

35. あなたは、最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか。



メンタルヘルスの不調を「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が最も多かった項目は「強い不安に襲われた」で54.9%（前回49.6%）であった。次いで、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」46.7%（前回36.7%）、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」は46.1%（前回34.2%）が続く。上位3項目の割合はいずれも前回調査より増加した。

## 【大学院学生】



大学院留学生のメンタルヘルスの状態において、もっとも体験されていたのは「強い不安に襲われた」であり、「しばしば体験した」「ときどき体験した」の合算値が46.7%（2019年度調査では52.0%）であった。この数値は、日本人学生の選択割合、コロナ前2019年度の調査よりも小さい。一方、4割以上の学生が「しばしば」「時々」体験している項目が、日本人学生は12項目中3項目であったのに対して、留学生は、留学生は半分の項目において4割を超えている。また、2019年度調査では、4割を超える学生が「しばしば」「ときどき」体験した項目は、2項目のみであった。全体的には、メンタルヘルスの状態が悪いと感じている学生が多く、不調の体験様式が多様化している可能性がある。また、特に大学院留学生は、未入国状態の学生が3割いることから、感染症の影響の出方も多様であることが想定される。

## 【大学院学生】

### 「V.不安・悩み」の分析（まとめ）

大学院学生は「将来の進路や生き方」、「就職」、「経済的なことや経済的自立」で特に不安や悩みを抱えていることが多く、いずれの項目でも6割以上が悩んでいると回答していた。また、約半数の大学院学生は「強い不安に襲われた」経験があり、何らかのメンタルヘルス不調を経験する学生が多いことが示された。そうした悩みを相談する相手としては、教職員や大学の相談施設よりも、「大学内の同じ学科や研究室の友人」、「父・母」、「大学外の友人」などの身近な関係者である傾向がみられた。相談施設の利用率は他大学と比較して極端に低いわけではないが、悩みを抱えた学生の援助要請を促進するための、スティグマの軽減や認知度の向上を図る必要があるだろう。

大学院留学生は、これまで同様に日本人学生よりも、悩みを抱えていると回答する学生の割合が多く、項目で高い。またとりわけ「勉学」を中心とした悩みを持つ学生の割合が高い。コロナ前と比較すると、勉学や将来に関連した悩みはより強くなっている。相談相手として日本人の友人等が選択されない傾向は、コロナ以前から同様であるが、指導教員や部局の事務室等は、身近な相談先となっている。

メンタルヘルスの状態は、コロナ前と比べると、より不調の体験様式が多様化している。来日前の学生、コロナ禍をずっと日本で過ごしてきた学生など、様々な学生が含まれるため、今後こうした学生の心身健康面がどのように安定していくか注意深く見守り、支援を行っていく必要がある。

## 【大学院学生】

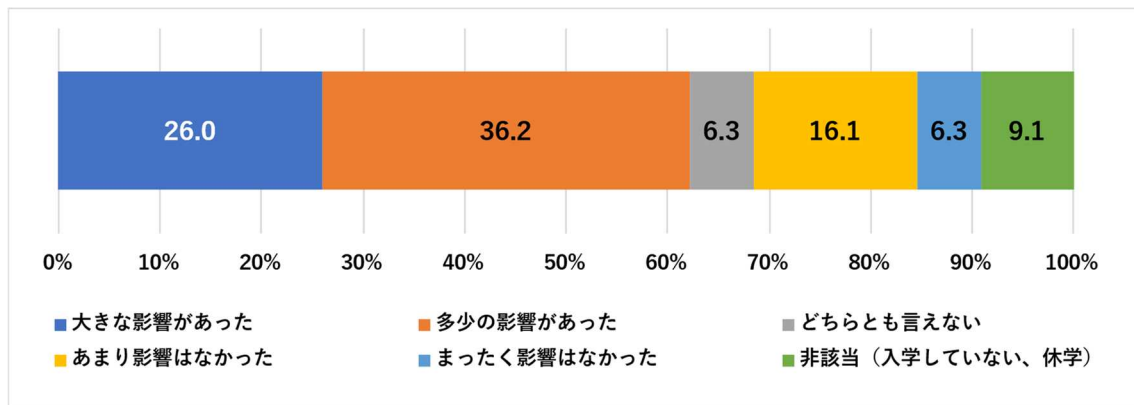
### VI. 新型コロナウイルス感染症の影響

#### 36. 研究への影響

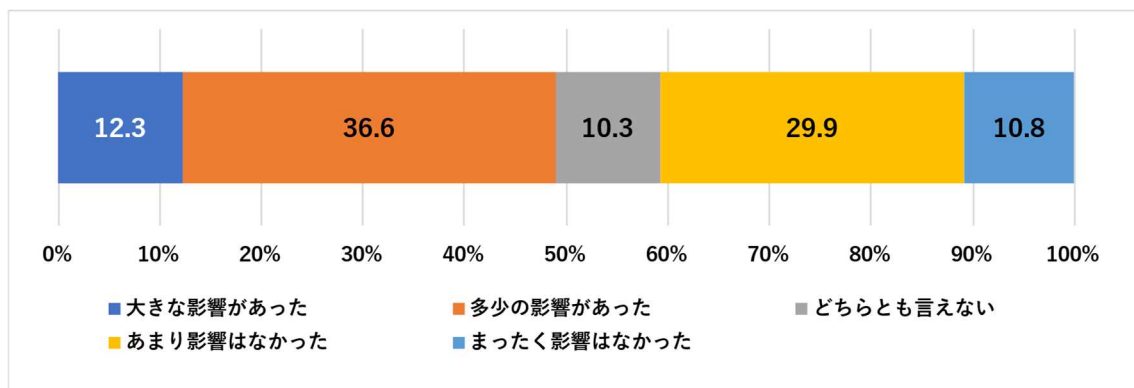
- 「大きな影響があった」、「多少の影響があった」合計 48.9%

36. 新型コロナウイルス感染症の影響により、研究がストップしたり、研究計画を変更せざるを得なくなったりといった影響はありましたか。

2020 年度



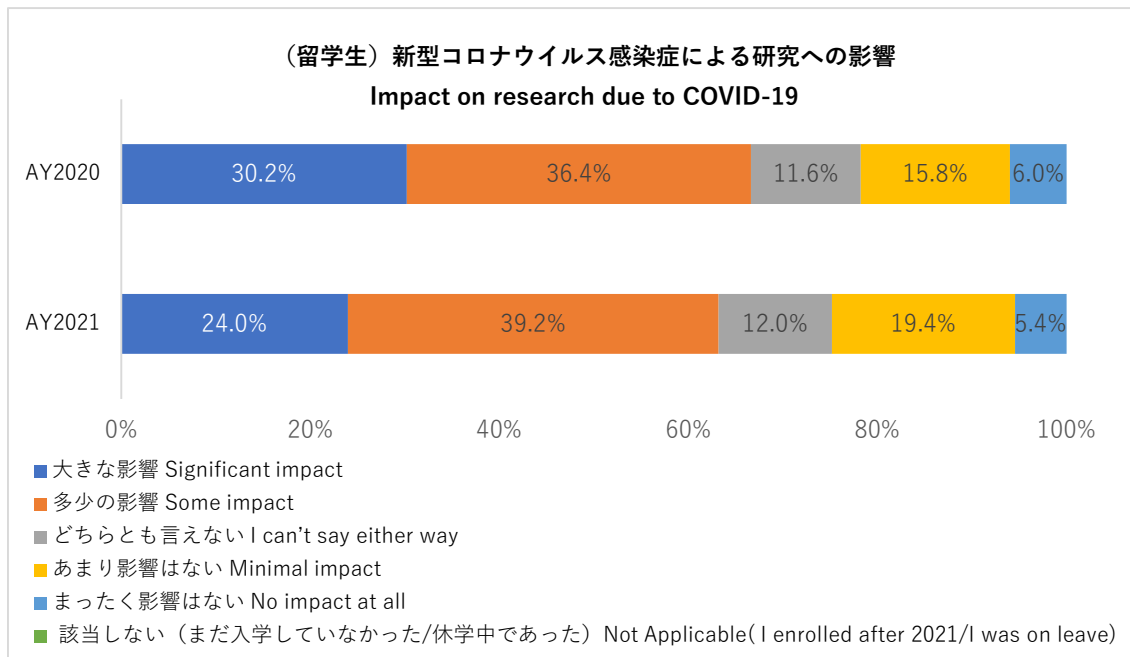
2021 年度



新型コロナウイルス感染症による研究への影響について、2020 年度は 62.2%、2021 年度は 48.9%の大学院生が影響があったと回答している。



## 【大学院学生】



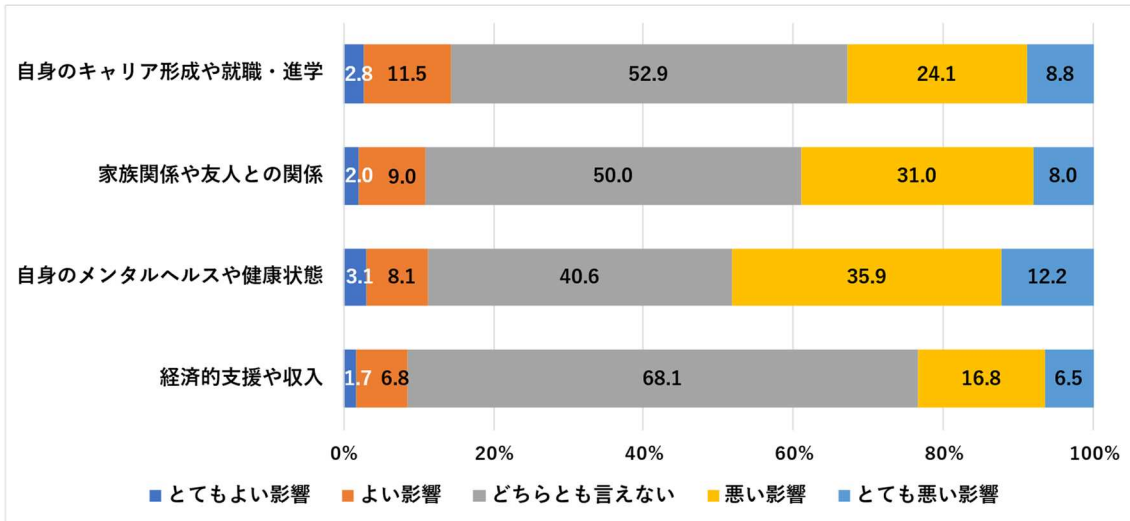
感染症の影響が、初年度と2年目の2021年度にどのように研究に影響したかについて回答を求めた。当該年度に在籍していなかった学生を除き、各年度の影響を比較すると、大きな影響を受けていると感じている学生は日本人学生と比べて多い。2021年度のほうが研究活動への大きな影響を感じている学生はやや減少しているが、日本人学生と比べると減少幅は小さく、入国の遅れ等で影響が大きく残っていることが考えられる。

## 【大学院学生】

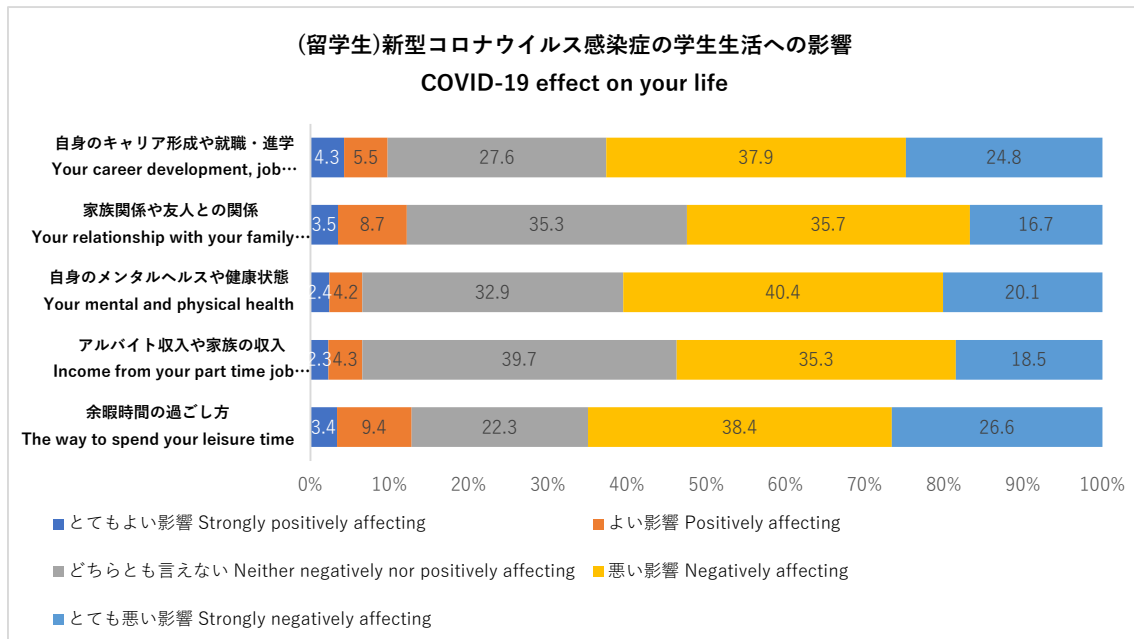
### 37. 生活への影響

- よい影響よりも悪い影響の方が大きい

36. 新型コロナウイルス感染症下での様々な制限は、今現在あなたの生活にどのような影響がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。



全ての項目において悪い影響がよい影響を倍以上上回り、中でも「自身のメンタルヘルスや健康状態」については、悪い影響がほぼ半数を占めた。



留学生の回答は、すべての項目において「悪い影響」を選択した学生の割合が日本人学生よりも多く、また「とても悪い影響」の選択が、2割以上を占める。

## 【大学院学生】

### 「VI. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析（まとめ）

新型コロナウイルス感染症は、大学院生の研究や学生生活に大きな影響をもたらした。オンライン授業とは異なり、研究活動の多くは、自宅ではできないことや指導教員の指導を受けられないことから、入構制限や種々の活動制限は大学院生の研究活動にかなりの支障となっている。また、生活に関する全ての項目においても悪い影響がみられる。今後も新型コロナウイルス感染症の流行については予断が許せない状況が続くため、どのようにつきあっていくかを考えておく必要がある。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響については、「11. 学会参加・発表」、「15. 研究室スペース」、「III.学会参加・研究活動」の分析（まとめ）、「17. 研究費自己負担額」、「25. 修了後の希望進路（専門職学位課程）」、「VIII.家庭の状況」の分析（まとめ）、「IX.生活費の状況」の分析（まとめ）、「XI.アルバイト・暮らし向き」の分析（まとめ）などにも記載があるので参照されたい。

留学生に関しては、調査実施段階では入国すらできていなかった学生も多く、また様々な活動制限は、入国後にキャンパス生活に慣れていくプロセスを大きく阻害している。詳細は、留学生版の調査報告についても参照のこと。

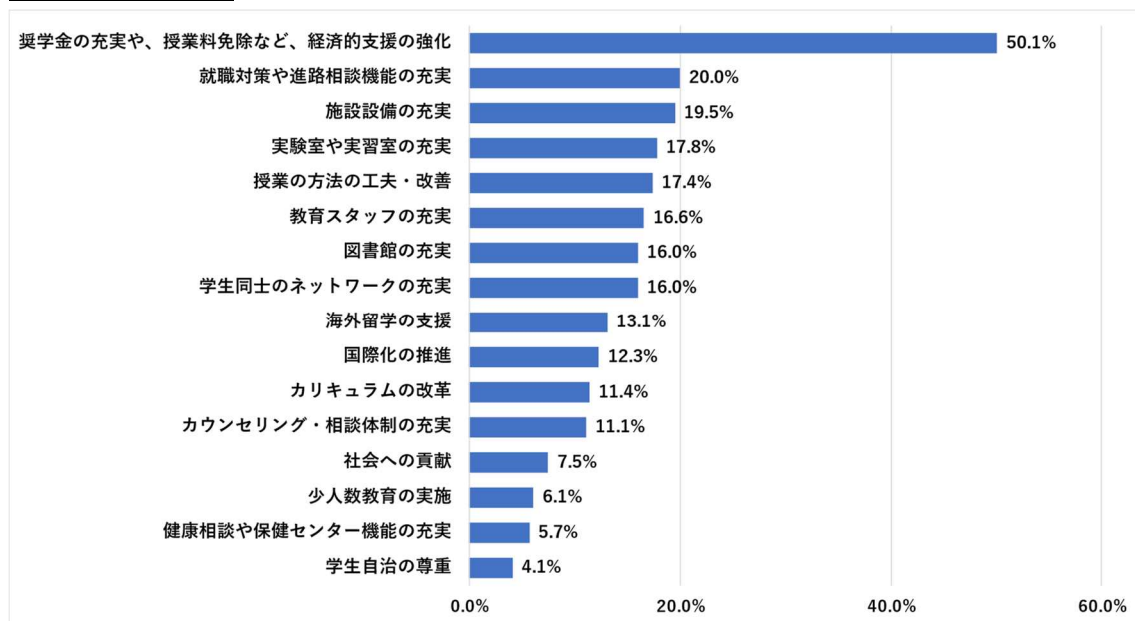
## 【大学院学生】

### Ⅶ. 大学への要望

#### 38. 要望や期待すること

- 大学に最も期待することの上位 3 項目は「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」、「就職対策や進路相談機能の充実」、「施設設備の充実」

38. 大学へ特に要望したいことや期待することは何ですか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。

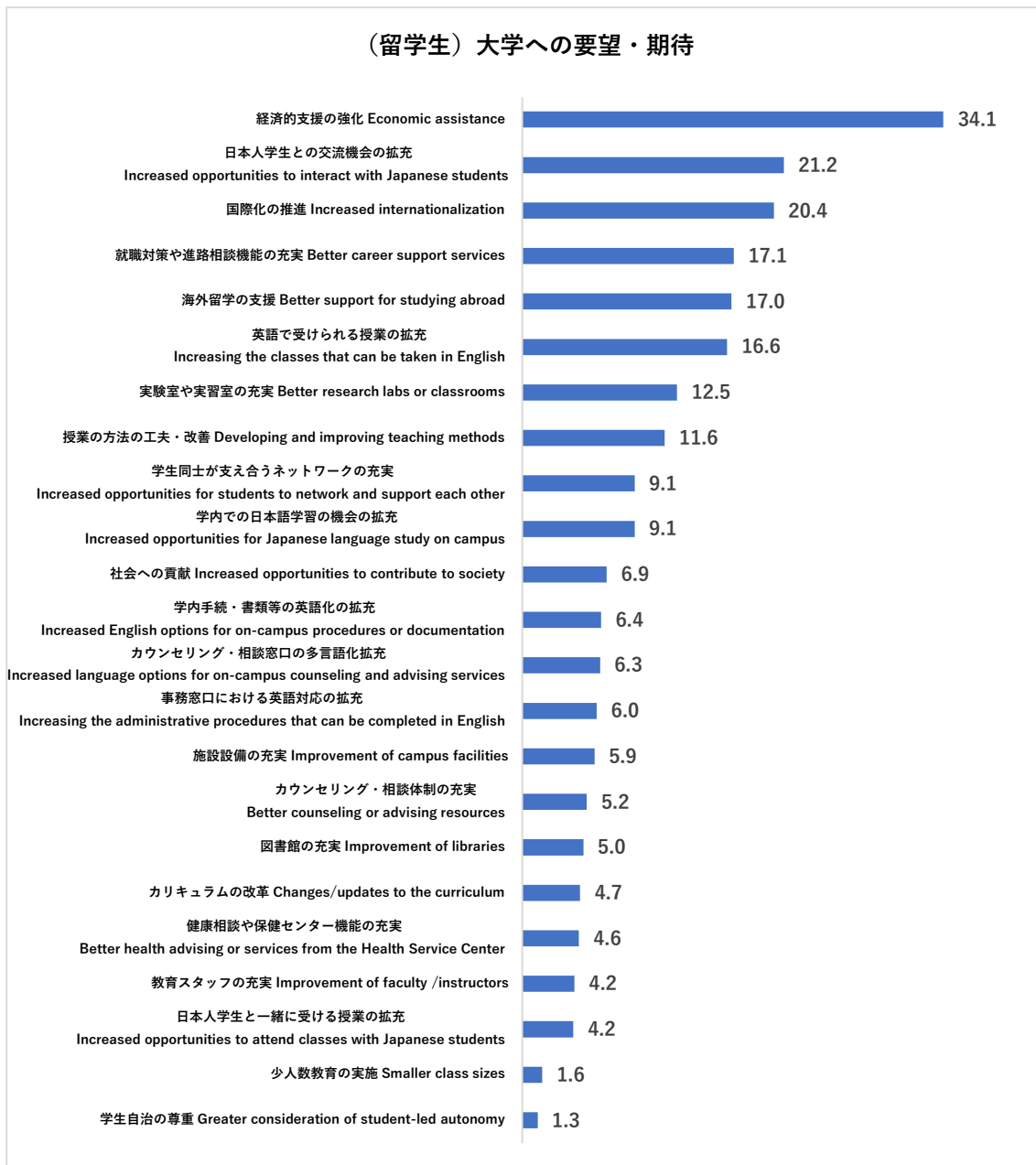


大学へ特に要望したいことや期待することを尋ねたところ、「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」が 50.1%で最も多く、「就職対策や進路相談機能の充実」の 20.0%、「施設設備の充実」の 19.5%と続く。

前回調査と比べて、「就職対策や進路相談機能の充実」の順位が高くなっている。

なお、前回調査では各要望項目に対して要望度合いを尋ねる形であったが、今回調査では要望項目を3つまで選ぶ形としている。

## 【大学院学生】



項目が日本人学生版とは一部異なるが、「奨学金の充実や、授業料免除など、経済的支援の強化」「就職対策や進路相談機能の充実」を要望する学生が多い点は、日本人学生と共通している。また、「国際化の推進」が上位である点は、前回までの調査と同様の結果である。さらに調査実施中に未入国の学生も多く、そもそも施設の利用や対面授業への参加ができない状況であったが、「日本人学生との交流機会の拡充」への期待が高くみられる。

## 【大学院学生】

### 「Ⅶ.大学への要望」の分析（まとめ）

大学への要望は経済的支援の強化、就職・進路相談機能の充実、施設設備の充実が多く、一方で要望が比較的少ないのは、少人数教育、健康相談・保健センター機能の充実、学生自治の尊重などである。自助努力では賄えない項目が上位に挙がっている傾向が見てとれる。経済的支援の強化については、前回の調査でも最上位であり、学部生では3位であることをふまえると、研究活動において、いかに経済的支援が重要であるかが見てとれる。

経済的支援の強化への期待の高さは、留学生も国内生と同様に強くみられた。一方、「国際化の推進」への要望の強さは、留学生の変わらぬ特徴である。さらに、「日本人学生との交流機会の拡充」は、コロナ禍で益々要望が高まっている。

詳細は、留学生版報告書で述べる。

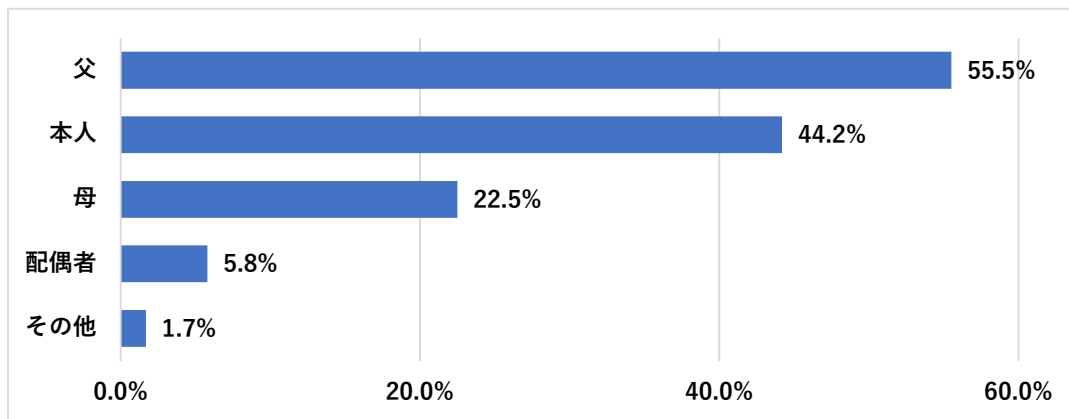
## 【大学院学生】

### Ⅷ. 家庭の状況

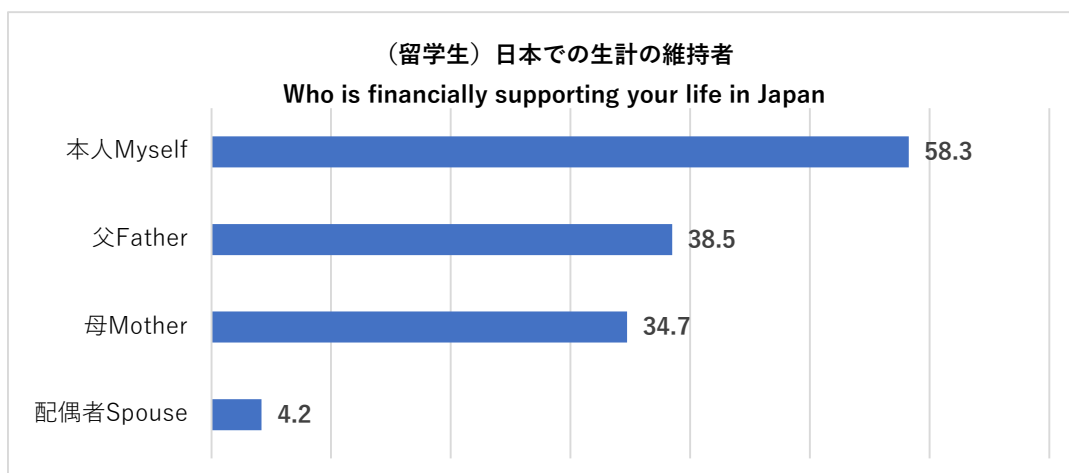
#### 39. 生計維持者

- 主たる生計維持者は「父」55.5%、前回調査より6.7%ポイント減少

39. あなたの現在の生計を主に支えているのはだれですか。（複数回答可能）



複数回答により主たる生計維持者を尋ねたところ、「父」が55.5%と過半数で最も多いが、前回の62.2%よりは6.7%ポイント減少した。次いで「本人」が44.2%で、前回の31.7%より12.5%ポイント増加した。「母」は22.5%（前回22.1%）で前回とほぼ同じであった。順位は前回調査と同じである。



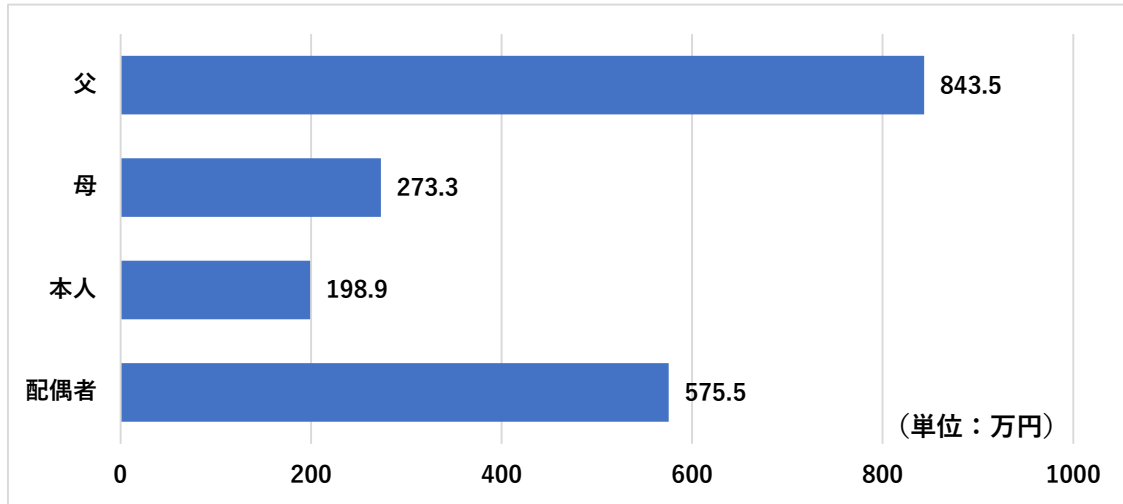
留学生版では、「日本での生活を主に支えている人」について回答を求めたため、未入国の学生を除いた769名を対象とした。日本での生計を支えているのは、「本人」(58.3%)、「父」(38.5%)、「母」(34.7%)、「配偶者」(4.2%)であり、日本人学生と比較すると、「本人」との回答が多い。また「父」と「母」の割合が大きく変わらない点が、日本人学生の回答との相違点といえる。

## 【大学院学生】

### 40. 家族・本人の年間税込み収入

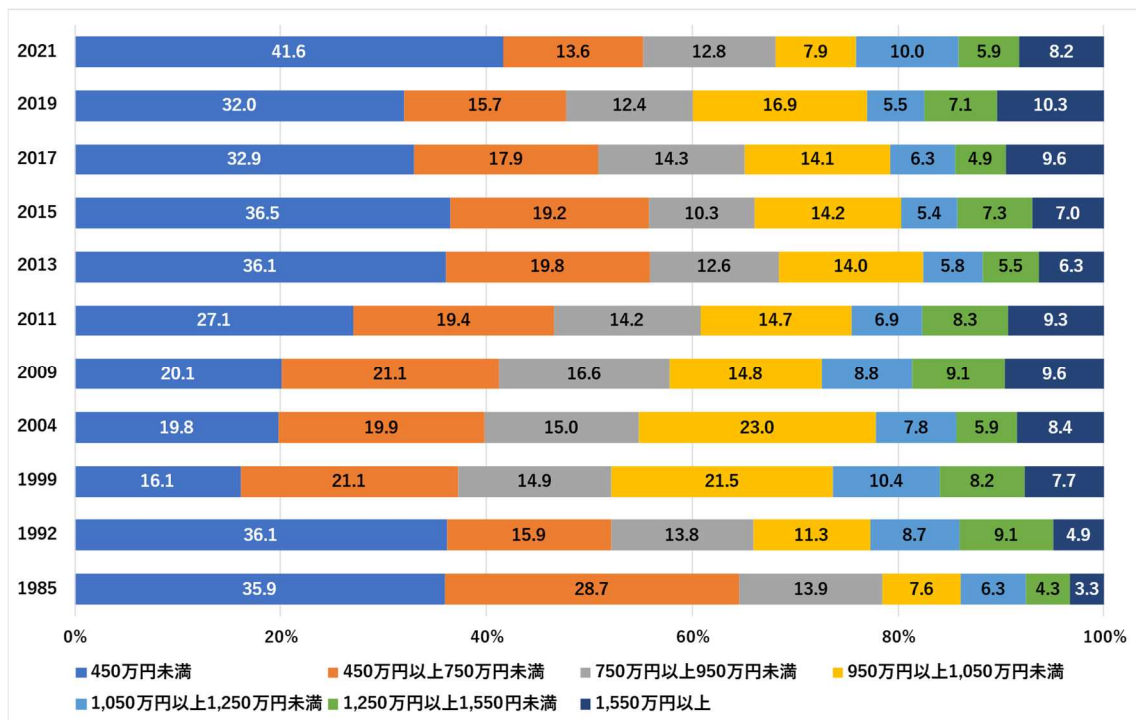
- 父が最も多く、次いで配偶者、母、本人の順

40. 昨年（2021年1月～12月）の年間税込み収入はどれくらいですか。おおよその金額を選択してください。



本人及び家族の年間税込収入(平均)は、「父」が843.5万円で最も多く、「配偶者」575.5万円、「母」273.3万円と続く。

生計維持者の年間税込み収入の推移



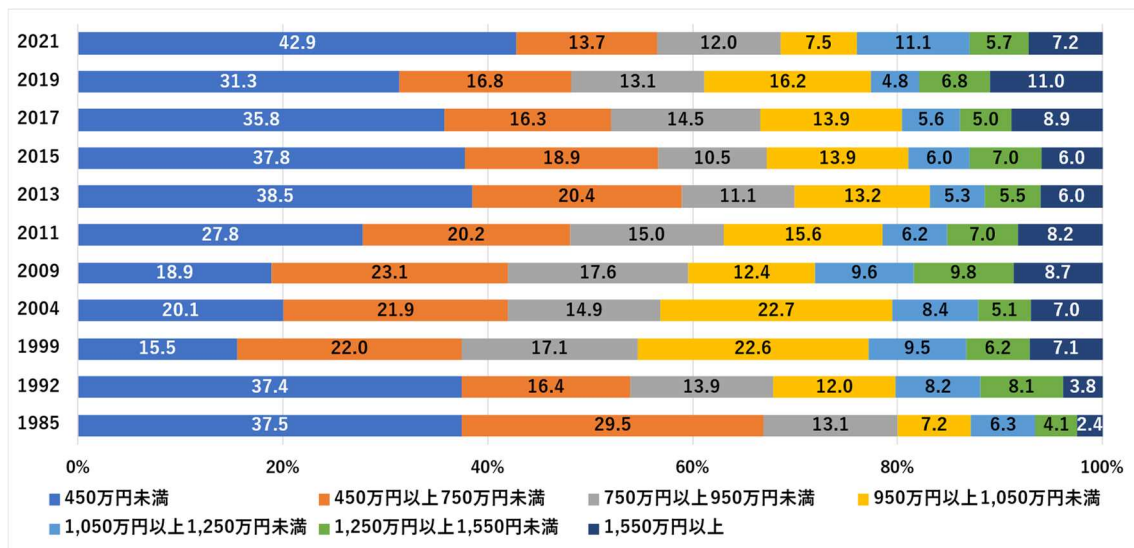


## 【大学院学生】

生計維持者の年間税込み収入の推移をみると、今回調査で「450万円未満」の割合が41.6%で、過去10年間で最も多い。なお、1,050万円以上の割合は2013年から増加傾向で、今回調査では合計24.1%に達して、前回調査の22.9%より微増した。低収入層と高収入層が共に拡大したのは今回調査の特徴である。

なお、これまでの調査では「生計維持者」の収入金額を記入する回答方式であったが、今回調査では「家族」の収入金額を7つの金額区分から選択する形とし、生計維持者に該当する家族の金額区分の中間値に基づいて収入額を算出していることから、2019年以前のグラフと傾向が異なっている可能性があることに留意する必要がある。

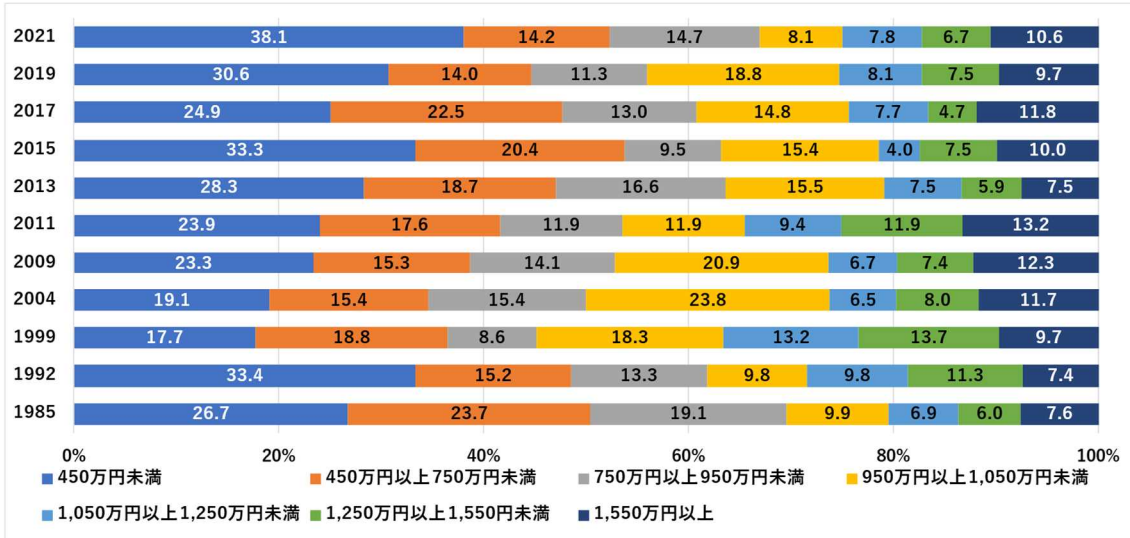
### 生計維持者の年間税込み収入（男子）



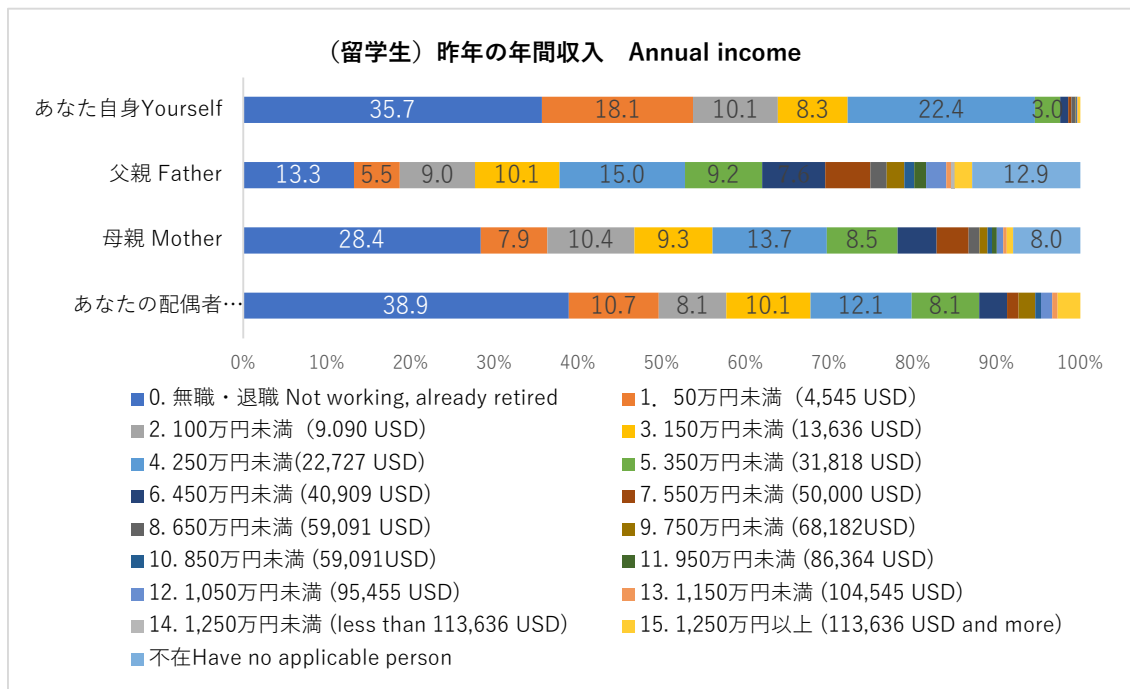
回答者を男子に限定すると、「450万円未満」の低収入層が42.9%で、前回調査より11.6%増加した。その前は、低収入層は減少傾向であった。2013年~2019年の間に増加傾向であった1,050万円以上の高収入層は今回24.0%と引き続き増加傾向にある。

## 【大学院学生】

生計維持者の年間税込み収入（女子）



回答者を女子に限定すると、男子とは異なり、2017年から引き続き低収入層の拡大傾向がみられる。1,050万円以上の高収入層の割合は例年と比べて大きな変化がなく、25.1%で男子より大きい。



大学院留学生の生計維持者の年間の収入のうち、450万円未満の割合は父親では8割程度、母親では9割程度を占めており、日本人学生等と経済的な差が大きい。また、学部留学生と比べると、全体的に父・母の収入が低い。配偶者の収入を記載した149名のうち、38.9%は配偶者に収入がないが、この中には奨学金受給者も含まれるものと思われる。また学生本人と配偶者の収入分布は似通っており、夫婦で学生のケース等も少なくないと考えられる。

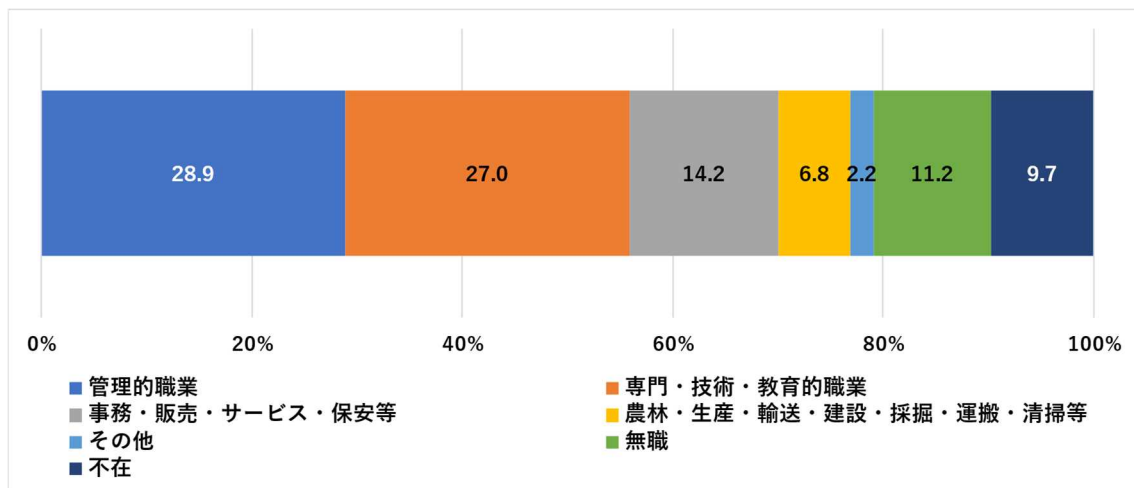
## 【大学院学生】

### 41. 親・本人の職業

- 父親の職業上位3項目「管理的職業」、「専門・技術・教育的職業」、「事務・販売・サービス・保安等」
- 母親の職業上位3項目「無職」、「事務・販売・サービス・保安等」、「専門・技術・教育的職業」
- 母親の職業「無職」の割合は引き続き減少

41. 次の方の職業は何ですか。

父親の職業

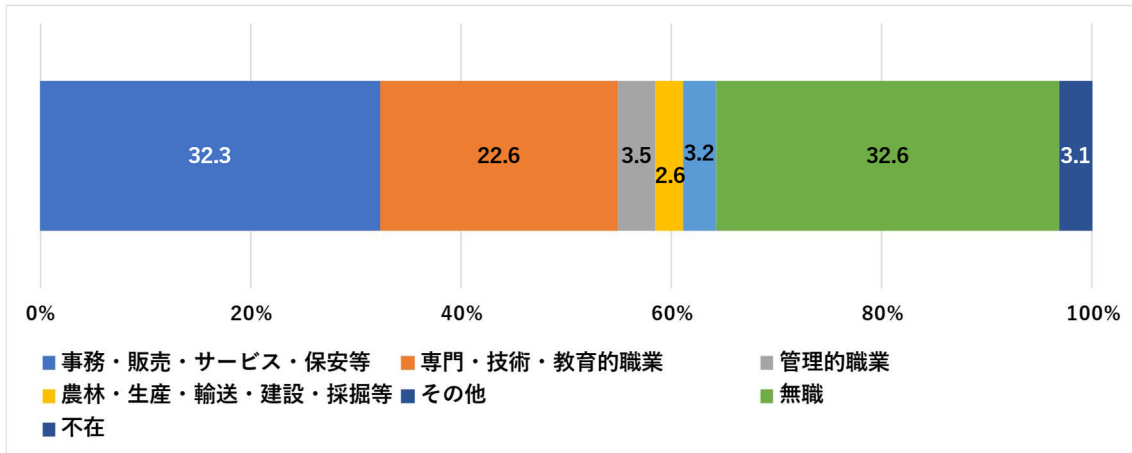


父親の職業は「管理的職業」が28.9%で最も多い（前回31.2%）。次いで「専門・技術・教育的職業」27.0%（前回33.8%）、「事務・販売・サービス・保安等」14.2%（前回14.4%）と続く。前回調査より大きな変化はなかった。

なお、選択肢の分類について、これまでの調査では「専門・技術」、「教育的職業」、「管理的職業」、「事務」、「販売」、「サービス業」、「保安」、「農林」、「生産」、「輸送」、「建設・採掘」、「運搬・清掃」、「無色」、「その他」としていたが、今回調査では「専門・技術・教育的職業」、「管理的職業」、「事務・販売・サービス業・保安等」、「農林・生産・輸送・建設・採掘・運搬・清掃等」、「無職」、「その他」の分類とし、選択肢に「不在」を追加している。

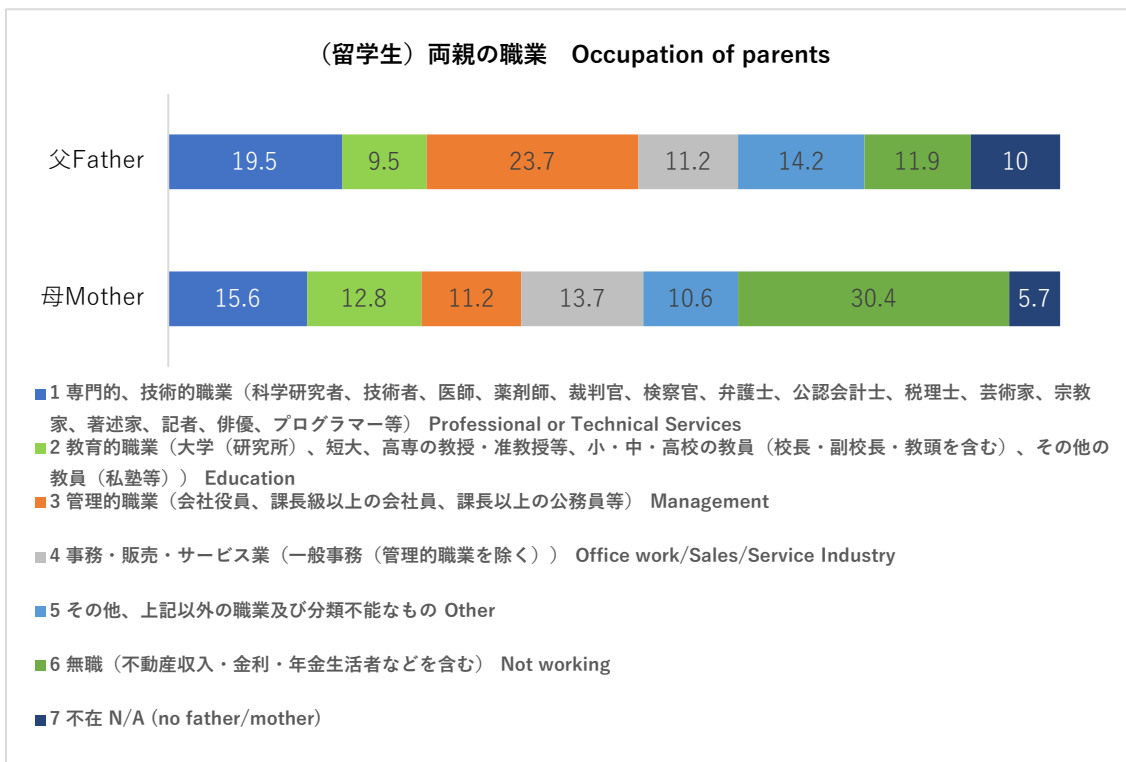
## 【大学院学生】

### 母親の職業



母親の職業は「無職」が32.6%で最も多いものの、前回調査の35.0%と比べて減少した。次いで、「事務・販売・サービス・保安等」32.3%（前回28.6%）、「専門・技術・教育的職業」22.6%（前回26.1%）と続く。

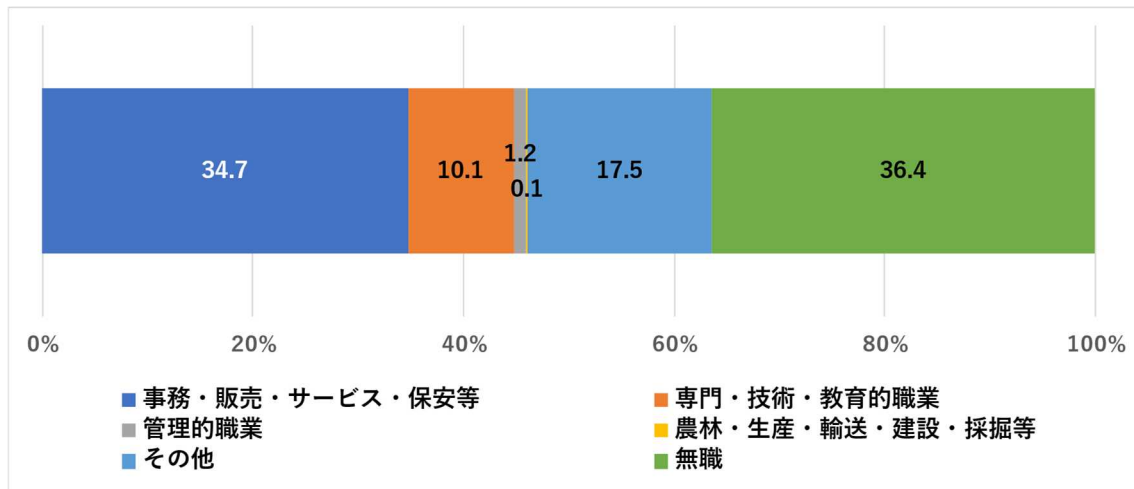
選択肢の変更については、父親の職業と同様である。



専門的職業、教育的職業に従事している留学生の父親は29.0%、母親は28.4%であり、管理的職業は父親23.7%、母親11.2%である。専門職・教育職、管理職に従事する母親の割合の高さと、父親と母親の職業分布の差が、国内生と比較すると高いことが、学部生同様留学生の両親の特徴として挙げられる。母親の3割程度が無職である点は、国内生・留学生ともに共通している。

## 【大学院学生】

### 本人の職業



本人の職業について、無職が 36.4%で最も多く、「事務・販売・サービス・保安等」の 34.7%（前回 11.3%）、「その他」の 17.5%（前回 8.4%）と続く。前回調査と比べて数値に大きな変動がみられるが、今回調査では選択肢に「無職」を追加していることからその影響が大きいと思われる。

## 【大学院学生】

### 「Ⅷ.家庭の状況」の分析（まとめ）

大学院学生は主たる生計維持者が「父」か「本人」である。今回調査で、低収入層と高収入層が共に拡大した。主たる生計維持者の収入は「450万円未満」が41.6%で、過去10年間で最も多く、「1,050万円以上」の割合も前回調査より微増したが、これは前述のとおり、回答方式が従来と異なっている影響が表れた可能性がある。また、年収額は社会の景気に左右される面があることから、前回調査時には発生していなかった新型コロナウイルスの影響も考慮する必要があるだろう。

職業について、父親の職業は管理職が最も多いが、その割合が前回調査より減少した。母親の職業は「無職」が32.6%で最も多いものの、減少傾向である。本人は無職が36.4%で最も多い。

大学院留学生の父親の年収は、450万円未満が8割程度を占めており、日本人学生等と経済的な差が大きい。奨学金で生活を支えている学生が多い留学生に関しては、母国家族が経済的に頼れるかどうか、経済的な不安の強さを大きく左右するため、特に母国家族の経済状況に関しては、念頭に置いておく必要がある。

また、大学院留学生の配偶者は、回答学生本人と収入分布が類似しており、夫婦の両方に収入がある場合と、どちらか片方だけに収入がある場合で、家計の状況が大きく異なると考えられる。

大学院留学生の親の職業は、国内生と比較した際に、専門職・教育職、管理職に従事する母親の割合の高さが特徴であり、父・母の職業分布の差が国内生と比較すると小さい。これらの点は、留学生の職業選択やジェンダー観などにも、影響を及ぼしうだろう。

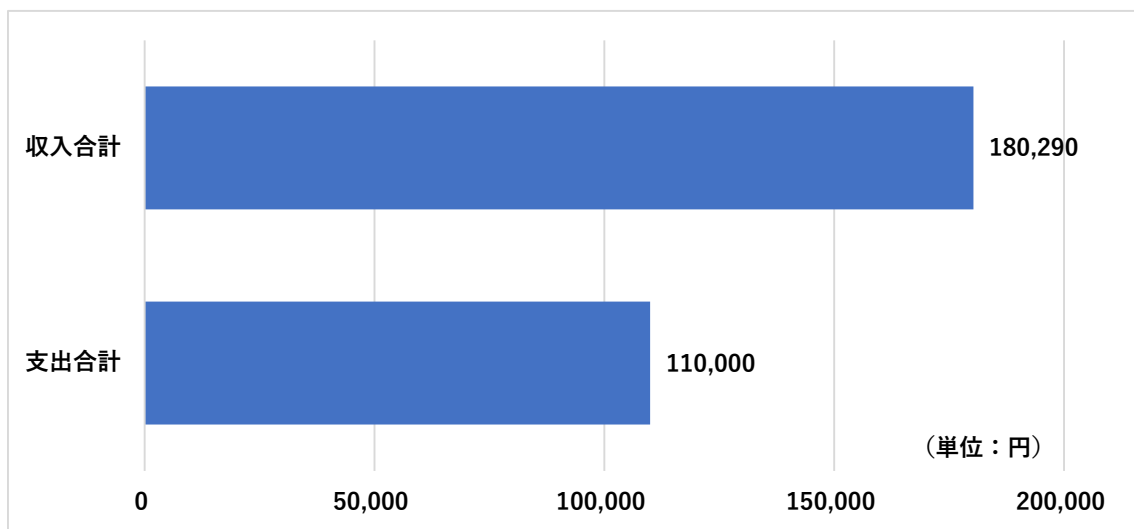
## 【大学院学生】

### IX.生活費の状況

#### 42. 収入・支出

- 収入が大きく減少
- 収入合計は 2009 年以降の最低額、支出合計は 1992 年以降の最低額

42. あなた自身の生活費の状況について、金額を選んでください。（最近3ヶ月の実績から、平均1ヶ月の収支額を、該当しない場合は「0円」を選んでください。）



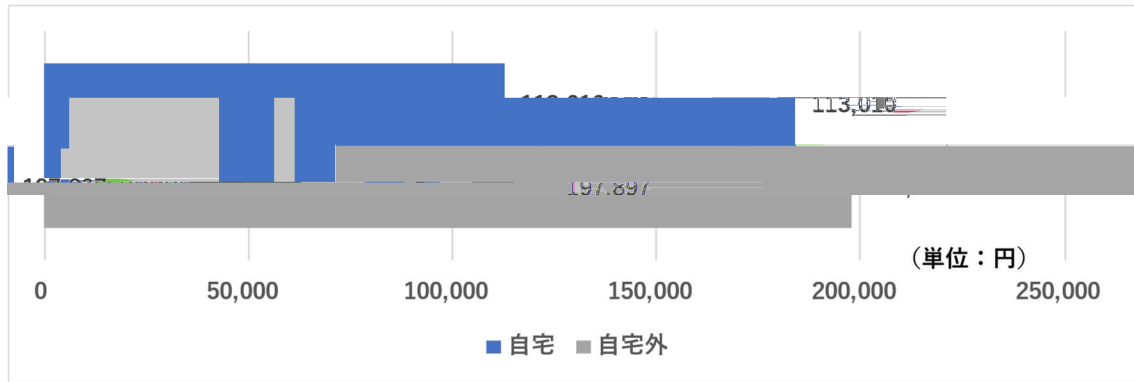
1ヶ月収入合計は平均 180,290 円で、支出合計は平均 110,000 円であった。収支差額は 70,290 円であった。

なお、これまでの調査では収入合計額を直接尋ねていたが、今回調査ではその設問を無くしているため、主な収入項目（家庭からの仕送り・小遣い、学外の奨励金・奨学金、学内の奨励金等、アルバイト、定職、配偶者からの支援、その他の収入）のそれぞれの回答結果の平均額合計に基づいて収入合計額を算出している。

また、回答方式についても、収入支出ともにこれまでの調査では金額を記入する形であったが、今回調査では「その他の収入」を除き、金額区分から選ぶ形としているため、これまでの調査結果と傾向が異なっている可能性があることに留意する必要がある。

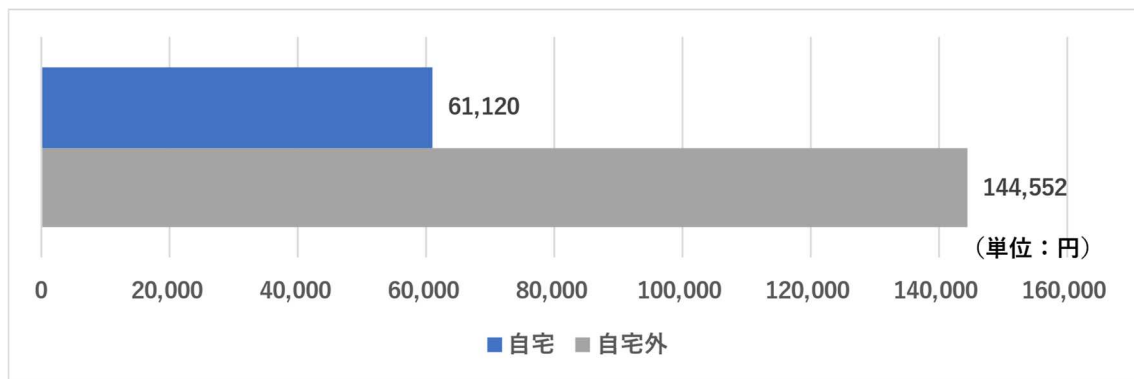
## 【大学院学生】

収入合計（自宅生・自宅外生）

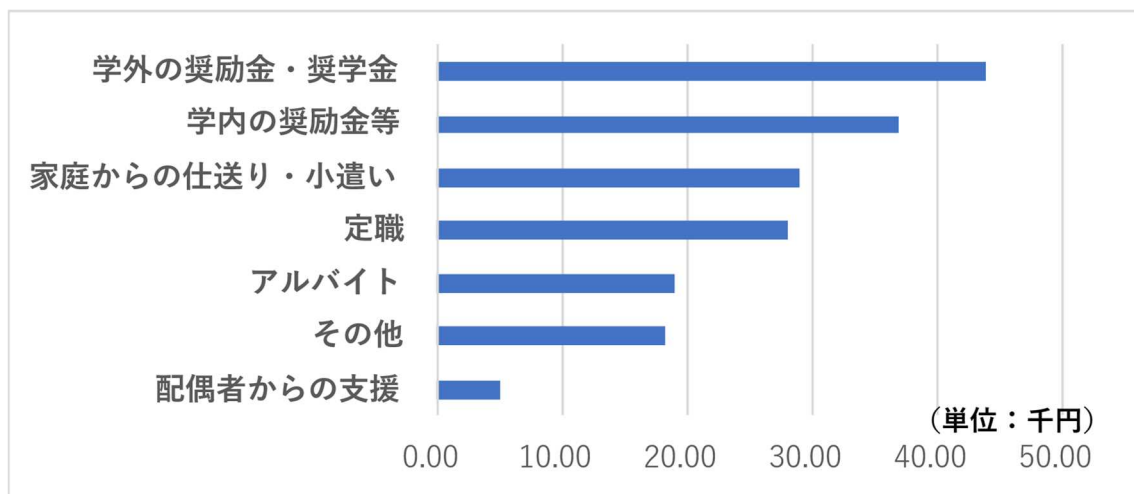


収入の中身をみると、自宅生の上位3項目は「学外の奨励金・奨学金」(30.6%)、「学内の奨励金等」(26.4%)、「アルバイト」(15.9%)となっており、自宅外生は「学外の奨励金・奨学金」(26.0%)、「学内の奨励金等」(21.3%)、「仕送り・小遣い」(19.6%)の順であった。

支出合計（自宅生・自宅外生）



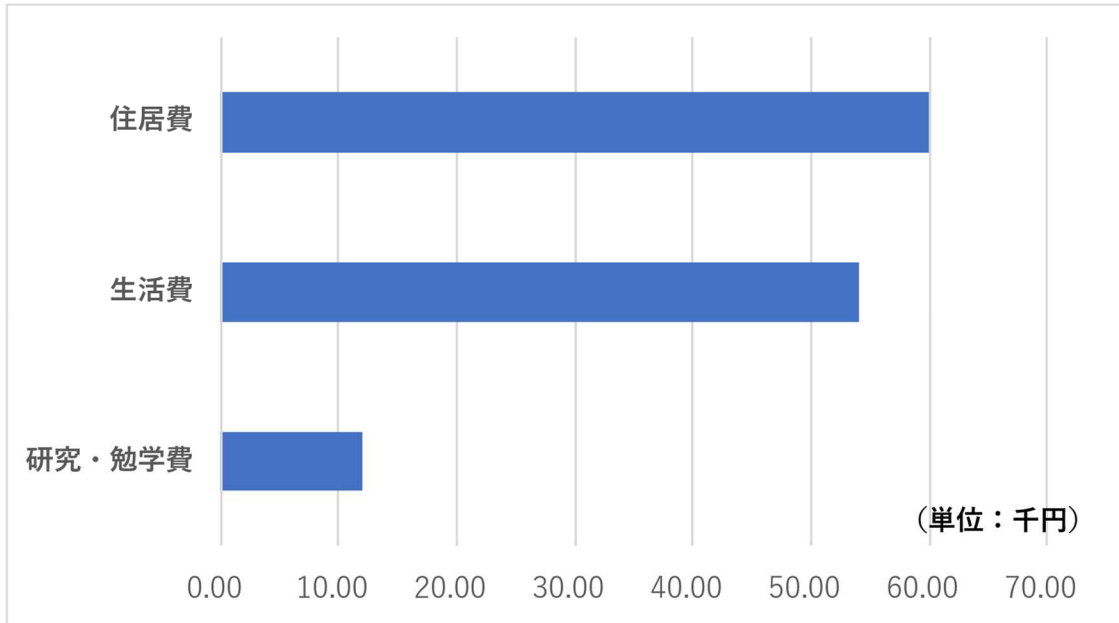
主な収入項目



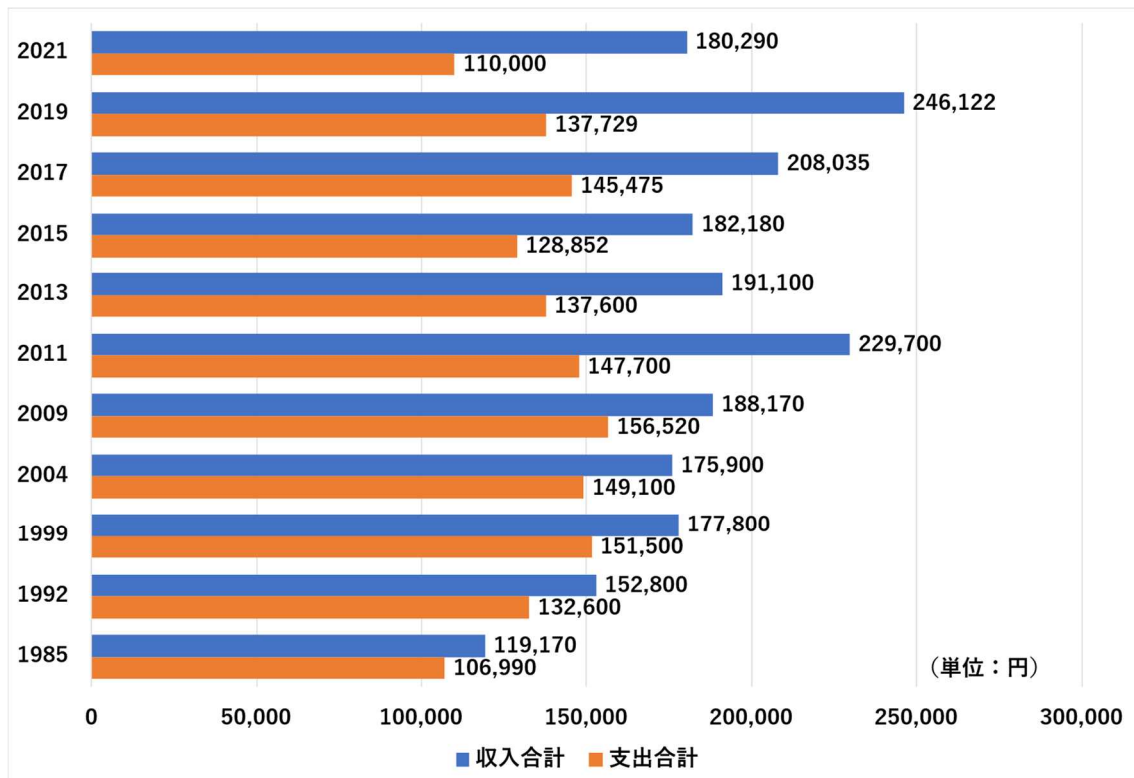


## 【大学院学生】

主な支出項目



収支の経年変化



収支の経年変化をみると、特に収入が大きく減少した。収入合計が2009年以降の最低額で、前回より65,832円減少した。支出合計も前回より27,729円減少し、1992年以降の最低額となった。

## 【大学院学生】

### 「IX.生活費の状況」の分析（まとめ）

今回調査では、1ヶ月の平均収入合計額が、前回調査より65,832円減少し、2009年以降の最低額となっている。支出合計は前回より27,729円減少し、1992年以降の最低額であった。収支差額は70,290円で、前回調査の108,393円より38,103円も減少した。今回調査は新型コロナウイルス感染症が発生して以来初めての調査で、2019年以前の調査結果と比べて大きな変化がみられる。同感染症の影響により収入が少なくなったことに伴い、支出を抑えた可能性もうかがえる。

なお、入国していない学生が多く含まれていたことや、収入・支出平均の算出の仕方の相違等から、留学生の家計状況については、国内生と比較を行わず、別途留学生版報告書で結果を示す。

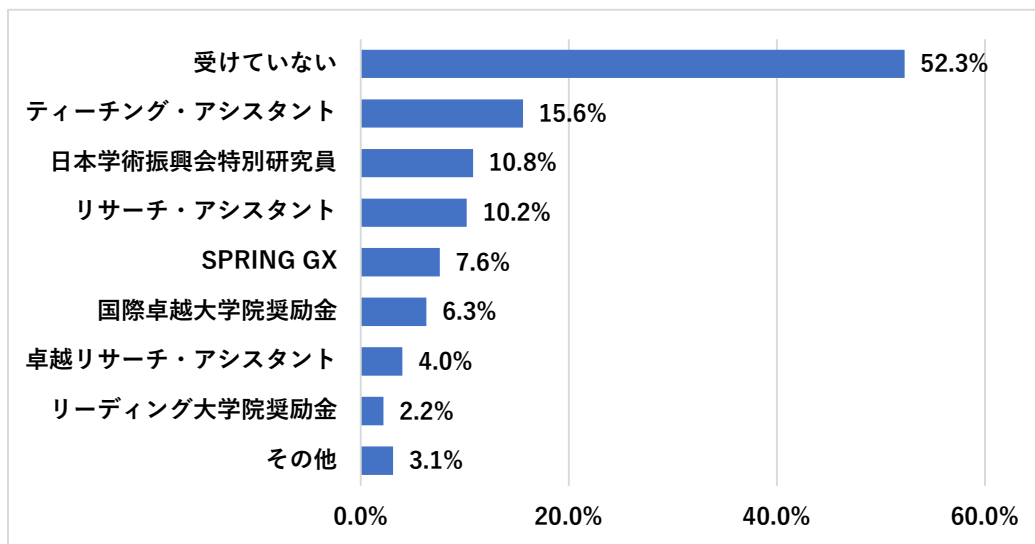
## 【大学院学生】

### X.研究奨励金及び奨学金

#### 43. 学内外研究費等支援の受給状況

- 過半数は学内外の研究費等の経済的支援を何も受給していない
- 学内外の研究費等の経済的支援を受けている研究費の上位3項目は「ティーチング・アシスタント」「日本学術振興会特別研究員」「リサーチ・アシスタント」

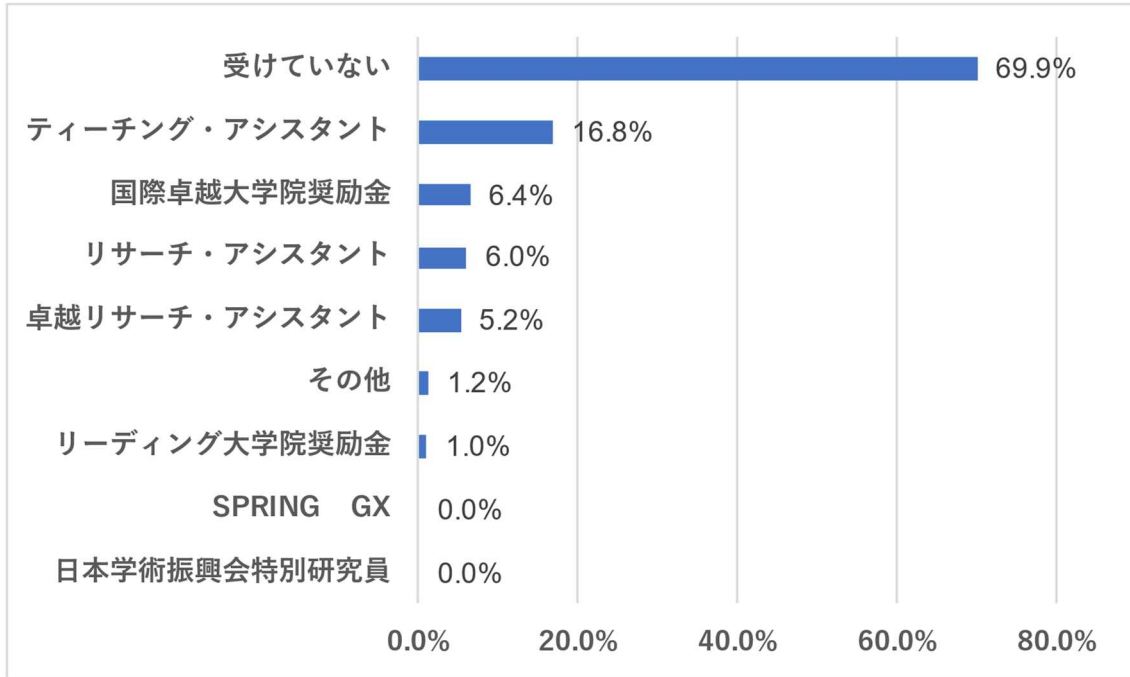
43. 現在、学内外の研究費等の経済的支援を受けていますか。（いくつでも選んでください。）当てはまるものをすべて選択してください。



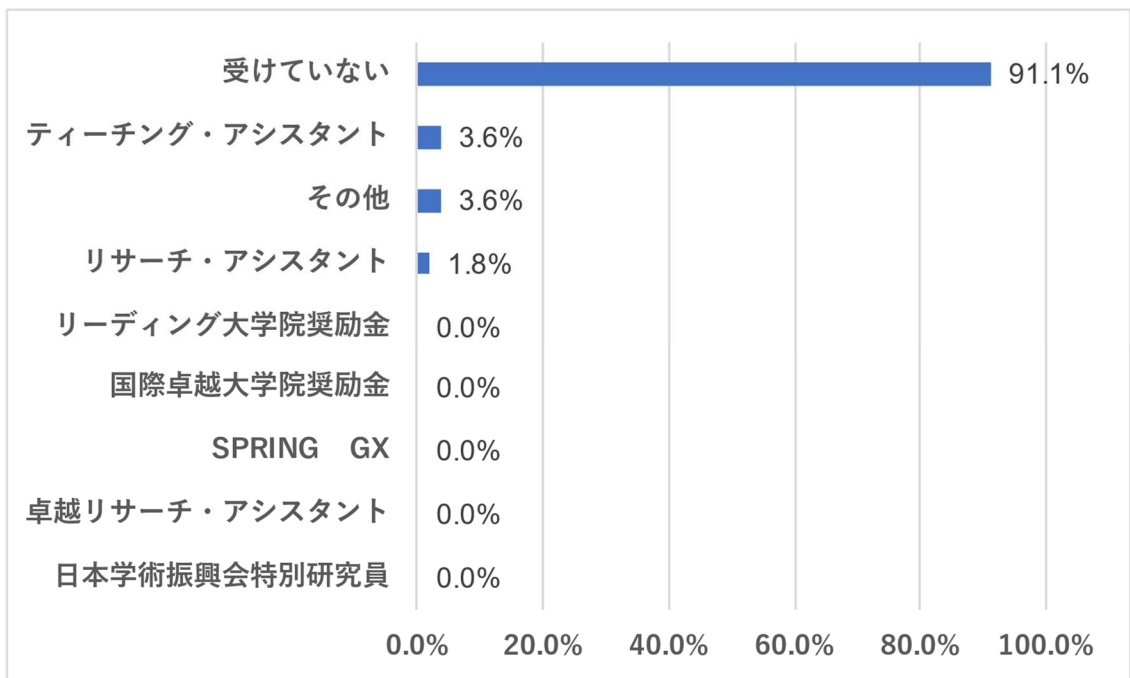
学内外の研究費等の経済的支援の受給状況について、52.3%の回答者が「受けていない」（前回 58.5%）と回答した。受給している支援金のトップは、「ティーチング・アシスタント」15.6%で、「日本学術振興会特別研究員」10.8%、「リサーチ・アシスタント」10.2%と続く。

## 【大学院学生】

### 修士課程



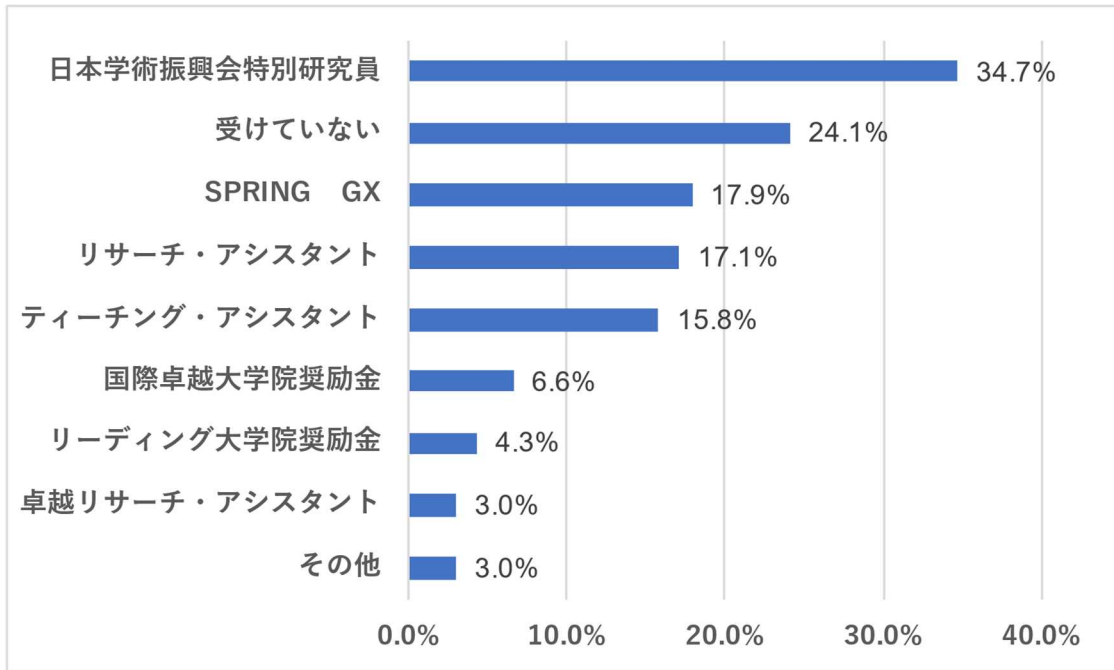
### 専門職学位課程



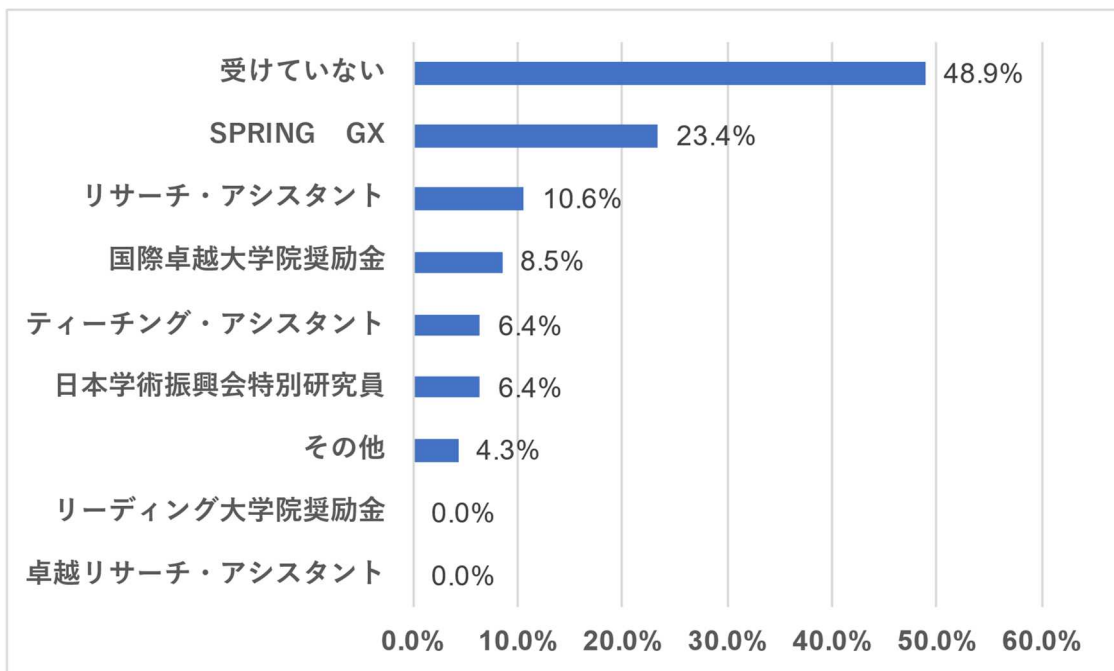
修士課程（専門職学位課程含む）の学生は、SPRING GX 及び日本学術振興会特別研究員の制度対象ではないため、0%となっている。受給している支援金のトップはティーチング・アシスタント（修士課程 16.8%、専門職学位課程 3.6%）であった。

## 【大学院学生】

博士課程（獣医学・医学・薬学除く）



博士課程（獣医学・医学・薬学履修）



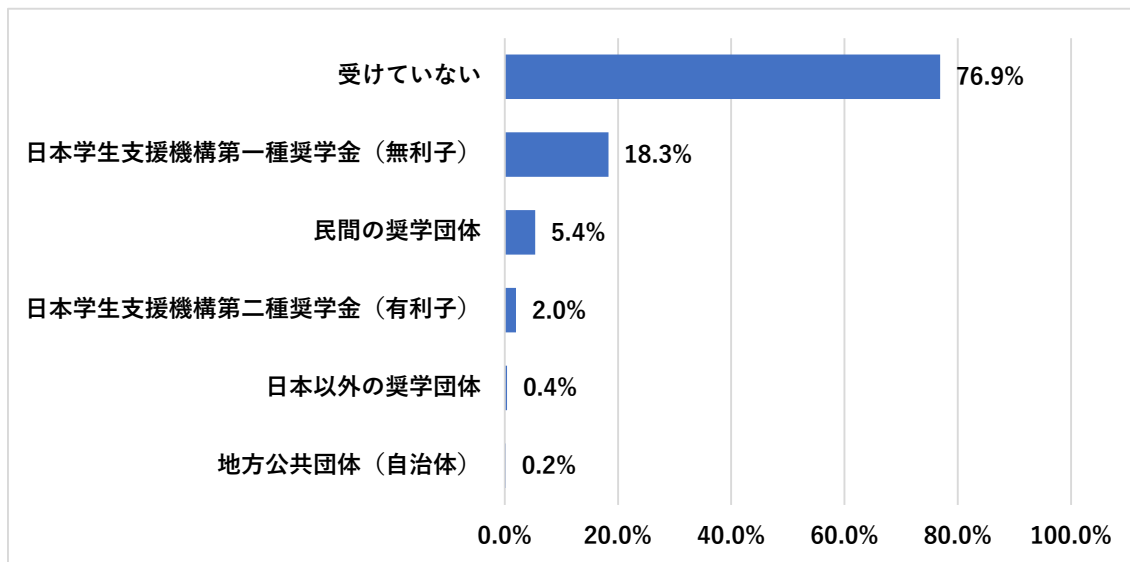
博士課程（獣医学・医学・薬学除く）の回答者で支援金を受けていない割合は24.1%となっており、回答者の4分の3は何らかの経済的支援を受けていることが見て取れる。受給している支援金のトップは博士課程（獣医学・医学・薬学除く）が日本学術振興会特別研究員（34.7%）、博士課程（獣医学・医学・薬学履修）がSPRING GX（23.4%）であった。

## 【大学院学生】

### 44. 奨学的資金（学外）の受給状況

- 76.9%が奨学的資金を「受けていない」、前回調査より3.2%ポイント減少

44. 現在、定期的に奨学的な資金を受けていますか。（いくつでも選んでください。）



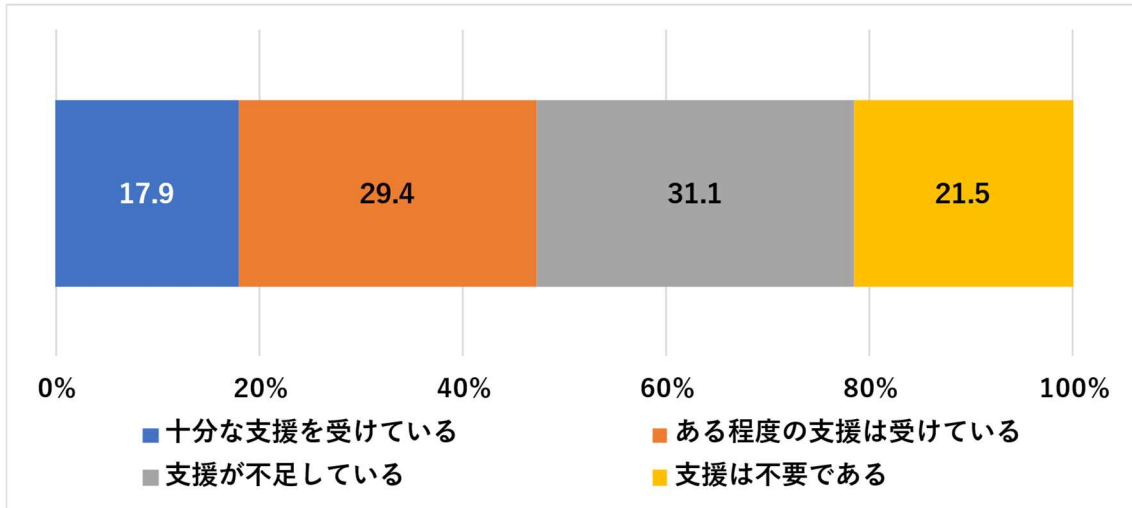
複数回答可として奨学的資金の受給状況について尋ねたところ、「受けていない」が最も多く76.9%であった。前回調査の80.1%と比較して3.2%ポイント受けていない者が減少した。次いで「日本学生支援機構第一種奨学金（無利子）」18.3%（前回16.8%）、「民間の奨学団体」5.4%（前回3.8%）と続く。

## 【大学院学生】

### 45. 経済的支援の状況

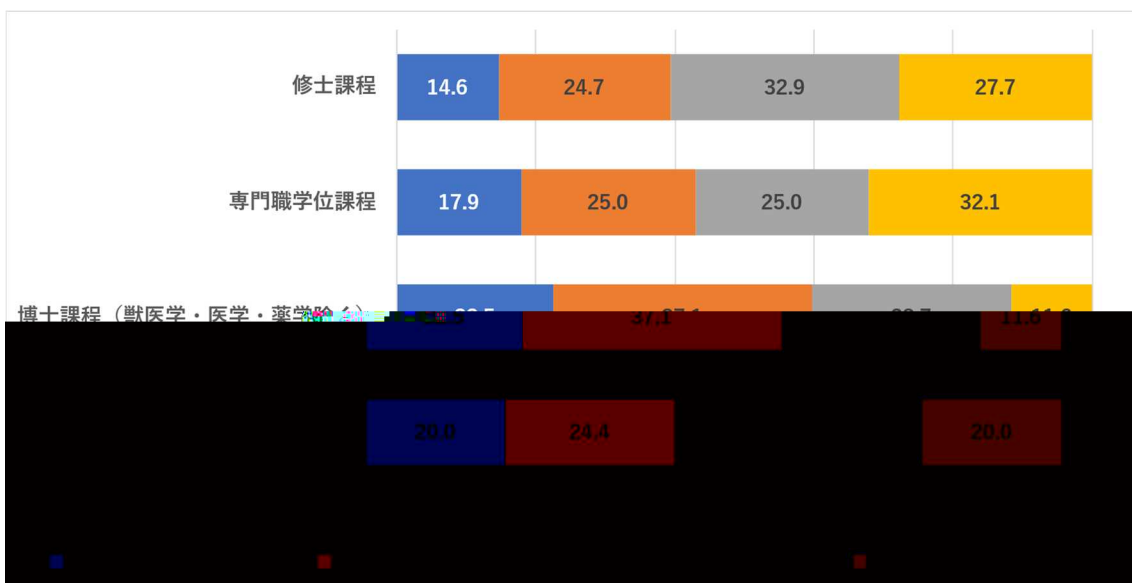
- 支援を受けている回答者が半数未満
- 3割強が支援が不足と回答

45. 現在、教育研究に専念できる国や大学等からの経済的支援の状況はいかがですか。

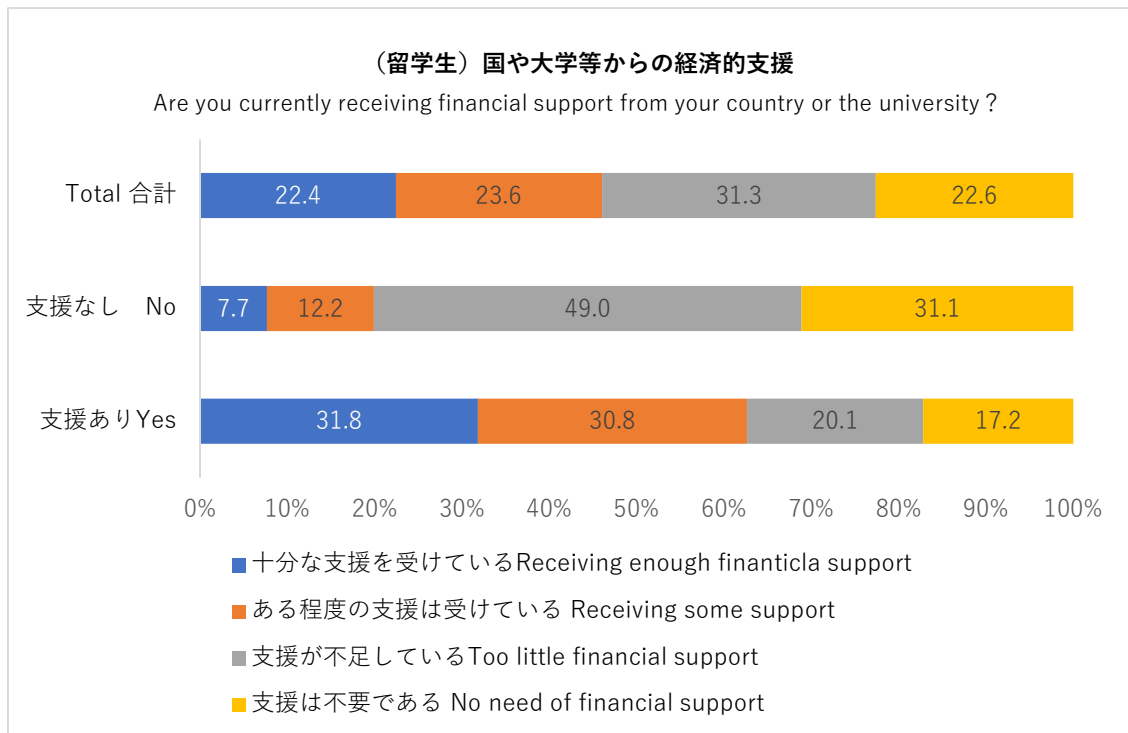


今回調査より新たに経済的支援の状況を尋ねたところ、「十分な支援を受けている」「ある程度の支援を受けている」と回答した者が半数未満であった。また、3割強が「支援が不足」、2割強が「支援が不要」と回答している。

経済的支援の状況（課程別）



## 【大学院学生】



大学院留学生の中で、学内外の研究費・奨学金等の経済的支援を受けていない学生は全体では 35.9%であった。在学段階別にみると、経済的支援を受けていない学生は、大学院研究生 48.0%、修士課程 52.4%、専門職学位課程 30.4%、博士課程 18.0%であった。経済的支援を受けていると回答した学生で、もっとも多かったのは国費奨学金 13.7%であり、SPRING GX 等の大学からの研究奨励費が 12.7%と続く。

経済的支援に関して「十分な支援を受けている」22.4%、「ある程度の支援を受けている」23.6%であり、「十分な支援を受けている」と感じている学生の割合が、日本人学生よりも高い。ただし、現在奨励費や奨学金を受給していない学生は、49.0%が、「支援が不足している」と回答している。



## 【大学院学生】

### 「X.研究奨励金及び奨学金」の分析（まとめ）

学内外研究費等支援の受給状況をみると、半数の大学院生は何も受けていなかった。その中には支援を希望していても受けられない大学院生も一定割合いることを考えると、次回以降、支援を希望して受けられなかった大学院生の割合がわかるような設問を追加することが望ましい。支援が不足していると回答した 3 割の大学院生も含め、経済的支援が十分でないと考える大学院生は相当数いると考えられる。研究とお金は切り離せない関係にあることから、大学院生に対する経済的支援の更なる拡充が求められる。

大学院留学生の中で、学内外の研究費・奨学金等の経済的支援を受けていない学生は全体では 35.9%であった。特に博士課程の学生は支援を受けている学生の割合が高い。また経済的支援については、「十分な支援を受けている」と感じている学生の割合が、日本人学生よりも高い。

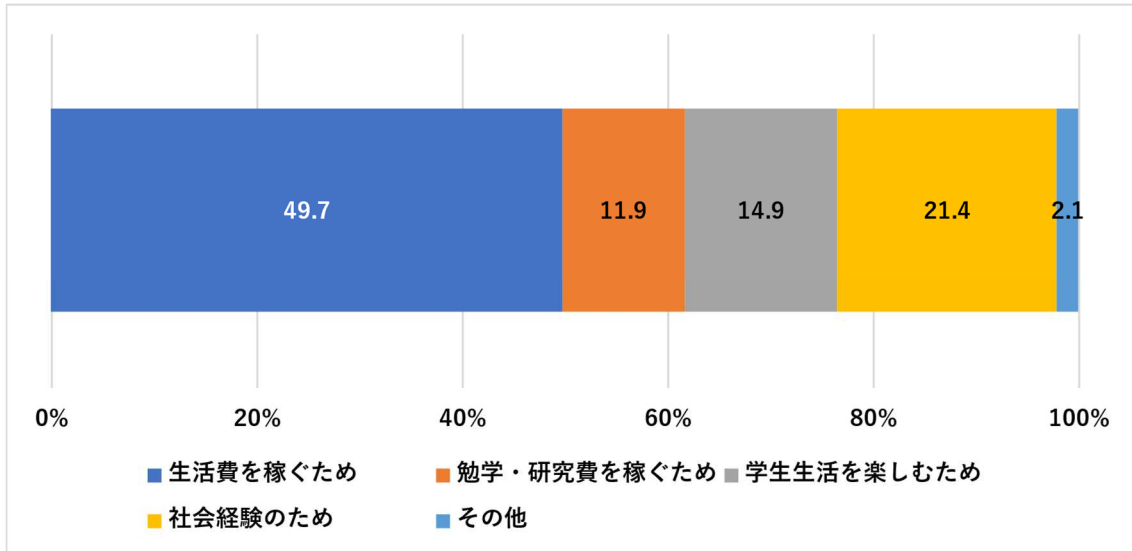
## 【大学院学生】

### XI. アルバイト・暮らし向き

#### 46. アルバイトの目的

- アルバイトの目的は、前回調査同様「生活費を稼ぐため」がほぼ半数

46. アルバイトをした目的はどれにあたりますか。（どれか1つ選んでください。）



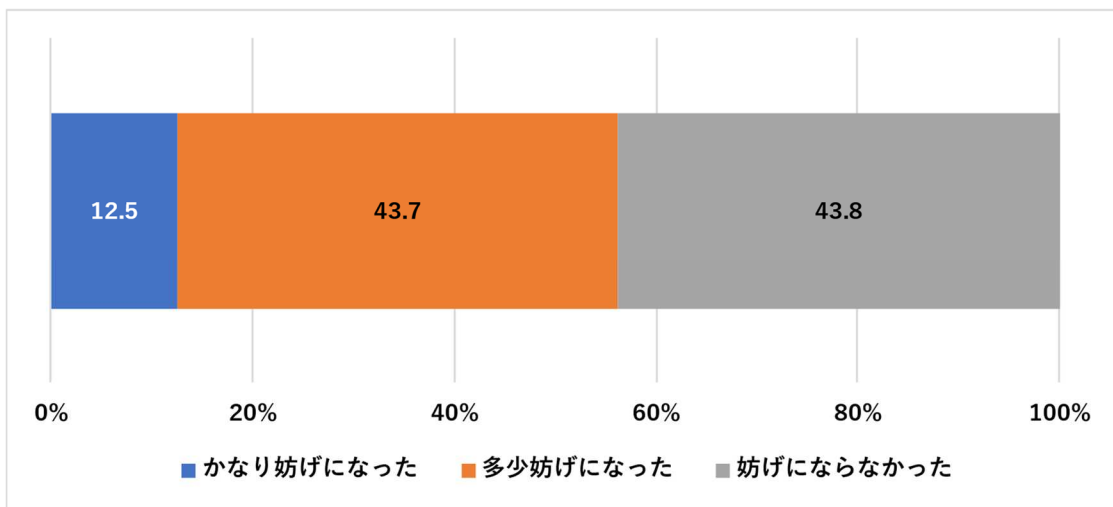
アルバイトの目的は「生活費を稼ぐため」が49.7%(前回53.4%)と最も多く、「社会経験のため」21.4%(前回14.6%)、「学生生活を楽しむため」14.9%(前回18.4%)と続く。前回調査と比較して「社会経験のため」と「学生生活を楽しむため」の順が入れ替わっている。

## 【大学院学生】

### 47. アルバイトと勉学の関係

- 「アルバイトが勉学の妨げになった」割合は 56.2%
- 妨げになった回答割合の多い研究科は「人文社会系研究科」、「医学系研究科」、「教育学研究科」
- 妨げにならなかった回答の多い研究科は「数理科学研究科」

47. アルバイトは勉学・研究の妨げになりませんでしたか。どれか1つ選んでください。( )



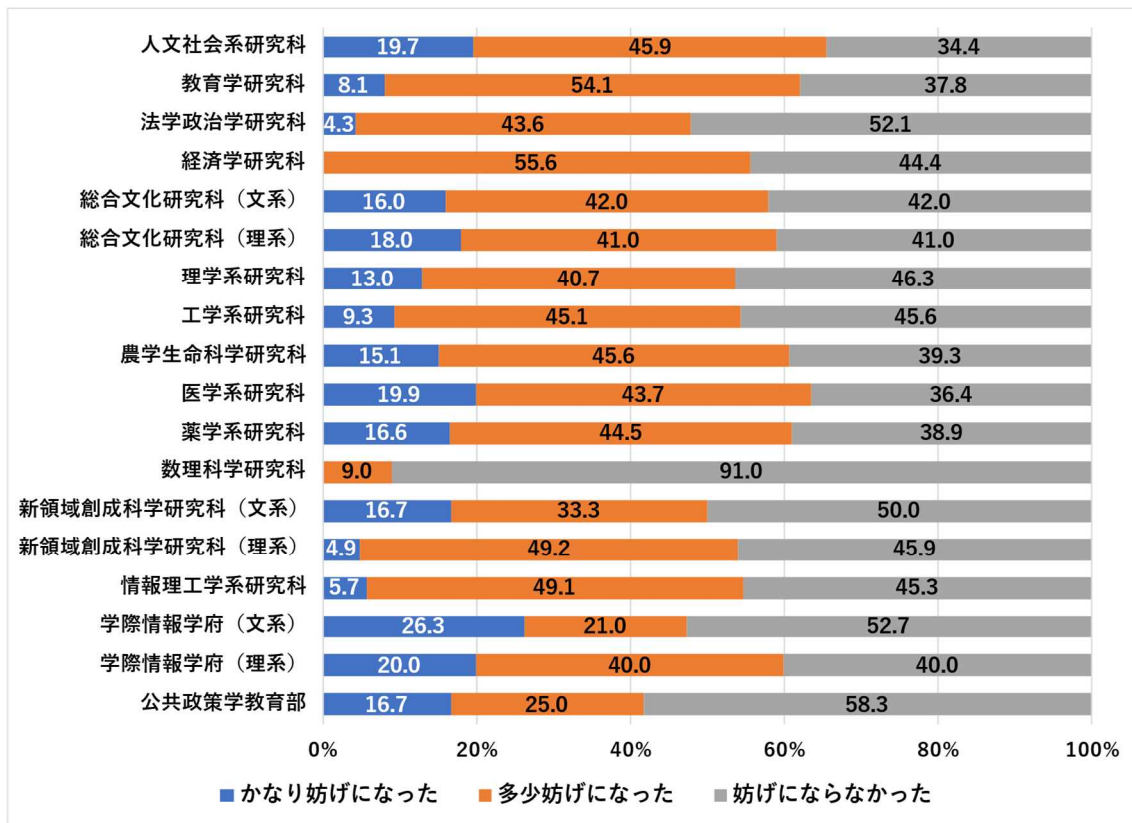
40.9%の回答者がアルバイトをしていなかったが、従事したことのある大学院生の中では、56.2%が「かなり妨げになった」「多少妨げになった」と回答している。

大学院留学生のうち、アルバイトの従事経験のない学生は 65%であり、日本人学生に比べると多い。従事したことのある大学院留学生の従事目的は、「生活費を稼ぐため」64.3%（前回 61.3%）、「社会経験のため」16.9%（17.2%）、「授業料・学費を稼ぐため」9.8%（5.5%）、「学生生活を楽しむため」5.9%（8.7%）であった。日本人学生等と比較すると、生活費を補填するためにアルバイトを行う学生が多く、またコロナ前 2019 年度に実施した調査と比べると、「生活費」「授業料等」を稼ぐことを目的とする留学生の割合が増えており、必要性の高い学生がアルバイトを行っていると考えられる。

一方、従事経験のある大学院留学生のうち、アルバイトが勉強の「かなり妨げになった」と考える学生は 12.6%（15.2%）、「多少妨げになった」43.0%（45.2%）、「妨げにならなかった」44.4%（39.2%）であり、前回調査と比較すると「妨げにならなかった」と回答した留学生が若干増えている。また回答傾向は、日本人学生と類似している。

## 【大学院学生】

### アルバイトと勉学の関係（研究科別）



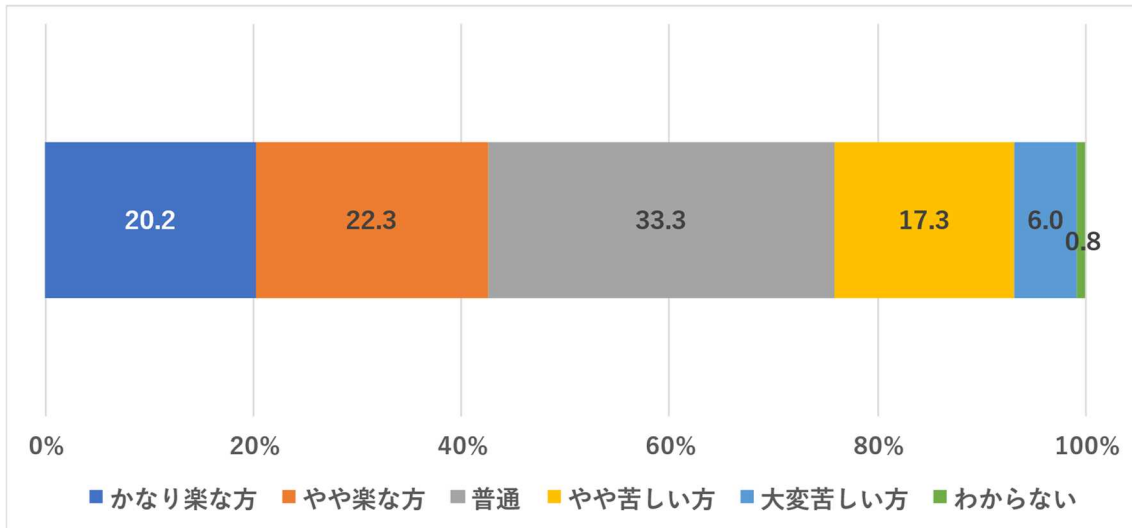
アルバイトが勉学の「かなり妨げになった」「多少妨げになった」の合算値が多い研究科は「人文社会系研究科」65.6%、「医学系研究科」63.6%、「教育学研究科」62.2%である。「妨げにならなかった」の割合が最も高い研究科は「数理科学研究科」の91.0%であった。

## 【大学院学生】

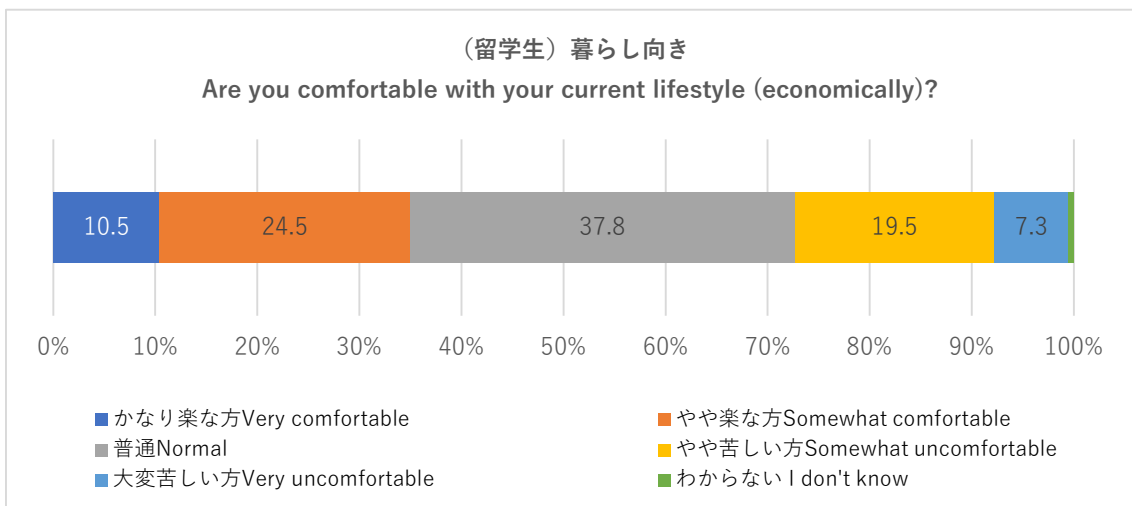
### 48. 現在の暮らし向き

- 暮らし向き「楽な方」「普通」「苦しい方」はそれぞれ 42.5%、33.3%、23.3%

48. 現在の暮らし向きについてどうお考えですか。次の中からどれか1つ選んでください。



現在の暮らし向きは「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値で 42.5%（前回 41.6%）、「普通」で 33.3%（前回 36.5%）、「やや苦しい方」「大変苦しい方」の合算値で 23.3%（前回 21.9%）となり、概ね前回調査と同じ結果となった。



回答時に未入国の学生を除いた、大学院留学生の暮らし向きの評価は、「かなり楽な方」(10.5%)、「やや楽な方」(24.5%)、「普通」(37.8%)、「やや苦しい」(19.5%)「大変苦しい」(7.3%)であった。日本人学生よりも、「かなり楽」と回答した学生の割合は少ない。

## 【大学院学生】

### 「XI.アルバイト・暮らし向き」の分析（まとめ）

アルバイトが勉学の妨げになったと回答した者は 56.2%である。生活費や勉学費を稼ぐためにアルバイトをする反面、アルバイトをすることが勉学の妨げになるというジレンマが大学院生を悩ますことになる。暮らし向きについては、前回調査とほぼ変化がなく、新型コロナウイルス感染症の影響はみられなかった。

大学院留学生の生計は、奨学金によって支えられている部分が多く、学業に集中できる経済的支援があると感じている学生が国内生よりも多い。またアルバイト時間の制限もあることから、勉学の時間を取れないほどの極端な長時間のアルバイトは生じにくい。一方、暮らし向きを「かなり楽な方」と評価している学生の割合は、国内生の半数程度であり、経済と勉学のバランスを取りながら生活を維持している状況がみられる。

## 総合分析

### 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限が学部生と大学院生に与えた影響の比較分析

総合分析では、昨年と同様に新型コロナウイルス感染症による様々な制限の影響について分析する。ただし、これまでと異なり 2021 年度の学生生活実態調査は学部生と大学院生を同じ時期に調査している。この新しい調査枠組みの特徴を活かし、学部生と大学院生によって影響が異なるのか、また経済的な状況の主観的評価である暮らし向きによって影響が異なるのか、またその影響が学部生と大学院生によって異なるのかを明らかにする。

本調査では「新型コロナウイルス感染症下での様々な制限は、今現在あなたの生活にどのような影響がありますか。あてはまるものを1つ選んでください。」という質問をたずね、学部生には「自身のキャリア形成や就職・進学」、「家族関係や友人との関係」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」、「アルバイト収入や家族の収入」、「課外活動等の余暇時間の過ごし方」の5つの項目についてたずねている。大学院生には「自身のキャリア形成や就職・進学」、「家族関係や友人との関係」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」までは学部生と同じだが、「アルバイト収入や家族の収入」については「経済的支援や収入」となっており、また「課外活動等の余暇時間の過ごし方」はない。これらの項目について回答選択肢は「とてもよい影響があった」「よい影響があった」「どちらとも言えない」「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」という5カテゴリである。

まず図1より学部・大学院別および男女別に傾向を確認する。全体的に見て、「よい影響」や「とても良い影響」よりも「悪い影響」や「とても悪い影響」と答えるケースが多い。特に「家族関係や友人との関係」「自身のメンタルヘルスや健康状態」、「課外活動等の余暇時間の過ごし方」などに悪影響があったとえいえる。「自身のキャリア形成や就職・進学」や「アルバイト収入や家族の収入」については他の項目に比べて、悪影響があったと回答するケースが少なくなっている。これら2つは「どちらとも言えない」という回答が多く、新型コロナウイルス感染症拡大での影響が現在においては比較的小さいものといえる。課程・男女別に傾向の違いを確認すると、全体としては傾向に大きな違いはなかったが、「家族関係や友人との関係」について、学部生のほうが大学院生よりも悪い影響があったと回答するケースが多いことがわかる。この傾向は学部生の男女ともに確認され、学部生の半数以上が家族関係や友人との関係の悪化を感じている。

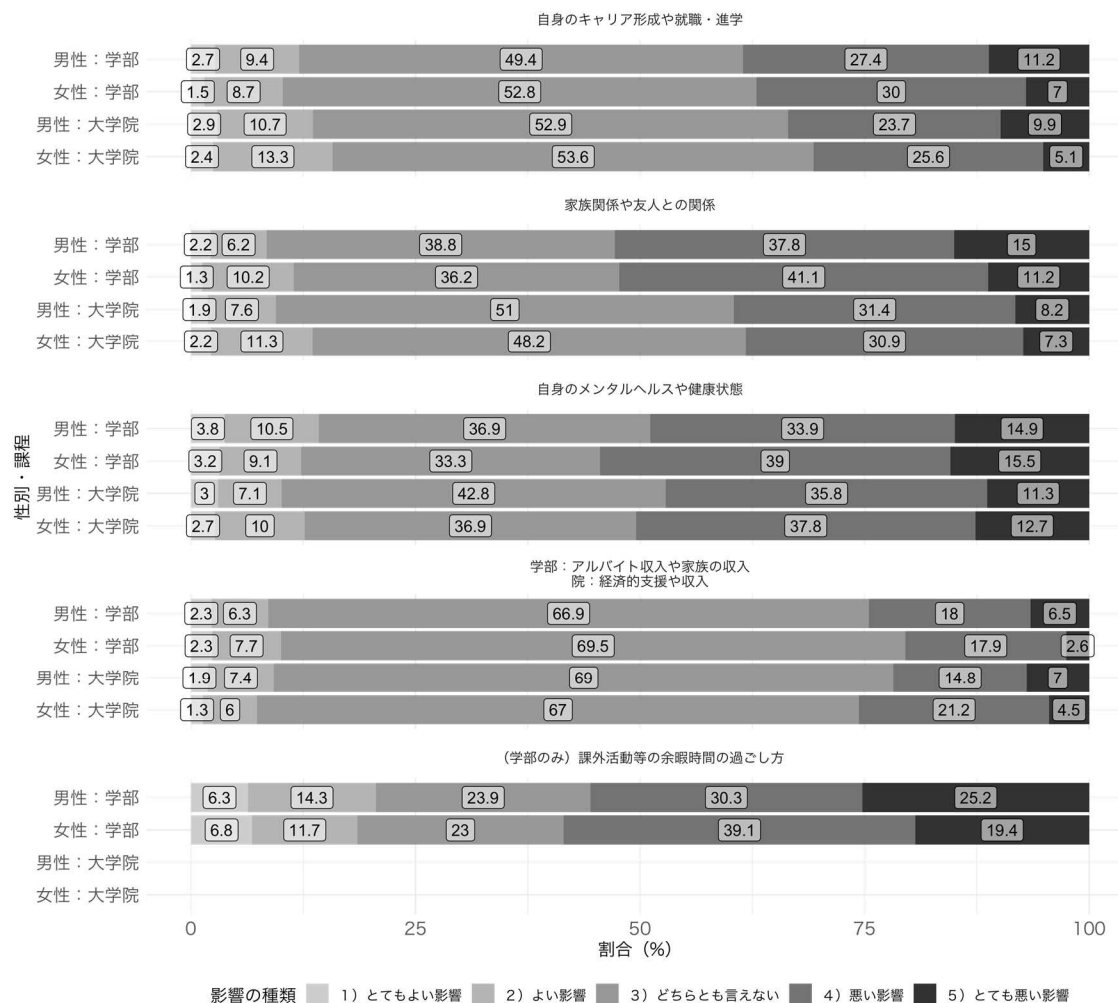


図1 学部・大学院別および男女別にみた新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響

昨年と同様に、簡単に結果を解釈できるように、「とてもよい影響があった」を2点、「よい影響があった」を1点、「どちらとも言えない」を0点、「悪い影響があった」を-1点、「とても悪い影響があった」を-2点として分析を行う。なお、ポジティブな影響が多くなると平均値はプラスに、ネガティブな影響が多くなると平均値はマイナスになる。図2は課程・男女別に平均値と信頼区間を示したものである。どの項目についても平均値は負であり、新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限がネガティブな影響を与えている。ここでも「家族関係や友人との関係」については学部と大学院で大きな違いがみられ、大学院生よりも学部生のほうでネガティブな影響が大きかったといえる。



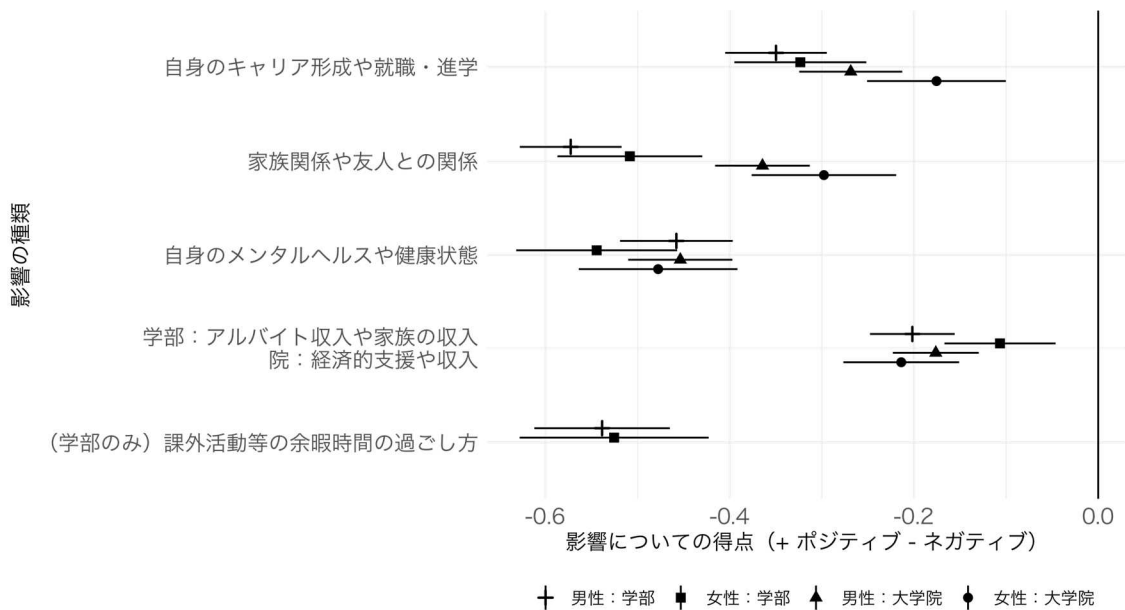


図2 学部・大学院別および男女別にみた新型コロナウイルス感染症拡大下の様々な制限の影響（平均値と95%信頼区間）

学部生については同様の質問を2020年度もたずねているので、図3には2020年度と2021年度の結果を示し、比較をする。学部によって回収の傾向が異なるため、厳密な年度間の比較ができるわけではないことには注意が必要である（少なくとも学部と性別の分布はウェイトで揃えるといった対処が必要となるがここでは行っていない）。2020年度と比較すると2021年度では、「自身のキャリア形成や就職・進学」や「家族関係や友人との関係」についてよりネガティブな影響があったことがわかる。つまり、これらの悪影響はより深刻になっている。昨年の2020年度の調査では、「自身のキャリア形成や就職・進学」についてはネガティブな影響があったものの、他の項目に比べれば影響は小さいといえる（2020年「総合分析」参照）という結果が導かれたが、新型コロナウイルス感染症拡大が長期化する中で、自身のキャリア形成や就職・進学に大きな悪影響が出始めているといえる。

一方で、「アルバイト収入や家族の収入」については2021年度でやや得点が高くなっており、僅かな回復の傾向がみられた。

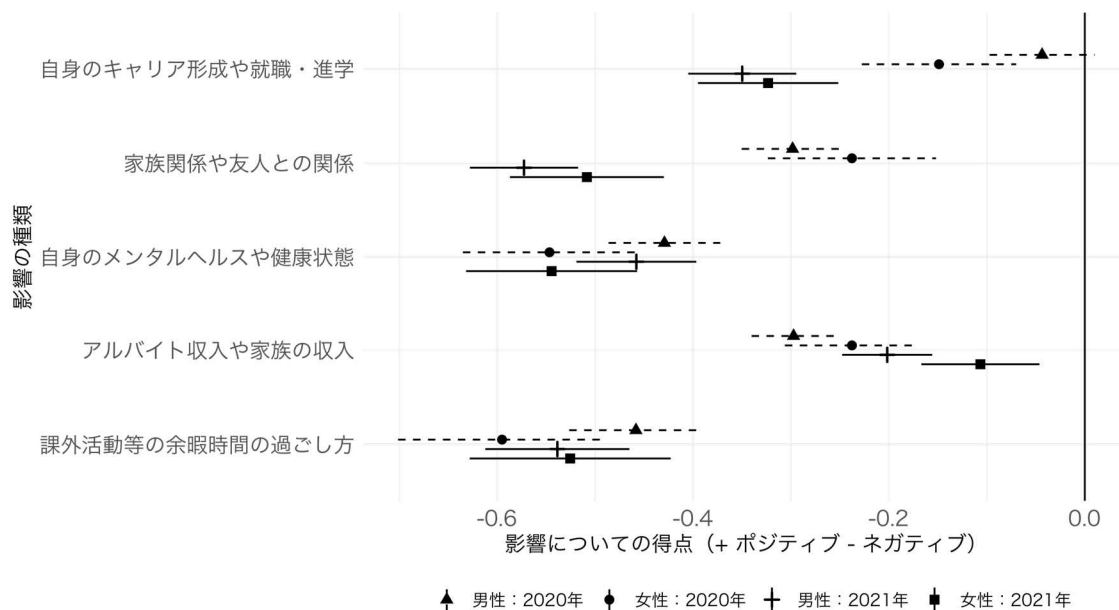


図3 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響についての2020年度と2021年度の比較（平均値と95%信頼区間、点線は2020年度、実線は2021年度）

この結果をさらに詳細に検討するために、学年別に結果を示したのが図4である。すると、「自身のキャリア形成や就職・進学」や「家族関係や友人との関係」について、基本的にはどの学年でみても2021年度のほうがネガティブな影響があったと答えることが多いようである（3年生の女性のみが例外）。また2020年度の1年生と2021年度の2年生を比較しても、「自身のキャリア形成や就職・進学」と「家族関係や友人との関係」の多くについて悪化の傾向がみられている。経済的状況はいくらか回復したかもしれないが、大学生活における「自身のキャリア形成や就職・進学」や「家族関係や友人との関係」といった重要な問題については悪化の傾向が確認され、また「自身のメンタルヘルスや健康状態」や「課外活動等の余暇時間の過ごし方」の悪影響も維持されているといえる。

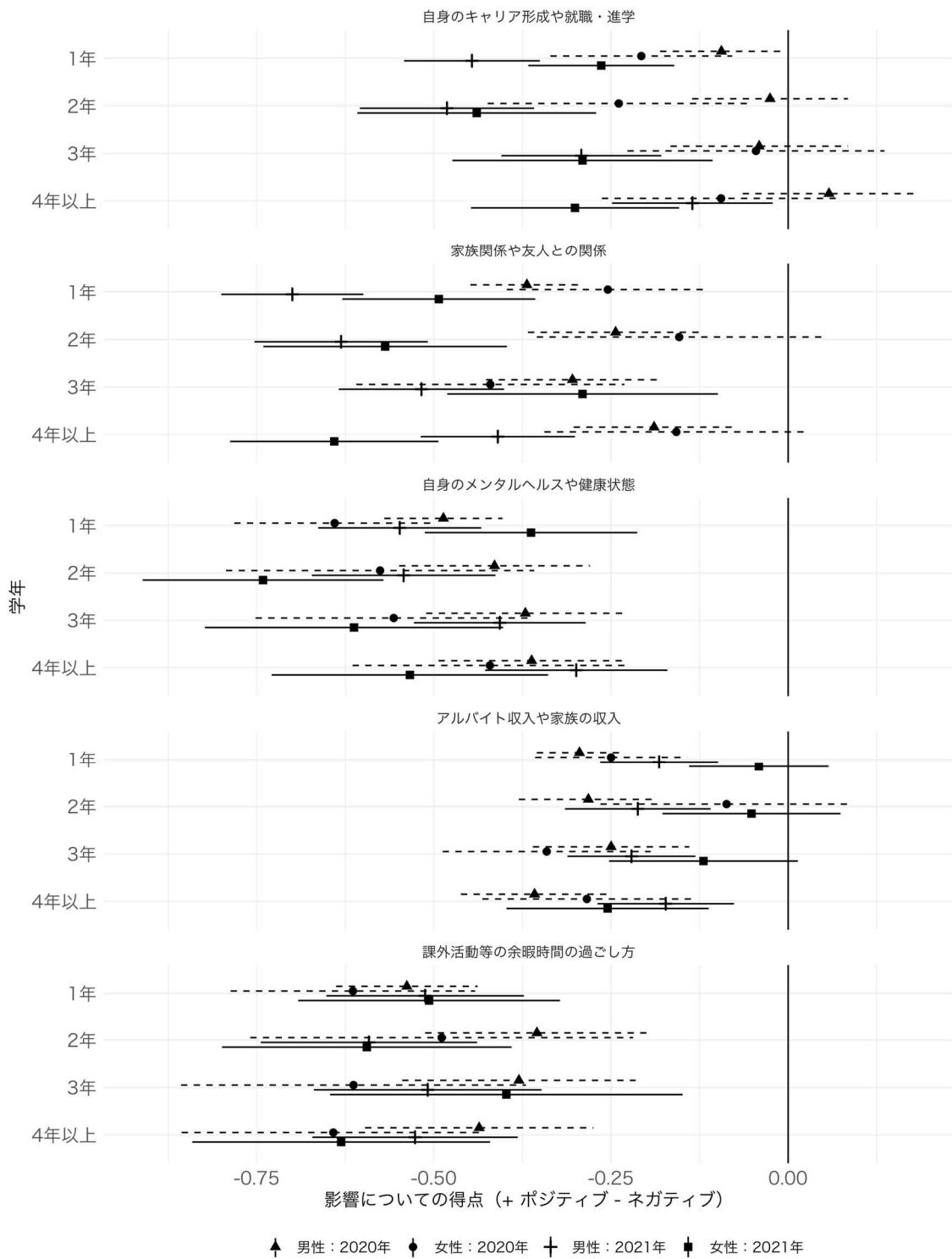


図4 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響についての学年別の2020年度と2021年度の比較（平均値と95%信頼区間、点線は2020年度、実線は2021年度）

それではこれらのネガティブな影響は学部生や大学院生の経済的状况によって異なるのだろうか。ここでは学部生と大学院生で共通して利用可能な暮らし向きと父職を用いた分析をおこなう。図5は暮らし向きと新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連を課程別および男女別にみたものである。「自身のキャリア形成や就職・進学」については学部では暮らし向きによる差はないが、大学院では暮らし向きが悪いほどネガティブな影響が大きくなっている。「家族関係や友人との関係」や「自身のメンタルヘルスや健康状態」については、学部の女性を除いては、暮らし向きが悪いとネガティブな影響が大きい。そして当然のことながら、「アルバイト収入や家族の収入」については暮らし向きが悪いほど、ネガティブな影響が大きいことがわかる。「課外活動等の余暇時間の過ごし方」については暮らし向きによる差はみられなかった。

全体として暮らし向きが悪いほうが新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限のネガティブな影響が大きいことがわかる。

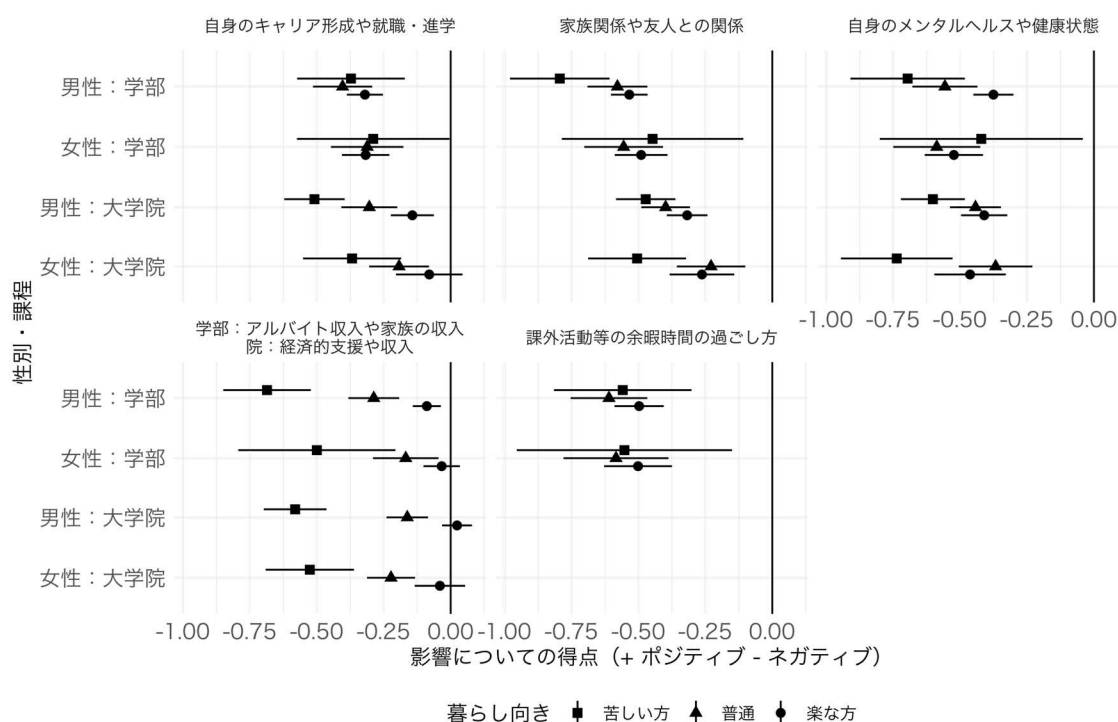


図5 暮らし向きと新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連（平均値と95%信頼区間）

しかし、暮らし向きはあくまで主観的な評価であり、影響の評価と関連が強くなる傾向があると考えられる。そこで、出身の経済的な豊かさを示すものとして、父親の職業が専門・管理か否かを用いて同様の分析を行う。結果は図6に示した。暮らし向きに比べて、ネガティブな影響の違いは大きくは見られないが、父親の職業が専門・管理であると、

「アルバイト収入や家族の収入」「経済的支援や収入」に対するネガティブな影響が小さいことははっきりと結果に表れている。これは学部生だけではなく大学院生にも同様にみられ、社会経済的に不利な出身の学部生や大学院生において、経済的な負の影響が大きいことを示している。

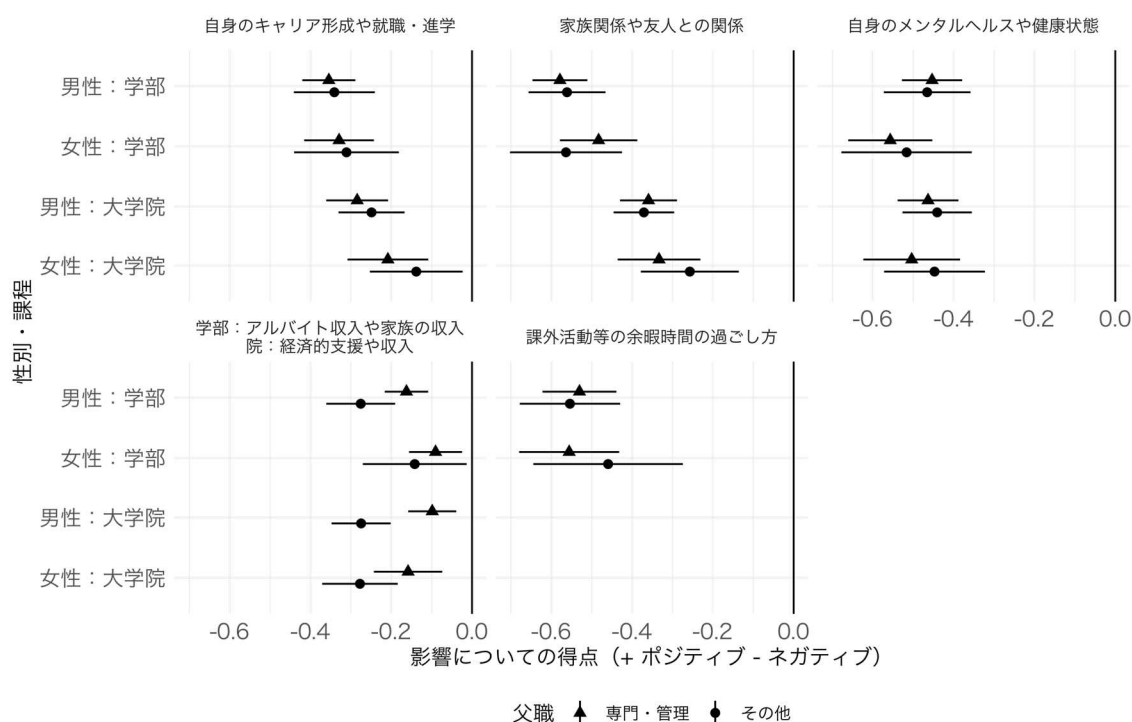


図6 父職と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連（平均値と95%信頼区間）

以上をまとめると、(1) 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響は、学部生と大学院生では共通する部分が多いが、「家族関係や友人との関係」については学部生の悪化が深刻であること、(2) 昨年度と比較して、その悪影響は回復するというよりもより悪化している部分があるということ、(3) 暮らし向きが悪いとネガティブな影響はより大きくなること、それと関連して(4) 父親が専門・管理職以外の学部生や大学院生の「アルバイト収入や家族の収入」「経済的支援や収入」についてのネガティブな影響が大きいことがデータから示された。

## 学生委員会学生生活調査WG

2023年1月現在

座長	藤村 宣之	(大学院教育学研究科・教育学部)
	加藤 貴仁	(大学院法学政治学研究科・法学部)
	江頭 正人	(大学院医学系研究科・医学部)
	小紫 公也	(大学院工学系研究科・工学部)
	高橋 嘉夫	(大学院理学系研究科・理学部)
	米山 正樹	(大学院経済学研究科・経済学部)
	松村 剛	(大学院総合文化研究科・教養学部)
	山川 雄司	(大学院学際情報学府)
	両角 亜希子	(大学院教育学研究科・教育学部)
	藤原 翔	(社会科学研究所)
	大西 晶子	(グローバルキャンパス推進本部)
	高野 明	(相談支援研究開発センター)
	君塚 剛	(本部部長 (教育・学生支援部))
	手塚 安澄	(本部課長 (教育・学生支援部))
	渡邊 千尋	(本部課長 (教育・学生支援部))

事務担当 本部学務課総務・企画チーム (教育・学生支援部)

本部国際支援課企画チーム (教育・学生支援部)

協力 胡 云 潼 (大学院教育学研究科博士課程3年)

村山 いまり (大学院学際情報学府修士課程2年)